

常磐自動車道遺跡調査報告42

仲山C遺跡

明神遺跡

2006年10月

福島県教育委員会
調査人 福島県文化振興事業団
東日本高速道路株式会社

常磐自動車道遺跡調査報告42

なかやま
仲山C遺跡
みよ じん
明神遺跡

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡などを確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成16・17年度に行った相馬市の明神遺跡と平成17年度に行った南相馬市の仲山C遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書を県民の皆様が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成18年10月

福島県教育委員会

教育長 富田孝志

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査は、平成6年度に、いわき市四倉町に所在する遺跡の調査を開始し、平成13年度をもって富岡I C予定地までの発掘調査を終了しております。

また、平成14年度からは富岡I Cから相馬I C予定区間にかかる遺跡調査に着手いたしました。これまでに調査を行った遺跡は、いわき市四倉町・広野町・楢葉町・富岡町・大熊町・浪江町・相馬市の52遺跡になります。

本報告書は、平成17年度に実施した発掘調査のうち、南相馬市に所在する^{なかま}仲山C遺跡・相馬市に所在する^{みやま}明神遺跡の調査成果をまとめたものです。

仲山C遺跡からは、縄文時代前期初頭～前葉にかけての水場遺構、古代の所産とみられる鍛冶遺構が発見されました。

明神遺跡では、竪穴住居跡と掘立柱建物跡群が整然と配列された奈良時代の遺構が発見され、土師器・須恵器などが出土しています。

今後、これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として、さらに地域社会の理解や生涯学習に幅広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所、福島県担当部局、南相馬市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対し、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年10月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 高 城 俊 春

緒 言

- 1 本書は、平成16・17年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）の遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。
仲山C遺跡 福島県南相馬市原町区深野字仲山 埋蔵文化財番号：20600297
明神遺跡 福島県相馬市山上字明神ほか 埋蔵文化財番号：20900196
- 3 本事業は、福島県教育委員会が日本道路公団（平成17年10月1日より東日本高速道路株式会社）の委託を受けて実施し、調査に係る費用は日本道路公団が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査にあたった。

平成16年度

専門文化財主査	松本 茂	文化財主査	吉野滋夫
文化財副主査	大河原勉		

平成17年度

文化財主査	吉田 功	文化財主査	佐々木慎一
文化財主査	佐藤 啓	文化財副主査	青山博樹
文化財主事	笠井崇吉	嘱 託	鹿又喜隆

なお、臨時的に次の職員の参加・協力を得た。

文化財主事	坂田由紀子	文化財主事	三浦 武司
-------	-------	-------	-------

- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が分担して行った。
- 7 本書に掲載した自然科学分析については、次の機関に委託し、付編にその結果と考察を掲載している。
仲山C遺跡出土鉄滓等の化学分析 JFEテクノリサーチ株式会社
- 8 本書に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。「〔承認番号〕平18東復第87号」
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関からご協力いただいた。
原町市教育委員会（現南相馬市教育委員会）、相馬市教育委員会
東日本高速道路株式会社（順不同）

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に真北方向を指す方位を示した。
- (2) 標 高 水準点を基にした海拔標高で示した。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺率を示した。
- (4) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字lと算用数字を組み合わせて表記した。
(例) 基本層位-L I・L II…、遺構内堆積土-l 1・l 2…
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）に基づく。
- (5) ケ バ 遺構内の傾斜面は「|」で表現したが、相対的に緩傾斜の部分には「|」で表している。また、「|」は後世の攪乱が明らかである場合に使用した。
- (6) 線の表現 波線は推定範囲、一点鎖線は貼床範囲を示す。
- (7) 網 かけ 挿図中の網かけの用例は、同図中に表示した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ俣を一点鎖線で表記し、胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。
- (2) 遺物計測値 () 内の数値は推定値、[] 内の数値は遺存値を示す。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺率を示した。
- (4) 網 かけ 挿図中の網かけの用例は黒色処理を示し、それ以外は同図中に表示した。

3 本書における本文中の遺物の番号は、挿図番号と対照できるようにして、以下のとおり記した。

(例) 図1の1番 → 図1-1

また、写真図版の遺物に付けた挿図番号は以下のとおり記した。

(例) 図1の1番 → 1図1

4 本書で使用した略号は、次のとおりである。

原町市…HM	仲山C遺跡…NY・C	相馬市…SM	明神遺跡…MZ
遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…l		
壘穴住居跡…SI	掘立柱建物跡…S ₁	土 坑…SK	鍛冶遺構…SWK
集石遺構…SS	柱列跡…SA	溝 跡…S ₂	道 跡…SF
性格不明遺構…SX	小穴・ピット…P	グリッド…G	

5 参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し、各編の末にまとめて収めた。

目 次

序 章

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の環境	3

第1編 仲山C遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 調査経過	11
第4節 調査の方法	14

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層	15
第2節 竪穴住居跡	18

1号住居跡 (18)

第3節 土 坑	20
---------	----

縄文時代の土坑	7号土坑 (20)	9号土坑 (20)	10号土坑 (22)	14号土坑 (22)
	16号土坑 (25)	21号土坑 (25)	22号土坑 (26)	

古代以降の土坑	1号土坑 (26)	2号土坑 (27)	3号土坑 (27)	4号土坑 (27)
	5号土坑 (29)	6号土坑 (29)	8号土坑 (29)	11号土坑 (30)
	12号土坑 (30)	13号土坑 (30)	15号土坑 (32)	17号土坑 (32)
	18号土坑 (32)	19号土坑 (33)	20号土坑 (33)	

第4節 鍛冶遺構	33
----------	----

1号鍛冶遺構 (34)	2号鍛冶遺構 (34)	3号鍛冶遺構 (35)
-------------	-------------	-------------

第5節 溝 跡	39
---------	----

1号溝跡 (39)	2号溝跡 (39)	3号溝跡 (41)
-----------	-----------	-----------

第6節 道 跡	41
---------	----

1号道跡 (41)	2号道跡 (42)	3号道跡 (42)
-----------	-----------	-----------

第7節 性格不明遺構	43
------------	----

1号性格不明遺構 (44)	2号性格不明遺構 (44)	3号性格不明遺構 (45)
---------------	---------------	---------------

第8節 遺構外出土遺物	46
-------------	----

縄文土器 (46)	土製品 (48)	土師器 (48)
縄文時代の石器 (49)	弥生時代の石器 (51)	

第3章 ま と め	55		
第2編 明神遺跡			
第1章 遺跡の環境と調査経過			
第1節 遺跡の位置と自然環境	59		
第2節 歴史的環境	61		
第3節 調査経過	64		
第4節 調査方法	66		
第2章 遺構と遺物			
第1節 遺跡の概要と基本土層	67		
第2節 竪穴住居跡	70		
1 a号住居跡 (70)	1 b号住居跡 (81)		
第3節 掘立柱建物跡	83		
1号建物跡 (84)	2号建物跡 (85)	3号建物跡 (88)	4号建物跡 (89)
5号建物跡 (90)	6号建物跡 (92)	7号建物跡 (94)	8号建物跡 (97)
9号建物跡 (98)	10号建物跡 (99)	11号建物跡 (101)	12号建物跡 (102)
13号建物跡 (103)	14号建物跡 (104)	15号建物跡 (106)	16号建物跡 (107)
第4節 性格不明遺構	108		
1号性格不明遺構 (108)			
第5節 土 坑	110		
1号土坑 (110)	2号土坑 (110)	3号土坑 (111)	4号土坑 (112)
第6節 その他の遺構	112		
1号集石遺構 (112)	1号柱列跡 (112)	1号溝跡 (114)	屋外ピット (114)
第7節 遺構外出土遺物	114		
縄文土器 (114)	土師器・須恵器 (116)	石器 (116)	
土製品 (116)	粘土 (120)		
第3章 考 察	121		
第1節 遺 物	121		
第2節 遺 構	123		
第4章 ま と め	127		
付 編 仲山C遺跡出土鉄滓等分析調査	169		

挿図・表・写真目次

序 章

〔挿 図〕

図1 常磐自動車道位置図	1
--------------	---

〔 表 〕

表1 年次別発掘調査遺跡一覧	3
----------------	---

第1編 仲山C遺跡

〔挿 図〕

図1 遺跡周辺表層地質図	8
図2 周辺の遺跡位置図	10
図3 調査区・工事計画図	12
図4 遺構配置図	16
図5 基本土層図	17
図6 1号竈居跡と出土遺物	19
図7 7・9・14・16号土坑	21
図8 10・21・22号土坑	23
図9 9・14・22号土坑出土遺物	24
図10 1～6・8・11・12号土坑	28
図11 13・15・17～20号土坑	31
図12 1～3号銀冶遺構	36

〔 表 〕

表1 3号銀冶遺構出土鉄滓グリッド別数量表 表(表1)	37
表2 3号銀冶遺構出土鉄滓グリッド別数量表 表(表2)	37

〔写 真〕

1 調査区遠景(北東上空から)	131
2 調査区遠景(南から)	131
3 沢1, 7・9・14・16号土坑	132
4 基本土層, 沢2・3・4	132
5 1・2号銀冶遺構	133
6 3号銀冶遺構	133

図13 3号銀冶遺構出土遺物	37
図14 1～3号溝跡, 1～3号道跡	40
図15 1～3号性格不明遺構	43
図16 2・3号性格不明遺構出土遺物	45
図17 遺構外出土遺物(1)	47
図18 遺構外出土遺物(2)	49
図19 遺構外出土遺物(3)	50
図20 遺構外出土遺物(4)	52
図21 遺構外出土遺物(5)	53
図22 遺構外出土遺物(6)	54
図23 遺構・遺物の分布状況	56

表3 3号銀冶遺構出土微細遺物グリッド別数量表 表(表1)	37
表4 3号銀冶遺構出土微細遺物グリッド別数量表 表(表2)	37

7 1号竈居跡, 1・2号土坑	134
8 3～6号土坑	134
9 7～9号土坑	135
10 10～13号土坑	135
11 14～16号土坑	136
12 17～20号土坑	136

13	21・22号土坑, 1～3号溝跡	137
14	1～3号溝跡, 1号道跡	137
15	2・3号道跡, 1・2号性格不明遺構	138
16	2・3号性格不明遺構, 遺構外北西に 隣接する製鉄関連遺構	138
17	1号竈居跡, 9・14・22号土坑出土遺物	139

18	2・3号性格不明遺構, 3号鍛冶遺構, 2号溝跡, 遺構外出土遺物	140
19	遺構外出土遺物(1)	141
20	遺構外出土遺物(2)	142

第2編 明神遺跡

〔挿 図〕

図1	遺跡周辺表層地質図	60
図2	周辺の遺跡位置図	62
図3	調査区・工事計画図	65
図4	遺構配置図	68
図5	基本土層図	69
図6	1a号竈居跡(1)	71
図7	1a号竈居跡(2)	73
図8	1a号竈居跡出土土器(1)	77
図9	1a号竈居跡出土土器(2)	79
図10	1a号竈居跡出土土器(3)	80
図11	1b号竈居跡	82
図12	1号建物跡	85
図13	2号建物跡	86
図14	3号建物跡	88
図15	4号建物跡	90
図16	5号建物跡	91
図17	6号建物跡	93
図18	7号建物跡	96
図19	8号建物跡	97
図20	9号建物跡	98

図21	10号建物跡と出土遺物	100
図22	11号建物跡	101
図23	12号建物跡	103
図24	13号建物跡	104
図25	14号建物跡	105
図26	15号建物跡	106
図27	16号建物跡	108
図28	1号性格不明遺構と出土遺物	110
図29	土坑と出土遺物	111
図30	その他の遺構	113
図31	遺構外出土遺物(1)	117
図32	遺構外出土遺物(2)	118
図33	遺構外出土遺物(3)	119
図34	1a号竈居跡出土土器の類例(1)	122
図35	1a号竈居跡出土土器の類例(2)	123
図36	官衙風建物群の諸例	125
図37	明神遺跡推定復元図	126

〔表〕

表1	周辺の遺跡	63
----	-------	----

〔写 真〕

1	遺跡遠景(東上空から)	145
2	遺跡遠景(南上空から)	145

3	調査区中央部近景	146	21	11号建物跡全景	156
4	調査区全景	146	22	12号建物跡全景	157
5	基本土層	147	23	13号建物跡全景	158
6	1a号能居跡全景	147	24	14号建物跡全景	158
7	1a号能居跡細部	148	25	15号建物跡全景	158
8	1a・b号能居跡細部	149	26	16号建物跡全景	159
9	1a号能居跡遺物出土状況	150	27	掘立柱建物跡細部	159
10	掘立柱建物跡群	151	28	1号性格不明遺構	160
11	1号建物跡全景	151	29	土坑	160
12	2号建物跡全景	152	30	その他の遺構	161
13	3号建物跡全景	152	31	1a号能居跡出土土器(1)	162
14	4号建物跡全景	153	32	1a号能居跡出土土器(2)	163
15	5号建物跡全景	153	33	1a号能居跡出土土器(3)	164
16	6号建物跡全景	154	34	1a号能居跡出土土器(4)	165
17	7号建物跡全景	154	35	遺構外出土縄文土器(1)	165
18	8号建物跡全景	155	36	遺構外出土縄文土器(2)	166
19	9号建物跡全景	155	37	石器・石製品・土製品	166
20	10号建物跡全景	156			

付 編

〔挿 図〕

図1	仲山C遺跡出土資料№.1 X線回折 チャート	172	図4	精錬滓と鍛冶滓の分類	175
図2	仲山C遺跡出土資料№.2 X線回折 チャート	173	図5	砂鉄系鍛冶滓の分類と虹石系精錬滓 の範囲	176
図3	出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量 の分布図	175	図6	Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ -SiO ₂ 系平衡状態図	176

〔 表 〕

表1	調査資料と調査項目	169	表3	鉄滓のX線回折鉱物と製造工場の分類	174
表2	鉄滓の化学成分分析結果	174			

〔写 真〕

写真1	仲山C遺跡出土資料№.1 外観・顕微鏡 組織写真	171	写真2	仲山C遺跡出土資料№.2 外観・顕微鏡 組織写真	172
-----	-----------------------------	-----	-----	-----------------------------	-----

7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施し、平成9年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成9年度はいわき市内5遺跡と広野町内の1遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市内の4遺跡、広野町内の3遺跡、楢葉町内の3遺跡、富岡町内の2遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、いわき市内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は、広野町内の4遺跡、楢葉町内の5遺跡について実施した。平成12年度は、広野町内の1遺跡、楢葉町内の7遺跡、富岡町内の5遺跡について実施した。この12年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、広野町内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成13年度の調査では、楢葉町内の1遺跡、富岡町内の5遺跡について発掘調査を実施し、楢葉町大谷上ノ原遺跡のⅡ期線部を残して楢葉町内の発掘調査を全て終了した。平成14年度は、富岡町の1遺跡、大熊町の2遺跡について発掘調査を実施した。なお、平成14年度には、当初富岡ICまでについては日本道路公団東北支社いわき工事事務所、富岡ICから大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、年度途中から富岡IC～浪江ICまでの区間についてもいわき工事事務所が管理することとなった。平成15年度は、相馬工事事務所が管轄する区域でも発掘調査が実施されるようになり、相馬市の2遺跡、いわき工事事務所管轄区内に所在する浪江町の2遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は、いわき工事事務所管轄区域である双葉町の3遺跡、相馬工事事務所管轄の相馬市の1遺跡、南相馬市鹿島区の2遺跡について発掘調査を実施した。

平成17年度の調査経緯

平成17年度の常磐自動車道関連の調査は、いわき中央IC～浪江IC間の4遺跡、浪江IC～相馬IC間の6遺跡である。このうち浪江IC～相馬IC間の発掘調査の詳細は下記に示した。

平成17年度の常磐自動車道発掘調査は、7遺跡、総面積18,000㎡を対象に調査員6名を配し開始した。4月中旬には日本道路公団から示された優先順位に沿って南相馬市鹿島区1遺跡、同小高区2遺跡を対象に遺跡毎に2名ずつの調査員を配し実施した。最優先箇所であった宮前遺跡300㎡については、設計変更に伴い掘削範囲が遺跡保存範囲の調査予定区域におよばないことが確認されたことから、発掘調査の対象外とし、工事中立会の処置が講じられた。このことにより、早速に次の調査対象遺跡である同鹿島区の北山下遺跡に移動し、調査の準備に取りかかった。

また、同時に小高区で調査を開始していた四ツ栗・熊平Ⅱの高遺跡については、5月中旬に調査面積変更があり、四ツ栗遺跡が550㎡、熊平Ⅱ遺跡が800㎡の面積が追加となった。これにより、変則であった調査範囲のまとまりがとれ、四ツ栗遺跡に至っては、南側の調査範囲全域を剝離することとなり、熊平Ⅱ遺跡は要保存範囲全域の調査を行うこととなった。6月末から7月には四ツ栗・熊平Ⅱ遺跡の終了に伴い、荻原遺跡に移動し、9月30日までに小高区の調査を全て終了した。

鹿島区の北山下遺跡は、用水路の取り扱いは条件があるため当初、調査可能範囲の500㎡を優先し調査を開始した。以後、条件が整うごとに3度の追加指示により、5,100㎡の調査を行った。ただし、予定されていた5,600㎡のうち残りの500㎡は、県道部分であることから次年度調査となった。

表1 年次別発掘調査遺跡一覧

年 度	市・区 名	遺跡名	面積 (㎡)	収 録 報 告 書
1990	南相馬市小高区	四ツ栗	460	県営かんがい排水事業跡戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅰ
2005			4450	常磐自動車道遺跡調査報告43
1992		萩原	500	小高町文化財報告書第1集 萩原遺跡
1994			3950	県営かんがい排水事業跡戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ
2005			2200	常磐自動車道遺跡調査報告43
2005			熊平B	3100
2005	南相馬市原町区	仲山C	6300	常磐自動車道遺跡調査報告42
2004	南相馬市鹿島区	北山下	2000	未定
2005			5100	
2004	相馬市	明神	2000	常磐自動車道遺跡調査報告42
2005			2000	

後半期の9月中旬頃からは、南相馬市原町区仲山C遺跡および相馬市明神遺跡の調査を開始した。仲山C遺跡は、当初小高区の大田切遺跡が面積調整の候補とされていたが、原町区に調査優先箇所が提示されたことから急速、調査の対象となり6,300㎡の調査を実施した。また、相馬市の明神遺跡は前年度に続いての調査であり、残りの2,000㎡を対象に実施した。なお、北山下遺跡と明神遺跡については、調査区の埋め戻しを行い、12月中旬に本年度の全ての現地調査を終了した。(吉田)

第2節 遺跡の環境

遺跡周辺の環境について、ここでは本書掲載遺跡の所在する浜通り地方北部の概略を述べ、詳細は各編で記述する。

遺跡の位置と地理的環境

遺跡の位置 福島県は、本州の北東部、東北地方の南端に位置する。面積の約8割を山地が占め、南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の3区域に区分される。

本書に掲載した2遺跡は、浜通り地方の北部に所在する。浜通り北部には、相馬市・南相馬市・相馬郡新地町・飯館村の2市2町村が存在する。仲山C遺跡は、南相馬市原町区深野字仲山地区に所在し、北緯37°40′41″、東経140°55′01″に位置する。明神遺跡は、相馬市山上字明神ほかに所在し、北緯37°46′44″、東経140°53′47″に位置する。

地理的環境 浜通り北部の地質構造は、ほぼ南北に走る双葉断層を挟んだ東方の浜通り低地帯と、西方の阿武隈高地で大きく異なる。断層の西側は、新生代第三紀中新世に形成された火山性堆積物により緩やかな地形が連続している。断層の東側は、新生代第三紀に形成された塩手層や太田川層の上層に、第三紀鮮新世に形成された初野層・久保間層・山下層・富岡層などが堆積する。これらの層は、断層東側の丘陵部のほとんどを構成する。

段丘は、これらの丘陵を樹枝状に開折しながら東流する宇田川・真野川・新田川・太田川やそれ

らの支流の流域に形成され、6面に区分される。この他、河川の流域には自然堤防や氾濫原・沖積平野などが形成されている。

本書掲載遺跡の立地は、仲山C遺跡が双葉断層に沿って走る中生統の山麓斜面から鮮新統の丘陵にわたり、明神遺跡が宇田川北岸に形成された自然堤防上である。

歴史的環境

本地域は、明治期以来さまざまな調査・研究が行われており、日本考古学史上著名な遺跡も少なくない。ここでは、浜通り地方北部の主要な遺跡を時代別に概観していく。

旧石器時代の遺跡は、各地で遺物の採取は知られているが、面的な発掘調査が行われたのは少なく、新地町三貫地遺跡原口地点や南相馬市萩原遺跡を挙げるにすぎない。

縄文時代になると、遺跡数・調査数とも増加する。新地町新地貝塚は後期末葉の標式資料であり、同町三貫地貝塚とともに国史跡に指定されている。相馬市猪倉B遺跡・山田B遺跡・南相馬市八重米坂A遺跡など縄文時代前期の生居跡が多数検出された遺跡や、遺跡群研究では県内屈指の資料を提供することとなった飯館村真野ダム遺跡群の調査成果は、集落研究に一石を投じたこととなった。また、南相馬市の浦尻地区遺跡群は貝塚をはじめとする各種の生産遺跡の存在が知られており、相馬市大森A遺跡からは後・晩期の木質遺物が出土している。

弥生時代の遺跡は、中期の遺跡が主体を占め、前期と後期は少ない。標式遺跡として、相馬市藤堂塚遺跡や南相馬市桜井遺跡などが知られている。また、桜井遺跡や南相馬市天神沢遺跡からは石包丁や大陸系磨製石斧などが採集されており、これらは真野川・上真野川の上流で採取される粘板岩を素材とする。また、飯館村岩下A遺跡からは水田跡とみられる遺構も検出されている。

古墳時代には、前期古墳として前方後方墳の南相馬市桜井古墳がある。当地域では、後期になって古墳群が増加する。相馬市丸塚古墳・高松古墳群・西山古墳群・南相馬市真野古墳群・片草南原古墳群などがあり、各種の副葬品が出土している。また、装飾壁画で著名な羽山横穴墓群も当地域に所在する遺跡である。前述した大森A遺跡からは、水田跡が検出された。

奈良・平安時代の当地域は、宇多郡と行方郡に編成される。相馬市黒木田遺跡と南相馬市和泉庵寺跡が両部の官衙関連遺跡と考えられている。また、南相馬市入道畑瓦窯跡で生産された瓦が同市植松庵寺跡に、新地町善光寺窯跡の瓦が黒木田遺跡に、それぞれ供給されたことが判明している。この時期における本地域の最も大きな特徴として、製鉄遺跡群があげられ、南相馬市金沢遺跡群・大迫遺跡群・割田遺跡群をはじめ、新地町向田遺跡群・武井遺跡群など、この地域から採取される砂鉄を利用した大規模な製鉄遺跡群が調査されている。大和政権の北方政策という歴史的事象の中で、本地域の果たした歴史的役割が次第に解明されつつある。

源頼朝の奥州征伐後、当地域は、多少の抗争を経ながらも、相馬氏の支配に組み込まれるようになり、明治維新を迎える。南相馬市小高城跡・牛越城跡・相馬市中村城跡など城館跡の他、新地町中山B遺跡・相馬市鷲塚遺跡・古川尻B遺跡といった製塩遺跡や、南相馬市押原遺跡などの陶磁器生産遺跡、野馬土手など、各種の遺跡・遺構が残され、今日に受け継がれている。（佐 藤）

第1編 なか やま 仲山C遺跡

遺跡記号 HM-NY・C

所在地 南相馬市原町区(旧原町市)深野字仲山

時代・種類 縄文時代・奈良時代-集落, 弥生時代-散布地

調査期間 平成17年9月12日～12月9日

調査員 佐々木慎一・笠井崇吉・鹿又喜隆

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

仲山C遺跡は、太平洋に面した福島県浜通り地方の北部に位置し、南相馬市原町区深野字仲山に所在する遺跡で、その面積は12,000㎡である。遺跡はJR常磐線原ノ町駅から北西へ約6.2km、鹿島駅から南西5.3kmの位置にあり、遺跡の北東約600mには真言宗豊山派の寺院久保山安養寺と北沢酒池が、南約1.2kmの新田川左岸には温泉施設「はらまちユッサ」が所在する。

遺跡は阿武隈山地東縁の丘陵地に立地する。地質分類学上、本遺跡が立地する丘陵は、新第三紀鮮新世に形成された久保間層（旧滝ノ口層）と呼ばれる地質からなる（図1）。遺跡のすぐ西側には、双葉断層東側の富沢層・中ノ沢層をはじめとする中世代層群から構成される標高100～200m程の岩山が胸壁のように南北に連なっており、東側には第四紀更新世に形成された低位砂礫段丘が所在する。低位砂礫段丘のさらに東方には、本遺跡が立地する丘陵とはほぼ同じ時期に形成された山下層からなる塩崎丘陵が幾重にも樹枝状の沢に開析されつつ、遙か太平洋の海岸線まで延びている。

遺跡が立地する小丘陵は概ね平坦な台状の地形で、丘陵南縁に偏って主尾根筋が標高75.5mの最高所から東に延びている。尾根筋の南側は、幅広い谷となり、その谷底へ向い20°程の斜面が下る。この斜面には調査区西端と中央付近に浅めの沢が尾根筋に向かって詰めあげており、縄文時代の堆積土で埋没していた。また斜面の各所で鉄滓によく似た華鉄鉱（土壌中の鉄分が結晶化したもの）が露出する。斜面下部から谷底にかけてはやや平坦な地形となり、鍛冶遺構・土坑等を検出した。谷底の西端には縄文時代の取水遺構を伴う湧水点があり、湧水は細いせせらぎとなって東方へ流れ出している。調査区南辺はこのせせらぎに沿って設定され、南東端に埋没した沢1を、中央に沢2を、東寄り沢3をそれぞれ検出した。谷底から尾根筋までの比高差は5～12mを測る。主尾根の北側は頂部が平坦で、なだらかな支尾根が北東方向の調査区外へ延びている。支尾根と主尾根の間には南北幅30m程の浅い酒れ沢が有り、東方へ緩やかに下っている。酒れ沢の左岸には礫層が帯状に露出する。支尾根の北側には、阿武隈山地から蛇行しながら東流する小川により開析された高さ2m程の急峻な崖線が形成され、この崖線に沿って概ね調査区北辺が設定されている。調査区北西隅だけが小川から支尾根へ詰め上げる沢4の存在により、南北に細長く緩い斜面となっている。（笠井）

第2節 歴史的環境

仲山C遺跡が所在する南相馬市原町区は、遺跡の調査数が増えたことにより、従来知られてこなかった太古の人々の営みが騒ろげながら解明されつつある地域である。本節では、常磐自動車道の建設予定地に所在する遺跡を中心に仲山C遺跡周辺の歴史的な変遷を概観する（図2）。

本地域で最初に人類の営みが確認できるのは、後期旧石器時代で、塩崎丘陵、畦原台地、雲雀ヶ原台地等の丘陵縁辺部に石器の散布地が点在する。上太田の陣ヶ崎A遺跡(30)では、刺剣刀及び尖頭器が採集されており、狩猟及び木器や骨角器の加工が行われていたようである。

縄文時代になると遺跡数が飛躍的に増加する。縄文時代早期～前期初頭の遺跡は阿武隈山地東縁の丘陵部を中心に展開する傾向がある。常磐道の路線沿いでは菖蒲沢遺跡(4)、石神遺跡(11)、赤柴遺跡(16)等で早期後葉を中心とする遺物が数多く出土し、集落の存在が想定される他、本遺跡でも前期前葉の住居跡及び土器埋設土坑を調査している。縄文時代前期前葉～中期にかけては遺跡の分布が東方の低丘陵へ広がり、雲雀ヶ原台地では奥掛場遺跡(37)、上茨生の前屋敷遺跡等で当該期の遺構・遺物が確認された他、新田川を挟んで対岸にあたる塩崎丘陵の縁辺では高松B遺跡(21)、植松A遺跡(23)で中期の集落が展開する。鹿島区小池の宮前遺跡では前期前葉の大木2 a 式～中期中葉の大木8 a 式までの遺構・遺物が調査されており、阿武隈山地東縁部も前代に引き続き人々の生活の場となっていた。続く後期から晩期にかけては、西内遺跡(5)や切付遺跡(17)等、それまで遺跡が希薄であった河川流域の低地部でも土器や土偶等の遺物が採集されるようになるが、遺構の検出割合が少なく雲雀ヶ原台地北縁の高見町A遺跡(28)で晩期中葉の住居跡が確認された程度である。

当地域の弥生時代は中期中葉から始まると言っても過言ではない。この時期の遺跡は塩崎丘陵、雲雀ヶ原台地等の沖積地に突き出した丘陵部に点的に分布する。大甕丘陵に位置する川内迫B遺跡(32)では建物跡と考えられる小穴群と枳形式を中心とする多数の遺物が出土している。出土遺物の中に大型板状石器と呼ばれる打製石器群が含まれており、これと近似する石器群が本遺跡でも出土している。浜通り北部の中期後葉の土器型式として知られる桜井式の標式遺跡である桜井遺跡群が雲雀ヶ原台地北縁部に形成され、当地域の中心集落として古墳時代まで継続する他、塩崎丘陵北縁に所在する鹿島区江垂の天神沢遺跡では石包丁や大陸系磨製石斧が盛んに作られ、周辺の広平遺跡(19)等に供給されていたようである。

古墳時代前期になると、雲雀ヶ原台地北縁部に桜井遺跡群の集団を母体にして桜井古墳(29)が出現する。桜井古墳は桜井古墳群の主墳で、大規模な周溝を備えた全長約75mの東北地方でも有数の規模を誇る前方後方墳である。隣接する高見町A遺跡(28)では弥生時代後期末葉の十王台式と古墳時代前期の塩釜式を共存する集落跡が調査され、新田川北岸の沖積地でも荒井前遺跡(27)で大型住居跡と墓跡が見つかった。後期になると当地域では群集墳と横穴墓群が造営される。群集墳の代表的なものとしては藤ノ木古墳出土資料等、全国的にも出土割合の少ない金銅製双魚袋金具が出土した20号墳を含む鹿島区寺内の真野古墳群が有り、原町区内では荷渡古墳群(24)等が知られる。横穴墓群は沖積地を臨む丘陵崖面に作られるもので、同一丘陵上に古墳群を伴う割合が多い。代表的なものには北山横穴墓群(20)や赤や白の顔料で人物・渦巻き・馬・鹿等を描いた装飾壁画を持つことで有名な羽山横穴墓群(31)がある。

大化の改新後、奈良・平安時代にかけて当地域は陸奥国行方郡として再編される。その中心となっていたのが、郡衙跡に比定される泉庵寺跡と、行方軍団の所在地とされる植松庵寺跡(22)である。



この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/50,000地形図を複製したものです。
(承認番号平18農地審97号)

0 2,000m
(1/50,000)

Nr	遺跡名	所在地	Nr	遺跡名	所在地	Nr	遺跡名	所在地
1	仲山C	深野字仲山	14	押釜原	押釜字原	27	荒井前	下高平字荒井前
2	仲山D	深野字仲山	15	滝ノ原	馬場字滝ノ原	28	高見町A	高見町1丁目
3	仲山B	深野字中山	16	赤柴	馬場字赤柴	29	桜井古墳	上流佐字原畑
4	高瀬沢	深野字高瀬沢	17	切付	馬場字切付	30	陣ヶ崎A	上太田字陣ヶ崎
5	西内	深野字西内	18	入道稲瓦跡群	上北高平字入道稲	31	羽山横穴墓群	中太田字天狗田
6	風越B	深野字風越	19	広平	金沢字広平	32	川内迫B	下太田字川内迫
7	道ノ上	信田沢字道ノ上	20	北山横穴墓群	下北高平字北山	33	新田原	信田沢字新田原
8	沼沢	信田沢字沼沢	21	高松B	上北高平字高松	34	北原田A	北長野字北原田
9	中山B	石神字中山	22	植松庵寺跡	上高平字植松	35	北原田B	北長野字北原田
10	中山C	石神字中山	23	植松A	上高平字植松	36	野馬土手	原町区内一円
11	石神	石神字石神	24	荷渡古墳群	下北高平字荷渡	37	鬼掛場	菅沢字鬼掛場
12	石神B	石神字石神	25	堂後の板石塔婆	下北高平字堂後	38	軽沢遺跡群	菅字軽沢
13	戸島土塚群	押釜字戸島土	26	牛越城跡	牛越字館	39	出口	牛乗字出口

図2 周辺の遺跡位置図

泉庵寺跡は原町区泉に所在する遺跡で、3期にわたる郡庁及び正倉院の跡が確認され、植松庵寺跡(22)では重要な建物に使用されたとされる瓦が多数出土している。また、これらの役所に物資を供給したと考えられる遺跡も周辺地域で見つかり、入道追瓦窯跡(18)では植松庵寺跡に供給された瓦を焼いた窯跡が調査された。滝ノ原遺跡(15)では長頸瓶を焼いた須恵器窯が確認されており、発掘調査を実施していないため断言はできないが、試掘の所見によると、菰窪遺跡(4)でも須恵器窯が存在するようである。この時期、当地域では海浜部の丘陵地帯を中心に大規模な鉄生産が行われており、塩崎丘陵突端の金沢地区では100基を越える製鉄伊跡の他、木炭窯、鍛冶遺構等が複数調査されている。製鉄・鍛冶関連の遺跡は、鹿島区の大迫地区・割田地区遺跡群、仲山C遺跡(3)、道ノ上遺跡(7)、中山B遺跡(9)・中山C遺跡(10)、北原田A遺跡(34)・北原田B遺跡(35)、蛭沢遺跡群(38)、出口遺跡(39)等の周辺の丘陵部でも確認されており、本遺跡でも3基の鍛冶遺構を調査した。本遺跡の場合所属時期は不明なものの、以後近世に至るまで当地域と鉄生産が不可分の関係にあったことが窺われる。

律令体制が崩壊し、源頼朝の奥州征伐が終わると、当地域は相馬氏が支配する中世を迎える。この時期の遺跡としては、相馬家臣団や地侍の居所であった城館跡が多く認められ、代表的なものとしては、泉道20号の南側で、沖積地に突き出した独立丘陵に立地し、慶長年間の短期間であるが相馬氏の本居であった牛越城跡(26)等を上げることができる。この他、中世の遺構としては、関東武士の影響が考えられている中世板碑信仰を伝える堂後の板石塔婆(25)等がある。

近世になると、この地域は相馬中村藩敷下で推移する。参勤交代により浜街道が整備され、原町市街地の母体となる原の町が形成されるとともに、野生馬の放散防止を目的として雲雀ヶ原台地を囲むように巡る長大な土塁(一部石垣)と溝跡で構成される野馬土手(36)が構築される。この他、近世の遺跡としては、窯道具が出土した押釜原遺跡(14)や近世墓群とされる戸島土塚群(13)等があり、現在へ連なる歴史復元の数少ない証言者となっている。(並井)

第3節 調査経過

仲山C遺跡は、平成10年度の表面調査(『福島県内遺跡分布調査報告5』)において、鉄滓を採取し、製鉄等の生産関連遺跡として登録された遺跡である。

平成17年5月に試掘調査を実施し、丘陵の両縁辺部及び南側の谷部から縄文時代の壘穴住居跡・土坑・土器・石器等を検出し、遺構・遺物を確認した6,300㎡が発掘調査の範囲となった(図3)。

本発掘調査は、福島県教育委員会から平成17年9月9日付けの指示により、(財)福島県文化振興事業団が実施した。調査の開始は9月12日からで、調査終了間近の南相馬市小高区萩原遺跡から当初調査員1名を配置して現地の草刈り及び調査区の縄張りを行った。

仲山C遺跡は遺跡への進入路が北からの1本のみで、発掘調査の基地となる現地連絡所から遺跡へ行くためには藪の生茂る丘陵地を400m程横断する必要があった。このため当初は重機・発掘器



図3 調査区・工事計画図

材を遺跡搬入するための搬入路と、作業員用の通路を整備することに時間がとられ、重機が遺跡の表土除去にかかれたのは9月16日からである。

遺跡の表土除去は、遺跡北側50m程の位置に設定された排土置き場の関係で、遺跡南部から北方へ向って進める他無く、谷底から表土を掘りあげ、クローラードンプに乗せ換えて排土置き場へ運ぶという工程を繰り返すこととなった。また遺跡内には伐採木の根塊が多く残されていたため、遺跡を痛めないように注意深く取り除く必要が生じ、最終的に表土を除去し終えたのは10月11日である。この間9月26日には調査員が2人に増員され、29日からは作業員17人を搬入して、調査区南部から遺構検出に着手することになる。

遺構検出は調査区南部の主尾根西側の調査区境から、南側の斜面へ下るようにして開始した。調査区南部の斜面は比較的勾配が急であるため、安全と排土速度の向上のために、足場板を連結して長大な滑り台を作り、手箕に排土を集めて滑り台で斜面下へ落とし、クローラーキャリアに乗せ換えて排土する手法で遺構検出を進めた。遺構検出の進捗に伴い、調査区南部斜面の西側では木炭焼成土坑を中心とする土坑が次々に確認され、斜面下の調査区南西隅では埋没した沢跡（以下沢1）を検出した。この沢1からは、その北岸にあたる位置から縄文時代前期初頭の取水遺構と考えられる土器埋設土坑が見つかった。

10月になると萩原遺跡の調査終了に伴い、萩原遺跡に残っていた担当調査員が本遺跡へ合流して調査員数が3人となり、表土除去と遺構検出の他に遺構精査も並行して行える体制が整った。このため排土の問題から優先して調査する必要がある土器埋設土坑（SK09・14）を含む沢1の精査を即座に開始し、随時周辺の鍛冶遺構の精査も実施した。10月11日には測量会社に委託して測量用基準杭を打設し、世界測地系に即した遺構・遺物の測量を可能とした。また、表土除去作業の終了に伴い17日から新規に作業員を増員して60人体制で調査区全域での遺構検出・遺構精査を進めると共に、微細遺物採取のため鍛冶関連遺構等の土壌洗浄を開始した。

11月に入ると3号鍛冶遺構を残して調査区南部斜面の調査はほぼ完了し、調査の主体は調査区北部に移っていった。調査区北部では支尾根の緩やかな頂部で、縄文時代前期の竪穴住居跡（SI01）や、土器器臺を埋約した性格不明遺構（SX02）等を調査した他、調査区北西部の埋没した沢付近で縄文時代前期前葉の大型土坑（SK22）が検出され、これら遺構の調査も同時に進められた。

調査区北部の遺構の掘り下げもほぼ完了した11月26日には相馬市明神遺跡とともに「遺跡の案内人」による遺跡の現地公開を開催し、地味な内容にも関わらず多くの見学者を迎えることが出来た。土壌採取が原因で調査が遅れていた3号鍛冶遺構の調査が完了すると、クローラーキャリアの通路部分についても遺構検出が可能になり、即日硬化した表土を除去して遺構検出を進めたがこの部分から遺構は検出されなかった。

調査がほぼ一段落した12月8日にはラジコンヘリコプターによる遺跡全景の空中撮影を実施した。12月9日には全ての調査を終了し、器材を撤収するとともに、東日本高速道路株式会社へ遺跡を引渡した。

(笠井)

第4節 調査の方法

仲山C遺跡では、調査区の位置を国土座標の中で正確に把握するために、世界測地系を基本とした測量用基準杭（ $X = 186,740$, $Y = 95,596$ ）を打設した。調査はこの基準杭を原点（ $X = 0$, $Y = 0$ ）とし、4m方眼のグリッドを調査区全域に設定して実施した。グリッドの基点は調査区北西外の国土座標（ $X = 186,796$, $Y = 95,580$ ）に位置する。グリッドの表記方法はアルファベットと算用数字を組み合わせたもので、A1グリッド～U24グリッド間で、西から東にアルファベット順、北から南に算用数字順で移行する。グリッド杭は該当グリッドの北東角に位置し、測量用基準杭はE15グリッドに属する。これらのグリッドは遺構・遺物の位置表示に使用し、必要に応じてグリッド内に1m方眼を設定して平面図作成した他、遺物の取り上げ及び、単純な遺構の作図は、光波測距機を用いて作図した。

調査区内の標高は、日本道路公団が設置した標高基準点を原点として標高移動を行い、測量用基準杭上に水準点（ $Z = 75.578\text{m}$ ）を移動し、これを調査時の原点とした。

調査区の表土剥ぎは原則的に重機を使用し、遺構検出・遺構掘り込みは人力で行った。

調査区内の土層については、基本土層はアルファベット大文字「L」とローマ数字を用い、遺構内堆積土については、アルファベット小文字筆記体「l」とアラビア数字を用いて表記し、さらに細分が必要なものについては土層表記の末尾にアルファベットの小文字を添えた。

各種遺構の掘り込みは、写真撮影及び実測用に土層観察帯を設定して行った。聖穴住居跡等の大型遺構は原則として4分割法により調査を実施し、遺存状態の悪いものについては適宜土層観察帯を設定した。土坑については、原則として2分割法を採用した。また土色に関しては、日本色研事業株式会社の新版標準土色帖に準拠した。

遺構の記録は縮尺10分の1及び20分の1、地形図は縮尺200分の1、遺物の実測図は等倍で作図した。写真は35mm判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムの双方を用いて撮影した他、聖穴住居跡等の大型遺構・遺跡全景・遺物等は6×4.5判を使用した。また編集・割付けのため、同一アングルでデジタルカメラの撮影も合わせて行った。

鍛冶遺構については、鍛冶剥片・粒状滓等の微細遺物を採取するため、1mメッシュの小グリッド（1～100）を設定し、グリッド毎に層位を分けて土壌を採取し、ウォーターセパレーションによる水洗浄で余分な土砂を取り除いた後、調査室に運び肉眼による分別採取を行った。

本遺跡の鉄滓等の化学分析はJFEテクノリサーチ株式会社に委託して実施し、その結果は巻末に付編として掲載している。

調査記録・出土資料は、当事業団の整理基準に準拠して整理を行い、報告書刊行後、(財)福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

(並 井)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

仲山C遺跡からは、住居跡1軒・土坑22基・鍛冶遺構3基・溝跡3条・道跡3条・性格不明遺構3基を検出した(図4)。出土遺物は縄文土器362点、土師器192点、陶磁器1点、石器42点、羽口7点、椀形滓16点、伊壁2点、鉄滓2.44kg、鍛造剥片9.4g、粒状滓8.4g、舞丸1個である。

遺構の分布は偏りがある。調査区西部の尾根付近から南部斜面西側にかけて木炭焼成土坑を含む土坑群、斜面下の沢1周辺では縄文時代前期の土器埋設土坑、調査区南部斜面中央から西側にかけての斜面下には、鍛冶関連遺構と木炭焼成土坑が分布する。調査区中央部は遺構の空白地帯で、北部の丘陵縁に沿って、縄文時代前期の住居跡や奈良時代の土器が出土する浅い掘り込み、木炭焼成土坑、時期不明の溝跡や道跡が検出された。遺物は縄文時代前期初頭～前期前半の時期のものが多く、早期中葉や後期・晩期の資料も認められる。石器は主に縄文土器に伴うものと考えられるが、一部弥生時代の打製石器と考えられるものが含まれる。鍛冶遺物については、羽口・伊壁・鉄滓等が出土しているが、その帰属時期は不明である。遺物は遺構に伴って出土したものは少なく、主に沢の堆積土や風倒木痕から出土したものである。

仲山C遺跡の層序は、上位から表土、黒褐色土、ローム、礫層に分けられる(図5、写真4・5)。調査区内は起伏が激しく、各所に沢や谷地形があり、窪地には局所的な堆積層が認められる。なお、試掘調査の層序は本調査の層序に対応しないため、試掘調査時の層序を記載した。

L Iは遺跡の表土層である。草木痕の影響を受けており、土色の違いから暗褐色のI aと灰黄褐色のI bに分かれる。

L I a : 調査区全域に堆積する暗褐色土層。層厚は10cm程度。

L I b : 主尾根北側の調査区北部で部分的に認められる灰黄褐色の木成堆積層。

L IIは主に丘陵頂部から以北に分布する堆積土で、包含物と土色から以下の6層に分かれる。

L II a : 調査区のはほぼ全域で認められるしまりのある黒褐色土。層厚は約20cmを測る。

L II a' : 調査区北西部の調査区際付近に局所的に認められる。L II aの再堆積土。

L II b : 調査区頂部平坦面から沢4にかけて堆積する黄褐色の再堆積土。局所的に砂礫を含む。

L II c : 調査区頂部平坦面から沢4で認められる暗褐色土。下部に縄文時代前期の遺物を含む。

L II d : 沢4の底面に堆積する無遺物の明暗褐色土。

L II e : 沢4の底面に堆積するグライ化した黒色粘土。無遺物層である。

L IIIは調査区南部斜面に認められる堆積土で、包含物と土色から以下の5層に分かれる。

L III a : 調査区南部斜面の中央付近と沢1に部分的に認められるL IVの再堆積層。木炭焼成土坑であるSK12はこの層を掘り込んで作られている。

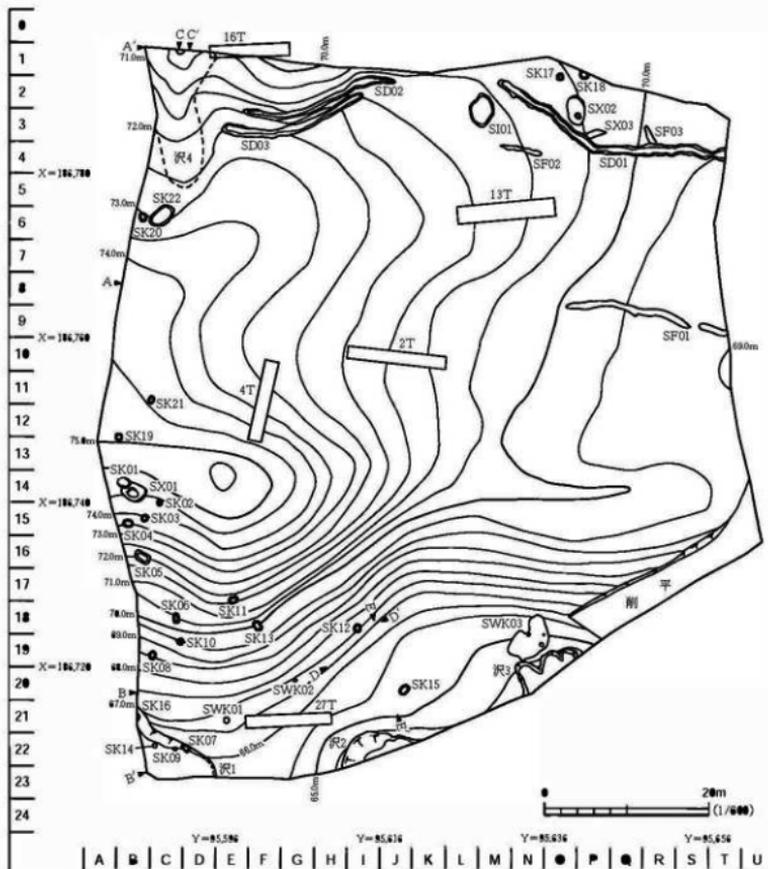


図4 遺構配置図

- L III b : 調査区南部斜面の中央と西側で尾根に詰め上げる浅い沢跡に堆積する黒褐色土。調査区南部斜面南西部に残る地滑り跡の割れ目にも堆積していた。
- L III c : 調査区南部斜面の中央と西側で尾根に詰め上げる浅い沢跡に堆積する暗褐色土。縄文時代前期の遺物を含む。
- L III d : 図化していないが、調査区南部斜面の西側で尾根に詰め上げる浅い沢跡に堆積する暗褐色土 (10YR 3/4)。SWK03はこの層の上に作られている。縄文時代前期の遺物を含む。
- L III e : 調査区南部斜面の下部に堆積する無遺物層。岩盤に沿って南側へ地滑りを起こしている。

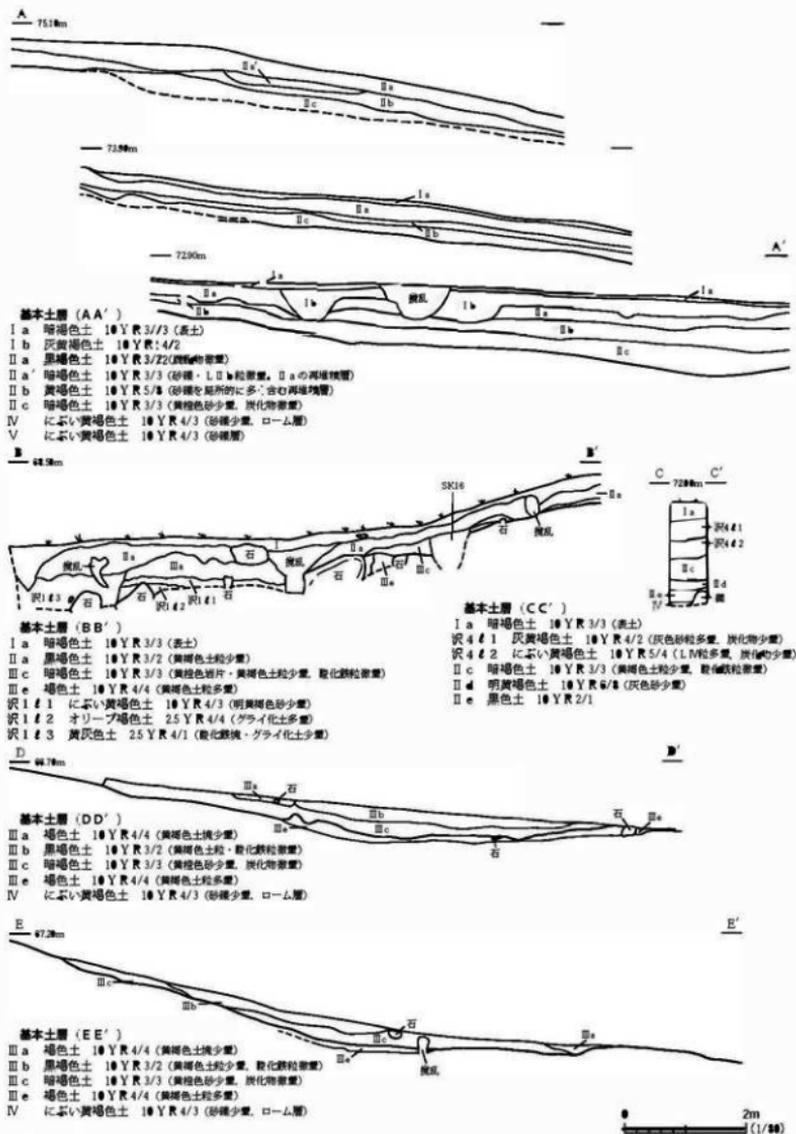


図5 基本土層図

L N : 調査区全域に堆積する砂礫を含むローム層で遺跡の基盤層。

L V : L Nの下位に位置する砂礫層で、調査区中央の沢跡左岸に帯状に露出する。

この他、調査区内4箇所で見出された沢が検出でき、調査区南部斜面下沢を西側から沢1・沢2・沢3、北西隅の沢を沢4として調査した。以下図示していない沢2・3の堆積土も含めて列挙する。

沢1Ⅱ1 : 沢の中央に堆積する砂質の水成堆積層。縄文土器を含まず、LⅢaの上に堆積する。

沢1Ⅱ2 : 沢の左岸寄りに堆積するシルト質の水成堆積層。LⅢaの下に堆積。

沢1Ⅱ3 : 沢1Ⅱ2の下層に位置する砂質の水成堆積層。縄文前期前葉の土器片が含まれる。

沢2Ⅱ1 : 沢の左岸寄りに堆積する黒褐色土層(2.5Y3/1)。L N塊を少量含む斜面からの流入土。

沢2Ⅱ2 : 沢2Ⅱ1の下層に位置する黒色シルト層(2.5Y2/1)の水成堆積層。遺物を含まない。

沢2Ⅱ3 : 沢の中央に堆積する灰色砂(5Y4/1)の水成堆積層。沢1Ⅱ1・沢3Ⅱ2に対応する。

沢3Ⅱ1 : LⅢaの上に堆積する黒色シルト層(10YR2/1)。沢2Ⅱ2に対応する。遺物を含まない。

沢3Ⅱ2 : 沢底に堆積する褐灰色砂(10YR6/1)の水成堆積層。沢1Ⅱ1・沢2Ⅱ3に対応する。

沢4Ⅱ1 : LⅡより上に位置する砂質の水成堆積層。遺跡北側の小川の氾濫により堆積。

沢4Ⅱ2 : 沢4Ⅱ1下層の砂質の水成堆積層。沢4Ⅱ1同様小川の氾濫により堆積。炭化物を含む。

(笠井)

第2節 竪穴住居跡

仲山C遺跡で見出した住居跡は、調査区北側の丘陵縁に位置する縄文時代前期前葉の所産と考えられる竪穴住居跡のみである。以下この住居跡を1号住居跡として報告する。

1号住居跡 S I 01

遺構 (図6, 写真7)

本遺構は、調査区北側のL・M-2・3グリッドに位置する。遺構は北東方向へ延びる低く幅の広い尾根上に立地する。周囲に同時期の遺構は存在しないが、遺物は少数ながら認められる。本遺構の検出面はL N上面で、炭化物を含む楕円形の黒褐色土の広がりを確認したため、遺構の中央を通るように十字の土層観察用ベルトを設定し掘り下げた。

土層観察の結果、住居内の堆積土は3層に分けられた。Ⅱ1は炭化物を含む有機質の多い黒褐色土、Ⅱ2は炭化物・礫を含む暗褐色土、Ⅱ3は周壁の崩落土と考えられるL N粒を多量に含む暗褐色土で、堆積状況から流入土の自然堆積と判断した。

住居跡の平面形は長辺が強く膨らむ隅丸長方形で、遺構の方位は短辺の中点を結んだラインを基準とすると、N18°Eを示す。遺構の規模は長軸である北東-南西方向が3.50m、短軸である北西-南東方向が2.97mを測り、短辺である北東辺は0.85m、南西辺1.80mを測る。遺構検出面からの深さは最も深い遺構中央で30cm、最も浅い北隅付近で18cmを測る。周壁は北西側で若干傾斜す

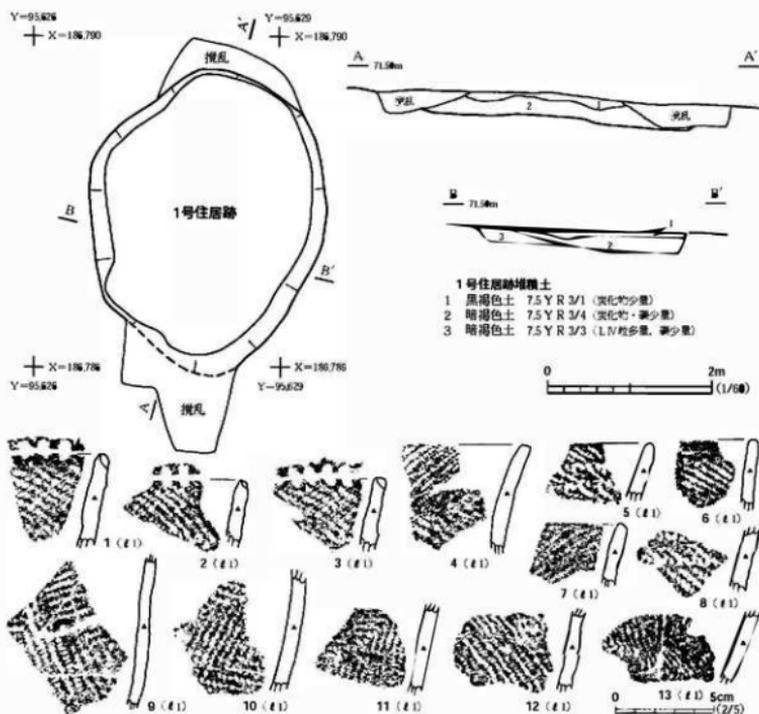


図6 1号住居跡と出土遺物

る他はほぼ垂直に立ち上がる。底面はL Nを掘り込んで作られており、ほぼ平坦でやしまりがある。

本遺構から、柱穴・地床炉等の屋内施設を検出することはできなかった。

遺物 (図6, 写真17)

本遺構からは、1から縄文土器23点が出土した。出土した土器はいずれも縄文時代前期前葉の織維土器で、風化が進んでいるが、それらの中で地文が判別できるもの13点を図化した。

図6-1～7は深鉢の口縁部片である。いずれも平坦口縁と見られ、1～3には口唇外端部に棒状工具で施された幅5mm、深さ5mm程の刻み目が認められる。

図6-8～13は深鉢の胴部片で、外面全体に単節縄文を縦横位に転がして羽状縄文を施す。

まとめ

本遺構は、屋内施設を備えていないため、住居跡と断定するには証拠不足であるが、土坑としては規模が大きいこと、底面がほぼ平坦で傾斜もなくしまりがあることから、住居跡と判断した。本遺構は、出土した縄文土器の年代観から縄文時代前期前葉の所産であろう。(佐々木)

第3節 土 坑

仲山C遺跡では、22基の土坑を検出し、検出順に1～22号土坑まで番号をふった。これらの土坑は時期別に大きく縄文時代の土坑7基と古代以降の土坑15基に分けられる。縄文時代の土坑の内2基は前期前葉土器埋設土坑である。また古代以降の土坑はほとんどが木炭焼成土坑と考えられる。以下土坑の番号順とは異なるが、縄文時代の土坑、古代以降の土坑の順に報告する。

縄文時代の土坑 (SK07・09・10・14・16・21・22)

7号土坑 SK07 (図7, 写真9)

本遺構は調査区西部のD22グリッドに位置する。沢1の左岸にあたる傾斜地に立地し、西0.6mにSK09、3.1mにSK14、北西6.3mにSK16が所在する。遺構検出面はLN上面で、沢1#3の除去後、隅丸長方形で黒色土の広がりとして検出し、短軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は#1のみである。#1は黒色粘土質シルトで、葉鉄鉱の薄片を含み、鉄砲水等で一気に遺構内へ流入したようである。

遺構の平面形は北隅が不明瞭な隅丸長方形で、方位は直線的な南西辺を基準にするとN47°Wを示す。規模は、長軸93cm、短軸66cm、遺構検出面からの深さ25cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦である。周壁は北西・北東・南東ではほぼ垂直に立ち上がる。南西側は流出しているが、この部分に長さ50cm程の自然石が露出し、壁の役割を果たしていたようである。

本遺構の性格は不明であり、遺構内から遺物も出土していないが、検出した位置関係や層序、周辺に散らばって出土した遺物の状況から縄文時代前期の土坑と考えられる。(鹿 又)

9号土坑 SK09 (図7・9, 写真9・17)

本遺構は調査区西部のC22グリッドに位置する。沢1の左岸にあたる傾斜地に立地し、東0.6mにSK07、西2.1mにSK14、北西5.4mにSK16が所在する。遺構検出面はLN上面で、沢1#3の除去後、裏敷の土器片とともに楕円形をした暗褐色土の広がりとして検出し、平面を四分割し、堆積土及び出土遺物を記録しつつ掘り下げた。

遺構内の堆積土は#1のみである。#1は暗褐色粘土質シルトで、葉鉄鉱の薄片を含み、鉄砲水等で一気に遺構内へ流入したようである。

本遺構は平面円形で、規模は直径37cm、遺構検出面からの深さ35cmを測る。底面は一部LVにまで達しており、中央へ向って窪んでいる。周壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側は一部流出して失われている他、自然石が露出している部分もある。

本遺構は土器埋設土坑で、土器は遺構底面及び南壁側へ崩れ落ち、貼り付いた状態で出土した他、

その上部が壁面の流出部分から遺構外へ飛び出し、沢部から散布した状態で検出された。

本遺構から出土した遺物は縄文土器31点であるが、完全には接合しなかったものの周囲の沢部に散らばっていた破片と合わせて1個体となる可能性が高い。また破片中に底部片が1点も含まれないことから、土器の埋設時には既に存在しなかったものと考えられる。

図9-1は比較的大きめの破片から復元した埋設土器である。口径が40cm弱、高さが30cm以上ある大きめの深鉢で、胴部が膨らみを持ち、弱く括れて外反気味に開く口縁部へ移行する器形を呈する。口唇部はほぼ水平に面取りされ、口唇部外端にやや斜めの刻み目を5mm程の間隔で連続して刻んでいる。外面には原体幅4cm程の結束縄文を横位に幾段も展開させており、内面にはナデによる調整を施している。胎土には繊維痕跡と砂粒が認められ、焼成はやや不良であり、黄褐色を呈する。縄文時代前期初頭の花積下層式土器と考えられる。

本遺構は埋設土器とはほぼ同サイズに作られたと推定される土坑である。遺構の性格は、埋設土器が底部を欠いていること、土坑の底面が砂礫層にまで達していること、土坑の周辺が沢頭にあたる地形であり、沢の落ち際付近に設けられていること等から、人口的に湧水点を作るために設けられた取水施設ではないかと思われる。実際沢1を掘り下げたところ、本遺構とはほぼ同一標高の南西2m程の地点で湧水が湧き出し、豊富な水は調査終了まで涸れることはなかった。本遺構の所属時期は埋設土器の年代観から縄文時代前期初頭と考えられる。(鹿 又)

10号土坑 SK10 (図8, 写真10)

本遺構は調査区南西部のC19グリッドに位置する。調査区南部斜面の南西部を詰め上げる沢筋の中位に立地し、南約12mにSK07・08、北約29mにSK21が所在する。遺構検出面はLN上面で、LIIIe除去後、方形の黒褐色土の広がりとして検出し、短軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は2層に分かれた。①はLN粒を多量に含む黒褐色土、②は黄褐色土で、堆積状況から斜面上位からの流入土と判断した。

遺構の平面形は南西辺が膨らむ長方形で、遺構の方位は短辺の中点を結んだラインを基準とするとN42°Wを示す。規模は上端で長軸73cm、短軸63cm、遺構検出面からの深さ24cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、南西側へ傾斜する。周壁は底面から傾斜しつつ立ち上がる。

本遺構は斜面中位に単独で存在する土坑であり、その性格は不明である。本遺構からは①から縄文土器2点が出土した。土器の表面は顕著に風化していることから四化していない。これらの土器は胎土に繊維痕跡が認められることから縄文時代前期前葉の所産と考えられる。本遺構も出土遺物の年代観から、縄文時代前期前葉の所産としておく。(笠 井)

14号土坑 SK14 (図7・9, 写真11・17)

本遺構は調査区南西部のC22グリッドに位置する。沢1の左岸にあたる傾斜地の中段で沢1の旧流路の沢底と考えられる幅の狭い平坦地に立地する。東2.1mにSK14、北西3.4mにSK16が所在

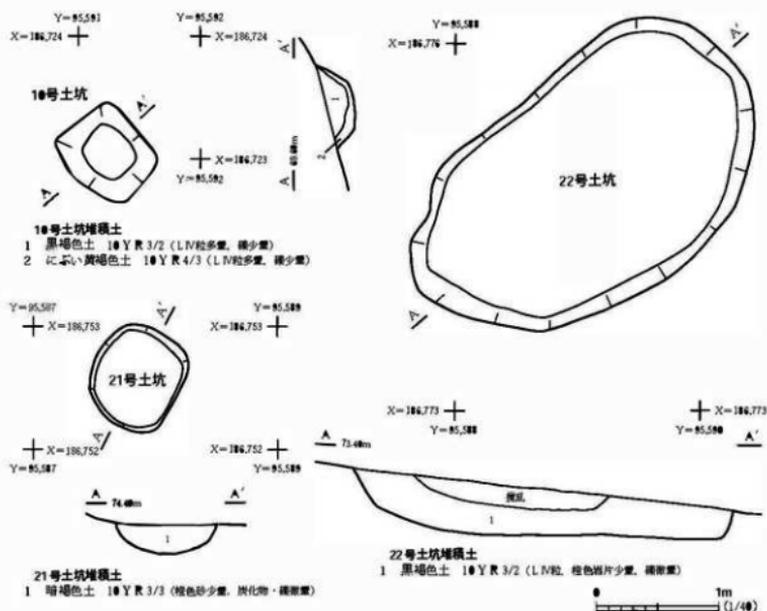


図8 10・21・22号土坑

する。遺構検出面はL/N上面で、沢1・3の除去後、複数の土器片とともに隅丸長方形をした暗褐色土の広がりとして検出し、平面を四分分割し、堆積土及び出土遺物を記録しつつ掘り下げた。

遺構内の堆積土は1のみである。1は暗褐色粘土質シルトで、葉鉄鉱の小片を含み、底面付近はグライ化している。鉄砲水等で一気に入ら遺構内へ流入したようである。

本遺構は平面楕円形で、規模は長軸68cm、短軸49cm、遺構検出面からの深さ29cmを測る。遺構の方位は長軸を基準とするとN68°Eを示し、長さ50cm程の沢底に露出した自然石を抱き込むように掘り込まれている。底面は平坦で、周壁は北側が緩やかに立ち上がり、東・西側はほぼ垂直に立ち上がるが、南側は露出する自然石をそのまま壁面としていたようである。

本遺構もS K09同様土器埋設土坑で、ほぼ1個体分の土器が斜面上方からの土圧によって押し潰された状態で、土坑の南側に位置する自然石に沿って出土した。土器の底部が出土しておらず、底部を外した状態で土坑に埋設されたと考えられる。

本遺構から出土した遺物は縄文土器62点であり、S K09同様に完全には接合しなかったものの周囲の沢部に散らばっていた破片と合わせて1個体となる可能性が高い。

図9-2は埋設土器の胴上部の破片である。口径が40cm以上、高さが30cm以上になると推定される大きめの深鉢で、胴部が膨らみを持ち、弱く括れて外反気味に開口縁部へ移行する器形を呈

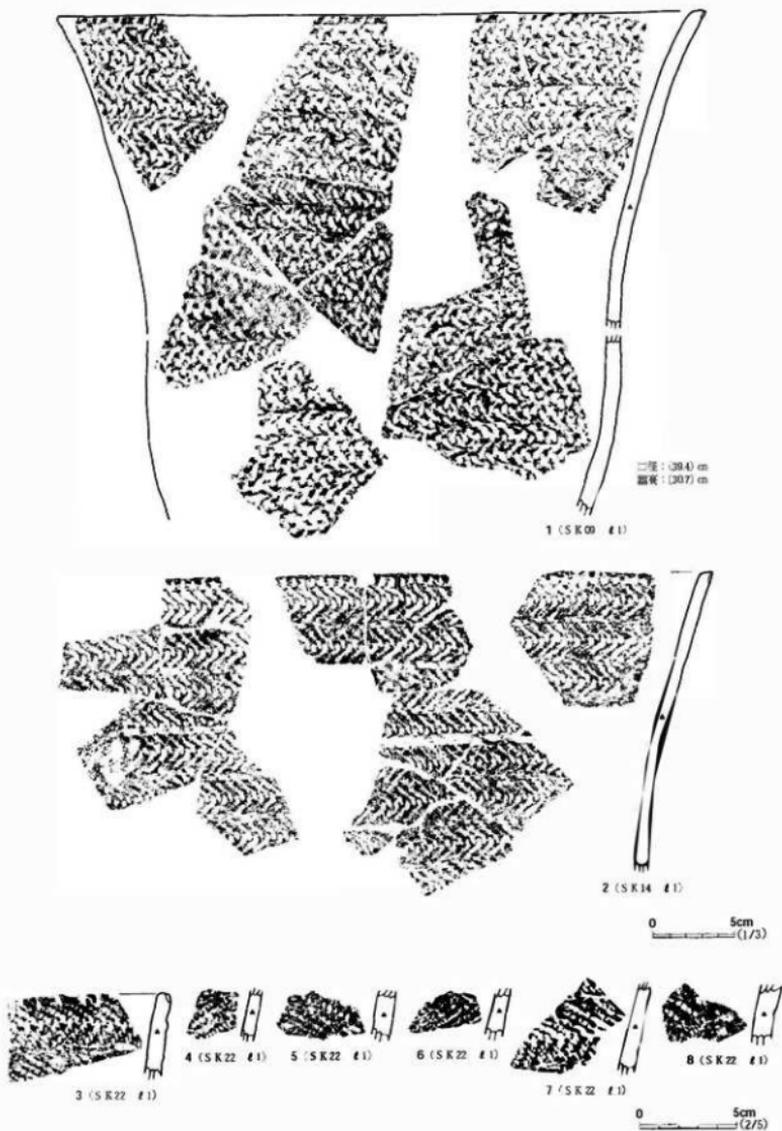


図9 ●・14・22号土坑出土遺物

する。口縁部がやや厚く、体部との境に段をもつ。口唇部はほぼ水平に面取りされ、口唇部外端にやや斜めの刻み目を5mm程の間隔で連続して刻んでいる。外面には短条の羽状縄文を横位に幾段も展開させており、内面にはナデによる調整を施している。胎土には雄雉痕跡と砂粒が認められ、焼成は比較的良好で、黒褐色を呈する。縄文時代前期初頭の花積下層式土器と考えられる。

本遺構は土器埋設遺構であるが、土坑のサイズは埋設土器よりも大きく、また遺構の中央に自然石が露出する。埋設土器はこの自然石と北壁の間に置かれたようで、土圧により自然石側に圧壊していた。遺構の性格は、埋設土器が底部を欠いていること、土坑の周辺が沢頭にあたる地形であること等から、SK09同様人工的に湧水点を作るために設けられた取水施設ではないかと思われる。

本遺構の所属時期は埋設土器の年代観から縄文時代前期初頭と考えられる。(鹿 又)

16号土坑 SK16 (図7, 写真11)

本遺構は調査区南西部西辺祭のB21グリッドに位置し、遺構の西側半分は調査区の外に延びる。沢1の左岸にあたる傾斜地の中段で沢1の旧流路の沢底と考えられる幅の狭い平坦地に立地する。南東約3.6mにSK14、5.4mにSK09が所在する。遺構検出面はLN上面であるが、土層断面の観察の結果LⅢcから掘り込まれている。遺構は沢1の堆積土除去後、黒褐色土の広がりとして検出し、調査区境の壁面沿いに半截して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は3層に分かれた。Ⅰは黒褐色シルト層で礫を混入しており、一気に遺構内へ流入したもので、Ⅱ・Ⅲは黄褐色及び褐灰色の粘土質シルトで砂流を含む水成堆積土である。

遺構は、隅丸方形か長方形であると考えられ、西側は調査区外へ延びている。規模は南北53cm、東西35cm以上、深さ82cmを測り、底面はすぼまり、周壁はなだらかに傾斜して立ち上がる。

本遺構の性格は不明であり、遺構内から2点の縄文土器片が出土したが、風化が顕著で時期を断定できない。SK07・09・14同様水場に関連した遺構であろうか。(鹿 又)

21号土坑 SK21 (図8, 写真13)

本遺構は調査区西部のB・C11グリッドに位置する。丘陵中央に位置する浅い沢の沢頭付近に立地し、周囲の地形は北東方向へ緩やかに傾斜する。南約29mにSK21、北約20mにSK22が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に楕円形の暗褐色土の広がりとして検出し、長軸方向に半截して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土はⅠのみで、炭化物及び礫を含む。堆積状況は不明である。

遺構の平面形は隅の湾曲が大きい隅丸長方形で、遺構の方位は短辺の中点を結んだラインを基準とするとN29°Eを示す。規模は長軸99cm、短軸77cm、遺構検出面からの深さ13cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、中央へ向って窪んでいる。周壁は底面から湾曲しつつ立ち上がる。

本遺構は丘陵頂部に単独で存在する土坑であり、その性格は不明である。本遺構からは縄文土器片が出土したが、風化が顕著で詳しい時期を断定できない。(鹿 又)

22号土坑 SK22 (図8・9, 写真13・17)

本遺構は調査区北西部のC6グリッドに位置する。沢4の沢頭付近で北側へ下る緩やかな傾斜地に立地し、西側でSK20と接する。また木根の攪乱により、遺構上部の西半が壊されている。遺構検出面はLIIc上面で、LIIb除去時に黒褐色土の広がりとして認識し、長軸方向に半載して堆積土を記録した。なお本遺構は試掘の段階で住居跡として報告されていたものであるが、底面の状態が安定せず、床面と認識できないことから土坑として報告する。

遺構内の堆積土はⅠのみで、炭化物及び礫を含む。堆積状況は不明である。

遺構の平面形は不正な楕円形で、遺構の方位は直線的な北西辺を基準とするとN51°Eを示す。規模は長軸120cm、短軸105cm、遺構検出面からの深さ13cmを測る。遺構底面は起伏があり、北方向へ緩やかに下っており、一部でLN・LVが露出する。周壁は底面からそのまま壁面へ内湾しつつ移行し次第に急角度で立ち上がる。

本遺構からは6点の縄文土器片が出土した。図9-3~8がそれである。3は口縁部で端部外面の断面形が角頭状を呈し、口唇部を面取り、外端部に棒状工具で連続する刻目を施す。4~8は胴部片で3も含めて外面に短条の羽状縄文を横位に連続して施している。これらの土器には胎土に繊維痕跡が認められる。

本遺構は沢頭に位置する大型の土坑でその性格は不明である。本遺構の時期は出土遺物の年代観から縄文時代前期前葉と判断した。

(鹿 又)

古代以降の土坑 (SK01~06・08・11~13・15・17~20)

1号土坑 SK01 (図10, 写真7)

本遺構は調査区西部のB14グリッドに位置する。丘陵尾根筋の落ち際に立地しており、北約4.5mにSK19、南東3.5mにSK02が所在する。また、南東側でSX01と重複しこれを壊している他、北西側を木根に攪乱されている。遺構検出面はLIV上面で、表土除去時に黒褐色土の広がりとして検出し、斜面と直行する方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は1層のみである。Ⅰは炭化物を多量に含むことから、木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層と判断した。

遺構の平面形は楕円に近い隅丸長方形で、遺構の方位は南辺を基準にするとN85°Wを示す。遺構の規模は、長軸120cm、短軸105cm、遺構検出面からの深さ13cmを測る。底面はLVを掘り込んで作られ、ほぼ平坦である。底面北東側に直径25cm程度酸化した範囲が認められる。周壁はほとんど遺存しないが、比較的残りの良い北側はほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものである。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。

(鹿 又)

2号土坑 SK02 (図10, 写真7)

本遺構は調査区西部のC14・15グリッドに位置する。丘陵尾根筋の落ち際に立地しており、北西約3.5mにSK01、南西約2mにSK03が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に黒色土の広がりとして検出し、斜面と直行する方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は2層に分かれる。①は炭化物を多量に含むことから木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層、②はLN粒から成ることから周壁の崩落土と判断した。

遺構の平面形は円形で、直径63cm、遺構検出面からの深さ17cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦且つ水平である。周壁はほとんど遺存しないが、比較的残りの良い北東側は傾斜しつつ立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿 又)

3号土坑 SK03 (図10, 写真8)

本遺構は調査区西部のB15グリッドに位置する。丘陵尾根筋から少し下った急斜面に立地しており、北西約4mにSK01、北東約2mにSK02、南西約1mにSK04、南約4mにSK05が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に黒色土の広がりとして検出し、斜面と直行する方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は2層に分かれる。①は炭化物を多量に含む、焼土粒を疎らに含むことから木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層、②はLN粒から成ることから周壁の崩落土と判断した。

遺構の平面形は円形で、直径83cm、遺構検出面からの深さ20cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦且つ水平である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿 又)

4号土坑 SK04 (図10, 写真8)

本遺構は調査区西部のB15グリッドに位置する。丘陵尾根筋から少し下った急斜面に立地しており、北約4mにSK01、北東約1mにSK03、南東約3mにSK05が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に黒褐色土の広がりとして検出し、半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は2層に分かれた。①は炭化物を含み堆積状況から流入土と考えられる。②は灰黄褐色の粘土質シルトで、周壁の崩落土と判断した。

遺構の平面形は楕円形で、遺構の方位は長軸を基準にするとほぼ東西方向である。遺構の規模は、長軸108cm、短軸89cm、遺構検出面からの深さ42cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦且つ水平である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

第1編 仲山C遺跡

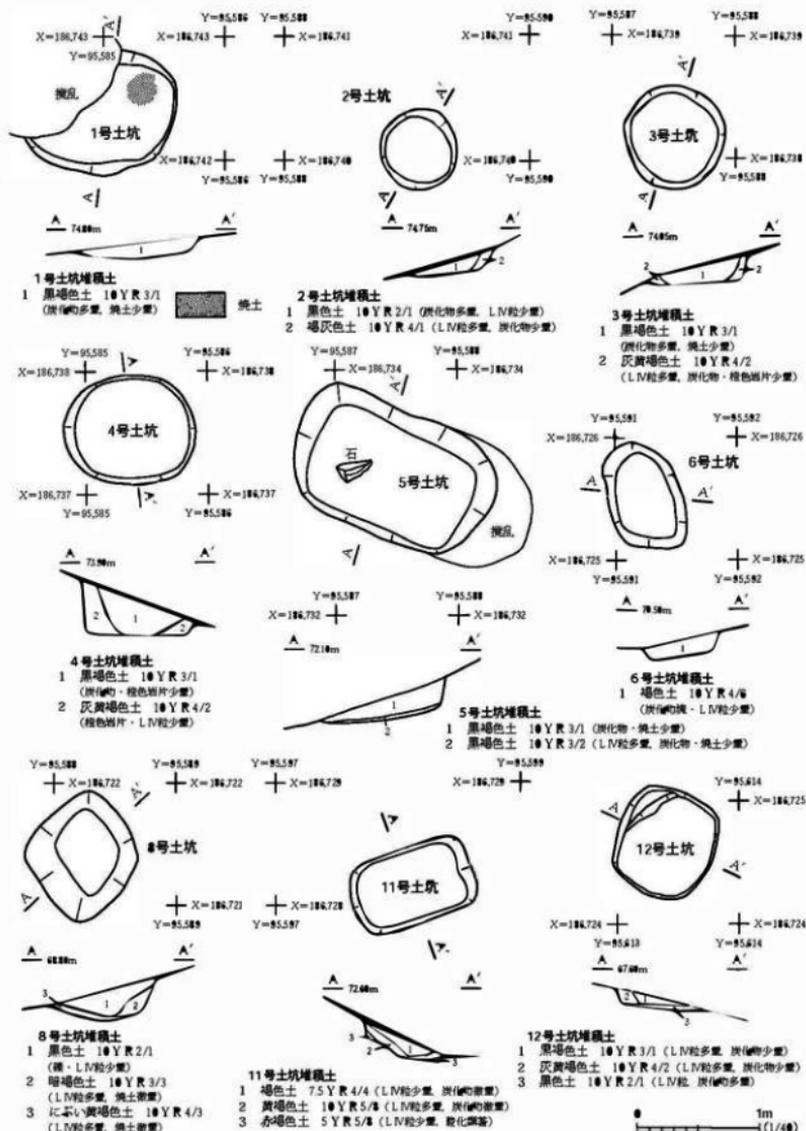


図10 1~6・8・11・12号土坑

本遺構からは炭化物層や酸化面が認められず、性格は不明である。また遺構の時期も遺物が出土していないため不明である。(笠 井)

5号土坑 SK05 (図10, 写真8)

本遺構は調査区西部のB・C16グリッドに位置する。丘陵尾根筋から少し下った急斜面に立地しており、北西約3mにSK04、北約4mにSK03、南東約7mにSK06が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に黒褐色土の細長い広がりとして検出した。当初木炭窯跡と想定して黒褐色土が延びる南北方向に半載したが、掘り下げて行くうちに規模が縮小し、最終的に土坑となった。

遺構内の堆積土は2層に分かれる。Ⅰ・Ⅱともに水平に堆積し、炭化物及び焼土を含むことから木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層と判断した。

遺構の平面形は隅丸長方形で、遺構の長軸方位は南西辺を基準にすると等高線にほぼ平行となるN67°Wを示す。遺構の規模は、長軸167cm、短軸107cm、遺構検出面からの深さ22cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦で若干南西方向へ傾斜している。周壁は斜面下方の南西側で流出しているが、残りの壁面の遺存状況は良好で、概ね垂直に立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑と考えられる土坑で、炭化物を多く含む覆土は大半が斜面下方へ流出していた。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿 又)

6号土坑 SK06 (図10, 写真8)

本遺構は調査区南西部のC18グリッドに位置する。調査区南部斜面の南西部を詰め上げる沢筋の中段に立地しており、北西約7mにSK05、南西約4mにSK08が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に褐色土の広がりを確認し、短軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土はⅠのみで、炭化物片を含む。斜面上位からの流入土と判断した。

遺構の平面形は拉げた隅丸長方形で、遺構の方位は短辺の中点を結んだラインを基準にするとN16°Eを示す。遺構の規模は、長軸92cm、短軸60cm、遺構検出面からの深さ15cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦で若干南西方向へ傾斜している。周壁は傾斜して立ち上がる。

本遺構は小型の土坑で、炭化物層や酸化面が認められず、性格は不明である。また遺構の時期も遺物が出土していないため不明である。(笠 井)

8号土坑 SK08 (図10, 写真9)

本遺構は調査区南西部のB・C19グリッドに位置する。調査区南部斜面の南西部を詰め上げる沢筋の下位に立地しており、北東約4mにSK06が所在する。遺構検出面はLⅢe上面で、表土除去時に黒色土の広がりを確認し、沢筋の方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は3層に分かれた。Ⅰは炭化物の細粒を含む黒色土で、木炭焼成土坑の炭化物層であろう。Ⅱ・Ⅲ3は共に焼土粒を含んでおり、その土色から前者はLⅢe、後者はLNに起

因すると考えられる周壁の崩落土と判断した。

遺構の平面形は菱形に似た拉げた隅丸方形で、遺構の方位は南西辺を基準にするとN34°Wを示す。遺構の規模は、南北104cm、東西91cm、一辺約85cm、遺構検出面からの深さ24cmを測る。底面はLⅢeを掘り込んで作られ、ほぼ水平で中央が弱く窪む。周壁は傾斜気味に立ち上がる。

本遺構は堆積土の状況から木炭焼成土坑と考えられる土坑である。遺構の時期は遺物が出土していないことから不明である。古代以降の所産としておく。(笠井)

11号土坑 SK11 (図10, 写真10)

本遺構は調査区南西部のE17・18グリッドに位置する。主尾根稜線から調査区南部斜面側へ派生して延びる支尾根上に立地しており、南西6.5mにSK06が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に褐色土の広がりを確認し、短軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は3層あり、①・②は炭化物を微量含む斜面上位からの流入土、③は酸化土を多く含み、底面と周壁の境目に堆積することから、周壁の崩落土と判断した。

遺構の平面形は隅丸長方形で、遺構の方位は短辺の midpoint を結んだラインを基準にするとN68°Eを示す。遺構の規模は、長軸102cm、短軸68cm、遺構検出面からの深さ16cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、斜面下方である南東方向へ傾斜している。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構は堆積土の状況から木炭焼成土坑と考えられる土坑である。遺構の時期は遺物が出土していないことから不明である。古代以降の所産としておく。(笠井)

12号土坑 SK12 (図10, 写真10)

本遺構は調査区南部のI18グリッドに位置する。調査区南部斜面中位の傾斜地に立地しており、西約11mにSK13、南東約8.5mにSK15が所在する。遺構検出面はLⅢa上面で、表土除去時に炭化物を多量に含む黒褐色土の広がりを確認し、短軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は3層あり、①は流入土、②は周壁の崩落土、③は炭化物層と判断した。

遺構の平面形は方形に近い隅丸長方形で、遺構の方位は短辺の midpoint を結んだラインを基準にするとN20°Eを示す。遺構の規模は、長軸87cm、短軸82cm、遺構検出面からの深さ15cmを測る。底面はLⅢaを掘り込んで作られ、水平且つ平坦である。床面の北西隅には低い段が認められる。周壁は南側を中心に流出してしまっているが、遺存する北側ではほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(笠井)

13号土坑 SK13 (図11, 写真10)

本遺構は調査区南西部のF18グリッドに位置する。主尾根稜線から調査区南部斜面側へ派生して延びる支尾根上に立地しており、北西約3mにSK11、東約11mにSK12が所在する。遺構検出面

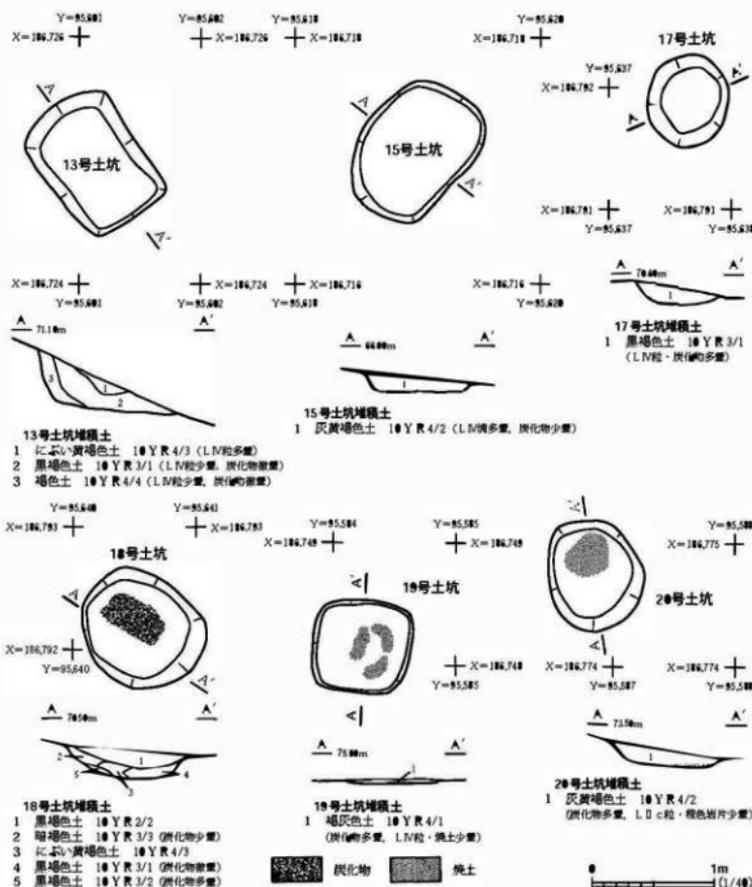


図11 13・15・17～20号土坑

はLIV上面で、表土除去時に黒褐色で隅丸長方形の広がりを確認し、斜面に直行する長軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は3層あり、 $\#1$ ・ $\#2$ は流入土、 $\#3$ は周壁の崩落土と判断した。

遺構の平面形は北西辺が膨らむ長方形で、遺構の方位は短辺の midpoint を結んだラインを基準にする
とN39°Wを示す。遺構の規模は、長軸112cm、短軸78cm、遺構検出面からの深さ35cmを測る。底面
はLIVを掘り込んで作られ、水平且つ平坦である。周壁は南東側を流出してしまっているが、他の
壁は傾斜して立ち上がる。

本遺構は均整のとれた長方形プランを持ち、形状が木炭焼成土坑に近似するが、酸化面及び炭化物層を持たないことから性格不明の土坑としておく。また遺構の時期も遺物が出土していないため不明である。(笠 井)

15号土坑 SK15 (図11, 写真11)

本遺構は調査区南部のJ20グリッドに位置する。調査区南部斜面下位の平坦地に立地しており、北西約8.5mにSK12、北東約13mにSWK03が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に炭化物を含む灰黄褐色土の広がりを確認し、短軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は1のみである。炭化物と地山のLNが攪乱されており、炭化物層と判断した。遺構の平面形は南西へ隅丸辺が削れた隅丸長方形で、遺構の方位は短辺の中点を結んだラインを基準にするとN37°Eを示す。遺構の規模は、長軸118cm、短軸86cm、遺構検出面からの深さ19cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、水平且つ平坦である。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(笠 井)

17号土坑 SK17 (図11, 写真12)

本遺構は調査区北東部の●1グリッドに位置する。丘陵北端の平坦地に立地しており、東約1.5mにSK18、南東約2mにSX02が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に円形の黒褐色土の広がりとして検出し、半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は1のみである。炭化物を多量に含むことから木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層と判断した。

遺構の平面形は円形で、直径72cm、遺構検出面からの深さ15cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、ほぼ平坦且つ水平である。周壁は底面から湾曲しつつ立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿 又)

18号土坑 SK18 (図11, 写真12)

本遺構は調査区北東部のP1・2グリッドに位置する。丘陵北端の平坦地に立地しており、西約1.5mにSK17、南約2mにSX02が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に黒褐色土の広がりを確認し、長軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土は5層あり、1は流入土、2～4は木炭取り出し時に攪乱された土、5は底面に残された木炭層と判断した。

遺構の平面形は楕円形で、遺構の方位は長軸を基準にするとN57°Wを示す。遺構の規模は、長軸104cm、短軸87cm、遺構検出面からの深さ24cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、浅く窪

んでいる。周壁は底面から湾曲しつつ立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿又)

19号土坑 SK19 (図11, 写真12)

本遺構は調査区南西部のA・B-12・13グリッドの境に位置する。丘陵尾根筋北側の落ち際平坦地に立地しており、南約4.5mにSK01が所在する。遺構検出面はLN上面で、表土除去時に炭化物を多量に含む褐色土の広がりを確認し、南北に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土はⅠのみである。Ⅰは炭化物を多量に含むことから、木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層と判断した。

遺構の平面形は隅丸方形で、遺構の方位は西辺を基準にするとN6°Eを示す。遺構の規模は、南北73cm、東西80cm、遺構検出面からの深さ3cmを測る。底面はLNを掘り込んで作られ、水平且つ平坦である。床面の中央部には酸化面が認められる。周壁は削平されて遺存しない。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿又)

20号土坑 SK20 (図11, 写真12)

本遺構は調査区北東部のB6グリッドに位置する。沢4の沢頭付近で北側へ下る緩やかな傾斜地に立地し東側にSK22と接する。遺構検出面はSK22覆土及びLIIc上面で、LIIb除去時に灰黄褐色土の広がりを確認し、長軸方向に半載して堆積土を記録した。

遺構内の堆積土はⅠのみである。Ⅰは炭化物を多量に含むことから、木炭焼成土坑の底面に堆積する炭化物層と判断した。

遺構の平面形は楕円形で、遺構の方位は長軸を基準にするとN10°Wを示す。遺構の規模は、長軸82cm、短軸75cm、遺構検出面からの深さ24cmを測る。底面はLIIcを掘り込んで作られ、浅く窪んでいる。周壁は底面から湾曲しつつ立ち上がる。

本遺構は木炭焼成土坑の上部が削平され、底部付近が遺存したものであろう。遺構の時期は遺物が出土していないため不明である。古代以降の所産としておく。(鹿又)

第4節 鍛冶遺構

調査区南部斜面は中央部が幅30m程の広く浅い沢状の地形をなしており、その下部の両岸に鍛冶伊跡と考えられる周囲が焼けて硬化した浅い小穴2基と、羽口・椀形滓・鍛造剥片・粒状滓等の鍛冶関連遺物が出土する高まりが検出された。本節ではこれらの遺構を鍛冶に関連する遺構として一括し、先の小穴を検出順にSWK01・SWK02、高まりをSWK03として報告する。

1号鍛冶遺構 SWK01 (図12, 写真5)

本遺構は調査区南西部のE21グリッドに位置する。遺構が立地する場所は、調査区南部斜面下で丘陵主尾根稜線から南側へ派生して延びる支尾根の終点付近にあたる標高66.7m付近の緩傾斜地である。遺構の北東9mの同一標高地点にはSWK02が所在する。遺構は上面を削平されており、表土除去後、LⅢe上面で暗褐色土の円形プランとして検出し、半載して堆積土を記録した。

遺構は上下2段から成る。上段は南北60cm、東西58cm、遺構検出面からの深さ6cmの掘り込みで、平面形は不整な隅丸方形である。底面は平坦で南東側へ傾斜し、周壁は底面からなだらかに立ち上がる。下段は上段底面の北寄りに位置し、南北40cm、東西38cm、遺構検出面からの深さ12cm、上段底面からの深さ6cmを測る掘り込みである。平面形は隅丸方形を成し、底面は水平且つ平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。下段の周壁は1cm程の厚さで被熱酸化し、赤褐色に変化していた他、下段底面で検出した長さ20cm程の石は表面が被熱していた。

遺構内堆積土は2層あり、それぞれ上段と下段に堆積していた。#1は上段に堆積する暗褐色土で直径0.5cm～2cm大の焼土塊を含んでいる。#2は下段に充填された土層で、直径1～3cm大の炭化物を多量に含んでいる。

本遺構では堆積土及び周囲の土壌を採集し、水洗浄及び肉眼による選別を行い、鍛冶剥片・粒状滓等の検出を目指したが、それらの遺物を検出することはできなかった。このため、本遺構を鍛冶伊跡と断定することは躊躇されるが、木炭焼成土坑としては規模が小さいこと、底面から周壁にかけて被熱していること、近くに鍛冶伊を持たない鍛冶関連遺構SWK03が所在することから、鍛冶伊跡と判断した。遺構の時期は遺物が出土していないことから不明である。周囲の遺構の状況から考えて、SWK03とはほぼ同時期の所産と考えられる。(笠井)

2号鍛冶遺構 SWK02 (図12, 写真5)

本遺構は調査区南西部のG20グリッドに位置する。遺構が立地する場所は、調査区南部斜面下で丘陵主尾根稜線から南側へ派生して延びる支尾根の東側にあたる標高66.7m付近の緩傾斜地である。遺構の南西9mの同一標高地点にはSWK01が所在し、沢地形を挟んで東26mにSWK03が所在する。遺構は上面を削平されており、表土除去後、LⅢe上面で炭化物を多量に含む黒褐色土の円形プランとして検出し、中央に十字の土層観察用ベルトを設定して堆積土を記録した。

遺構内堆積土は2層に分かれる。#1は直径0.5～2cm程の炭化物を多量、焼土を少量含む黒褐色土で、掘り込み中央に堆積していた。#2は灰黄褐色の粘質土で、周壁際で検出された。

本遺構の平面形は北東-南西方向に長い楕円形をしており、遺構の長軸方位はN59°Eを示す。掘り込みの規模は長軸45cm、短軸34cm、遺構検出面からの深さ4cmを測る。底面は南東側に、長さ17cm、幅12cm、深さ2cm程の窪みがあり、南東側へ傾斜している。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、厚さ2～8cm程が酸化して赤褐色に変化している。また北西側では一部還元して灰色になった

部分も認められた。

本遺構では堆積土及び周囲の土壌を採集し、水洗浄及び肉眼による選別を行い、鍛造剥片・粒状滓等の検出を目指したが、それらの遺物を検出することはできなかった。このため、本遺構を鍛冶伊跡と断定することは躊躇されるが、木炭焼成土坑としては規模が小さいこと、周壁が著しく被熱していること、近くに鍛冶伊を持たない鍛冶関連遺構SWK03が存在することから、鍛冶伊跡と判断した。遺構の時期は遺物が出土していないことから不明である。周囲の遺構の状況から考えて、SWK03とはほぼ同時期の所産と考えられる。(笠井)

3号鍛冶遺構 SWK03

遺 構 (図12, 写真6・18)

本遺構は調査区南東部のM19, N・●-18・19グリッドにかけての範囲に位置する。遺構が立地する場所は、調査区南部斜面下で中央を丘陵主尾根稜まで詰め上げる浅い沢の左岸にあたる標高64~66m付近の傾斜地である。

遺構の南西約13mに木炭焼成土坑であるSK15、沢地形を挟んで西26mにSWK02が存在する。遺構検出面はLⅢa上面で、表土除去時に鉄滓が出土したことから、周囲を丹念に精査したところ、周囲の土壌と異なる土で構成される低い高まりを確認した。この時点で羽口及び碗形滓の一部を検出していたことから、この高まりの下に鍛冶遺構が隠れていることが想定されるため、鍛造剥片・粒状滓等の微細遺物を採集する目的で、X=186.728, Y=95.629を基点に東方と南方へ各10mの正方形を設定し、その中を一边1mの小グリッド100個に区画し(図12 SWK03グリッド配置図参照)、グリッドごとに土壌を採取しつつ掘り下げ及び土層の記録を行った。

遺構は灰黄褐色土からなる1と黄褐色土からなる2から構成される比高差10cm程度の高まりで、南西向き斜面に寄りかかるように検出された。1は南北2.4m, 東西3.3m, 北西側に突出部をもつ不整楕円形の範囲に広がっており、層厚は55グリッド辺りを中心に最大8cm程を測る。炭化物を疎らに含んでいる。2は南北5.6m, 東西4.9m, 北西側が凹むカシューナッツ形の範囲に広がり、層厚は最大15cmを測る。LNに起因する土層で、砂粒・炭化物・鉄滓等を含む。

遺構底面は南方向へ下る12°程の傾斜地で、起伏があり、3基の小穴を検出した。P1は57グリッド北東隅に位置し、北西-南東方向に細長い楕円形をしている。長軸54cm, 短軸36cm, 深さ16cmを測る。内部には1に近似する土が堆積していた。P2は37・38・47・48グリッドの境に位置する円形の穴で直径18cm, 深さ24cmを測る。内部には2が堆積していた。P3は36・46グリッド西寄りの境に位置する北東-南西方向に細長い楕円形をしている。長軸45cm, 短軸26cm, 深さ16cmを測る。

遺 物 (図13, 表1~4, 写真18)

本遺構から出土した遺物は羽口7点、碗形滓16点、伊壁2点、鉄滓1.765kg, 鍛造剥片9.35g, 粒状滓8.4gである。このうち羽口1点と、碗形滓2点を図化した。以下図化しなかった遺物につ

表1 3号鍛冶遺構出土鉄滓
グリッド別数量表(ℓ1)

グリッド	機序群		機序		炉壁		炉口	
	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数
33								
44								
45	3125.3	18					127.6	3
46								
49								
50								
54							5.9	1
55								
56								
58							179.0	1
合計	3125.3	18			0	0	402.5	7

表2 3号鍛冶遺構出土鉄滓
グリッド別数量表(ℓ2)

グリッド	機序群		機序		炉壁		炉口	
	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数
33								
44								
45								
46								
49								
50								
54								
55								
56								
58								
合計	0	0	266.8	20	7.1	2	0	0

表3 3号鍛冶遺構出土微細遺物
グリッド別数量表(ℓ1)

グリッド	機序群		機序		炉壁		炉口	
	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数
33								
44								
45								
46								
49								
50								
54								
55								
56								
58								
合計								

表4 3号鍛冶遺構出土微細遺物
グリッド別数量表(ℓ2)

グリッド	機序群		機序		炉壁		炉口	
	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数
33								
44								
45								
46								
49								
50								
54								
55								
56								
58								
合計								

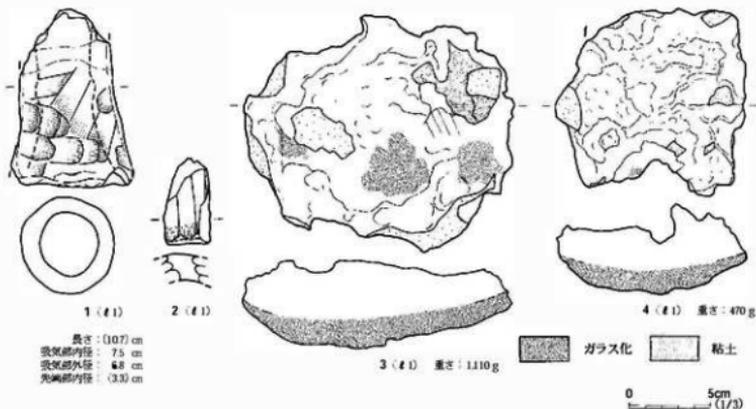


図13 3号鍛冶遺構出土遺物

いての所見も含め説明していく。

羽口はすべてⅠから出土した。図化した1点以外はすべて破片である。図13-1は64グリッドから出土した吸気部付近から管の中ほどまでの部分で、長さ10.7cm程が遺存する。ラッパ状に開く器形で、端部は面取りされている。内径は正円に近いが外形は横方向に長い楕円形である。粘土が柔らかい内に整形されたようで、外面のナデは凹凸が顕著である。また芯棒を先端部側へ捻りながら抜き取った跡が内面に認められる。図13-2は吸気部の破片で、1が端部に平行するようにナデを施しているのに対し、2は端部方向へ縦にナデを施している。

椀形滓はⅠの45グリッドから16点が出土した。図13-3は図12左側の白四角の位置から出土した最も大きなもので、1.110gの重さがある。平面形は不正楕円形で、長径16cm、短軸14.3cm、厚さ5.3cmを測る。中央部分が最も厚く、外縁に向い次第に薄くなる。図の左上と右下に欠損部が認められる。上面は溶解して滑らかな凹凸が各所にあり、部分的に焼粘土・黒色でガラス質の溶着滓が付着し、木炭の圧痕が認められる。下面は粘土質で砂粒を噛んでいる。図13-4は図12右側の白四角の位置から出土したもので、470gの重さがある。平面形は一隅が丸い四角形で、一辺約11cm、厚さ約4cmを測る。中央部分が最も厚く、外縁に向い次第に薄くなる。上面は凹凸が顕著で、ヒダ状の高まりが縦横に走る。下面は粘土質で半球状に盛り上がり、砂粒を噛んでいる。椀形滓でメタルチェッカーが反応したものは無かった。

鉄滓は遺構掘り下げ時に位置を記録して取り上げた直径1cm以上の鉄滓と、土壌と共に取り上げ、選別した直径1cm未満の小鉄滓に分かれる。鉄滓は、直径1～5cm大での塊状のもので、29点がⅠ2から出土した。表面は粒状に錆びてザラザラしている。メタルチェッカーに反応するものは1点のみであるが、磁性を帯びたものが認められる。磁性を帯びたものは斜面上方の53～56グリッドにかけて疎らに出土し、磁性を帯びないものは45・46グリッドに集中する傾向がある。

小鉄滓は直径5mm以下の粒状のものがその大半を占め、磁石で選別しているため、磁性を帯びた砂粒や葉鉄鋼の破片が混じっている可能性がある。Ⅰ1・2いずれの層からも検出されているが、検出状況に偏りがある。Ⅰ1では46グリッドで他の10倍近い量が検出され、Ⅰ2ではS字状に隣接する26・27・36・45・46グリッドに集中する。また西側に少しはなれた53グリッドでも集中する傾向が認められる。

鍛造剥片は一辺0.5～4mm程の板状片である。検出傾向は、Ⅰ1では46・65～67グリッドで他のグリッドの2～3倍の量を検出し、Ⅰ2では小鉄滓とはほぼ重なる27・36・37・45・46・54・56グリッドに集中する傾向が認められる。特に鍛造剥片が集中するグリッドの北東端にあたる27グリッドでは他の2倍の量を検出した。

粒状滓は直径0.2～5mm程の球状を呈する。表面には細かい気泡の穴が認められるものが多い。検出傾向は鍛造剥片とはほぼ一致する。Ⅰ1では45・46・66・67グリッドで多く検出され、Ⅰ2では27・36・46・56グリッドに集中する。ただし最も多く検出されたグリッドは北東側ではなく、分布の中央に位置する46グリッドである。

ま と め

本遺構からは明瞭な掘り込み・削平等の土地への造作や焼面・焼土等の燃焼を示す痕跡が認められず、検出できたのは鍛冶関連遺物を含んだ堆積土の高まり、つまり鍛冶遺構の残骸のみである。このため、鍛冶伊・作業場等の復元は不可能であるが、出土遺物の傾向からあえて復元すれば、鍛冶伊は椀形滓・鉄滓が集中する45・46グリッド付近、鍛錬を行った作業場は鍛造剥片の出土量の多い27グリッド周辺にあったのではないかと推定される。本遺構の時期は出土した羽口の形状から古代以降、中世以前としておく。(笠井)

第5節 溝 跡

仲山C遺跡からは調査区北側丘陵縁付近に東西方向の溝跡3条を検出した。本遺跡において溝跡は細長い形状で、明確な掘り込みが有り、踏みしまりが無く、底面に凹凸が多いものをあてている。

1号溝跡 S D01 (図14, 写真13・14)

本遺構は調査区北部のM2～T4グリッドにかけて検出した溝跡である。遺構は丘陵平坦面から丘陵縁にかけて立地し、SF03、SX03と重複しこれらを壊している。本遺構の西側約12mの延長線上にはS02・03が存在する。遺構検出面はLN上面であるが表土除去中に認識できたことから、より上層から掘り込まれていた可能性が高い。

遺構内堆積土は2層に分かれた。1は草木根が混じる有機質の多い暗褐色土でしまりがあまりなく、表土に近い印象をうける。2はしまりのややある黒褐色土で、周囲からの流入土と考えられる。

遺構の平面形は、くの字形をしており、調査区東境から西へ16.2m延び、北側へ35°屈折して北西方向へ14m延び、丘陵北端の崖線で途切れている。調査区内の全長は30.2mを測るが、東側は調査区外へ延びて行くため、遺構としてはさらに長い。遺構の断面は逆台形を成し、幅1m前後で、深さ17cm程を測る。遺構の底面及び壁面には人頭大から拳大の大小の礫が多数露出しており、部分的に砂礫層が底面付近に堆積する。

本遺構は、底面にしまりが無く、各所に礫が露出していることから人の往来には適さず道跡とは考え難い。また水成堆積物が認められないことから、恒常的に水が流れていたわけでもないことから、性格不明である。地境の溝であろうか。本遺構の時期は古墳時代の所産と考えられるSX03を壊していることから、それ以後で、堆積土の状況からかなり最近の遺構であろうことが推定される。なお、遺構北西部では流出滓とみられる、2～5cm大の鉄滓27点が出土している。(佐々木)

2号溝跡 S D02 (図14, 写真13・14・18)

本遺構は調査区北部のE3～J2グリッドにかけて検出した溝跡である。遺構は丘陵北側の斜面に立地し、標高71.5mの等高線にはぼ沿うように掘り込まれている。本遺構の斜面上位にあたる南

第1編 仲山C遺跡

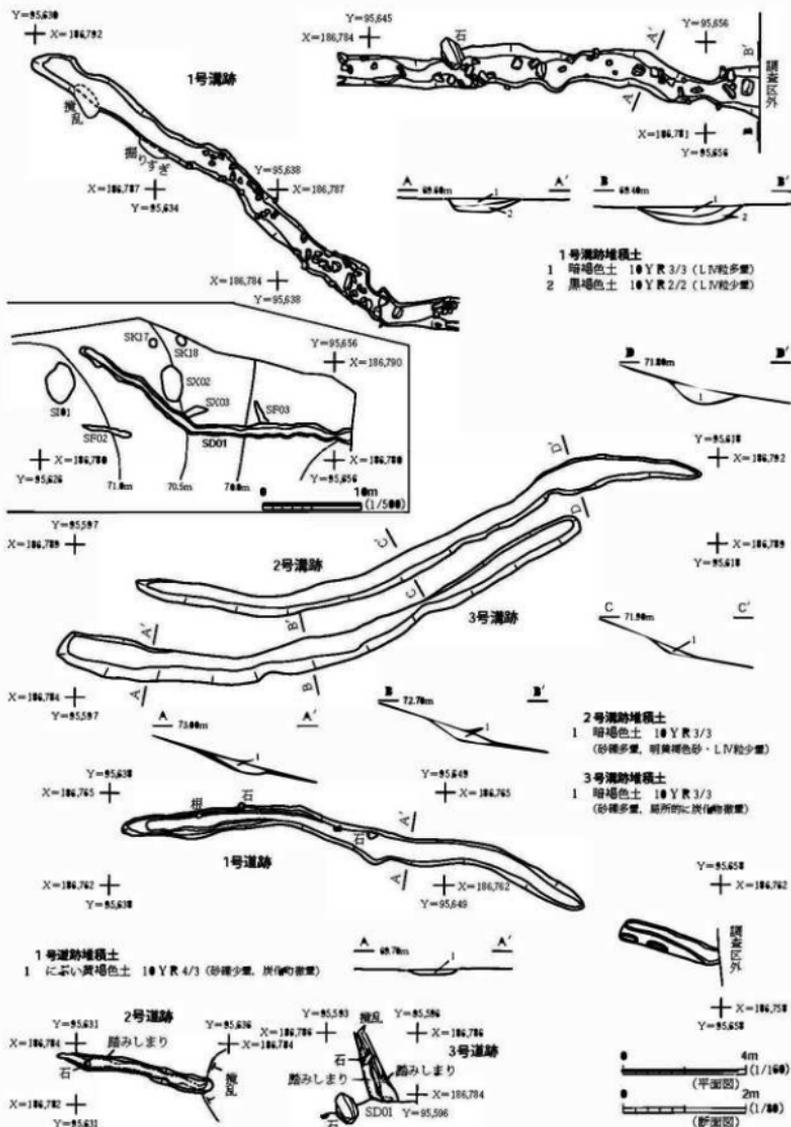


図14 1~3号溝跡, 1~3号道跡

約1mの位置にはS●03がほぼ平行して延びており、東側約12mの延長線上にはS●01が存在する。遺構検出面はLN上面で、暗褐色土が東西方向へ延びていた。

遺構内堆積土は砂礫を多量に含む暗褐色土層のⅠのみで、周囲からの流入土と考えられる。

遺構の平面形は緩やかなS字形をしており、全長18.8m、幅0.6~1.2m、深さ15cmを測る。断面は浅いU字形で、底面から緩やかに壁面へ移行するが、斜面を削って作られているため、斜面側にあたる北側にはほとんど壁が存在しない。底面は起伏が少なく、部分的に砂礫層が露出する。

本遺構は踏みしまりが無いことから、道跡とはしなかったが、底面が平坦であることから道跡であった可能性がある。本遺構の時期は底面から近世以後の所産と考えられる球形の甕丸（写真18、直径1.3cm、鉛製）が出土していることから、近世頃の所産と判断した。（笠 井）

3号溝跡 S D03 (図14, 写真13・14)

本遺構は調査区北部のE3~I2グリッドにかけて検出した溝跡である。遺構は丘陵北側の斜面に立地し、標高72~72.5mの等高線には沿うように掘り込まれている。本遺構の斜面下位にあたる北約1mの位置にはS●02がほぼ平行して延びており、東側約16mの延長線上にはS●01が存在する。遺構検出面はLN上面で、暗褐色土が東西方向へ延びていた。

遺構内堆積土は砂礫を多量に含む暗褐色土層のⅠのみで、周囲からの流入土と考えられる。

遺構の平面形は南側へ張る緩やかな弧状で、全長15.7m、幅0.6~1.1m、深さ8cmを測る。断面は浅いU字形で、底面から緩やかに壁面へ移行するが、斜面を削って作られているため、斜面側にあたる北側にはほとんど壁が存在しない。底面は起伏が少なく、部分的に砂礫層が露出する。

本遺構はS●02と近似する溝跡である。遺構同士が平行することから、両遺構は有機的な関係にあった可能性がある。本遺構からは遺物が出土していないが、S●02と同時期の遺構である可能性が高いため、近世頃の所産と判断した。（笠 井）

第6節 道 跡

仲山C遺跡では、溝状の遺構であるが、明瞭な掘り込みが無く、底面が踏みしまりにより硬化した遺構を3条検出した。本節ではこれらを道跡として報告する。

1号道跡 S F01 (図14, 写真14)

本遺構は調査区東部の●8~T9グリッドに位置する。遺構は丘陵頂部平坦面の中央に入る浅く広い沢跡の左岸にあたる平坦地に立地する。北西約19mにS F02、北約20mにS F03が存在する。遺構検出面はLN上面である。

遺構内堆積土はにぶい黄褐色土のⅠのみである。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

遺構の平面形は北側に張る緩やかな弧状で、東西方向へ延びている。遺構の規模は長さ約20m、

幅約1m、深さ8cm程を割り、調査区境から西へ3.5m程の場所から2m程途切れている。また調査区の東側にも遺構自体は延びているようである。断面形は薄い逆台形形で中央が平坦であるが、道跡の両側縁辺に幅5～15cm、深さ2cm程の浅い溝が認められる。底面は両側縁の溝部分を除いて硬くしまっている。

本遺構は位置関係から丘陵を浅い沢伝いに東側から登って来るための道跡であると考えられる。遺構の西側については削平されて遺存しないが、本来より西側に延びていたものと推定される。遺構の時期は出土遺物が無いため不明である。(鹿 又)

2号道跡 S F 02 (図14, 写真15)

本遺構は調査区北部のM・N4グリッドに位置する。遺構は北東方向へ延びる低く幅の広い尾根上に立地し、周囲は平坦である。南東約19mにS F 01、東約13mにS F 03が所在する。遺構検出面はLN上面である。

遺構内堆積土はⅠのみである。Ⅰは砂礫少量、炭化物微量含む暗褐色土(7.5YR 3 / 3)で、草木根を含み有機質が多い。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

遺構は東西方向に直線的に延び、長さ5m、幅60cm、深さ8cm程を割り、断面形は薄い逆台形形で、底面は中央部に踏みしまりが認められる。

本遺構は僅か5m程が遺存するのみであるが、踏みしまりが認められることから道跡と考えられる。遺構の東西には礫層が露出し、道跡の延長を追うことができなかった。遺構の時期は出土遺物が無いため不明である。(佐々木)

3号道跡 S F 03 (図14, 写真15)

本遺構は調査区北部のR3グリッドに位置する。遺構は北東方向へ延びる低く幅の広い尾根上に立地し、周囲は平坦である。南約20mにS F 01、西約13mにS F 02が所在する。S D 01と南側で重複しており、これに覆られている。遺構検出面はLN上面である。

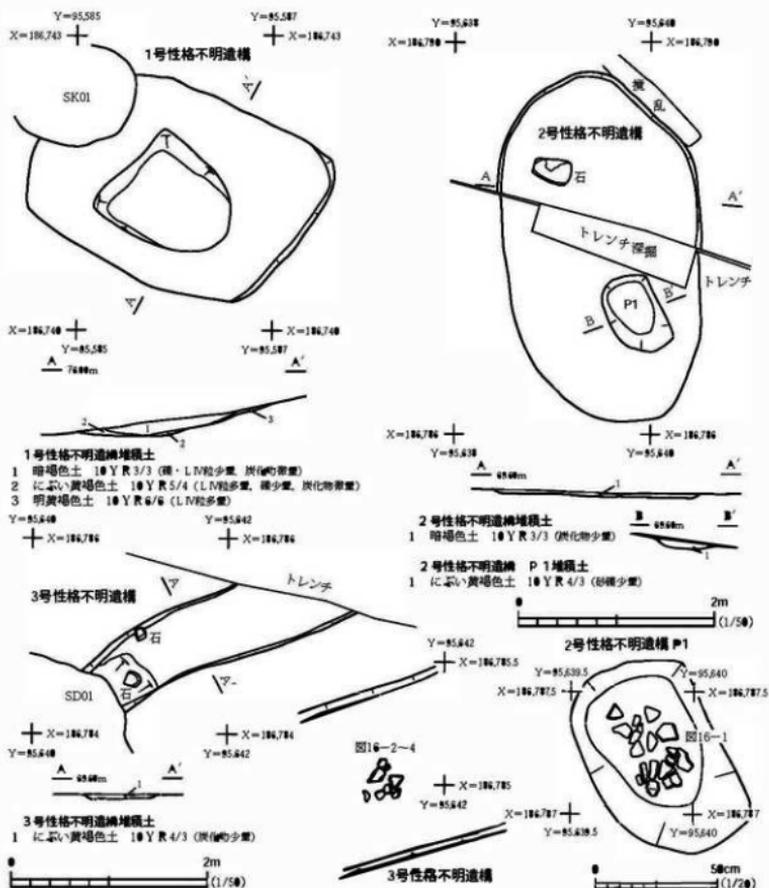
遺構内堆積土はⅠのみである。Ⅰは砂礫少量、炭化物微量含む暗褐色土(7.5YR 3 / 4)で、草木根を含み有機質が多い。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

遺構はN17°Wの角度で南北方向に延びているが、北側では木根による攪乱で、南側はS D 01により覆われており、遺存しているのは長さ2.5m、幅70cm、深さ6cm程の部分のみである。本遺構は幅40cmと30cmの溝跡が接するように平行しており、遺構の中央は僅かに盛り上がる。踏みしまりは中央の高まりの両脇で認められる。底面には人頭大の自然礫が露出している。

本遺構は僅か2.5m程が遺存するのみで、幅も狭く、底面も他の2基の道跡と異なるため、道跡とするには躊躇する部分があるが、底面に踏みしまりが認められることから一応道跡として報告する。遺構の北側及び南側は草木根の影響により地山のしまりが無く、礫層が露出しているため遺構を追いかけるのが困難である。遺構の時期は出土遺物が無いため不明である。(佐々木)

第7節 性格不明遺構

仲山C遺跡では、その形状・遺物の出土状況から、住居跡や土坑等に分類しえない遺構が3基検出された。1つは調査区西部の斜面に位置する縄文時代前期前葉の所産と考えられる窪みで、残り2つは調査区北東部で見つかった奈良時代の遺構である。本節ではこれらの遺構を性格不明遺構として一括して報告する。



1号性格不明遺構 SX01 (図15, 写真15)

本遺構は調査区西部のM14グリッドに位置する。丘陵尾根筋の落ち際に立地しており、北西側でSK01と重複し、これに覆されている。遺構検出面はLN上面で表土除去時に暗褐色土のぼんやりとした広がりを確認し、斜面に直行する方向で半載して土層を記録した。

遺構内堆積土は3層に分けられた。1は有機質の多い暗褐色土、2・3はLN起源の黄褐色土で、いずれも流入土の自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は隅丸長方形で、遺構の長軸方位は直線的な北東辺を基準にするとN65°Wを示す。遺構の規模は長軸2.82m、短軸2.00m、遺構検出面からの深さ18cmを測る。遺構の掘り込みは明瞭でなく、底面は中央に向かって楕円状に浅く窪み、中央部に長軸1.2m、短軸1.1m、深さ3cm程の浅い段をもつ。壁面は認められず、底面からそのまま傾斜しつつ開く。

本遺構は斜面の一部を窪ませてやや平坦な面を形成したものと考えられる。遺構内からは縄文時代前期前葉の所産と考えられる繊維土器が出土したが、表面の風化が激しく図示しえなかった。本遺構の時期は出土遺物から縄文時代前期前葉と考えられる。

(笠井)

2号性格不明遺構 SX02

遺構 (図15, 写真15)

本遺構は調査区北東部の●・P-2・3グリッドの境界付近に位置する。遺構は北東方向へ延びる低く幅の広い尾根上に立地する。周囲は平坦であるが遺構の北側5m程の位置には丘陵縁の崖線がある。遺構の南東1.5mには同時期の遺構であるSX03が所在し、さらにその南から西側にかけてS001が延びている。遺構は試掘時に縄文晩期の住居跡とされていたもので、発掘により所見が変わったものである。遺構検出面はLN上面で、表土除去時から楕円形をした暗褐色土の範囲を確認できた。遺構の南半分は試掘時の調査で床面まで露出していたため、遺構北側の遺存状況の比較的良好な部分に土層観察用ベルトを設定して掘り下げ、堆積土の記録をした。

遺構内堆積土は1のみである。1は炭化物を含む有機質の多い暗褐色土で、草木根の影響を受けて軟弱になっている。また層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺構の平面形は楕円形で、遺構の長軸方位はN6°Wを示す。遺構の規模は長軸3.56m、短軸2.03m、遺構検出面からの深さ5cmを測る。底面はほぼ平坦で、北部に長さ40cm程の石が置かれ、南部で土師器を埋設したP1を検出した。周壁はほとんど遺存していないため、その状況は不明な点が多いが、北側に関しては傾斜しつつ立ち上がるようである。

P1は長軸80cm、短軸52cm、床面からの深さ6cmを測る隅丸長方形の小穴である。P1内にはにぶい黄褐色土とともに、土師器甕図16-1が1個体分横倒しに潰れた状態で出土した。

遺物 (図16, 写真18)

本遺構からは土師器117点が出土した。その大半が図16-1の土師器甕である。

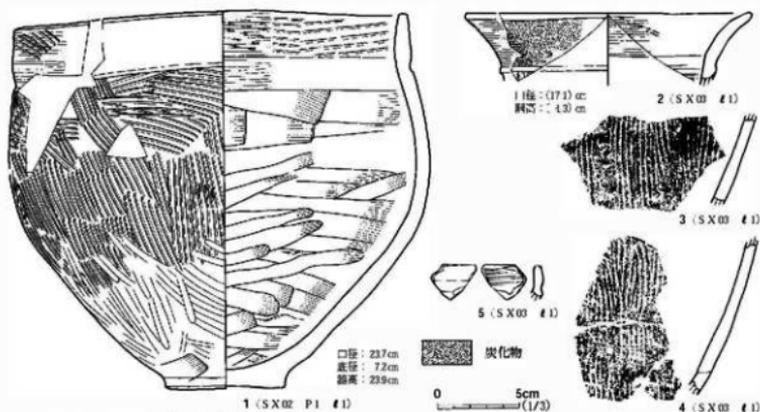


図16 2・3号性格不明遺構出土遺物

図16-1はP1から出土した土師器甕である。口径・器高ともに24cm程の資料で、最大径を中位あたりにもつ球形の胴部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。胴部と口縁部の境には弱い段を有する。器面の調整は内面にヘラナデ、口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面は上半に縦位のハケメ、下半にヘラミガキを施している。

まとめ

本遺構は楕円形の平面形を持ち底面が平坦な大型の土坑であった可能性が高い。上面を削平されているため、詳細は不明であるが、遺構の規模や、丘陵部の尾根筋に立地すること、1個体分の土器を埋設していること等から、墓坑である可能性を指摘しておく。本遺構の時期は出土遺物の特徴から、7世紀末から8世紀初頭にかけての時期であろう。(佐々木)

3号性格不明遺構 SX03

遺 構 (図15, 写真16)

本遺構は調査区北東部のP3グリッドに位置する。遺構は北東方向へ延びる低く幅の広い尾根上に立地する。遺構の北西1.5mには同時期の遺構であるSX02が所在し、南側でSD01と重複してこれに壊されている。遺構検出面はLN上面で、試掘坑とSD01の間に溝状の痕跡を検出した。

遺構内堆積土は1のみである。1はSX02P11と同様の堆積土で、層厚が薄いため、堆積状況は不明であるが、両遺構が有機的な関係にあったことが想定される。

遺構は溝状で、N68°Eの方位に延びている。遺構の規模は遺存値で長さ2.55m、幅70cm。遺構検出面からの深さ5cmを測る。断面形は逆台形をしているようで、底面はほぼ平坦である。

遺 物 (図16, 写真18)

本遺構からは土師器59点が出土し、この内4点を図示した。

図16-2は長胴甕の口縁部片で、内外面ともにヘラナデを施し、胴部との境に明瞭な段を有する。

図16-3・4は甕の胴部片で、外面にハケメが施されている。

図16-5は杯か鉢の口縁部付近と見られるもので、内面にミガキ、外面にナデが施される。

まとめ

本遺構は溝状を呈する遺構であるが両端が破壊されており、上面を削平されていることから、詳細は不明である。位置関係及び出土遺物・堆積土から、SX#2との深い関係が想定される。遺構の時期は出土遺物の特徴から、7世紀末から8世紀初頭にかけての時期であろう。(佐々木)

第8節 遺構外出土遺物

仲山C遺跡からは遺構外からも多数の遺物が出土している。その内訳は、縄文土器234点、土師器16点、陶磁器1点、石器42点、鉄滓少量である。この内時期別に特徴的な遺物を選出し以下説明を加える。なお、試掘調査時の出土遺物の中に本調査出土遺物よりも良好なものが含まれるため、試掘調査時の遺物も含めて本節で報告する。

縄文土器(図17, 写真19)

仲山C遺跡から出土した縄文土器は、早期中葉から前期中葉、後期、晩期中葉の所産である。前期前葉から中葉にかけての土器が最も多い。縄文時代前期の土器の分布は、調査区北部のなだらかな尾根筋と、南部斜面下に集中する傾向があり、後・晩期の土器の分布は調査区北部のなだらかな尾根筋からその南側の浅い沢跡にかけて散漫に点在する傾向がある。

図17-1・2は早期の土器である。1は早期中葉の田戸下層式と思われる口縁部片である。内湾気味に立ち、端部が肥厚する。口唇部断面は丸頭状で、端部に棒状工具で浅い刺突を1cm程の間隔で加えている。外面には幅4mm程の沈線で方形の文様を描いている。砂粒を多く含み、焼成は不良である。2は早期末葉の繊維土器である。口縁部片であり、口唇部に棒状工具による押圧が1cm程の間隔で施される。体部外面には無節の斜行縄文が施され、内面には貝殻条痕が認められる。口唇部にはナデ調整された無文部がある。胎土には繊維と砂粒が含まれる。

図17-3～10・17・18・22は前期前葉の土器である。3・4は口縁部片、5～10・17・18は胴部片である。胎土に繊維と砂粒を含み、基本的に外面に単節斜縄文を施される。4には口唇部に1.5cm程の間隔で押圧が施される。4・5・9の地文は羽状の構成をとり、5に関しては結束羽状縄文が施される。17・18では正反の舎の縄文が認められる。22は組型文を施文された底部片である。

図17-11～16・19～21・23～26は前期中葉と考えられる土器である。これらの土器は、焼成が比較的良好であり、にぶい黄褐色から褐色を呈する。胎土に砂粒を少量含む。11・12は口縁部片で、口縁端部に細いキザミを5mm程の間隔で施している。11の外面には縄文原体の押圧痕が認められる。11～15には外面に撚糸文が施され、15には蛇行する縦位の沈線が付加される。16は口縁部に近い部分



図17 遺構外出土遺物 (1)

である。端部が段を持って肥厚し、段の縁に直径8mm程の押圧があり、外面には羽状縄文がめぐる。19には同方向燃りの結束縄文が展開する。20には半載竹管によって鋸歯文が描かれる。21は太目のV字状沈線の文様が描かれる。23・24は胎土から同一個体と見られるもので、23には細い粘土帯を横位に貼り付け、24では単節斜縄文を半載竹管による平行沈線で区画している。25では櫛歯状の束線具によって、縦横の平行沈線を描いている。胎土に繊維と砂粒を含む。26は単節縄文を地文とし、粘土帯を縦位に貼り付け、帯上に爪による押圧を1cm程の間隔で施している。粘土帯の脇には半載竹管状工具による平行沈線で、菱形・平行線のモチーフを縦位に描いている。

図17-27～31・38は後期の土器である。27は新地式の胴上部から口縁部近くにかけての破片である。破片の左上に粘土塊を貼り付け、粘土塊の脇から次第に間隔を広げる4条以上の沈線を描き、粘土塊及び沈線の下位に2条の平行する沈線を引いて文様帯を区画している。粘土塊の頂部には先端の尖った工具で刺突が加えられる他、間隔を広げる沈線間にも同様の工具で刺突列が施される。28は外面に縦走する羽状縄文が施されており、29は横走する羽状縄文が施される他、内面に丁寧な磨かれる。30はR L単節縄文を縦位に施している。31・38は底面に刻度痕がある土器の底部である。内面は磨かれる。

図17-32～38は晩期の土器である。なお、33～38は試掘調査13トレンチLⅢ（本調査LⅡbに対応）から出土したものである。32は鉢の口縁部で、内湾しており、端部外面に粘土帯を貼り付けて二重口縁としている。外面には栞目状捺糸文を施している。33は大洞A'式と考えられる鉢の破片である。破片上部に変形字文が認められる。34は壺の頸部と考えられる破片である。外反して開く器形で、破片の上部は無文、下部に栞目状捺糸文を施している。35～38は胴部片で、外面には栞目状捺糸文が展開する。33以外はすべて大洞C2式と考えられる。（鹿 又）

土製品（図18、写真18）

図18-8は土器片を加工した土製円盤である。表面に単節縄文、裏面に貝殻条痕が認められる土器片の破断面を研磨して円形に近い形状に仕上げている。遺物の時期は素材となった土器から縄文時代前期前半の所産と考えられる。（鹿 又）

土師器（図18、写真18）

すべての土師器は、調査区中央の主尾根と、主尾根から分岐して北東方向に延びるなだらかな尾根の間に横たわる幅広く浅い沢跡から出土している。

図18-1～7はすべて7世紀末から8世紀初頭の所産と考えられる。1・2は壺の口縁部片で外反して開く器形である。内外面ともに横ナデを施し、2では胴部との境に明瞭な段を有する。胴部外面には縦位のハケメが施される。3は内湾する壺か鉢の口縁部で、端部は内削ぎ状に尖る。外面は上部及び内面は横ナデを施し外面下部には縦位のハケメが認められる。4・5は胴部で、4は長胴壺、5は壺であると考えられる。4は底部まで遺存するもので、外面に縦位のハケメを施し、外

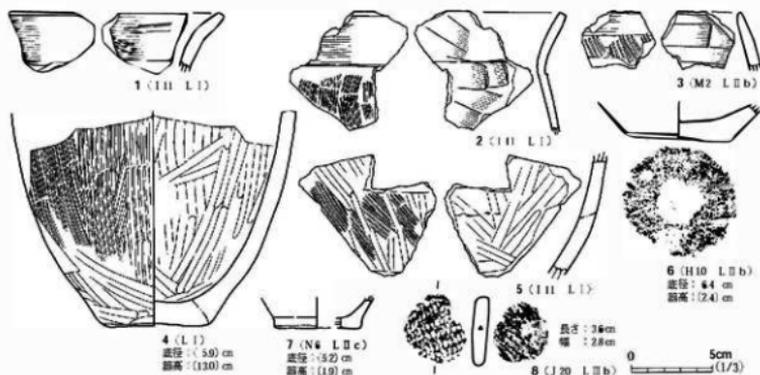


図18 遺構外出土遺物(2)

面下端及び内面に太めのヘラミガキを施している。底面には木葉痕が認められる。5は内外面に太目のヘラミガキを施しており、ミガキの下に一部細かいハケメが認められる。6・7は底部である。6は球形の胴部を持っていたと考えられるもので、底面中央を削って相対的に中央よりも外縁を高めている。7は小型の土器で器壁が非常に薄い。儀礼用のミニチュア土器であろうか。(鹿又)

縄文時代の石器(図19・20, 写真20)

縄文時代の石器の分布は縄文前期の土器の分布とほぼ一致し、調査区北部のなだらかな尾根と、南部斜面下で出土している。なお、図19-1は試掘調査27トレンチL III(本調査L III c)、4は試掘調査16トレンチL III(本調査L II c)から出土したものである。

図19-1・2は凹基無茎畿である。両面を丁寧に加し、細部調整が施される。1は珪質凝灰岩製で側縁が外湾し、2は流紋岩製で側縁が直線的である。

図19-3・4は石畿の未製品である。3では素材剥片の腹面側に細部調整が施され、それを打面として背面側に押圧剥離による加工が施される。腹面基部には調整が加えられ、平基あるいは凹基の形態に整形する途中であったと考えられる。4は背面に自然面を残す剥片を素材とし、背面の周辺からの調整、腹面基部への調整を施し、3同様に平基または凹基の石畿に整形する途中であったと考えられる。二次加工の剥離面内が光沢を帯びており、熱処理が行われた可能性がある。

図19-5~7は磨製石斧である。5は扁平な礫を素材に両側縁から調整を施され、最後に刃部を中心に研磨により整形される。刃部の両面には使用による直交の線状痕と摩減が認められる。6は前面が丁寧に研磨された石斧である。刃部には刃こぼれが認められるが、研磨により再加工される。また、刃部には明瞭な使用痕、基部には着柄により生じた磨耗が認められる。5・6は刃部付近に最大幅があり、基部が細くなる形態である。7は細長い扁平な礫を素材にし、研磨により整形される。刃部が破損している。

第1編 仲山C遺跡

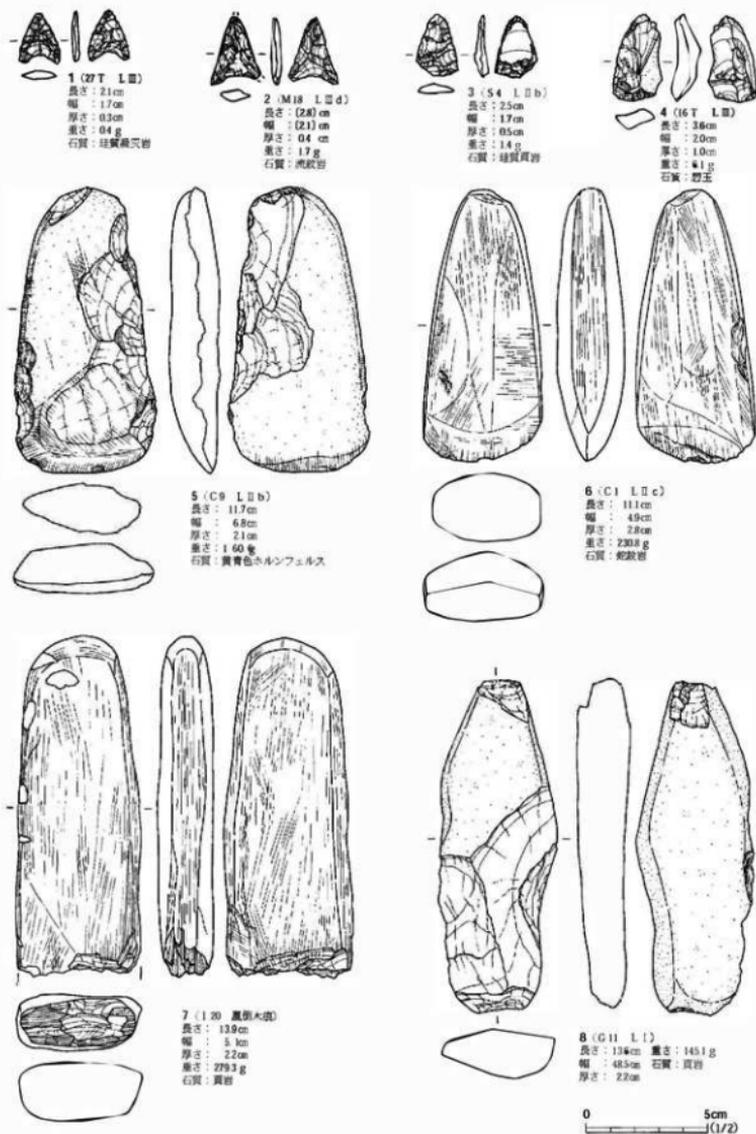


図19 遺構外出土遺物(3)

図19-8は扁平な礫を素材に粗い剥離により整形された石斧の未製品である。

図20-1は楕円形の転礫を素材にした凹石である。両面の中央には打ち叩いて生じた窪みがある。

図20-2は正面と一側面に平坦面をもつ磨石である。平坦面には多方向の擦痕がある。(鹿 又)

弥生時代の石器 (図20~22, 写真20)

仲山C遺跡では弥生時代の土器は見つかっていないが、大型板状石器とよばれる、東北地方の弥生時代に特有な大型の打製石器群が出土している。この石器群は相馬中村層に産する頁岩を素材とし、他の石器と容易に区分できることから、本節ではこれらの石器群を縄文時代の石器と分離して報告することにする。

弥生時代の石器は調査区南部斜面下沢際線の平坦面と、調査区北部のなだらかな尾根上に集中する傾向がある。なお、図20-5、図21-1・3、図22-3・4は試掘調査27トレンチLⅢ(本調査LⅢb・LⅢc)、図21-4は4トレンチLⅡ(本調査LⅡa)、同図5は2トレンチLⅠb(本調査LⅠb)から出土したものである。

図20-3は大型剥片の両側辺を何らかの切断作業に使用した石器である。縁辺には刃こぼれと平行の線状痕、著しい磨耗が認められる。

図20-4~6は裏面の末端に連続する二次加工が施された石器である。二次加工部分に平行する線状痕と縁辺の磨耗が認められる。

図21-1は特に二次加工を加えていないが、末端に平行の線状痕が認められることから、鋭利な末端を刃部として使用したと考えられる石器である。

図21-2・3は横長の石器である。2は錯交剥離により上下から整形され、刃部には直交の線状痕と磨耗が認められる。3は背面の刃部以外の部分に周辺から粗い加工により整形したもので、直線的な刃部に刃こぼれや摩減、平行の線状痕が認められる。

図21-4・5は使用痕跡が認められないことから石包丁の未成品と考えられる資料である。4は背面が自然面となる扁平な剥片を素材に周辺から両面に二次加工を施している。5は板状に割れた剥片を素材として裏面の下縁を中心に二次加工を施したものである。

図22-1・2は円形の石器である。1は円形の板状剥片を素材に両面の全周に二次加工を施した石器である。下縁の両面には微小剥離痕と摩減がみられる。2は錯交剥離により刃部を作り出した円形の石器で、上下左右の縁辺には直交や平行方向の線状痕があり、多様な操作法により使用されたと考えられる。

図22-3は周辺から粗い剥離により整形された石器である。二辺が挟られた形状となる。下部の直線的な縁辺には平行の線状痕と軽度の摩減がある。

図22-4は四辺に挟り込みのある石器である。挟り部の位置は、各辺の中央ではなく、図示したように左右対称を意図して整形される。挟り部は細かな剥離によって潰れている。(鹿 又)

第1編 仲山C遺跡

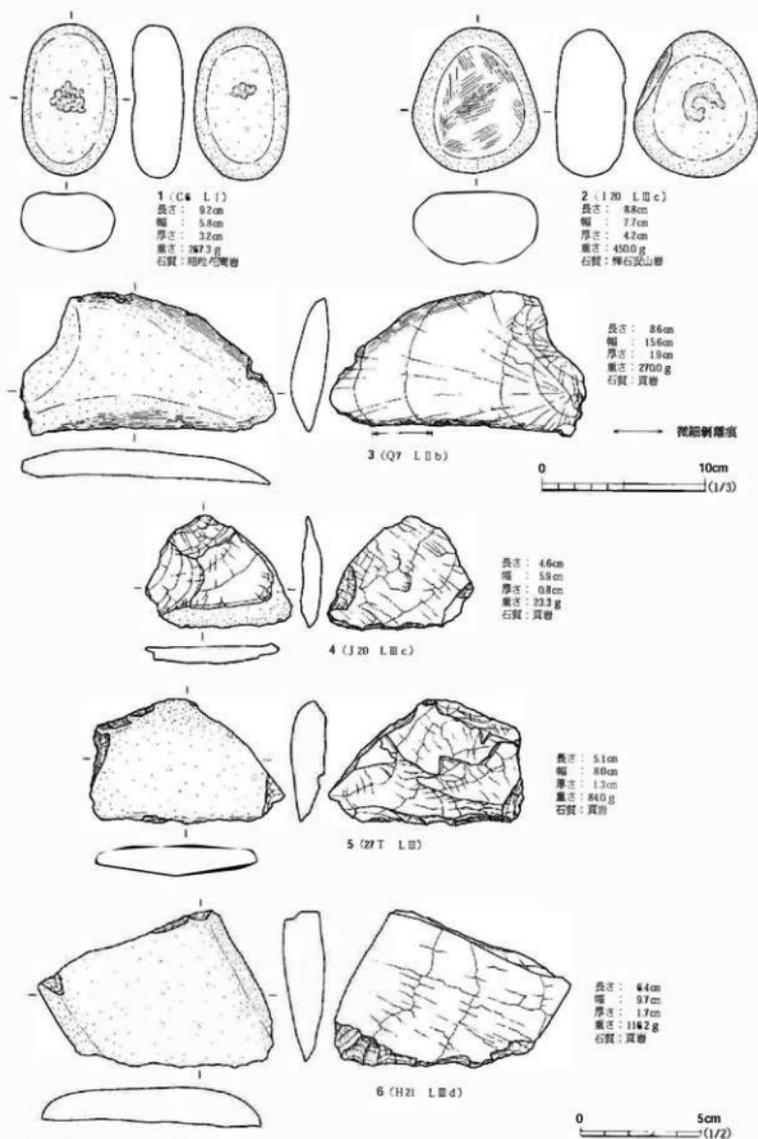


図20 遺構外出土遺物(4)

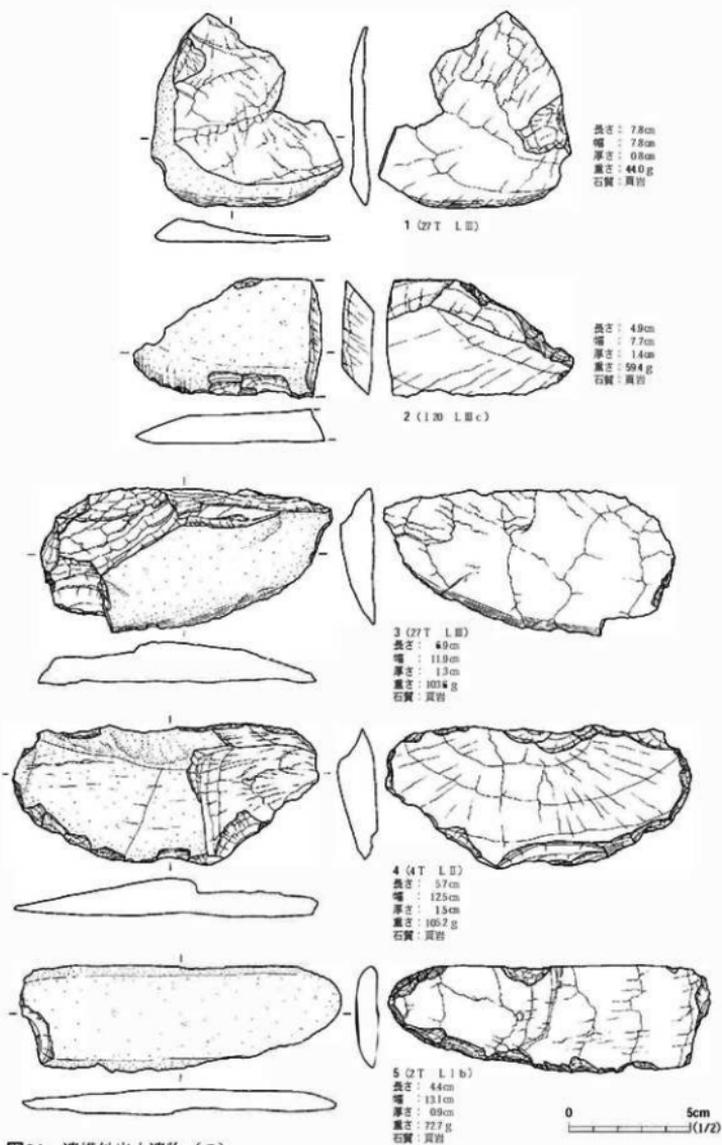


図21 遺構外出土遺物 (5)

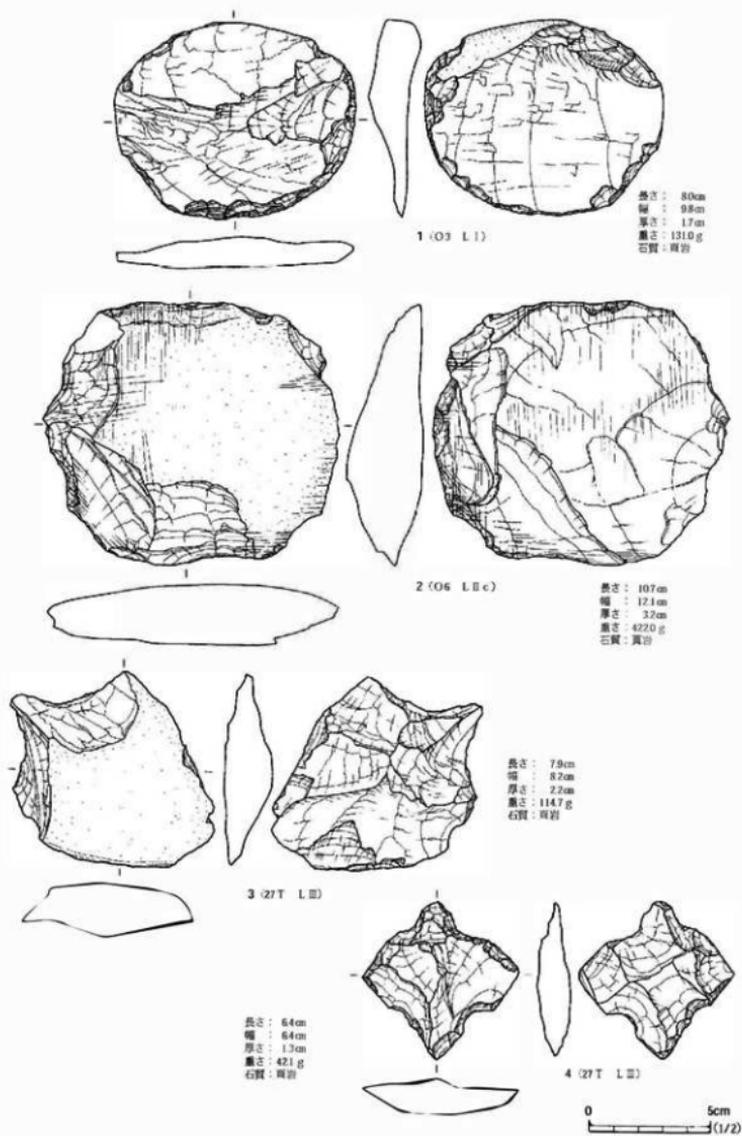


図22 遺構外出土遺物(6)

第3章 ま と め

仲山C遺跡では、竪穴住居跡1軒、土坑2基、溝跡3条、道跡3条、鍛冶遺構3基、性格不明遺構3基、縄文土器362点、土師器192点、陶磁器1点、石器42点、羽口7点、椀形滓16点、伊壁2点、鉄滓約2.44kg、鍛造剥片約8.4g、粒状滓約8.4g、釧丸1個を検出した。

遺跡内で最も古い時期の遺構は、縄文時代前期初頭～前葉にかけての遺構である。竪穴住居跡1軒と土器埋設土坑2基、土坑3基、性格不明遺構1基が該当する。竪穴住居跡は調査区北部の北東方向へ延びる支尾根の平坦な頂部に位置し、土器埋設土坑及び2基の土坑は調査区南西隅の谷に位置する沢1の左岸沿い、残る1基の土坑と性格不明遺構は調査区北東部の沢4の沢頭と調査区最高所の主尾根を直下の南向き斜面に位置する。この内特筆すべきは土器埋設土坑である。この遺構は現在でも水の湧き出す谷頭に立地しており、内部に底部を欠いた土器を埋設していた。立地及び埋設土器の状況から、土器埋設土坑の機能は、人工的に湧水点を作り、水を安定して確保するための施設と考えられる。縄文時代前期前葉の遺物は、当該期の遺構の周囲から出土するだけでなく、調査区南部斜面下の地形が平坦になる中央部と沢3近くの2地点に集中する傾向が認められ、この時期の人々が、調査区北部の支尾根付近を居住域、南部斜面下を生活域としていたことが覗かれる。

縄文時代後期～晩期にかけての遺構は検出できなかったが、新地式及び大洞C2式・A'式の土器が少量出土している。遺物の分布は前期前葉と異なり、調査区北部の支尾根上とその南側の浅い沢跡に限定される。生活域がより北側に移った感がある。

弥生時代は遺構・土器ともに検出できなかったが、調査区南部斜面下の沢2北岸に位置する平坦地で、大型板状石器とよばれる東北地方の弥生時代に特有な打製石器群がまとまって出土した。これらの石器は頁岩の板状に割れる性質を利用して製作され、使用痕の認められるものが多く、一般に磨石具としての機能が想定される石器である。仙台平野の中在家南遺跡（工藤他1996）や高田B遺跡（荒井・赤澤2000）に類似が多く確認される。福島県内では、武井A・師山・能登・船沢A・大船泊・長瀬・鳥井沢B・鳥打沢B・南入A・白岩堀ノ内・仲ノ内遺跡などで確認されている。共存する土器は主として弥生時代中期の椀井式である。仲ノ内遺跡では弥生時代後期が主体であるが、中期も少数出土する。能登遺跡は会津地方の事例であり、弥生時代後期の天王山式が共存するほか、使用される石材が珪質凝灰岩や珪質頁岩である点が相違する。浜通り地方では、頁岩、粘板岩、流紋岩など多様な在来地性の石材が利用される傾向にある。

奈良時代になると、調査区北部の支尾根上に性格不明遺構2基が隣接して構築される。性格不明遺構の性格を推定するのは野暮であるが、丘陵地の尾根上に立地する事、遺構の規模が3.5m×2mで平面形が楕円形である事、底面にはほぼ完形土師器甕が置かれていた事等から、墓塚であった可能性を指摘しておく。

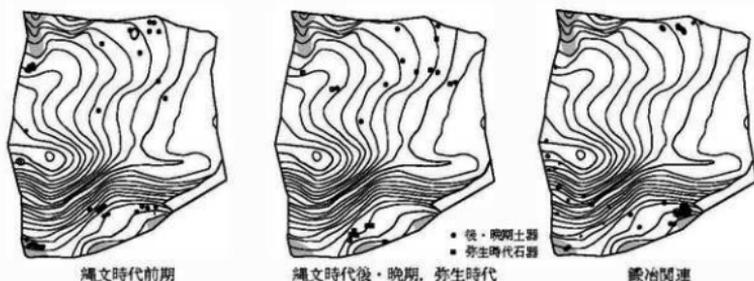


図23 遺構・遺物の分布状況

この他、本遺跡では調査区南部斜面下の緩傾斜地を中心に鍛冶遺構3基を検出した。SWK03については、鉄滓の化学分析によると、精錬鍛冶滓であるとの結果がでていることから、鍛錬だけではなく、精錬も行われていた可能性がある。土師器を伴わないため、時期については不明であるが、古代～中世にかけての所産と考えられる。この鍛冶遺構と関連して調査区南部斜面の西側を中心に複数の木炭焼成土坑が見つかっており、調査区南部斜面で鍛錬鍛冶を主体とする生産活動が行われていたようである。なお、調査区北部から出土している鉄滓に関しては、本遺跡の北西に存在を確認した鹿澤場から供給されたものと推定される。

以上述べてきた以外にも、本遺跡からは縄文時代早期中葉・前期中葉の土器や石鏃・磨製石斧等の各種石器が少量ながら出土しており、時期ごとにそれぞれの生業活動に応じた土地利用の状況が認められる。(笠井・鹿又)

引用・参考文献

- | | |
|-------------|--|
| 鈴木 敬治 他 | 1990 「表層地質図」『土地分類基本調査 相馬中村』pp.23-34 福島県 |
| 鈴木 敬治 他 | 1990 「表層地質図」『土地分類基本調査 原町・大栗』pp.23-37 福島県 |
| 工藤 哲司 他 | 1996 『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集 |
| 荒井 格・赤澤 靖章 | 2000 『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集 |
| 吉田 秀亨 | 1989 「第11編 武井A遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ本文』pp.503-516 |
| 大竹 篤 他 | 1990 「第5編 師山遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ本文』pp.195-254 |
| 大橋 道正 他 | 1990 「第1編 能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告10』pp.7-108 |
| 安田 稔 他 | 1991 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅱ本文』 |
| 安田 稔 他 | 1992 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ本文』 |
| 佐久間ふく子・安田稔他 | 1997 『常磐自動車道遺跡調査報告10』 |
| 高橋 信一 他 | 1999 「第6編 仲ノ内西遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告18』 |

第2編 みょうじん 明神遺跡

遺跡記号 SM-MZ

所在地 相馬市山上字明神ほか

時代・種類 縄文時代-散布地, 奈良時代-集落

調査期間 第一次調査 平成16年10月14日～12月3日

第二次調査 平成17年9月13日～12月16日

調査員 第一次調査 松本 茂・吉野謙夫・大河原雄

第二次調査 吉田 功・佐藤 啓・青山博樹

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と自然環境

明神遺跡は、相馬市山上字明神・広瀬地区にわたって広がる遺跡で、その面積は84,000㎡と推定されている。相馬市は、太平洋に面した福島県浜通り地方の北部に位置し、東西28km、南北13kmにわたり、面積は197.6km²を誇る。北を相馬郡新地町・宮城県伊具郡丸森町、西を伊達市霊山町、南を相馬市鹿島区・相馬郡飯館村と境を接している。遺跡は、松川浦海岸線から西に約8km内陸にあり、JR相馬駅から南西約3.5kmに位置している。

本地域の地形は、市の西側を南北に走る双葉断層（岩沼－久ノ浜構造線）を挟んだ東西で大きく異なり、西方は阿武隈高地東縁の準平原地形、東方は浜通り低地帯とに分けられる。準高原地形には、霊山（標高804m）や手倉山（672m）・彦四郎山（635m）などの山々が発達し、おおむね400～500mのなだらかな地形を形成している。一方、浜通り低地帯は山鏡丘陵部と沖積平野部に大きく分かれ、丘陵を開析した段丘面も数箇所確認されている。丘陵部は、東流する宇田川・小泉川・地蔵川・日下石川などの河川に南北を挟まれるため東西方向に発達し、北方および東方に高度を減じて、海岸部では磯を形成する。この丘陵の南岸を利用して集落が営まれることが多い。沖積平野部は河川流域にみられ、河岸段丘・扇状地の他、松川浦や新沼浦といった潟湖がみられる。

図1には、遺跡周辺の表層地質を図示した。本地域は、割山地壘・相馬中生層群を境にして、それぞれ以西が主に新生代新第三期中新統起源の丘陵、それ以东が主に新第三期鮮新統起源の丘陵地に大きく分けられ、これは前述した双葉断層とその東西にはほぼ一致する。

割山地壘は、古生代に形成したと推定される割山層と、中生代ジュラ紀に形成された粗粒アルコーズ砂岩・砂岩・頁岩に特徴付けられる相馬中生層群（北沢層・栗津層・山上層・橋窪層・中ノ沢層）からなり、東西幅1～3kmで南北に走る破砕帯である。相馬市北部から新地町にかけて割山層、南部に相馬中生層群が分布する。いずれも造陸運動による強い褶曲を受けて複背斜構造をなしている。そのため、その起伏は激しく、特異な形状の山体から神体山とみなされる山も少なくない。

断層の西側は、玄武岩質集塊岩・カンラン石玄武岩からなる天明山集塊岩を挟んで塩土層・金山層（どちらも礫岩・凝灰岩を特徴とする）が分布している。いずれも新生代新第三紀中新世の半鹹水域に堆積した土層である。このころ会津地方のグリーンタフ変動など、北部日本では激しい地殻変動が起こっており、本地域でも同様の活動が指摘されている。このころ、双葉断層に平行する相馬断層や大谷断層が形成されたと考えられる。

断層の東側は新第三期中新世末に形成された初野層の上位に、鮮新世の久保間層・山下層（滝の口層）が堆積する。特に山下層は、塊状の青灰色シルト岩・青灰色泥岩からなる特徴的な層で、本地域の丘陵主部を構成している。山下層の堆積直後、相馬地方は隆起し陸地化したと考えられてお

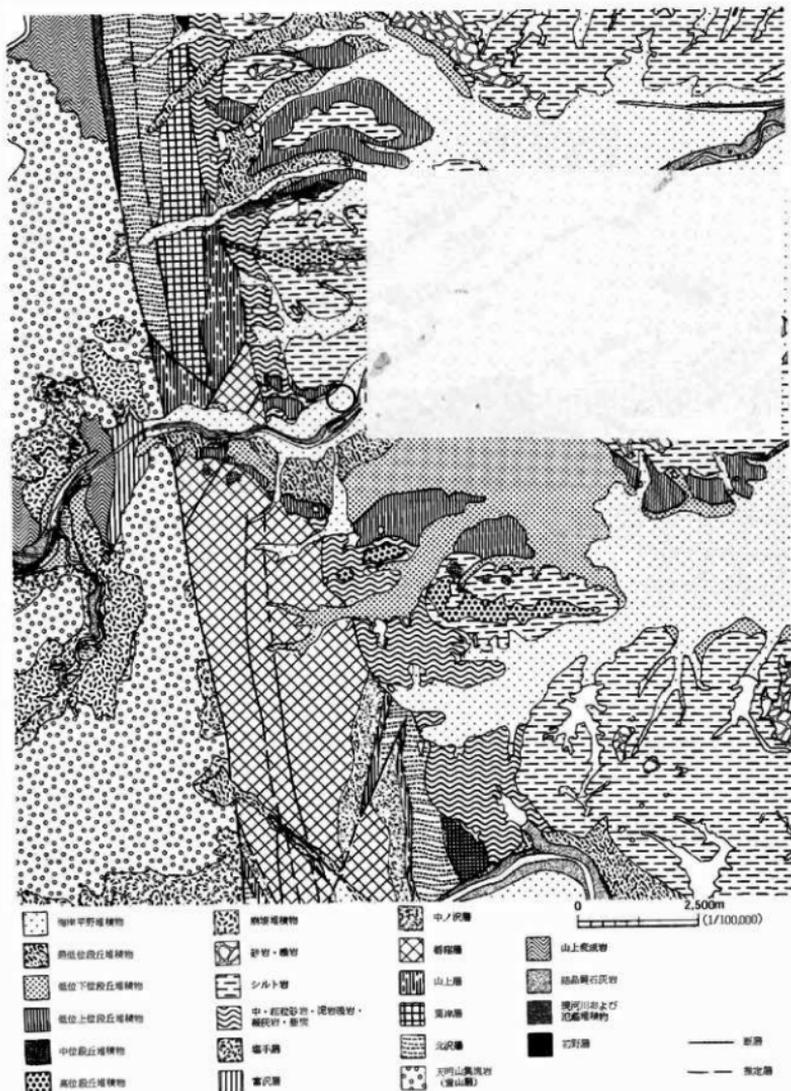


図1 遺跡周辺表層地質図 (1990『相馬中村』より作図)

り、この層を開析した段丘面とともに、更新世を経て現在に近い地形になった。

相双地区にはこれまでⅠ～Ⅴ面の段丘面が知られており、本地域ではⅡ～Ⅴ面に相当する高位段丘・中位段丘・低位上位段丘・低位下位段丘・最低位段丘が確認できる。段丘は、東西に走る丘陵を開析する宇田川・小泉川・地蔵川・日下石川の流域に発達する。丘陵間は沖積低地が発達し、ここに平野堆積物・砂州堆積物などが認められ、海岸へ至っている。

相馬市の気候は、太平洋気候区に属するため、夏は涼しく冬は暖かい温暖な地域といえる。年間平均気温が12℃、年間降水量約1,300mm、年間日照時間2,360時間を割る。一年を通して乾燥した晴天の日が多く、降水量が少ないため、水不足に悩まされることがある。また、梅雨期に吹く北東風(やませ)の影響で日照不足・低温が続き、農作物に打撃を与えることもある。

明神遺跡は、宇田川北岸の、沖積平野上に立地している。宇田川は、遺跡の西方約2kmの山上宇須堂地区から東方に開口する扇状地形をなし、今田地区付近で北東に流れを変え、中村市街地を経て太平洋へ注ぐ。流域には河岸段丘が形成され、特に、日下石川に挟まれた宇田川南岸の高松丘陵には低位段丘(上位面・下位面)と最低位段丘が大きく広がっている。これに対し宇田川の北岸は、掘坂地区と山岸地区の一部に狭小な低位段丘(下位面)が形成されるのみである。

微視的にみれば、遺跡は北東に走る宇田川に沿って形成された小規模な自然堤防上に立地し、東西120m、南北10～40m、標高21～18mの範囲に推定されている。遺跡の北方には後背湿地が形成されており、宇田川がかつて山岸地区の段丘直下を流れていたことを推測できる。事実、調査区内から裏敷の流路跡が見えられている。遺跡の西部は圃場整備により削平され、旧地形はとどめていない。この際、削り取った土砂を利用して後背湿地を埋没せしめたため、現況では自然堤防と後背湿地の標高差はほとんどない。調査前の遺跡周辺は、水田・宅地・畑地に利用されていた。(佐藤)

第2節 歴史的環境

相馬市では、戦後直後の各調査機関による発掘調査の他、近年は相馬地域開発や一般国道6号相馬バイパス・一般国道113号バイパス・常磐自動車道・相馬第二用水などの建設に伴う、遺跡分布調査が行われ、発掘調査件数も増加している。このように、当地域では遺跡の分布状況のみならず、遺跡の内容もしだいに明らかになってきている。以下、周辺の歴史的環境について述べる。

旧石器時代の遺跡は少なく、椎木北原の北原遺跡や同段ノ原A・Bを数えるのみである。北原遺跡と段ノ原A遺跡からナイフ形石器が、段ノ原B遺跡から細石刃核がそれぞれ出土し、後期旧石器時代後半期と終末期に比定される。いずれも原位置を保ったものではないが、中位段丘や低位段丘上位面に立地するので、今後こうした段丘上から該期の遺跡が発見される可能性は高い。

縄文時代の遺跡になると、遺跡数のみならず発掘調査数も増加する。特に早期末葉から前期前葉にかけては主に相馬地域開発による調査で大きな成果が上がっている。段ノ原B遺跡・山田B遺跡・猪倉B遺跡から各遺跡100軒を超える該期の堅穴住居跡が検出され、集落遺跡を構成している。

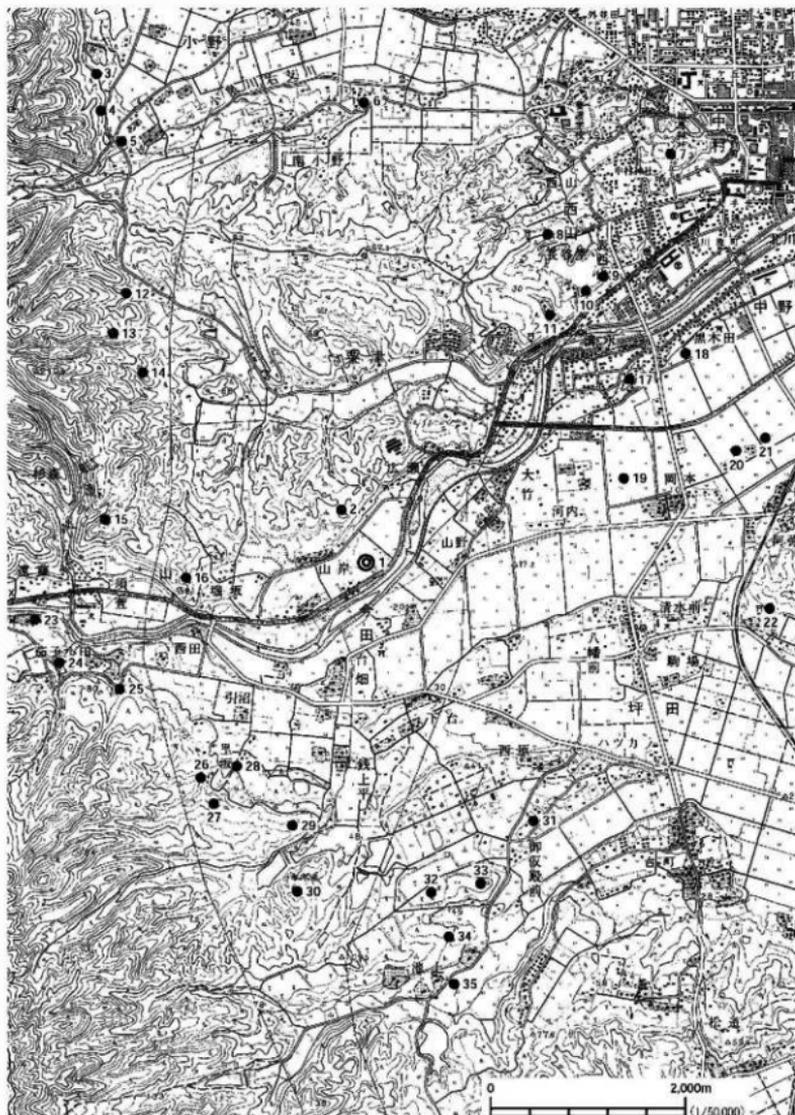


図2 周辺の遺跡位置図

この地図は、富士地理院長の承認を得て、同院発行の1/50,000地形図を複製したものです。(複製番号 平和史地研47号)

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	文化財番号	所在地	種別	時代	番号	遺跡名	文化財番号	所在地	種別	時代
1	明神	20000196	山上字明神・広岡	伽藍跡	縄・古代	19	館殿跡	20000185	成田字館殿	伽藍跡	中世
2	山塚跡	20000185	山上字山塚	伽藍跡	縄・古代	20	丸尾古墳	20000006	成田字館殿	古墳	古墳
3	堂ヶ平A	20000124	黒木字堂ヶ平	散布地		21	船場	20000171	成田字館殿	散布地	古代
4	堂ヶ平B	20000157	黒木字堂ヶ平	散布地	縄・文	22	高松塚六墓	20000009	坪田字高松	古墳	古墳
5	小野北原	20000158	小野字北原	散布地		23	茄子小田	20000136	山上字茄子小田	散布地	古代
6	小野日向原跡	20000073	小野字元産敷	伽藍跡	中世	24	塩手下	20000137	山上字塩手下・ノノ神沢	散布地	縄・文
7	相馬中村跡	20000074	中村字北町	伽藍跡	中世・近世	25	ノノ神沢	20000138	山上字ノノ神沢・今田字塩手下	散布地	
8	藤山山境六墓群C	20000076	西山字西山	古墳	古墳	26	一里坂	20000139	今田字一里坂	散布地	縄・文
9	西山境六墓群A	20000079	西山字西山	古墳	古墳	27	土武A	20000140	今田字土武	散布地	縄・古代
10	西山境六墓群B	20000077	西山字西山	古墳	古墳	28	土武B	20000141	今田字土武・一里坂	散布地	縄・文
11	西山境六墓群D	20000078	西山字西山	古墳	古墳	29	前原	20000142	今田字前原・小嶋山	散布地	縄・文
12	石水口	20000125	興津字石水口	散布地		30	飯上平	20000143	今田字飯上平	敷敷跡	
13	石水口B	20000126	興津字石水口	散布地		31	御前殿	20000146	坪田字御前殿・西原	散布地	古墳・古代
14	源原田	20000127	興津字源原田	散布地		32	金草A	20000144	坪田字金草	散布地	近世
15	王船跡	20000162	山上字濱敷	伽藍跡	中世	33	金草B	20000145	坪田字金草・西原	散布地	古墳・古代
16	相模野跡	20000179	山上字相模	伽藍跡	中世	34	大穴口塚跡	20000147	坪田字大穴口・上原田・金草	塚跡	近世
17	筑野堂跡	20000000	中野字堂ノ前	伽藍跡	中世	35	山田	20000148	坪田字山田	散布地	縄・古代
18	黒木田	20000081	中野字明神前	邸宅遺構	古墳・古代						

中期の遺跡は馬見塚遺跡があげられる。馬見塚遺跡では中華の土器片と、複式伊を伴う末葉の生活跡が検出されている。明神遺跡では、遺構は検出されていないが、ほぼ同時期の土器片が少量出土している。後・晩期の遺跡として、大森A遺跡・節山遺跡・双子遺跡・朝日前貝塚などがあげられる。沖積低地に立地するため、有機質遺物が出土する遺跡もあり、大森A遺跡で丸木弓や椀状木製品など、双子遺跡で丸木舟、節山遺跡では該期の製塩とみられる伊跡が発見されている。また、新地町には学史上著名な新地貝塚や三貫地貝塚等も所在し、県内でも特色ある地域となっている。新地貝塚は手長明神伝説が伝えられているが、明神遺跡に近接する塩手山にも同様の伝承が残されている。

弥生時代の遺跡には、前期の成田藤堂塚遺跡と中期の北迫A遺跡がある。成田藤堂塚遺跡からは再葬墓が検出され、「藤堂塚式」の標識資料となっている。ただし、該期の遺跡から集落が検出された例はなく、今後の進展が望まれる。

古墳時代になると、それぞれの段丘に応じて古墳群が形成されるようになり、発掘調査例も多い。丸塚古墳や高松1号墳からは人物埴輪・円筒埴輪の他、馬具や金銅製承盤付椀などが出土している。福迫横穴墓群からは金銅製双龍巻頭大刀が出土している。同時期の集落跡は明らかでないが、前述した大森A遺跡からは水田跡が検出されている。

奈良・平安時代の当地域は宇多郡に属し、本遺跡の北東2kmに位置する黒木田遺跡が同郡の郡家ないし寺院と考えられている。また、黒木田遺跡から出土した瓦が、善光寺窯跡出土の瓦と同型であることから、善光寺窯跡が供給地であることが明らかになった。また、新地町武井遺跡群では多数の製鉄遺構が検出され、該期に鉄生産が開始される。当地域でも大森遺跡から製鉄伊が検出されている。今回の調査の結果、明神遺跡の主体は該期であることが判明した。

中世の当地域は、文治5（1189）年源頼朝の「奥州征伐」により千葉氏（相馬氏）の支配に入る

が、南北朝まではその支配は不安定であったようで、黒木田城跡や熊野堂城跡といった館跡が、南朝方の居城である霊山城の搦手として築城されている。

相馬氏は、15世紀後半に宇多庄の支配を確立したとみられ、慶長16（1611）年中村城に居を移す。以後、中村城は相馬6万石の居城として城下を成立させ、明治維新をむかえることとなる。また、近世の当地域では旧新沼浦で製塩が展開し、鷲塚遺跡や古川尻B遺跡などから入浜式製塩法を用いた製塩関連遺構が検出されている。

明治4（1871）年7月麩澤置業により成立した中村県は、同年11月磐前県に編入される。以後、宇多郡の中心地として成長した当地域は、明治22（1889）年に中村町、次いで昭和29（1954）年に周辺の7村を合併し相馬市として成立し、現在に至っている。（佐藤）

第3節 調査経過

明神遺跡は、明治25年、在地の研究者であり新地貝塚や三貫地貝塚の発掘調査で著名な館岡虎三氏により縄文時代の遺跡として紹介された（館岡1892）遺跡である。しかし、遺物の散布が知られた程度で遺跡の詳細については長年にわたり不明であり、平成8年に刊行された『福島県遺跡地図』にも掲載されていなかった。本格的な調査は平成10年度に表面調査が初めて実施され、この時確認された遺物の分布から遺跡範囲は84,000㎡と推定された。試掘調査は2度にわたって行われた。平成15年度には工区面積13,900㎡を対象に実施され、保存面積は3,100㎡となった。平成16年度には未調査であった900㎡を対象とし、調査の結果、保存面積は合計4,000㎡となった。

第1次調査

明神遺跡の第1次調査は、平成16年9月28日に福島県教育委員会から指示を受けて、(財)福島県文化振興事業団がこれを実施した。平成16年度の本発掘調査対象面積は、保存面積4,000㎡のうち2,000㎡である。本発掘調査は常磐自動車道いわき工区から調査員1名を配置し、10月14日から開始した。まず、重機を用いて表土剥ぎを実施した。

10月21日には作業員28名の雇用手続きと安全衛生講習を行い、遺構検出作業を開始した。そこでは土師器・縄文時代前期末葉の土器が出土し、遺物包含層を確認した。以後、遺物包含層の掘り下げを進めた。10月下旬には山岸碓庫跡から基準杭を移動し、測量杭の打設を行った。

11月初旬には遺構の精査を開始した。11月上旬には立ノ沢遺跡の終了に伴い、常磐自動車道相馬工区の調査員と交代した。11月中旬には遺構の精査を終了した。11月下旬には流路跡の掘り下げを行い、縄文時代中期・後期の土器が出土した。

12月初旬には調査区全景の写真撮影、器材の撤収を行い、12月3日には明神遺跡の調査を終了した。12月14日には日本道路公団東北支社へ明神遺跡を引渡した。12月20～22日にかけて調査区の埋め戻しを実施して平成16年度の現地作業を終了した。（吉野）

第2次調査

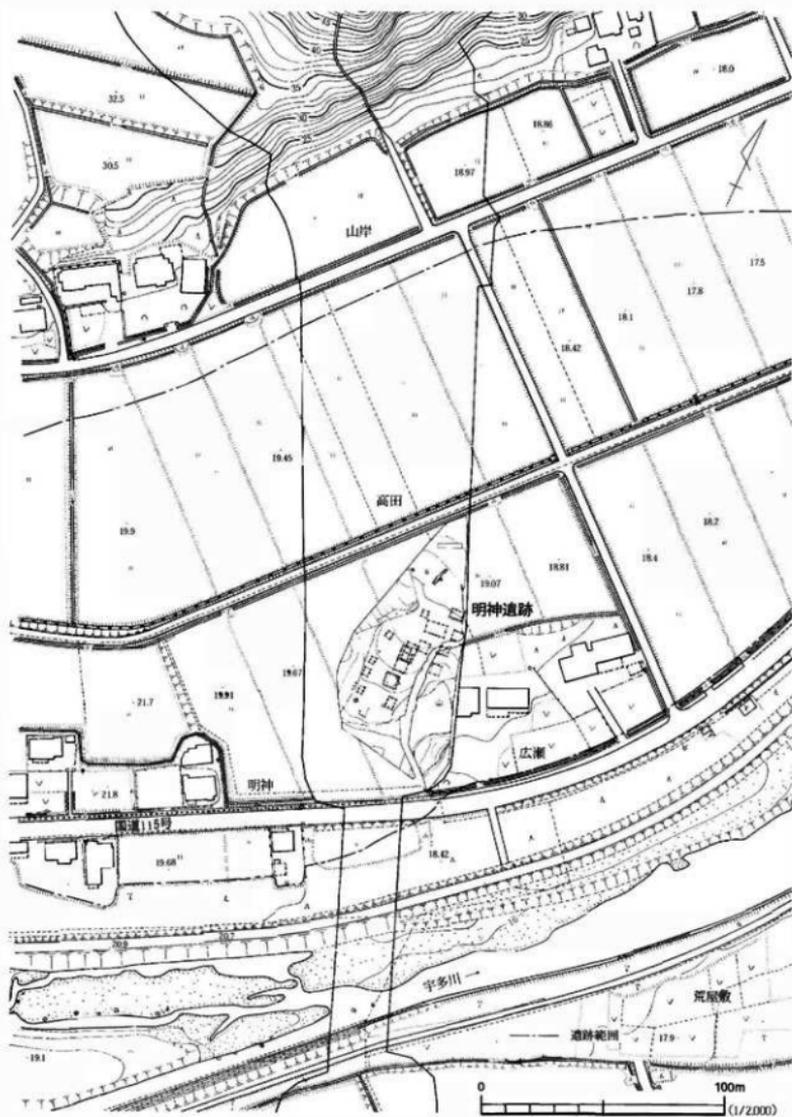


図3 調査区・工事計画図

第2次調査は、平成17年9月9日に福島県教育委員会より指示を受け、残る2,000㎡を対象として実施した。調査員1名を配置し、9月13日より重機による表土の除去を開始した。また、9月下旬にプレハブ等を設置するなど、断続的に調査を行った。作業員20名を雇用した現地調査は10月4日から行い、この時点で鹿島町の調査を終えた調査員2名が合流した。

10月中旬までは、遺構検出や測量基準杭の打設など基礎的な作業を主とし、遺物を含むLⅡの掘り下げを行った。LⅡからは縄文土器・土師器・須恵器等が混在した状態で出土し、これを除去したLⅢ上面で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出された。

10月下旬には、遺構検出が本格化し遺構精査も進んでいった。また11月8日には、作業員13名を増員し、作業の効率化を図った。

11月中旬には検出された掘立柱建物跡は10棟を超え、遺構の記録作業が滞りがちになってきた。そこで11月下旬に調査員1名を派遣し、応援体制を整えた。その結果、記録は飛躍的に進捗した。また掘立柱建物跡群がし字形に配列することが判明し、遺跡の重要性が指摘されたことから、11月26日に現地公開を開催し、周辺住民への周知を図った。11月29日には、ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。

12月上旬には遺構の調査と並行して器材の撤収を行い、現地調査を終了した。12月9日には東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所へ遺跡の引渡しを行った。そして、12月14～16日にかけて調査区の埋め戻しを行いすべての現地作業を終了した。
(佐藤)

第4節 調査方法

本遺跡の調査は、これまで(財)福島県文化振興事業団遺跡調査課で行ってきた調査方法を踏襲している。まず遺構・遺物の位置を表示するための方眼を調査区全体に設定し、これをグリッドと呼称した。調査区内のグリッドは5m方眼とし、世界測地系に基づき国土座標X=198,035, Y=93,645を基点とした。表記方法は基点から、西から東にA・B・C…H, 北から南に1・2・3…7とし、それらを組み合わせてA1・A2…H7とした。これを基に、遺構の作図や遺物の取り上げを行った。本報告では国土座標の座標値を用いた任意の測点を複数図示し、遺構の位置を示した。

表土は重機を用いて除去した。遺物を含むLⅡについては原則として人力によって掘り込み、遺物が散漫で堆積の厚い一部の地区は重機で除去した。遺構の精査にあたり、遺構に土層観察用枠を適宜残すなど、遺構の掘込面や堆積状況の把握に努めた。

遺構の記録は、縮尺1/10及び1/20で断面図と平面図を作図した。地形図は縮尺1/200で作図した。写真は35mm判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、重要と判断されたものについては6×4.5cm判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムでも撮影した。

調査記録・出土資料などは、当事業団が定めた整理基準に沿って整理を行い報告書刊行後、(財)福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。
(吉野・佐藤)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

明神遺跡は、宇田川左岸に平行して東西に走る自然堤防上と、後背湿地に移行する緩斜面にかけ立地する遺跡で、現地表面での調査区の標高は約20mである。調査区内の基盤層には東西端に横層が露呈し、中央部と南東隅で流路跡が検出されている。特に調査区の中央を南北に走る幅約20mの流路の範囲からは、褐色砂質土が分布していた。遺構は主に、この褐色土の範囲から検出され、礫層での分布は希薄になっている。遺物の出土もおおむね同様の傾向を示している。

検出された遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・性格不明遺構・土坑・集石遺構・柱列跡・溝跡・屋外ピットがある。遺跡の主体をなすのは、竪穴住居跡と掘立柱建物跡で、これらは出土土器などから、古代に属すると考えられる。これらの遺構は、広場を挟んでL字形に配列し、所謂「官衙風建物跡」の配置に類似している。

遺物は、縄文土器277点・土師器3,181点・須恵器96点・陶磁器16点・石器23点・土製品2点・鉄滓14点の計3,609点が出土している。大部分は遺物包含層からの出土で占められるが、一部は遺構に伴って出土している。

基本土層（図5、写真5）

明神遺跡では、現地表面から基盤層までの土層はおおむね50cm程度堆積し、調査区南部では盛土されて1mを超える地区もある。盛土を除いた土層は、土質の違いからLⅠ～Ⅳまで細分できた。これらの土層はおおむね粘質土で、調査区北端の斜面部のみ地下水の影響のためか全般的にグライ化していた。以下、図5のB-B'とC-C'で示した土層断面をもって基本的な土層の説明を行い、その後流路跡に堆積していた土層について記述する。

LⅠは表土層である。黒褐色を呈するしまりが弱い層で、厚さ30～50cmで調査区全域に堆積している。少量の遺物を含む。調査区北部ではこれをLⅠaとし、水田床土であるLⅠbと区別することが可能であった。層厚はLⅠaが30～40cm、LⅠbが10～15cmである。

LⅡは黒褐色土で、調査区西部の一部を除いて分布している。層厚は10～60cmと地点により異なるが、おおむね20cmを測る。本層は比較的多量の遺物を含んでいることから遺物包含層と理解している。しかし、縄文土器と土師器・須恵器が混在している点や摩滅した土器が認められることから、耕作など小規模な攪乱を受けている可能性は否定できない。本層上面が遺構の掘込面である可能性が高いが、上記の理由のためか平面プランを確認することはできなかった。

LⅢは明褐色粘質土で、LⅣとの漸移層にあたる。層厚は10～20cmである。多くの遺構は本層上面で検出されている。遺物を含まないことから、明神遺跡の基底面と捉えられた。LⅣは段丘の基

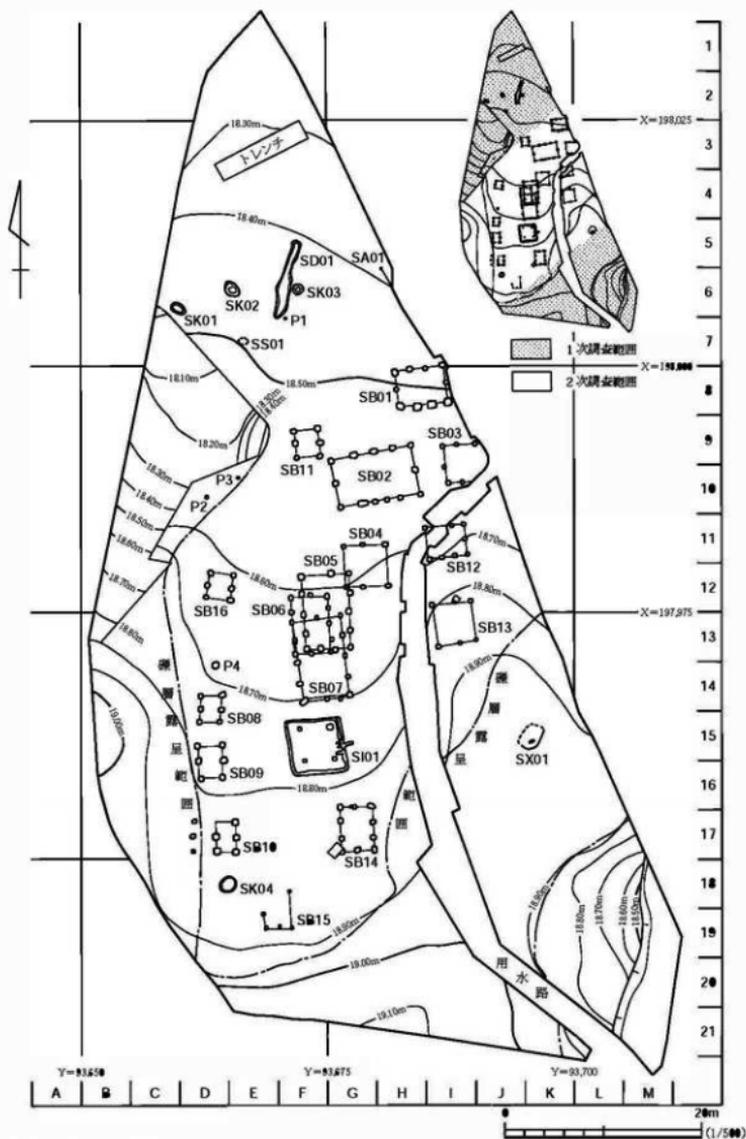
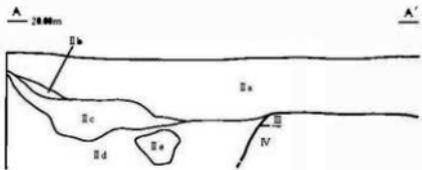


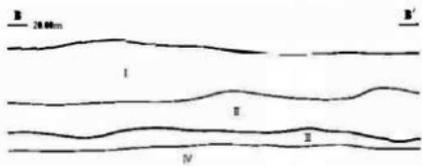
図4 遺構配置図

図5 基本土層図

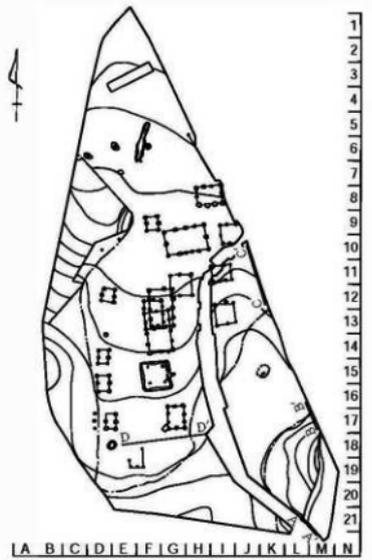
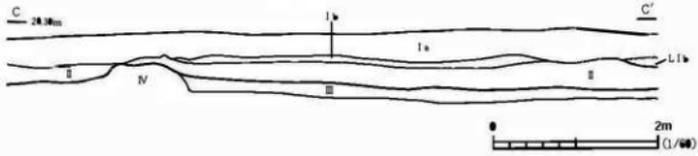


- A-A' 土層**
 IIa 暗褐色土 10 Y R 3/3 (白色砂粒)
 IIb 暗色砂質土 10 Y R 4/4
 IIc 黒褐色土 10 Y R 3/2
 IIe にぶい黄褐色砂 10 Y R 5/4
 IIe 暗褐色土 10 Y R 3/2 (塊状に増積)

- B-B' ~ C-C' 土層**
 Ia 黒褐色粘質土 2.5 Y R 3/2 (水田耕作土)
 Ib 明黄褐色粘土 2.5 Y R 6/6 (灰土)
 II 常褐色土 7.5 Y R 3/1 (白色砂粒)
 III 明褐色粘質土 7.5 Y R 5/6
 IV 砂礫層



- D-D' 土層**
 1 暗褐色土 10 Y R 3/3 (砂多量)
 2 暗色砂質土 10 Y R 4/4 (小型の砂少量、粘性あり)
 3 暗褐色砂 10 Y R 3/3 (細い砂少量、しまり弱い)
 4 暗褐色砂 10 Y R 3/4 (小型の砂多量)
 5 にぶい黄褐色土 10 Y R 4/3 (砂多量)
 6 黒褐色砂 10 Y R 3/2 (砂少量)
 7 黒褐色砂 10 Y R 3/1 (粘質土少量)
 8 褐色砂 10 Y R 4/4 (砂層と黒褐色土の互層)
 9 黒色砂 10 Y R 2/1 (最大の砂少量)
 10 黒褐色砂 10 Y R 2/3
 11 暗褐色土 10 Y R 3/3 (粘性あり)
 12 黒褐色土 10 Y R 3/2 (約10cmの砂少量)
 13 暗褐色土 10 Y R 3/3 (粘性ややあり)
 14 黒褐色土 10 Y R 3/1 (大型の砂多量、粘性あり)



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

盤をなす砂礫層である。調査区西部ではLⅠ直下に木層が露呈している。

調査区南東隅からは流路跡が検出された。流路跡内にはLⅡ類似の黒色土と明る黄色調の砂質土が互層になっており(図5 A-A'), 黒色土中から縄文時代中・後期の土器が出土した。この結果、この流路が縄文時代中期以前に形成されたこと、およびLⅡが縄文時代を中心とした時期に堆積したこと、以上の2点が推定された。

また、調査区中央部からも流路跡が検出されている。この流路跡内にはLⅢ類似の暗褐色土と砂層が互層に堆積(図5 B-B')し、堆積状況から流路跡a(Ⅰ1~6)・流路跡b(Ⅰ7~9)・流路跡c(Ⅰ10~14)の3本の流路跡が確認された。LⅡとの層位関係から、これらの流路は縄文時代より古く形成されていた可能性が高い。調査中は、これらの土層をLⅢとして認識しており、土質や層位関係からも大きな矛盾がないため、以下の記載でもLⅢとして報告する。(吉野・佐藤)

第2節 竪穴住居跡

今回の調査により、竪穴住居跡は2軒検出された。これらは同じ地点に重複することから、建て替えの結果残されたものであることが判明した。そこでこれを1a号住居跡・1b号住居跡と呼称し、個別に報告する。

1a号住居跡 SⅠ01a

遺 構 (図6・7, 写真6~9)

本遺構は、調査区南部のF・G-15・16グリッドにかけて位置し、流路跡が埋没した平坦面に立地する。試掘調査4Tで発見されていた住居跡(福島県教育委員会2004)である。精査後、下層からSⅠ01bが検出されており、本遺構が新しい。また、遺構の北東コーナーと南西コーナー付近に本遺構より古い風倒木垣が存在する。また、重複関係はないが、本遺構の北側にSⅡ05~07が隣接している。

遺構の精査は、まずトレンチ部分を掘り起こし平面プランと周壁の立ち上がりの確認に努めた。トレンチはLⅢに達していたため、この部分はプラン確認が容易であったが、LⅡ中での確認は困難であった。そこで周辺をLⅢまで除去してプランを確認した。ただし、予想される住居跡のプラン内から多数の遺物が出土したことから、遺構の掘込面はLⅡ中と推定している。

遺構内堆積土は16層におよぶ。すべての土層に通し番号を付してしまい煩雑なので、まず大別を述べることにする。Ⅰ1~10は住居施設後に堆積した土層で、このうちⅠ3~7・9はカマド内に堆積する土層である。Ⅰ11・12が壁溝内埋土で、Ⅰ13・14がカマド、Ⅰ15が性格不明の盛土施設のそれぞれ構築土に用いられる。Ⅰ16は貼床内埋土である。以上の土層の詳細については、各項目で述べることにする。

次に住居施設後の堆積土について報告する。Ⅰ1・8は遺構の全面にみられ、Ⅰ2は東壁付近、

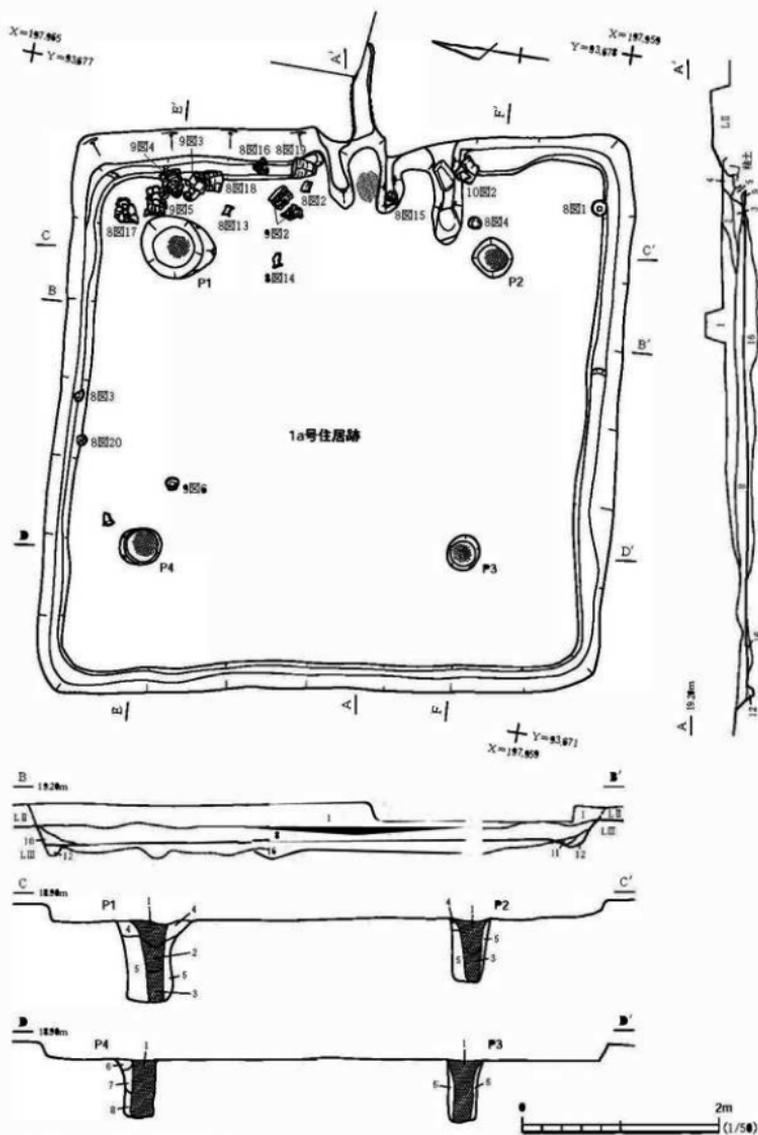


図6 1a号住居跡(1)

Ⅱ10は北壁際で確認された。Ⅱ1は遺構の中心部では少量のLⅢ粒子を含み、周辺のLⅡと区別されるが、遺構の外縁にいくにしたがいこの差異は不明瞭となる。遺物取り上げの関係で土層番号を付したが、Ⅱ1がLⅡに由来する層であることは間違いない。Ⅱ8・Ⅱ10にも、混入物は極めて少ない。これに対し、Ⅱ3～Ⅱ7・Ⅱ9はカマド周辺にのみ分布している。これらに含まれる混入物は、いずれもカマドの崩落に由来するものである。こうした所見から、Ⅱ1～Ⅱ10は、自然堆積した土層群と考えられる。

本遺構の平面形は、方形を基調とする。ただし、正方形というわけではなく、若干ひしゃげた印象を受ける。軸線方向は南壁でN85°E、西壁でN10°Wである。規模は、遺構北端で南北5.73m、東西5.74mを測り、比較的大型の都類に入る。床面はLⅢ類似の流路跡内堆積土を掘り込んだ窪地にⅡ16を敷き詰めて平坦な貼床としている。Ⅱ16は粘質土と砂の混土で、部分的黒色粘土がブロック状に堆積している。しまりが強い。なお、Ⅱ16の上面には後述するSⅡ10aのカマド跡も構築されている。周壁の立ち上がる角度は50～70°で、おおむね70°を測り、北東隅付近では緩やかになる。壁高は9～22cmを測る。

住居内施設として、カマド・盛土施設・柱穴・壁溝が検出された。カマドは東壁の中央から検出されている。カマドは燃焼部と煙道からなり、燃焼部には天井部が崩れた状態で検出され、煙道も横抗の状態で残存するなど、遺存状況は良好であった(写真8)。カマドの規模は、全長1.72m・幅0.76mで、内訳は燃焼部が長さ74cm・幅28～40cm、煙道が長さ98cm・幅22cmである。

左右袖が残存し、それぞれ周壁から55～70cm程度延びている。この先端を結んだ線の奥壁側約20cmの範囲が酸化していることから、使用時の状態と大差ないことが理解できる。また右袖の袋口付近には、補強材と考えられる10cm角の粘土塊を埋めている。煙道は、燃焼部底面の約15cm上位から掘り込まれ、5°の傾斜で東方に走り、奥行き50cmにわたって酸化している。煙道の径は20cmであることが判明している。さらに、燃焼部底面から10～20cm浮いて40×20cmと35×15cmの長方形の粘土塊が出土している。粘土塊はその下面が酸化していることから、これらの粘土を積んでカマド天井部としていたものと考えられる。この粘土塊の起源となる粘土層は、遺跡の北方に面する丘陵に堆積しているのが確認されている。

カマド内にはⅡ3～Ⅱ7・Ⅱ9が堆積する。LⅡ類似土に焼土が多量に含まれているので、カマドの崩落に由来する土層群と判断される。カマドの意図的な破壊については、Ⅱ5中から出土した粘土塊の形が整っていた点から、その可能性は低い。したがってこれらの土層は、自然堆積と判断された。なお、袖の構築材として黒色土と焼土の混土であるⅡ13・Ⅱ14を用いている。

盛土施設はカマドの南50cmに位置する。施設は掘形に盛土し土手状にしたもので、東壁から長さ100cm・幅27～30cm・高さ10cm弱の規模で西方に延びる。構築材として石や粘土が用いられる。周壁との接合部には幅10cm・厚み5cm程度の板状に整形した粘土を貼り付け、施設の中央と先端には高さを合わせるように石を設置し平坦面を揃えている。周辺に酸化面や貯蔵穴もないことから、この施設の性格がカマドの袖や間仕切りでないことは明らかである。また、幅や検出場所を考慮す

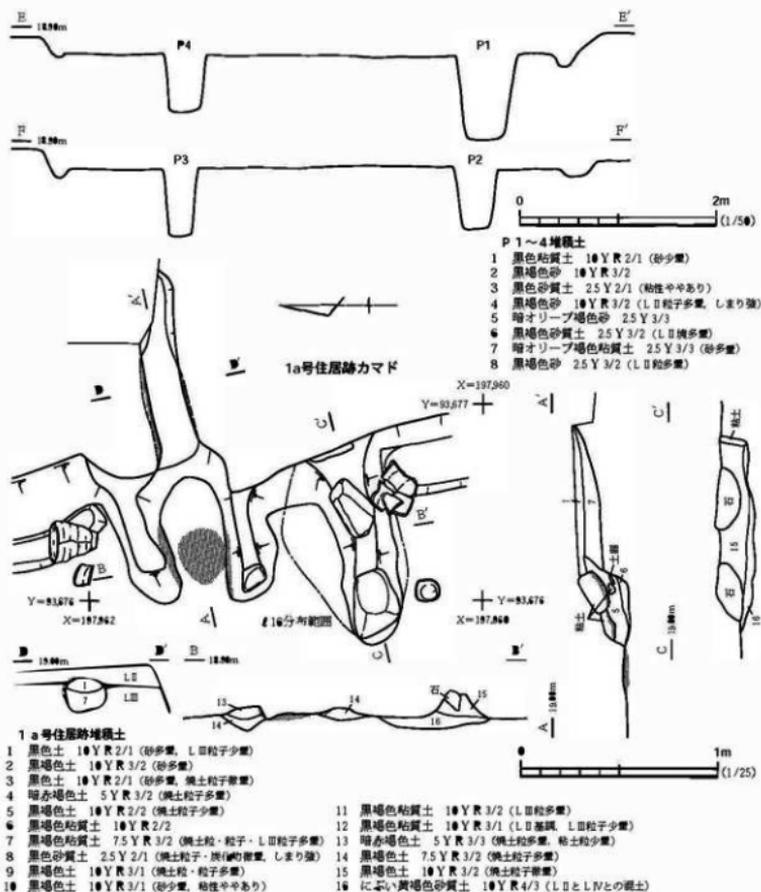


図7 1a号住居跡(2)

れば出入口施設とも考えにくい。具体的な機能を限定するのは困難であるが、平坦な上面を評価して、この面から周壁にかけて板を渡した欄などの痕跡と想定しておきたい。

柱穴は、周壁からそれぞれ1m離れた地点から4基が検出され、北東から時計回りにP1~4と呼称した。このうちP3・4はS101bの柱穴を襲している。柱穴は、貼床土では柱痕のみ検出され、断ち割り調査によって掘形が判明した。掘形はおおむね円形で大きさは33~61cm・深さ60~83cm、柱痕は径20cmあり、P1の規模が大きい。柱穴内堆積土は8層に分けられ、1~3が柱痕、4~8が掘形内埋土である。土層の観察から柱は抜き取られた可能性が高い。掘形埋土上面の1

4はしまりが強く、平面的には貼床との区別は困難であった。

壁溝は、カマドを除いて全周している。このことは、カマドの位置を決定した後に掘削されたことを示している。よって、壁溝は本遺構の構築時に設けられた施設と考えられる。幅22～38cm・深さ4～14cmで巡り、東壁際では幅が広がり、深さも浅くなっている。また、風倒木痕と重なる南壁では、他の地点に比較して深くなっている。

遺物 (図8～10, 写真31～34・37)

1a号住居跡からは、縄文土器片28点、土師器片823点、須恵器片36点、石器4点、鉄滓3点、粘土塊2点が出土した。このうち完形もしくはこれに近い状態で床面から出土した土師器を主に、杯9点、手づくね土器2点、高杯2点、鉢5点、甕8点、壺1点、鉢か甕か判断できなかったもの1点、須恵器4点と、堆積土中から出土した縄文土器8点、石器1点を図示した。

図8-1～9は土師器の杯である。1は、南東コーナー付近の床面から出土した。完形品である。丸底からゆるやかに立ち上がり、やや外反する口縁部をもつ。口縁部と体部の境は内外面とも不明瞭である。器壁の厚さは最大約1cmで、やや厚手である。色調はにぶい褐色である。外面は口縁部にヨコナデが施された後、体部から底部にかけて粗雑にヘラケズリされている。底面中央に削り残し部分があり、木華痕が長径3cm、短径2cmの範囲についている。内面調整は激しい摩滅のため不明である。2は東壁際のカマド左袖付近の床面から出土した。全体の約40%が遺存している。平底の底部からやや外反しながら口縁部に至る。外面には口縁部にヨコナデ、底部付近に指頭圧痕が付されている。底面には木華痕がみられる。内面は口縁部にヨコナデが、底部付近にナデが施されている。色調はにぶい褐色である。3は北壁際中央の床面から出土した。丸底で、緩やかに内湾する体部と口縁部をもつ。底部・体部・口縁部の境は明瞭でない。全体の約50%が遺存している。外面の底部付近のみヘラケズリされる。口縁部から体部にかけては輪積み痕が残されている。内面はミガキと黒色処理が施されている。外面の色調はにぶい黄褐色である。4は南東部の支柱穴P2東側の床面から出土し、堆積土中から出土した小破片と接合した。丸底で、緩やかに内湾する体部と口縁部をもつ。底部・体部・口縁部の境は明瞭でない。全体の約50%弱が遺存している。外面は口縁部にヨコナデを施した後、体部と底部がヘラケズリされている。内面はナデの後、ミガキが施されている。色調は褐色である。5は土師器の杯と思われるが、鉢の可能性もある。北東部の床面と北西部の床面から出土した破片が接合した。全体の約25%が遺存している。大きな平底から急角度で立ち上がる体部をもつ。口縁部は遺存していないが、破片の上端部にヨコナデが観察されることから端部は近いと思われる。外面は体部にナデ、底部にヘラケズリが施されている。内面にはミガキの後、黒色処理が施されている。外面の色調はにぶい褐色である。6は1から出土した。全体の約20%が遺存している。丸底で、緩やかに内湾する体部と口縁部をもつ。浅い皿状の器形である。底部・体部・口縁部の境は明瞭でない。外面は、底部付近にヘラケズリ、口縁部にヨコナデが施され、体部付近には輪積み痕が残されている。内面にはミガキがおおむね放射状に施されている。色調は赤褐色から明赤褐色である。7は1から出土した。口縁部付近の小片で全体の約5%が遺存す

るのみである。緩やかに内湾する体部と口縁部をもつ、浅い皿状の器形である。外面は口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されるが、両者の先後関係は不明である。内面にはミガキが施される。色調はにぶい藍色である。8は北東部の床面からやや浮いた8で出土した。全体の約15%が遺存するのみである。緩やかに内湾する体部と口縁部をもつ。底部は遺存していない。体部・口縁部の境は明瞭でない。浅い皿状の器形になるものと思われる。外面は、口縁部にヨコナデが施された後、体部から口縁部付近までヘラケズリが粗雑に施されている。内面は単位の不明瞭なミガキと黒色処理が施されている。外面の色調は褐灰色である。9は、南東部の床面からやや浮いた9から出土した破片と1から出土した破片が接合した。口縁部から体部にかけて全体の15%ほどが遺存するのみである。緩やかに内湾する体部と口縁部をもつ。体部と口縁部の境は明瞭ではない。外面は口縁部にヨコナデが施された後、体部がヘラケズリされる。内面は口縁部に並行するミガキと黒色処理が施されている。外面の色調は黒褐色である。

図8-10は土師器の杯か鉢である。南東部の9から出土した。平底の底部付近のみ遺存している。二次加熱を受け赤変し摩滅が激しい。底面に糸切り痕が観察され、その縁辺はヘラケズリされている。内面は摩滅しているが黒色処理が施されていると思われる。色調はにぶい赤褐色である。

図8-11・12は手づくね土器である。11は北東部の床面から出土した。浅い碗形で、全体に指頭圧痕が付されている。底部付近からやや外れた位置に内面から外面に穿孔されたような破損箇所があるが、人為的なものかどうかは断定できない。色調はにぶい藍色である。12はカマド左袖脇の床面から出土した。器形は浅い碗形である。全体に指頭圧痕が付されて、内面にはさらに指ナデが施されている。色調は浅黄藍色である。

図8-13・14は土師器の高杯である。13は北東部の1から出土した。脚部上半の中実部分から裾部にかけてのみ遺存している。裾部は「八」の字状に広がると思われるが遺存していないため全体の形状は不明である。杯部底面にはミガキと黒色処理が施されている。脚部外面には縦方向にヘラケズリされ、内面にはひだ状の凹凸が縦方向に認められる。色調はにぶい黄藍色である。14は北東部の1から出土した。脚部上半の中実部と裾部上端のみ遺存している。中実部分は円筒形で裾部との境に稜線を有する。杯部底面にはミガキと黒色処理が施されている。脚部外面には縦方向のヘラケズリが施され、内面にはヨコナデが施されている。外面の色調は明赤褐色である。

図8-15~19は土師器の鉢である。15はカマド右袖の上から出土した。このほか住居内各所の床面や堆積土中から出土した小破片と接合した。ほぼ完形である。木葉痕の付された平底の底部から急な角度で立ち上がる体部をもち、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は高さと同器厚が不揃いで、器面に凹凸が多く、全体に粗雑なつくりである。外面には縦方向のハケメが粗雑に施され、輪積み痕が部分的に残る。内面は横方向のヘラナデが施され、輪積み痕が部分的に残る。外面は二次被熱のため底面を除いて赤変し、器面が一部剥離している。色調は、外面が明赤褐色、内面が明褐色である。16は東壁際のややカマドよりの床面から出土した。ほぼ完形である。木葉痕の付された平底の底部から急な角度で立ち上がる体部をもち、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部に至る。口

縁端部は高さが不揃いで器面には浅い凹凸が多く、全体に粗雑なつくりである。外面には縦方向のハケメが施される。内面はヘラナデの後に縦方向のナデがまばらに施され、輪積み痕が部分的に残る。外面は二次被熱のため体部・口縁部の一部が赤変している。色調は、外面がにぶい橙色から橙黄色、内面がにぶい橙黄色である。17は北東コーナーの床面から出土した。口縁部から体部にかけてと体部下半から底部にかけての約60%が遺存している。両者は接合しないが、まとめて出土していることから同一個体と考えられる。木葉痕の付された平底の底部と急な角度でやや内湾しながら立ち上がる体部、ほぼ垂直かやや内傾する口縁部をもつ。口縁端部は高さと同様に器面に凹凸が多く、全体に粗雑なつくりである。外面は摩滅が激しいが、部分的に縦方向のハケメが観察される。内面は横方向のナデの後、横方向のヘラナデが施されている。口縁端部には内外面とも指頭圧痕が付され、輪積み痕が残されている。外面は二次被熱のため体部・口縁部の一部が赤変している。色調は外面が灰黄褐色からにぶい赤褐色、内面が黒褐色からにぶい橙黄色である。18は東壁際のカマド北側の床面から出土した。底部が欠損している。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する。外面は二次被熱のため全体的に赤変し、器面は摩滅が激しく一部が剥離している。外面には縦方向のハケメが観察され、輪積み痕が一部に残る。内面には横方向のヘラナデが施される。口縁部にはヨコナデが施される。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい黄褐色である。19は東壁際のカマド左袖脇の床面から出土した。ほぼ完形である。木葉痕の付された平底の底部と急角度に外傾する体部、わずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は高さが不揃いで、器面に浅い凹凸が多く、全体にゆがみの多い粗雑なつくりである。外面にはナデと指頭圧痕が、内面にはヘラナデが施されているが、内外面とも輪積み痕が多く残されている。口縁部にはヨコナデが施されているが、内面はなでによって消されている。外面は二次被熱のため体部の一部が赤変・剥離している。色調は、外面が黄褐色から赤褐色、内面が浅黄褐色である。

図8-20は土師器の鉢か甕である。北壁際中央の床面から出土した。底部と体部下半のこく一部が遺存している。平底の底部には木葉痕が付され、体部は急な角度で立ち上がる。底部の外面には指頭圧痕がみられるが体部の調整は不明である。内面にはナデが観察される。色調は黒褐色である。

図9-1~7、図10-1は土師器の甕である。図9-1は小型の甕である。北東部からカマドにかけての床面、1、2、4などから散在して出土した。ほぼ完形に復元された。木葉痕の付された平底、最大径を上半にもつ張りの弱いやや長胴の体部、外傾する口縁部をもつ。体部には、外面にハケメが、内面にヘラナデがそれぞれ施された後、口縁部内外面にヨコナデが施される。内面の口縁部と体部上半に輪積み痕が部分的に残されている。体部から口縁部の外面の一部が二次被熱により赤変・剥離している。色調は橙黄色である。2はカマド左袖脇の床面から出土した。ほぼ完形である。木葉痕の付された平底の底部、最大径を中ほどにもつ張りの弱い長胴の体部、外反する口縁部をもつ。体部の外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のヘラナデがそれぞれ施された後、口縁部内外面にヨコナデが施されている。内面には輪積み痕がとくに上半部に明瞭に残され、外面の口縁部にもみられる。二次被熱のため、底部から体部にかけての外面片側のみがとくに赤変・剥離している。

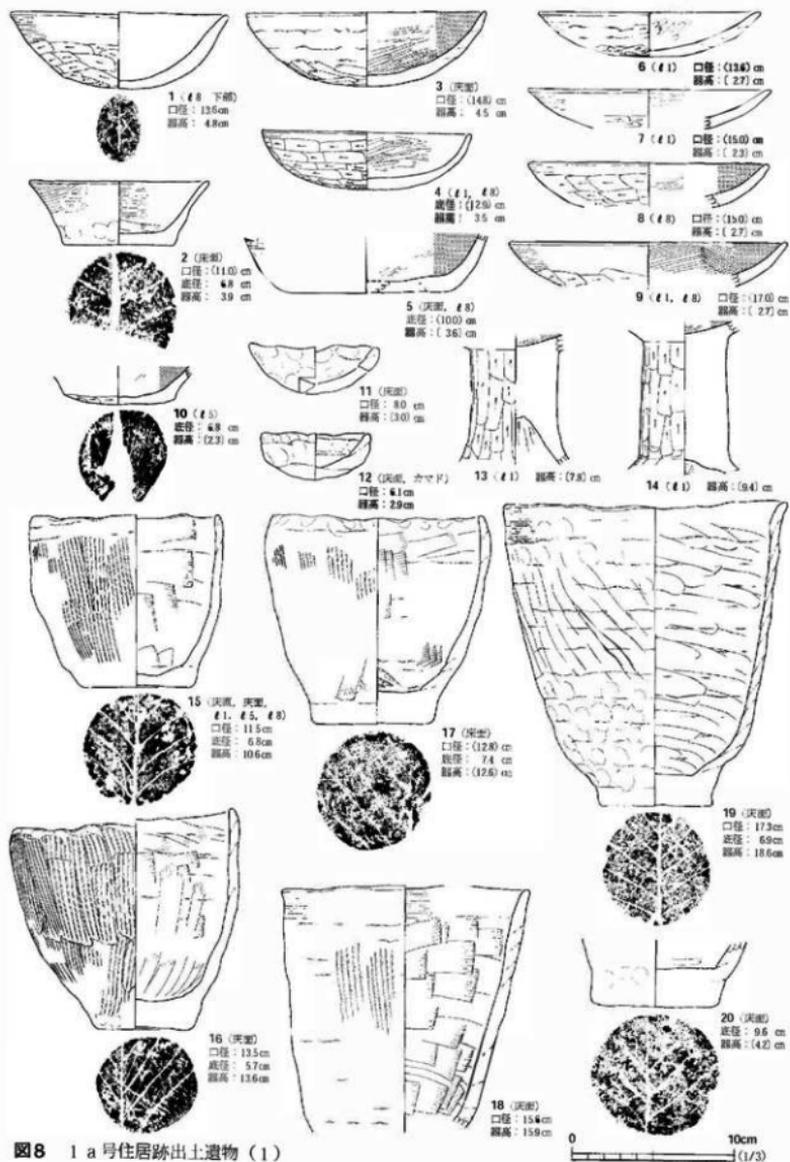


図8 1 a号住居跡出土遺物(1)

色調は外面がにぶい藍色から赤褐色、内面が藍色である。3はカマド北側の東壁際の床面から出土した。ほぼ完形である。木葉痕の付された平底の底部、最大径を中ほどにもつ張りの弱い長胴の体部、外傾する口縁部をもつ。体部には外面に縦方向のハケメ、内面に縦方向のナデの後に横方向のヘラナデがそれぞれ施された後、口縁部内外面にヨコナデが施される。体部内面に比較的多くの輪積み痕が残され、口縁部外面にもみられる。外面の底部から体部にかけては二次被熱のため赤変している。赤変部分はとくに体部の片側にのみ顕著にみられる。色調は外面がにぶい藍色から藍色、内面がにぶい藍色である。4はカマド北側の東壁際の床面から出土した。ほぼ完形である。木葉痕の付された平底と張りのない長胴の体部、外傾する口縁部をもつ。外面には縦方向のハケメの後に口縁部にヨコナデが、内面には横方向のヘラナデの後に口縁部から体部上半にかけて横方向のナデが施されている。外面の底部から体部にかけては二次被熱のため赤変し一部が剥離している。赤変・剥離部分はとくに体部の片側にのみ顕著にみられる。色調は、外面が浅黄藍色、黄藍色、黒褐色、内面がにぶい藍色である。5は北東コーナー付近の床面から出土した。底部外面の大部分が被熱のため剥離しているほかはほぼ完形に近い。平底と張りのない長胴の体部、外傾する口縁部をもつ。器面の摩滅が激しいが、体部外面には縦方向のハケメ、内面に横方向のヘラナデがそれぞれ施された後、口縁部内外面にヨコナデが施されているのが観察される。内外面とも輪積み痕が多く残されている。外面の底部から体部にかけて被熱による赤変と器壁の剥離がみられる。剥離は底面の大部分と体部の一部におよぶ。色調は外面が浅黄藍色から藍色、内面が藍色である。6は支柱穴P4の東側の $\#$ 8下部から出土した。底部と体部下半の一部のみが遺存している。全体が被熱のため赤変し、一部が剥離している。外面は摩滅のため調整は不明である。内面にはヘラナデが施され、輪積み痕がみえる。色調は、外面が明赤褐色、内面が藍色である。7は北東部の床面から出土した。底部から体部下半にかけて遺存している。木葉痕の付された平底と下ぶくれの体部をもつ。外面は二次被熱のため底部から体部の一部が赤変し、器壁の一部が剥離している。外面は摩滅が激しいが、縦方向のハケメが観察される。内面は横方向のヘラナデが施されている。色調は外面が黄藍色から藍色、内面が黄藍色である。図10-1は、南東部の床面、 $\#$ 5、カマド内などに散在して出土した。体部のおよそ4分の1と底部が遺存する。体部と底部は接合しないが、胎土・焼成・色調から同一個体であると思われる。木葉痕の付された平底と張りの強い体部、外傾する口縁部をもつ。外面には縦方向のハケメの後にヨコナデが施される。内面は摩滅が激しいが、体部に横方向のヘラナデが、口縁部にヨコナデが施されている。内面には輪積み痕がみられる。外面は二次被熱による赤変と剥離が部分的にみられる。色調は、外面が藍色から灰褐色、内面がにぶい藍色である。

図10-2は土師器の壺である。底部から体部下半にかけてと口縁部から体部上半の一部が遺存する。カマド南側の東壁際の床面から体部下半が、口縁部が北東部の $\#$ 1と南東部の床面からやや浮いた状態で出土した。両者は接合しないが胎土・焼成・色調から同一個体と思われる。底部は木葉痕の付された平底である。体部は寸胴であるが、下位に屈曲をもち底部に向かって直線的にすぼまる。体部上半は口縁部にむかって内傾しながらすぼまる。口縁部は短く外傾する。体部下半の屈曲部分

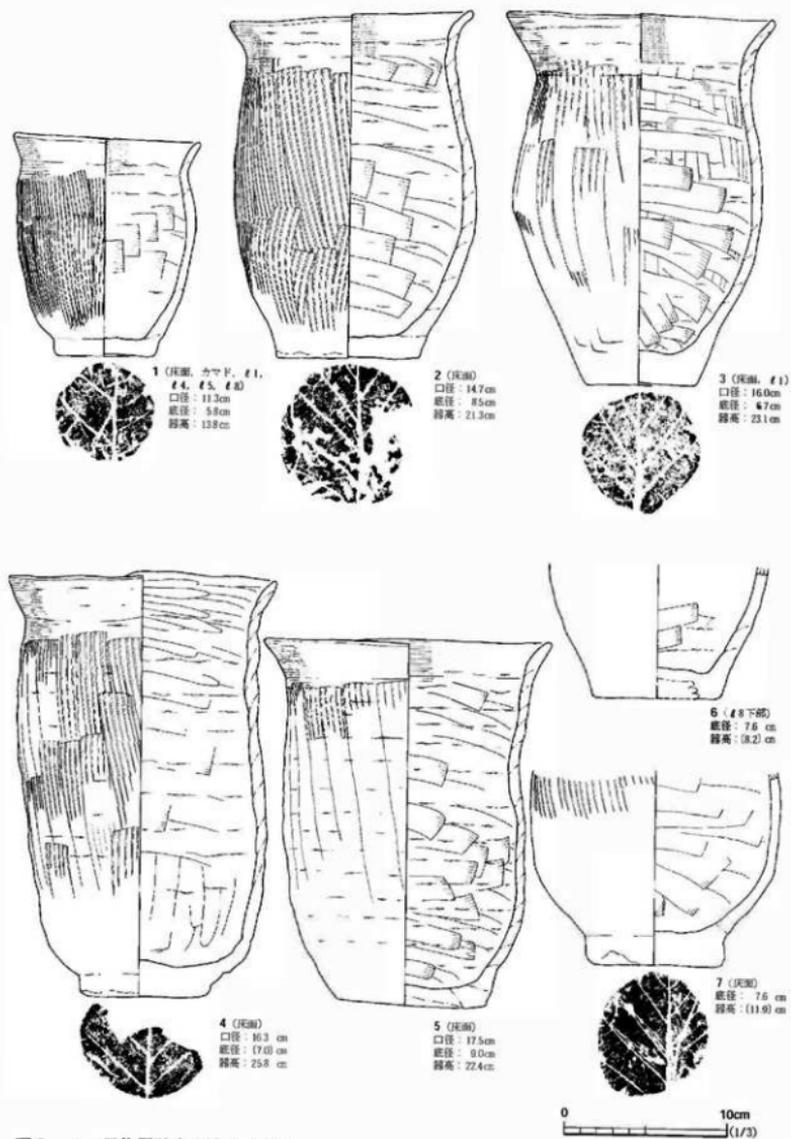


図9 1a号住居跡出土遺物(2)

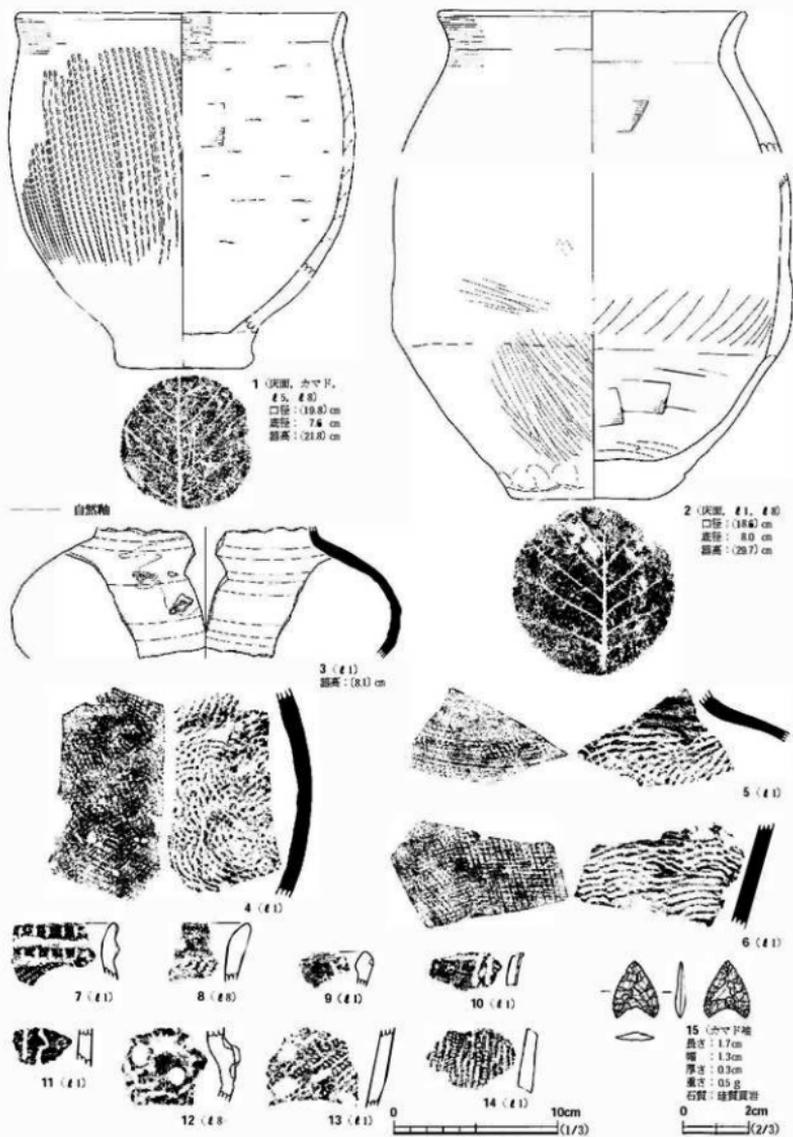


図10 1a号住居跡出土遺物(3)

には内外面とも緩やかな稜線と不自然な盛り上がりがあり、内面にはわずかながら粘土の接合痕が観察されること、大型の器形をもつことから、製作時に乾燥期間をおいたものと考えられる。内外面とも摩滅が激しいものの、体部外面には横方向から斜め方向のミガキが、内面にはヘラナデとナデが施されている。色調は内外面ともにぶい藍色である。

図10-3は須恵器の短頸壺と考えられる。1から出土した。頸部から体部上半の一部分のみ遺存している。焼き歪みが激しいが、肩の張る器形になるものと思われる。内外面ともロクロナデが観察される。外面には暗オリーブ色の自然釉が薄くまばらにかかっている。外面の肩部には焼成前もしくは焼成中に付着した粘土小塊が張り付いたまま焼成されている。色調は灰白色である。

図10-4～6は須恵器の大甕の破片である。4は体部の破片である。1から出土した。外面に格子状の叩き目が、内面に同心円状のあて具痕がみられる。外面は比較的平滑であるが、内面には凹凸が多い。色調は外面が灰色、内面が灰白色である。5は頸部から体部にかけての破片である。1から出土した。外面には格子状の叩き目が付された後、回転力を使ったナデが施されている。内面は、体部に同心円状のあて具痕が、頸部にロクロナデと思われるナデが施されている。6は体部の破片である。1から出土した。図10-4と同一個体の可能性がある。外面には格子状の叩き目が、内面には同心円状になるとと思われるあて具痕がみられる。

図10-7～14は縄文土器である。いずれも堆積土から出土した。前期末葉の太木6式(7・13・14)、後期前葉の綱取2式(9～11)がある。瘤状の突起と押圧が施された12は中期初頭かと考えられる。

図10-15は石鏃である。カマドの右袖付近から出土した。先端部に摩滅がみられる。石質は珪質頁岩である。

まとめ

本遺構は比較的大型の竪穴住居跡で、プランや床面を同じくすることから、S I 01bを建て替えた住居跡である可能性が高い。S I 01bとは壁溝を新しく設け、カマドや柱穴の一部をずらした点で異なる。カマド南から検出された盛土施設については、管見では順列を見出すことはできない。

本遺構からは床面直上を中心に良好な一括資料が出土した。出土土器群は、いずれも非ロクロ成形のもので杯・鉢・甕・手づくね土器から構成される。杯は、丸底が主体をなし平底も共存する。口縁部と体部の境界が不明瞭で、内面は黒色処理された例とされない例の二者が存在する。甕は、ハケメを多用した下ぶくれの長胴甕が存在する。以上の型式学的特徴から、これらの土器群は、8世紀代に位置づけることができる。同時期の遺構として掘立柱建物跡群やS X 01があり、特に掘立柱建物跡群とは重複しないことから、同時存在していた可能性が高い。(佐藤・青山)

1b号住居跡 S I 01b

遺 構 (図11, 写真8)

本遺構は、調査区南部のF・G-15・16グリッドにかけて位置し、流路跡が埋没した平坦面に立

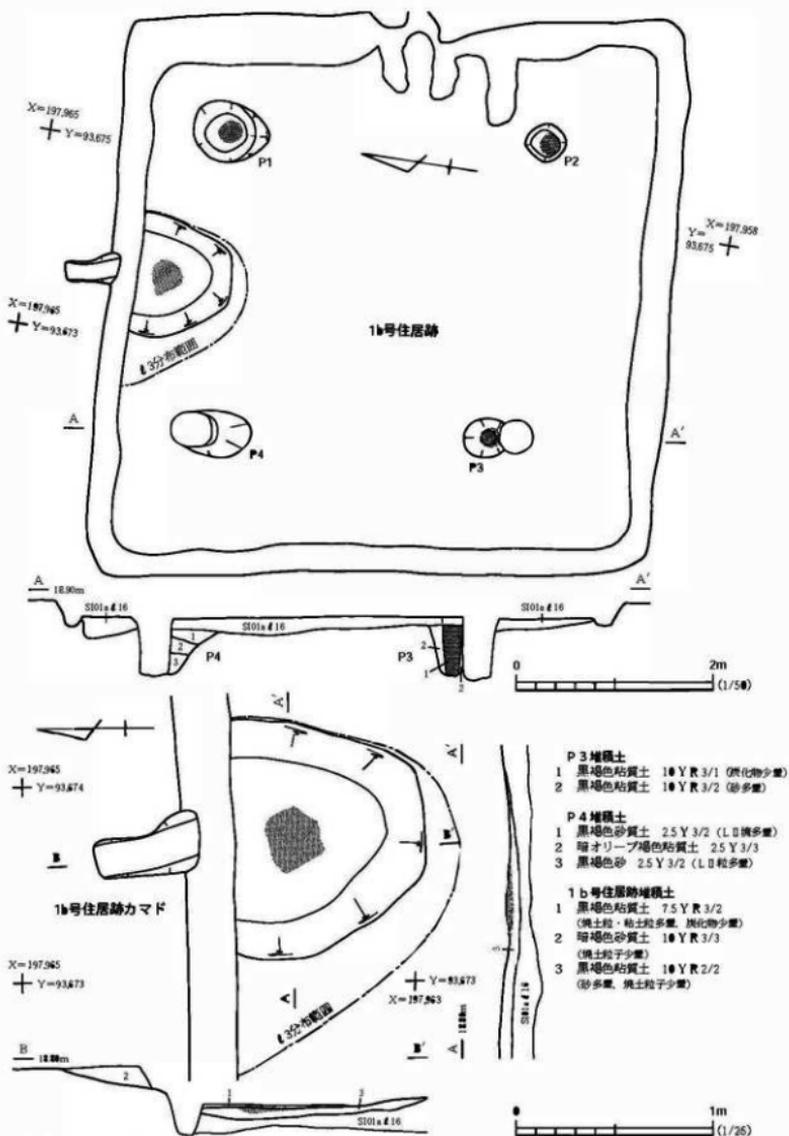


図11 1b号住居跡

地する。S I 01aの精査中、北壁中央で焼土の分布がみられた。そこで精査後、土層観察用畦を設定し掘り込んだところ酸化面と煙道が検出でき、カマド跡と判明した。

本遺構の平面プランや規模は、S I 01aのそれと同じと推定される。カマド酸化面の良好な遺存状態から、S I 01aの16上面をそのまま床面として利用しているようである。住居内施設として、カマドと柱穴が検出されている。

カマドは北壁中央に構築されている。燃焼部と煙道の一部が遺存し、全長1.09m、幅1.21mが検出できた。燃焼部は南北0.95m、東西1.21m、深さ4cmの窪みに、径30cm、厚さ3cmの酸化面が形成されている。袖はこの掘形に取り付いていたと考えられるが、遺存していない。燃焼部と煙道の接続部は、S I 01aの壁溝により約25cmにわたって壊されている。煙道は燃焼部底面の10cm上位から掘り込まれ、約5°の傾斜で北に走っている。長さ55cm、幅33cmにわたり残存する。

カマド内の土層は3層に分けられた。1は燃焼部上面に分布する層で、人為的に埋め戻されている。酸化した粘土粒を多量に含んでいることから、この粘土粒は破壊された袖構築土と考えられる。2は煙道内に自然堆積した層で、少量含まれる焼土粒子は天井から崩落した焼土であろう。3は掘形内に詰められた層で、この上面が焼部底面に利用されている。

柱穴は4基検出され、これを北東から時計回りにP1～4と呼称する。P1・2についてはS I 01aの柱穴にそのまま利用されたと考えている。P3・4はS I 01aの柱穴に壊されている。P3はS I 01a P3の北に接し、径約50cm、深さ60cmの掘形内に径20cmの柱痕が埋められていた。P4はS I 01a P4の南に接する柱穴で、不整な掘形をもち、柱痕は確認できない。P3・4とも貼床上面では検出できなかった。P3 1は貼床上面で区別可能なはずであるが、柱抜取りの際に117と同じ土を貼り付けたため、区別されないと考えている。

壁溝については、カマド燃焼部を壊している点やS I 01aでの調査所見から、本遺構には伴わないと判断している。本遺構から、遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、北カマドをもつ壑穴住居跡で、プランや柱穴の一部をS I 01aと共有している。したがって、本遺構を建て替えてS I 01aにいたった可能性が高い。S I 01aと大きな時間差は考えにくいことから、本遺構の所属時期は8世紀代と考えられる。(佐藤)

第3節 掘立柱建物跡

本遺跡では16棟の掘立柱建物跡が検出された。その多くは、調査区南東部に広がる空閑地の北辺と西辺に、棟の方向を東西か南北にそろえながら配置されている。北辺の建物はすべて東西棟、西辺の建物はすべて南北棟で、全体の建物配置はL字形となる。

西辺を構成する建物群は、東西の2列からなる。東側の列は北からS B 11・05・06・07・14の5棟（このうちS B 05・06・07は重複）、西側の列は北からS B 16・08・09・10の4棟、合計9棟で

ある。東側の列のS Ⅲ07・14の間には1号竪穴住居跡がある。東側の列は最北のS Ⅲ11のみが1間×2間である他は、S Ⅲ05・06・07が2間×4間、S Ⅲ14が2間×3間の側柱建物である。西側の列はすべて1間×2間の小型の建物である。

北辺を構成する一群は、S Ⅲ01・02・03・12の4棟からなる。東側が調査区外にまで延びるため全容は不明だが、西辺の一群と同様に列をなして配置されていると思われる。ただし、もっとも北ともっとも南の列はそれぞれS Ⅲ01とS Ⅲ12の1棟が確認されたのみである。

この他にいずれのグループにも属さないS Ⅲ04・13・15の3棟の建物跡がある。

建て替えが認められるのは、西辺の東側の列に位置するS Ⅲ05・06・07のみで、他の時代の遺構も見当たらない。よってこれらの建物は比較的短期間のうちに廃絶したものである。

なお、本建物跡で検出された建物跡はすべて側柱からなる。そのため各柱穴の呼称は、原則として、北西隅をP 1とし以下時計回りにP 2、P 3…と付している。

1号建物跡 S Ⅲ01

遺 構 (図12, 写真11)

本掘立柱建物跡は、H・I ⅧグリッドのLⅢ上面で検出された。掘立柱建物跡群のもっとも北に位置する。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は建物跡の南辺で約18.5m、北辺で約18.45m、高低差5cmである。柱穴はLⅢの暗褐色土の上面で、黒褐色土によっていずれも比較的光線に識別された。建物の北東隅が東側の調査区外に延びたため買収用地内で調査区を拡張し、北東隅の柱穴を検出した。南側4mにS Ⅲ02とS Ⅲ03がある。

平面形は東西方向に長い長方形で、東西3間×南北2間、10基の柱穴からなる。北辺の柱痕を結んだ線は、N99°Wを指す。

規模は、四隅の柱痕間で、北辺(P 1～4間)約4.9m、東辺(P 4～6間)約3.9m、南辺(P 6～9間)約5.1m、西辺(P 9～1間)約3.4mである。各柱痕間の距離は、北辺が西から1.6m、1.5m、1.8m、東辺が北から1.8m、2.1m、南辺が東から1.8m、1.6m、1.7m、西辺が南から1.7m、1.7mである。平均すると1.73mとなる。

柱穴は平面形と規模にはらつきがある。南辺の柱穴はいずれも大型で平面形が方形であるのに対し、北・東・西辺は比較的小さく平面形が隅丸方形や楕円形である。平面形が隅丸方形の柱穴は、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。最大のP 7で東西83cm、南北74cm、最小のP 3で東西40cm、南北35cmである。深さは一定せず、P 9がもっとも深く検出面からの深さが35cm、P 4・6がもっとも浅く検出面からの深さが15cmである。底面の標高も揃っていない。平面規模の大小と深さの大小は必ずしも一致しない。

柱穴の側壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らであるが、P 2・9・10には深く掘り下げられている部分がある。いずれの柱穴にも直径が15～20cmほどの柱痕がある。

柱穴の堆積土はLⅢの暗褐色土に黒褐色土や褐色土の小塊を含んでいる。しまりはとくにない。

遺物

P5から1点、P6から2点、それぞれ土器の小片が出土している。いずれも堆積土中からの出土である。図化できたものはなかった。

P5から出土したのは土師器甕の体部破片と思われる。外面は二次被熱によって赤変し、器壁が剥離している。成形方法は不明であるが器壁は薄い。P6からは土師器の甕の口縁部と思われる小片が出土した。外反し、口縁端部は丸くおさめられている。時期は不明である。もう一点は甕の体部の破片と思われる。二次被熱のため赤変し、激しく摩滅している。

まとめ

本掘立柱建物跡は、2間×3間の規模をもつ東西棟である。L字形に配置された掘立柱建物跡群の北端に位置する。

本建物跡に伴う遺物が少ないため時期の特定は難しいが、奈良時代頃の遺構と考えられる。

(青山)

2号建物跡 SB02

遺構 (図13, 写真12・27)

本掘立柱建物跡は、G・H-8・9グリッドのLⅢ上面で検出された。L字形に配置された掘立柱建物跡群の北部に位置する。

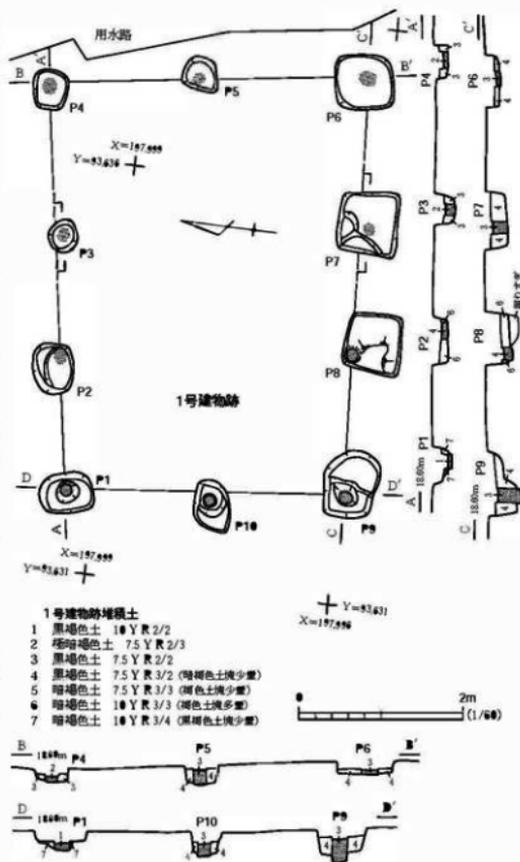


図12 1号建物跡

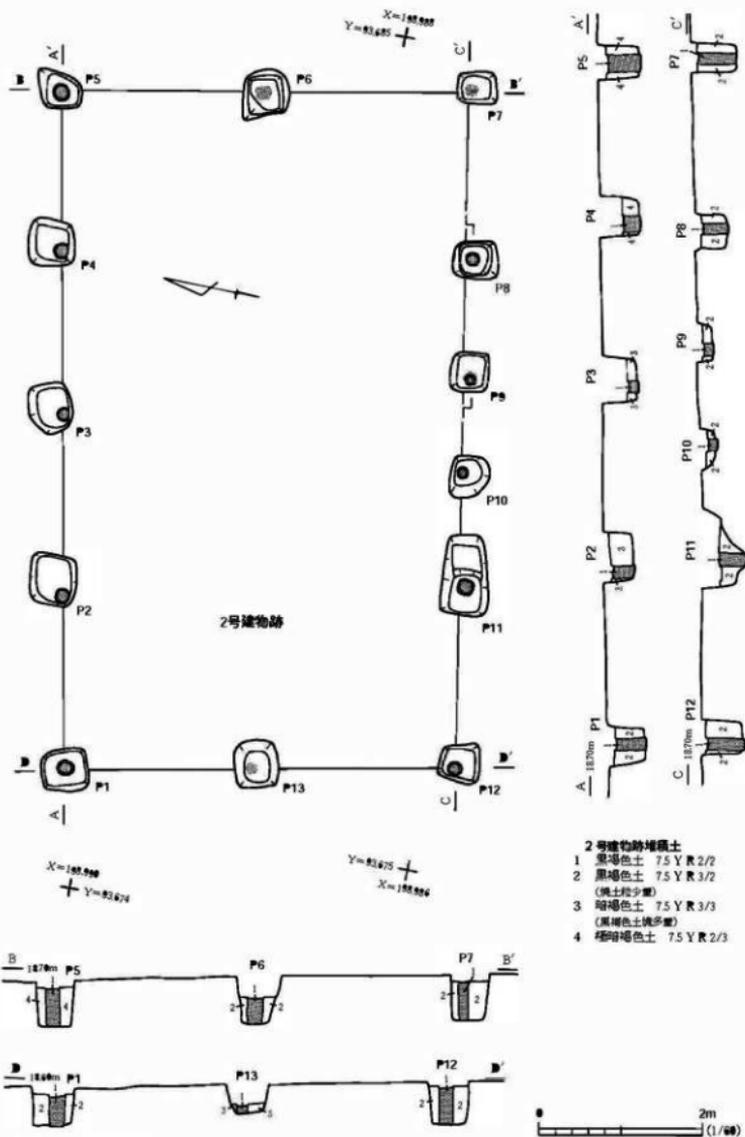


圖13 2号建物跡

検出された場所は平坦であるが、南東から北西にむかってきわめて緩やかに下がっている。検出面の標高は、建物跡の南東隅付近がもっとも高く約18.65m、北西隅付近がもっとも低く約18.5mで、高低差は15cmである。柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面で黒褐色土によっていずれも比較的明瞭に識別された。北側約4mにSⅡ01、東側約3mにSⅡ03、南側約4mにSⅡ04・12、北西側約1mにSⅡ11がある。

平面形は東西方向に長い長方形である。南北は2間、東西方向は柱穴の数が異なり、北側が4間、南側が5間である。柱穴の数は13基である。北辺の柱礎を結んだ線は、N101°Wを指す。

規模は、四隅の柱礎間で、北辺（P1～5間）約8.3m、東辺（P5～7間）約4.9m、南辺（P7～12間）約8.3m、西辺（P12～1間）約4.7mである。各柱礎間の距離は、北辺が西から2.1m、2.3m、2.0m、1.9m、東辺が北から2.4m、2.5m、南辺が東から2.1m、1.5m、1.1m、1.4m、2.2m、西辺が南から2.5m、2.2mである。北辺より東西辺の柱礎間隔のほうがやや長い。南辺には柱礎間隔に比較的大きなばらつきがある。柱礎間隔を平均すると、北辺が2.08m、東西辺が2.35mである。

柱穴は平面形と規模がほぼそろっている。平面形はおおむね隅丸方形で、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。規模は最大のP2で東西62cm、南北56cm、最小のP7で東西37cm、南北49cmである。P11のみ平面形が柱列に沿って東西に長い隅丸長方形で、規模は東西97cm、南北57cmである。深さも比較的そろっているが、南辺の中央にあるP9・10のみは他の柱穴と比べて浅い。検出面からの深さはP7がもっとも深く57cm、P9がもっとも浅く検出面からの深さが20cmである。底面の標高はP9・10を除いて18.1mから10cmを前後する範囲でおおむね一定している。底面の標高がもっとも低いのはP1で18.0mである。

柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。P11の東壁のみは比較的緩やかな角度で立ち上がる。底面はおおむね平らである。いずれの柱穴にも、直径が15～20cmほどの柱礎がある。柱穴の堆積土は黒褐色土にLⅢ起源の暗褐色土の小塊を含むものが多い。しまりはとくにない。

遺物

柱穴の堆積土に混入した状態で土器の破片が合計15点出土している。いずれも小片で、遺構に伴うと考えられるものはなかった。内訳は、P1から縄文土器1点、P7から土器器3点、P8から土器器1点、P11から土器器8点、P12から土器器2点である。非口口成形の杯の口縁部と思われる小破片がP11から1点出土している他、いずれも非口口成形の甕の体部片と口縁部片である。

まとめ

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群の北部に位置する、2間×4間の東西棟で、本遺跡で検出された中でSⅡ05・07とともにもっとも大きな規模をもつ建物の一つである。北辺は4間であるのに対し南辺は5間と、南北辺の柱間の数が異なっていることから、南辺中央に入り口などの施設が存在していたものと思われる。南辺の柱間が多いという構造はSⅡ05にもみられる特徴である。

本建物跡に伴う遺物が少なく時期の特定は難しいが、奈良時代頃の遺構と考えられる。(青山)

3号建物跡 SB03

遺 構 (図14, 写真13・27)

本掘立柱建物跡は、I・J-9・10グリッドのLⅢ上面で検出された。L字形に配置された掘立柱建物跡群の北東端に位置する。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は、建物跡の南辺で約18.6m、北辺で約18.5mで、高低差は約10cmである。柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面に黒褐色土によっていずれも比較の明瞭に識別された。北側約4mにSB01、西側約3mにSB02、南側約4mにSB12がある。

建物の東端部分は調査区外に延びている。買収用地の範囲内で調査区を拡張したが、建物の全体は検出できなかった。全体の形と規模はわからないが、精査を繰り返した結果、調査区内には建物跡の東側を画する柱穴が検出されなかったことから、平面形は東西方向に長い長方形になると考えられる。南北2間で、東西は3間以上の規模をもつ。検出された柱穴の数は6基である。南辺は柱穴が2基のみ検出されたにとどまる。北辺の柱痕を結んだ線は、N96°Wを指す。

規模は四隅の柱痕間で、西辺(P1～5間)約3.5m、北辺は約4.0m以上、南辺は3.0m以上の

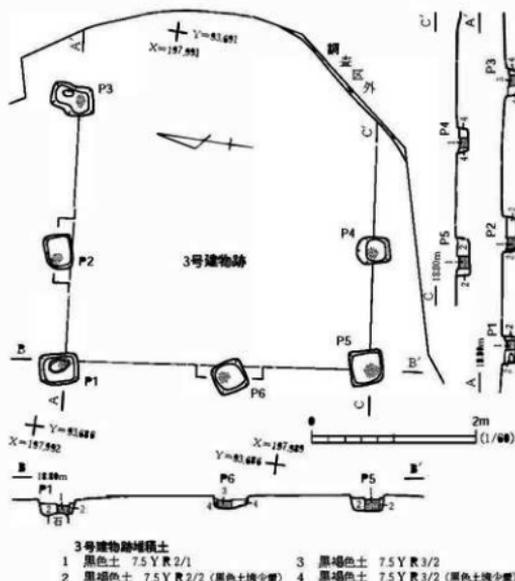


図14 3号建物跡

規模となる。各柱痕間の距離は、北辺が西から1.3m、2.0m、0.8m以上、南辺が東から1.6m以上、1.4m、西辺が南から1.8m、2.0mである。平均すると1.7mとなる。

柱穴は平面形と規模がほぼそろっている。平面形はおおむね隅丸の方形から長方形で、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。規模は最大のP1で東西37cm、南北47cm、最小のP4で東西31cm、南北41cmである。P3のみ平面形が不整である。深さは比較的そろっている。検出面からの深さはP1がもっとも深く20cm、P4

がもっとも浅く検出面からの深さが18cmである。底面の標高は18.3～18.4mである。

柱穴の側壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らであるが、P1・3では基本土層に含まれる礫が露出している。いずれの柱穴にも、直径が13～17cmほどの柱痕がある。

柱穴の堆積土は、黒褐色土に黒色土の小塊を含むものが多い。しまりはとくにない。

遺 物

柱穴の堆積土に混入した状態で土器の破片が合計5点出土している。いずれも小片で、遺構に伴うと考えられるものはなかった。内訳は、P1から縄文土器1点、P5から土師器3点、縄文土器片1点である。土師器片はいずれも小片で、器種や時期を特定できるものはない。

ま と め

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群の北東部に位置する。建物跡の東側は調査区外に延びていて全体の規模は不明だが、2間×3間以上の東西棟である。

本建物跡から出土した遺物が少なくいずれも細片であることから遺物から時期の特定はできないものの、周辺の建物跡と一定の間隔をもって建てられていると考えられることから、これらとほぼ同時期、奈良時代頃の遺構と考えられる。 (青山)

4号建物跡 SB04

遺 構 (図15, 写真14)

本掘立柱建物跡は、G・H-11・12グリッドのLⅢ上面で検出された。調査区のほぼ中央、掘立柱建物跡群の中央部やや北よりに位置する。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は18.6m前後で、検出面における南北の高低差は約5cmである。柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面で黒褐色土によっていずれも比較的明瞭に識別された。

本建物跡の南西部はSB05と重複するが、柱穴同士が直接重複していないため先後関係は不明である。北側約4mにSB02、東側約4mにSB12、南東側約5mにSB13がある。

平面形は東西方向にやや長い長方形であるが、東西辺と南北辺の長さの差は少なく、正方形に近い。南北1間、東西2間で、6基の柱穴からなる。東側の調査区外に延びることも考えられたため調査区の拡張を行ったが、柱穴は検出されなかった。西辺の柱痕を結んだ線は、N3°Wを指す。

規模は四隅の柱痕間で、北辺(P1～3間)が約4.4m、東辺(P3～4間)約4.1m、南辺(P4～6間)約4.3m、西辺(P6～1間)約4.1mである。各柱痕間の距離は、北辺が西から2.0m、2.4m、南辺が東から2.6m、1.7mである。南北辺の中央の柱穴(P2・5)は、いずれも中心から西側に寄った位置に掘り込まれている。

柱穴は、平面形と規模がほぼそろっている。平面形はおおむね隅丸の方形から長方形で、いずれも建物の方向とほぼ同じ方向に向きをそろえている。規模は最大のP3で東西48cm、南北46cm、最小のP1で東西36cm、南北29cmである。深さは一定していない。検出面からの深さはP3がもっ

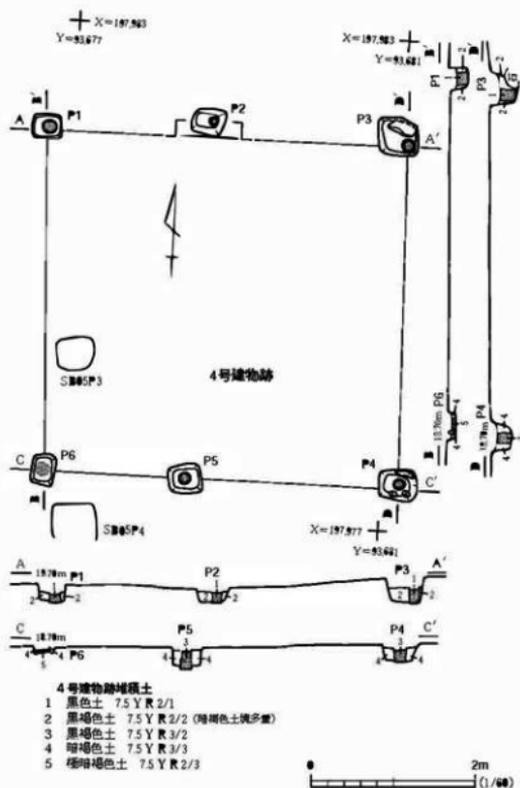


図15 4号建物跡

ものの、周辺の建物跡とはほぼ同じ方向を向いていることから、これらとはほぼ同時期、奈良時代頃の遺構と考えられる。

(青山)

5号建物跡 SB05

遺構 (図16, 写真15)

本掘立柱建物跡は、F・G-12・13グリッドのLⅢ上面で検出された。南北4間×東西2間の建物跡である。調査区のはほぼ中央部、L字形に配置された掘立柱建物跡群のはほぼ中央部に位置する。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は、建物跡の南辺付近がもっとも高く約18.7m、北辺付近がもっとも低く約18.6mで、高低差は約10cmである。

とも深く32cm、P6がもっとも浅く9cmである。底面の標高は18.3~18.5mである。

柱穴の側壁はいずれも急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らであるが、P3・4では基本土層に含まれる礫が露出している。いずれの柱穴にも、直径が12~15cmほどの柱痕がある。

柱穴の堆積土は、黒褐色土に暗褐色土の小塊を含むものが多い。しまりはとくにない。本遺構からは遺物はまったく出土しなかった。

まとめ

本掘立柱建物跡は、平面形がほぼ正方形であるにもかかわらず2間×1間というやや変わった構造をもつ。本遺跡で検出された建物跡の中では小型である。

本建物跡から出土した遺物ではなく時期の特定はできない

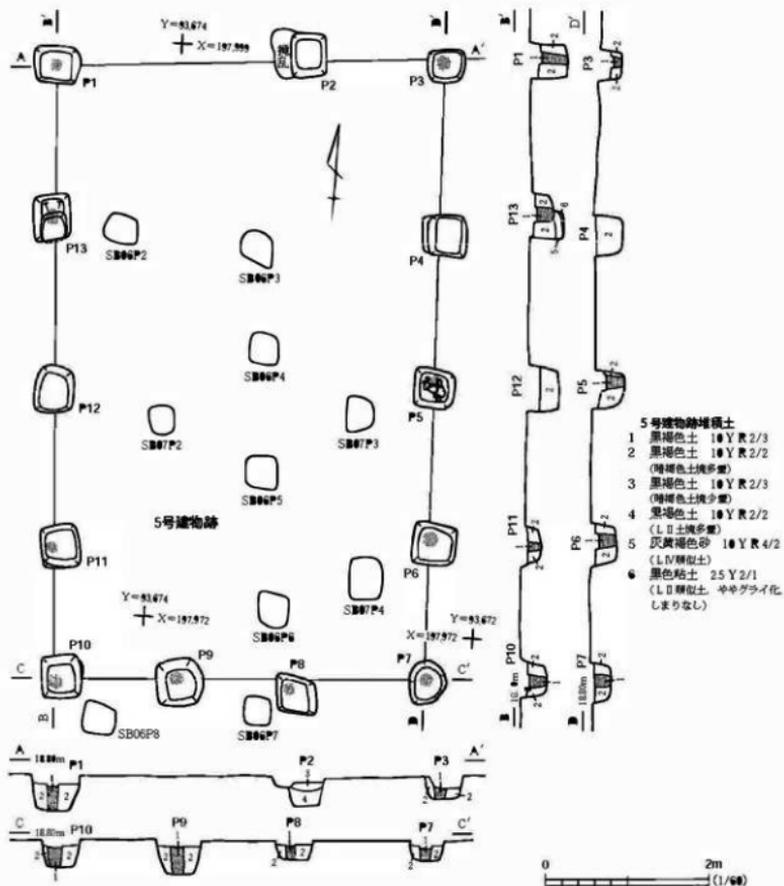


図16 5号建物跡

本建物跡は、他の3棟の建物跡と重複関係にある。本建物跡の北東部はS 04、西部はS 06、北部はS 07とそれぞれ重複するが、いずれの建物跡とも柱穴同士が直接重複しないため先後関係は不明である。S 06・07も互いに重複し、本建物跡と同じ2間×4間の南北棟であることから、ほぼ同じ場所で同規模の建物跡の建て替えが都合2回行われたものと考えられる。

本建物跡の西側約7mには、S 16がある。

平面形は南北方向に長い長方形である。東西辺はそれぞれ5基の柱穴からなる4間の規模をもつが、南北辺は柱穴の数が異なり、北側が柱穴3基からなる2間、南側が柱穴4基からなる3間であ

る。柱穴の数は13基である。西辺の柱痕を結んだ線は、 $N4^{\circ}W$ を指す。

規模は、四隅の柱痕間で北辺（P1～3間）約4.7m、東辺（P3～7間）約7.5m、南辺（P7～10間）約4.5m、西辺（P10～1間）約7.5mである。各柱痕間（柱痕の確認されなかった柱穴についてはそのほぼ中央）の距離は、北辺が西から3.1m、1.6m、東辺が北から2.1m、1.8m、1.9m、1.7m、南辺が東から1.6m、1.4m、1.5m、西辺が南から1.6m、1.9m、2.1m、1.9mである。北辺には柱痕間隔に比較的大きな差がある。南辺を除いた柱痕間隔を平均すると1.97mとなる。

柱穴は、平面形と規模がほぼそろっている。平面形はおおむね隅丸方形で、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。規模は最大のP9で東西55cm、南北57cm、最小のP3で東西47cm、南北40cmである。深さにはややばらつきがみられる。検出面からの深さはP1がもっとも深く45cm、P7がもっとも浅く23cmである。底面の標高は約18.15mから18.45mまでおよそ30cmの標高差がある。底面の標高がもっとも低いのはやはりP1である。

柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らであるが、P13のみ一段深い部分がある。P2・4・12を除くいずれの柱穴にも、直径約14～18cmの柱痕がある。

柱穴の堆積土は、黒褐色土にLⅢ起源の暗褐色土の小塊を多量に含むものが多い。しまりはとくにない。

遺物

柱穴の堆積土に混入した状態で土器の破片が合計33点出土している。いずれも小片で、遺構に伴うと考えられるものはなかった。内訳は、P2から土師器14点、須恵器2点、P3から土師器2点、P5から土師器2点、P6から土師器9点、須恵器1点、縄文土器1点である。内面黒色処理が施され、外面がヘラケズリされた杯と思われる小片と烙子状の叩き目と同心円状のあて具痕をもつ須恵器大甕がP2から出土している他は、時期を推定できるものはない。

まとめ

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群のほぼ中央付近に位置する、4間×2間の南北棟で、本遺跡ではSⅡ02・SⅡ07とともにもっとも大規模な建物の一つである。

本建物跡と同じ4間×2間の南北棟であるSⅡ06・07と重複している。本建物跡を含めた3棟が場所をややずらしながら建て替えを繰り返したものと思われる。

建物の北辺は2間であるのに対し南辺は3間と南北辺の柱間の数が異なることから、南辺中央に入り口などの施設が存在したと思われる。南辺の柱間が多いという構造はSⅡ02にもみられる。

本建物跡に伴う遺物が少ないため時期の特定は難しいが、周辺の建物跡との関係から奈良時代頃の遺構と考えられる。

(青山)

6号建物跡 SⅡ06

遺構 (図17, 写真16)

本掘立柱建物跡は、F・G-12・13グリッドのLⅢ上面で検出された。南北4間×東西2間の規

模をもつ建物跡である。調査区のはほぼ中央部、L字形に配置された掘立柱建物跡群のはほぼ中央部に位置する。

柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面に黒褐色の堆積土によっていずれも比較的明瞭に識別できた。当初10基の柱穴を検出したが、本建物跡の北西部付近に黒褐色土を堆積している風倒木痕があつて柱穴との識別が困難であつたため、その付近のみ検出面からさらに5cmほど掘り下げ、さらに2基の柱穴を検出した。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は、建物跡の南辺付近がもっとも高く約18.7m、北辺付近がもっとも低く約18.6mで、高低差は約10cmである。

本建物跡は、他の2棟の建物跡と重複関係にある。本建物跡の東部はSⅢ05、北部はSⅢ07とそれぞれ重複する。

SⅢ05とは互いの柱穴が直接重複せず、新旧関係は不明である。SⅢ07とは、そのP13と本建物跡のP10が重複している。新旧関係については、両者の堆積土が類似しているため判断が難しかったが、堆積状況の断面観察から本建物跡の方が古いものと判断された。本建物跡のP11とSⅢ07のP11はまったく同じ位置にあり、先の新旧関係にしたがえば、本建物跡のP11の位置にSⅢ07のP11が掘り込まれ、これによって完全に覆されたものと考えられる。SⅢ05・07も互いに重複し、本建物跡と同じ2間×4間の南北棟であることから、同規模の建物跡の建て替えが都合2回、やや場所を変えながら行われたものと考えられる。

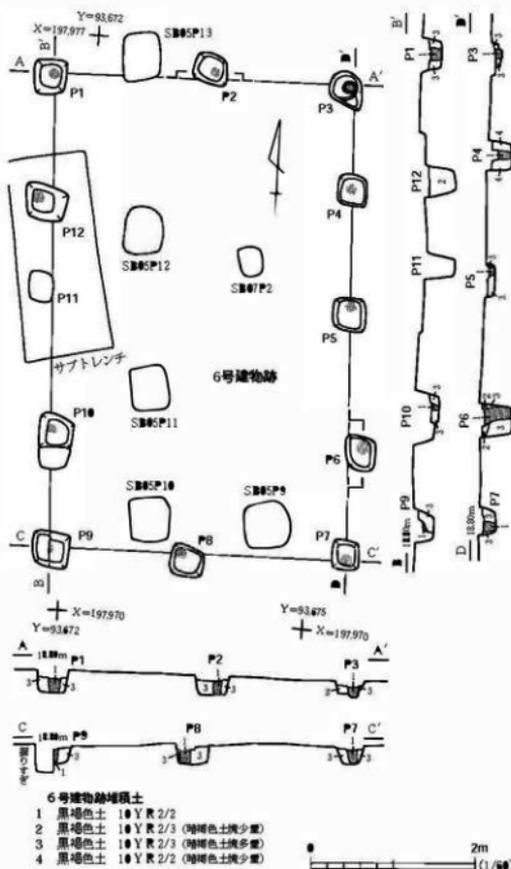


図17 6号建物跡

第2編 明神遺跡

本建物跡の北東側約2mにはS 04が、西側約6mにはS 16がある。

平面形は南北方向に長い長方形である。南北4間×東西2間である。柱穴の数は12基である。西辺の柱礎を結んだ線は、N 3°Wを指す。

規模は、四隅の柱礎間で、北辺（P 1～3間）約3.6m、東辺（P 3～7間）約5.8m、南辺（P 7～9間）約3.6m、西辺（P 9～1間）約5.7mである。各柱礎間の距離は、北辺が西から2.0m、1.6m、東辺が北から1.3m、1.4m、1.7m、1.4m、南辺が東から2.0m、1.6m、西辺が南から1.4m、1.7m、1.1m、1.5mである。東西辺と南北辺の柱間の距離には差が認められる。柱礎間隔を平均すると、東西辺が1.44m、南北辺が1.8mとなる。

柱穴は、平面形と規模がほぼそろっている。平面形はおおむね隅丸方形で、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。規模は最大のP 12で東西50cm、南北43cm、最小のP 7で東西32cm、南北35cmである。深さにはややばらつきがみられる。検出面からの深さはP 1がもっとも深く40cm、P 5がもっとも浅く12cmである。底面の標高は約18.2mから18.5mまでおよそ30cmの標高差がある。底面の標高がもっとも低いのはP 12である。

柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らであるが、P 13のみ一段深く掘りくぼめられた部分がある。いずれの柱穴にも、直径が10～15cmほどの柱礎がある。

柱穴の堆積土は、黒褐色土にL III起源の暗褐色土の小塊を多量に含むものが多い。しまりなどはとくになかった。

遺物

P 6から堆積土に混入した状態で土師器の破片が2点出土している。このうち1点は、丸底になると思われる非ロクロ成形の杯である。外面全体にヘラケズリが丁寧な施され、内面にはミガキののち黒色処理が施されている。国分寺下層式の杯と考えられる。ほとんど摩滅していないことから、破損後まもなく本建物跡の柱穴に埋没したものと思われる。

まとめ

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群のほぼ中央付近に位置する4間×2間の南北棟である。本建物跡と同じ4間×2間の南北棟であるS 05・07と重複し、S 07よりも古い。S 05との新旧関係は不明である。重複する他の2棟と比べると、本建物跡だけやや規模が小さい。本建物跡を含めた3棟が場所をややずらしながら建て替えを繰り返したものと思われる。

本建物跡に確実に伴う遺物はないが、P 6から出土した土師器の杯の特徴から、奈良時代頃の遺構と考えられる。

(青山)

7号建物跡 S B 07

遺構 (図18, 写真17)

本掘立柱建物跡は、F・G-13・14グリッドのL III上面で検出された。南北4間×東西2間の規模をもつ建物跡である。調査区のほぼ中央部、L字形に配置された掘立柱建物跡群のほぼ中央部に

位置する。

柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面に黒褐色土によっていずれも比較的明瞭に識別された。当初の検出作業によって12基の柱穴を検出したが、本建物跡の北西部付近に黒褐色土を堆積している風倒木痕があって柱穴との識別が困難であったため、その付近のみ検出面からさらに5cmほど掘り下げて柱穴の検出を行い、北西隅にある1基の柱穴を検出した。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は、建物跡の南辺付近がもっとも高く約18.8m、北辺付近がもっとも低く約18.55mで、高低差は約25cmである。

本建物跡は、他の2棟の建物跡と重複関係にある。いずれも本建物跡の北部に位置するSⅡ05とSⅡ06である。SⅡ05とは、互いの柱穴が直接重複しないため新旧関係は不明である。SⅡ06とは、本建物跡のP13とSⅡ07のP10が重複している。新旧関係については、両者の堆積土が類似しているため判断が難しかったが、堆積状況の断面観察から本建物跡の方が新しいものと判断された。本建物跡のP1とSⅡ06のP11はまったく同じ位置にあり、先の新旧関係にしたがえば、本建物跡はすでにあったSⅡ06のP11のあった位置とまったく同じ場所にP1の掘り込みを行ってこれを完全に覆したのと考えられる。SⅡ05・06も互いに重複し、本建物跡と同じ2間×4間の南北棟であることから、本建物跡を含めてほぼ同じ場所で同規模の建物跡の建て替えが都合2回、やや場所を変えながら行われたのと考えられる。

本建物跡の北東側約3mにはSⅡ04が、北側約2mにはSⅠ01がある。

平面形は南北方向に長い長方形である。南北4間×東西2間である。北辺は3基の柱穴の他に南東隅の柱穴の西側60cmほどのところに1基の柱穴が掘り込まれている。あるいは本建物跡には伴わないものかもしれないが、本建物跡を含めて取り扱った。これを含めた柱穴の数は13基である。西辺の柱痕を結んだ線は、N9°Wを指す。

規模は、四隅の柱痕間で、北辺（P1～3間）約5.0m、東辺（P3～7間）約8.2m、南辺（P7～10間）約4.6m、西辺（P10～1間）約8.1mである。各柱痕間の距離は、北辺が西から2.5m、2.5m、東辺が北から2.1m、2.0m、2.2m、1.9m、南辺が東から2.4m、2.2m（P8を除く）、西辺が南から1.7m、2.2m、2.1m、2.1mである。東西辺と南北辺の柱間距離には差が認められる。柱痕間隔を平均すると、東西辺が2.03m、南北辺が2.4mとなる。

柱穴の平面形は隅丸方形か隅丸長方形で、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。規模はばらつきがあり、もっとも大きい都頼のP7が東西58cm、南北58cm、P10が東西80cm、南北58cmで、東西方向に長いやや不整な長方形である。最小はP2で東西30cm、南北35cmである。

柱穴は、深さも一定しない。検出面からの深さはP1とP10がもっとも深く50cm、P2がもっとも浅く21cmである。底面の標高は約18.2mから18.5mまでおよそ30cmの標高差がある。底面の標高がもっとも低いのはP1である。

柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らである。P12は基

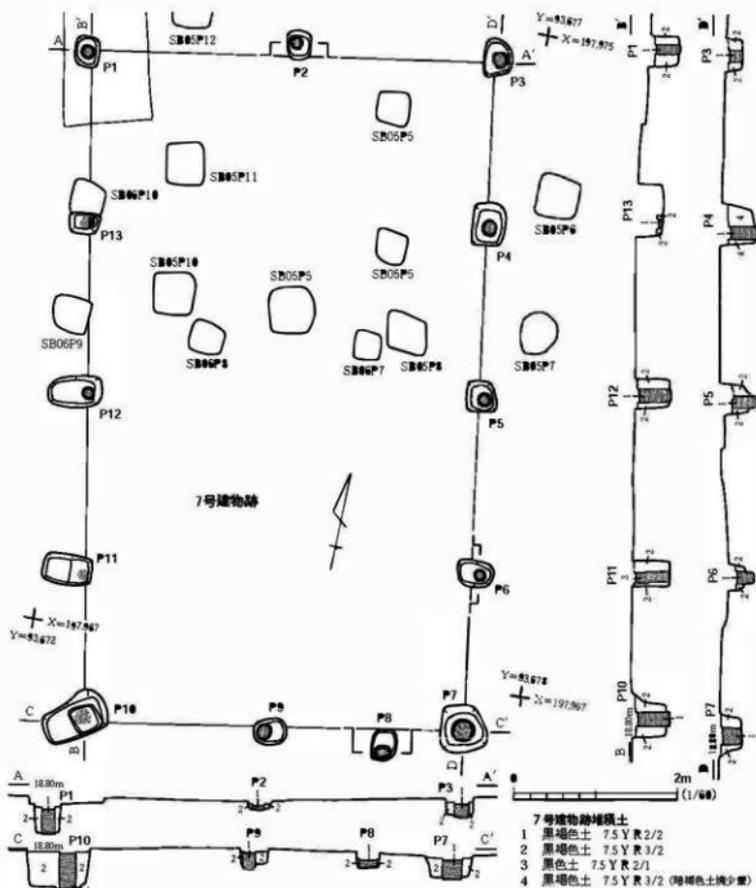


図18 7号建物跡

本土層に含まれる礫が底面に露出している。いずれの柱穴にも、直径が10～22cmほどの柱痕がある。柱穴の堆積土は、黒褐色土にⅢ起源の暗褐色土の小塊を含むものが多い。しまりなどはとくになかった。

遺物

P10から堆積土に混入した状態で縄文土器の破片が1点出土しているのみである。

まとめ

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群のほぼ中央付近に位置する4間×2間の

南北棟である。

本建物跡と同じ4間×2間の南北棟であるS B 06・07と重複している。S B 06よりも新しい。S B 05との折旧関係は不明である。本建物跡を含めた3棟が場所をややずらしながら建て替えを繰り返したと思われる。

本建物跡に確実に伴う遺物はなく遺物から時期を推定することはできないが、他の建物跡との関係から、奈良時代頃の遺構と考えられる。 (青山)

8号建物跡 S B 08

遺 構 (図19, 写真18・27)

本遺構は、調査区南西部のD14・15グリッドに位置し、標高18.6m付近の平坦面に立地している。重複遺構はなく、南2mにS B 05が近接している。遺構検出面はLⅢ上面である。

本遺構は、南北2間×東西1間の小規模な建物跡で、柱穴6基で構成される。平面形は南北に長い長方形を呈し、軸は東辺でN7°Eを指している。四隅の柱痕間を結んだ規模は、北辺(P1・2)が2.07m、東辺(P2~4)が2.08m、南辺(P4・5)が2.01m、西辺(P1・5・6)が2.81mを測る。西辺の方が東辺より長い理由は、P5の柱をずらしたためと考えられ、そのため南辺が若干ひしゃげた形状を呈している。各柱痕間の間隔は、東辺が北から1.48+1.20m、西辺がやはり北から1.34+1.47mを測る。

柱穴は、平面形が方形を基調とし、東西に軸をもつ長方形(P2・3・6)や、丸みをもつ例(P1・5)もみられる。規模は44~69cmあり、P2・3・6が相対的に大型である。検出面からの深さは52~69cmを測り、底面の標高はおおむね1.81~1.82mに揃えられている。P5のみ若干浅く、底面には礎が露出している。上述したように、P5の柱痕がP4のそれより南にずれているのは、この礎の上では深さが確保できず不安定なため、柱の位置を変更したためと考えられる。

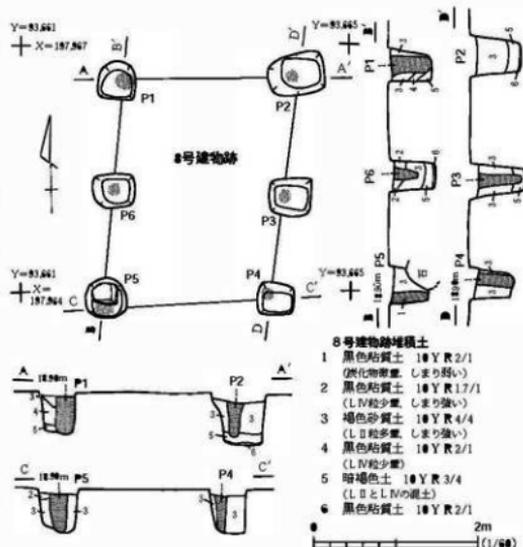


図19 8号建物跡

柱穴掘形はほぼ垂直に掘り込まれている。底面も平坦に整えられることが多く、P1・4では柱痕部が一段深く掘り下げられている。またP1・6の底面の柱痕と接する範囲に、柱の重圧による変色が観察される。柱穴内堆積土は柱痕(1)と掘形埋土(2~6)に明瞭に区別される。掘形埋土は、LⅢを基調としてLⅡや砂質土を含む土層で、上方の土層ほど強くしまっている。

遺物

本遺構からは、P4から縄文土器1点、P5から土師器1点が出土している。いずれも小片であるため、図示していない。縄文土器は体部片で、胎土に繊維を含まず、外面に縄文がされている。土師器は甕の体部片で、磨耗が著しい。どちらも時期は限定できない。

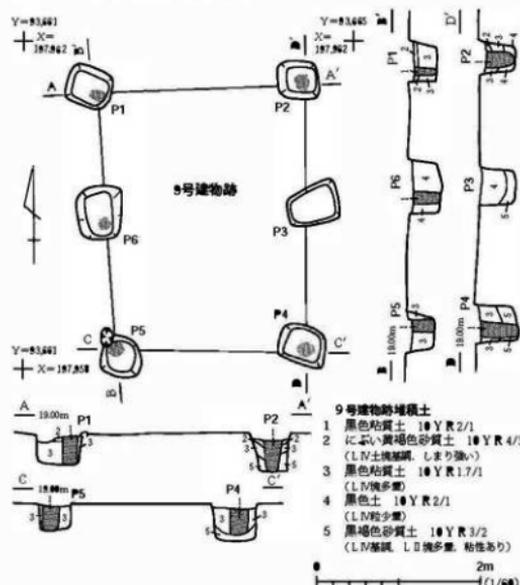
まとめ

本遺構は、2間×1間の南北棟で、検出された建物跡群の中で西端に位置している。本建物跡の南方に位置するSⅡ09・10と主軸を同じくすることから、何らかの関連性を想定することができる。

出土した遺物は、いずれも遺構の年代決定資料ではないため、所属年代は不明であるが、周辺の建物跡と同様、古代と考えられる。(佐藤)

9号建物跡 SⅡ09

遺構(図20, 写真19・27)



本遺構は、調査区南西部のⅡ15・16グリッドに位置し、標高18.8m付近の平坦面に立地している。重畳遺構はなく、北2mにSⅡ08, 南4.5mにSⅡ10が近接している。遺構検出面はLⅢ上面である。

本遺構は、南北2間×東西1間の小規模な建物跡で、柱穴6基で構成される。平面形は南北に長い長方形を呈し、主軸は東辺でN1°Wを指している。四隅の柱痕間を結んだ規模は、北辺(P1・2)が2.48m、東辺(P2~4)が3.30m、南辺(P4・5)が2.30m、西辺(P1・5・6)が3.11mを測る。柱痕間

図20 9号建物跡

の間隔は、東辺が北から1.60+1.70m、西辺がやはり北から1.57+1.54mを測る。

柱穴の平面形は、長方形（P1・3・4・6）と、方形（P2・5）があり、前者は東西軸を持つものが多い。規模は48～65cmあり、長方形のものが大型である。検出面からの深さは35～47cmを測り、底面の標高はおおむね18.3～18.4mに揃えられている。柱穴掘形はほぼ垂直に掘り込まれている。底面も平坦に整えられることが多く、P5では柱痕部が一段深く掘り下げられている。またP3・6の底面には、S B 08でも観察された変色部分が存在する。柱穴内堆積土は柱痕（Ⅰ1）と掘形埋土（Ⅱ2～5）に明瞭に区別される。掘形埋土は、LⅢを基調としてLⅡや砂質土を含む土層で、上方の土層ほど強くしまっている。

遺物

出土遺物は、P1から縄文土器1点、P3から土師器1点が出土した。いずれも磨耗が著しく、詳細は不明である。

まとめ

本遺構は、南北棟をもつ2×1間の掘立柱建物跡で、S B 05・10・16とともに西端に位置している。このうちS B 05・10と近接し、規模や主軸が類似することから、関連する施設と想定される。所属時期は不明だが、周辺の建物跡同様、古代と考えられる。（佐藤）

10号建物跡 S B 10

遺構（図21、写真20）

本遺構は、調査区南西部のD・E17グリッドに位置する建物跡で、標高18.8m付近の平坦面に立地している。重畳する遺構はないが、遺構の北西部が風倒木によって壊されている。また、北4.5mにS B 09が近接している。柱穴の配列は、LⅢ上面で検出されている。

本遺構は、南北2間×東西1間の小規模な建物跡で、柱穴5基から構成される。遺構の北西隅に存在したであろう柱穴は、上記した風倒木のため、検出できなかった。そこで北東隅の柱穴をP1とし、これより時計回りにP2～5と呼称する。

本遺構は、平面形が南北に長い長方形を呈し、主軸が東辺でN2°Eを指している。四隅の柱痕間を結んだ規模は、東辺（P1～3）が3.10m、南辺（P3・4）が2.05mである。各柱痕間の間隔は、東辺で北から1.57+1.53m、西辺が1.47mを測る。

柱穴の平面形は方形で、わずかに東西方向が長い。規模は、長辺で60cm、短辺で50cmを測る。底面は平坦に整えられ、柱痕の部分が若干深くなる柱穴が多い。検出面からの深さは26～38cmあり、柱痕底面は、おおむね標高18.5m前後で揃っている。側壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴内堆積土は4層に分けられる。Ⅰ1が柱痕、Ⅱ2～4が掘形埋土である。掘形埋土は上部の方がしまりが強い。

ところで、本遺構西辺の西約2.3mの地点に3基の柱穴が検出されている。これを北からP6～8とする。いずれも不整な円形を呈し、規模は38～52cmで、柱穴中心点を結ぶと1.57+1.56mと等間隔で並んでいる。この軸線はN1°Eを指し、本遺構のそれとはほぼ平行する。また、P6～8

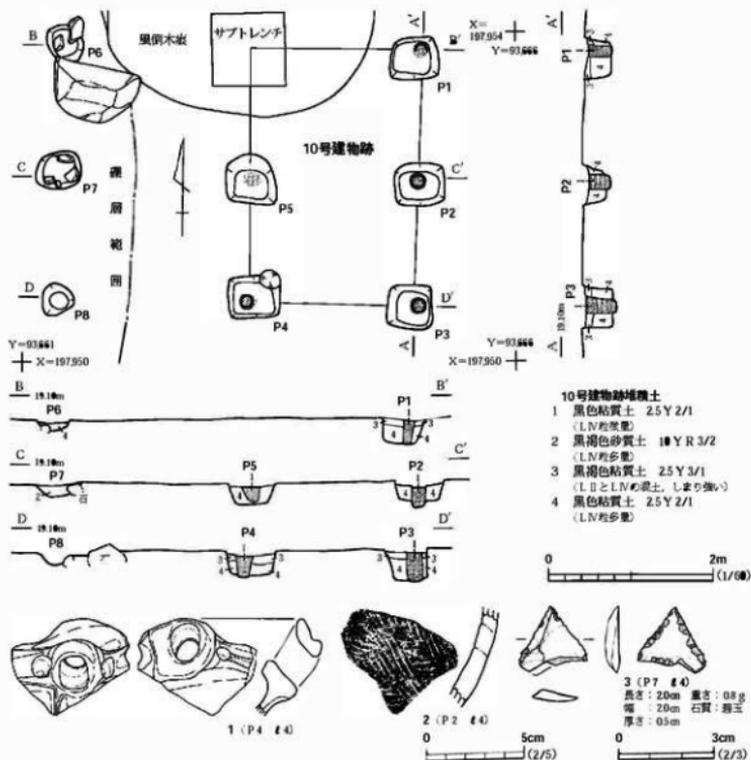


図21 10号建物跡と出土遺物

の軸線を北に延長すると、SB08・09の西辺に連続することが分かる。このようにP6～8は、本遺構の柱穴をそのまま西に移動させたように配列し、SB08・09との関連も指摘できるようなのである。しかし、P6～8は検出面からの深さが14cm、底面の標高が18.7m付近と浅く、礫層に掘り込まれているため、底面や側壁は整っておらずここに柱を据えるのは困難とみられる。したがってP6～8は、本遺構の西辺として掘り込まれたが、礫層のためそれ以上掘れなかった柱穴と考えられる。

遺物 (図21, 写真37)

本遺構からは、縄文土器3点・石器2点が出土した。いずれも柱穴掘形から出土しており、本遺構には伴わない遺物である。このうち3点を図示した。図21-1は深鉢の口縁部突起である。貫通孔を中心に盲孔が沿い、貫通孔の直下から隆帯が垂下している。盲孔は内面にも観察される。網取2式に比定される。同図2は1と同時期の胴部破片である。3は調整のある剥片である。小型薄手の剥片を素材とし、縁辺に微細な調整を施して先端部を作出している。

まとめ

本遺構は、南北棟をもつ2×1間の建物跡で、近接するS 205・09と共通点性が高い。また、遺構の西辺に並行してP 6～8は、礎層で掘り下げられなかった本遺構の西辺であった可能性が高い。したがって、本遺構は、礎層を避けるためP 1～5を東にずらして構築されたと推定される。

出土した遺物はいずれも年代決定資料ではなく、したがって所属時期は限定できないが、周辺の建物跡と同様、古代に属すると考えられる。(佐藤)

11号建物跡 SB11

遺 構 (図22, 写真21)

本掘立柱建物跡は、F 9グリッドのLⅢ上面で検出された。L字形に配置された掘立柱建物跡群の北西端に位置する。検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下がっている。検出面の標高は、建物跡の南辺付近がもっとも高く約18.5m、北辺付近がもっとも低く約18.45mで、高低差は約5cmである。柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面に黒褐色土によっていずれも比較的明瞭に識別された。本遺構の南東側約1mにはS 202がある。

平面形は南北方向に長い長方形である。南北2間×東西1間である。西辺の柱礎を結んだ線は、N 6°Wを指す。

規模は、四隅の柱礎間で、北辺(P 1～2間)約2.3m、東辺(P 2～4間)約2.8m、南辺(P 4～5間)約2.4m、西辺(P 5～1間)約2.8mである。各柱礎間の距離は、東辺が北から1.6m、1.2m、西辺が南から1.4m、

1.4mである。東西辺と南北辺の柱間の距離には差が認められる。柱礎間隔を平均すると、東西辺が1.4m、南北辺が2.35mとなる。

柱穴の平面形は、P 1～4・6がおおむね隅丸長方形で、P 5が円形である。

隅丸長方形のものは、いずれも建物の方向とはほぼ同じ方向に向きをそろえているか、ややふれる程度である。規模は平面形が円形のP 5を除いてはほぼそろっており、もっとも大きいP 2で東西54cm、南北

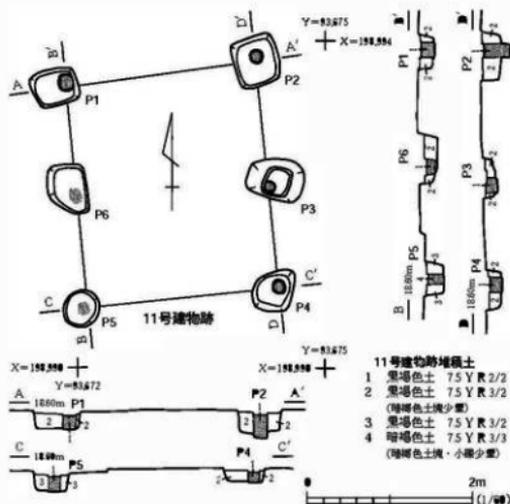


図22 11号建物跡

58cm, 最小はP 4で東西52cm, 南北49cmである。P 5はやや小さく東西44cm, 南北43cmである。

柱穴の深さは、検出面から測ってP 2がもっとも深く35cm, P 3・4がもっとも浅く20cmである。底面の標高は約18.15mから18.3mまでおよそ15cmの標高差がある。底面の標高がもっとも低いのはP 2である。

柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らである。いずれの柱穴にも、直径が15~20cmほどの柱痕がある。

柱穴の堆積土は、黒褐色土にLⅢ起源の暗褐色土の小塊を含むものが多い。P 5には小礫が多く含まれていた。しまりなどはとくになかった。

遺 物

P 2から土師器2点, P 3から土師器2点, P 4から土師器3点, 合計7点の土師器が出土している。いずれも堆積土に混入した状態で出土し、本建物跡に伴う遺物はない。

P 4から出土した土師器のうち2点には、内面に黒色処理が施されている。いずれも器壁が厚く、1点には二次被熱によって赤変し器壁が剥離していることから、甕の体部と考えられる。

ま と め

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群のはほぼ北西端に位置する2間×1間の南北棟である。掘立柱建物跡群の西辺に並ぶ5棟の2間×1間の南北棟の中では、もっとも北に位置している。

本建物跡に確実に伴う遺物はないが、内面黒色処理が施された甕の破片が出土していることと他の建物跡との関係から、奈良時代頃の遺構と考えられる。

(青 山)

12号建物跡 SB12

遺 構 (図23, 写真22)

本遺構は調査区中央部のI11グリッドに位置する建物跡で、標高18.8m付近の北に傾斜する微高地に立地している。北約4mにS B03, 北西3.5mにS B02, 西4mにS B04, 南4.5mにS B13がそれぞれ近接し、本遺構を取り囲むように配列している。また、遺構の北西部を用水が北東に走っているため、この部分は壊されたと考えられる。遺構検出面はLⅢ上面である。

本遺構は東西3間×南北2間の建物跡で、柱穴8基が検出された。このうち、P 1-2間とP 8-1間の用水直下に柱穴2基が予想され、本来は10基で構成されていたと推定される。本遺構の平面形は東西に長い長方形を呈し、南辺の軸線はN84°Eを指す。規模は、北辺(P 1~3)が3.98m, 東辺(P 3~5)が3.17m, 南辺(P 5~8)が4.02m, 西辺(P 8~1)が3.22mである。各柱痕間(柱痕の確認されなかった柱穴についてはそのほぼ中央)の距離は、北辺が西から(2.73)+1.25m, 東辺が北から(1.55)+1.62m, 南辺が西から1.30+1.35+1.37mである。

柱穴の平面形は長方形を基調とし、東西軸(P 1・2・4・5・6)が多く、南北軸(P 3・8)や丸みをもつ刺(P 7)がみられる。柱穴長辺の規模は37~58cm, 検出面からの深さは10~37cmを

割る。周辺の建物跡の柱穴に比べやや小規模といえる。その中では、南側に配置されている柱穴が大きい傾向がある。柱穴の底面は平坦に整えられ、急峻に立ち上がって側壁に至る。柱穴底面は標高18.3mと18.6m付近に揃うように、側柱が深く掘り下げられている。

柱穴内の堆積土は3層に分けられた。①は柱穴を覆うようにレンズ状に堆積する土層である。P3・8で観察される。②は柱状で、混入物はみられない。P1～3・5・8で確認されている。③は掘形埋土である。

本遺構から、遺物は出土していない。

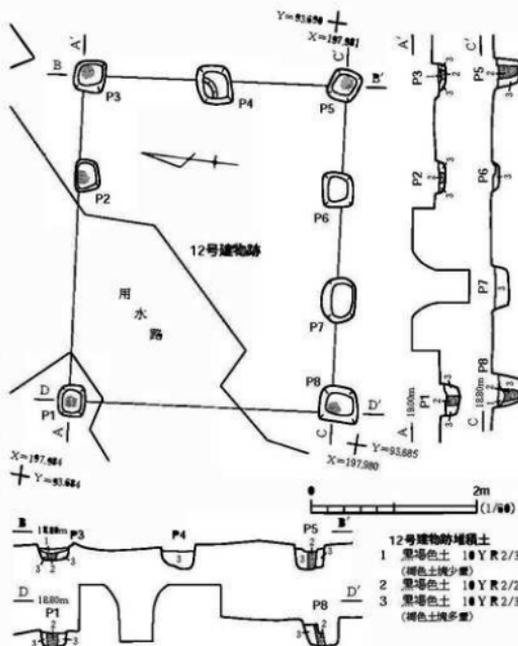


図23 12号建物跡

まとめ

本遺構は、建物跡群配置の空間部の西に接する建物跡で、東西棟をもつ3×2間で構成されている。出土遺物がなく年代は不明だが、周辺の建物跡と同様、古代に属すると考えられる。東西棟をとることから、SⅡ01～03に類する性格を推定している。(佐藤)

13号建物跡 SⅡ13

遺 構 (図24, 写真23)

本遺構は、調査区中央部のI・J13グリッドに位置する建物跡で、標高18.9m付近の微高地上に立地している。周辺は、北西方向に緩やかに傾斜している。重複する遺構はなく、北5mにSⅡ12が近接している。また、トレンチにより柱穴1基が半分ほど壊されている。遺構検出面はLⅢ上面で、遺構の南東部では礎が多く露呈している。

本遺構は東西2間×南北1間の建物跡で、柱穴は6基である。平面形は方形で、南辺の軸線はN88°Eを指す。規模は、北辺(P1～3)が3.98m、東辺(P3・4)が3.99m、南辺(P4～6)が3.92m、西辺(P6・1)が4.24mを測り、西辺が若干長い。柱穴間の間隔は、北辺で西から

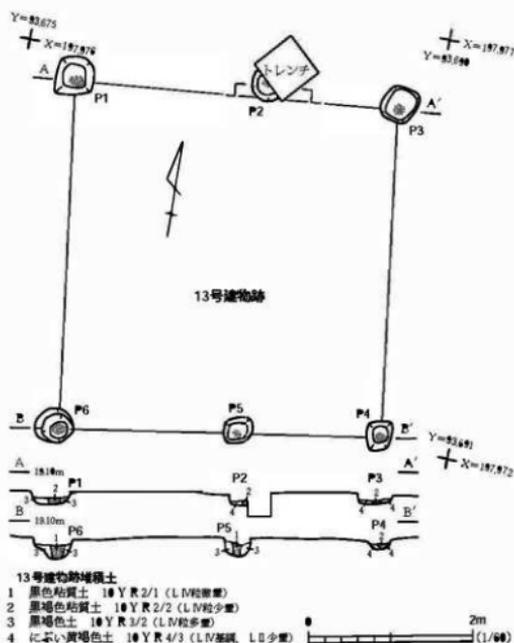


図24 13号建物跡

2.32+1.66m, 南辺で西から2.17+1.75mを測る。このようにP2とP5は各辺の中心より東方に寄っていることが分かる。また、P2はP1・3の柱痕間より北に離れている。

柱穴の平面形は、おおむね隅丸方形を呈する。規模は33~47cmを測り、北辺の3基が相対的に大きい。底面は平らに整えられ、側壁にいたる。検出面からの深さは10~22cmあり、底面は標高18.7m付近におさまる。この中で南辺側柱であるP6が最も深い。

柱穴内堆積土は4層に分けられる。①・②が柱痕、③・④が掘形埋土である。①・②は混入物をほとんど含

まないLⅡ類似土で、①はP5・6、②はP1~4にそれぞれ堆積する。③・④には、より下層に堆積する明るい色調のLⅢが多く含まれている。

本遺構から遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は東西棟をもつ2×1間の建物跡で、SⅡ12同様、建物跡群の空間部の西に面して構築されている。平面形や規模、棟方向の柱が寄る点など、本遺構の北西5mに位置するSⅡ04との共通点が指摘できる。SⅡ04では柱は西に寄る点で、本遺構とは異なる。出土遺物がなく正確な時期は不明だが、周辺の建物跡と大差ない年代と推定される。(佐藤)

14号建物跡 SB14

遺構(図25, 写真24)

本掘立柱建物跡は、G17グリッドのLⅢ上面で検出された。調査区の南部、L字形に配置された掘立柱建物跡群の南端に位置する。柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面に黒褐色土によっていずれも比較的明瞭に識別された。他の遺構との重複はないが、南西隅の柱穴の一部が攪乱によって覆われて

いた。

検出された場所は平坦であるが、南東から北西にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は、建物跡の南東端付近がもっとも高く約18.85m、北西端付近がもっとも低く約18.8mで、高低差は約5cmである。本建物跡の北側約3mにS I 01がある。

平面形は南北方向に長い長方形である。南北3間×東西2間、柱穴の数は10基である。西辺の柱痕を結んだ線は、 $N 1^{\circ} W$ を指す。

規模は、四隅の柱痕間（柱痕の確認されなかった柱穴についてはそのほぼ中央）で、北辺（P 1～3間）約3.3m、東辺（P 3～6間）約4.4m、南辺（P 6～8間）約3.4m、西辺（P 8～1間）約4.7mである。各柱痕間の距離（柱痕の確認されなかった柱穴についてはそのほぼ中央）は、北辺が西から1.1m、2.2m、東辺が北から1.5m、1.7m、1.2m、南辺が東から1.7m、1.7m、西辺が南から1.6m、1.7m、1.4mである。柱痕間隔を平均すると、1.58mである。

柱穴の平面形はP 1・2・4・6・7・10がおおむね隅丸方形か隅丸長方形、またはその形が崩れたもので、いずれも建物の方とはほぼ同じ方向に向きをそろえている。P 8・9は不整な円形か楕円形、P 2・3・5は東西

に長い不整な平面形をもつ。規模はほぼ一定し、もっとも大きいP 3が東西81cm、南北45cm、最小はP 2で東西53cm、南北36cmである。

柱穴の深さは比較的浅く、ほぼ一定である。検出面からの深さはP 6がもっとも深く19cm、P 9がもっとも浅く11cmである。底面の標高は約18.65m～18.75mで、標高差はおおよそ10cmである。

柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らである。P 3・6を除くいずれの柱穴にも、直径が14～18cmほどの柱痕がある。柱穴の堆積土は、いずれも黒褐色土にL III起源の暗褐色土の小塊を含む。し

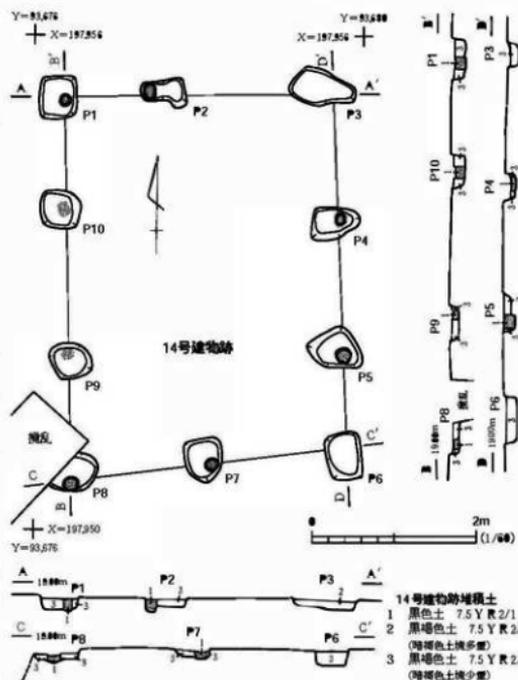


図25 14号建物跡

まりなどはとくになかった。

本遺構からは遺物はまったく出土しなかった。

まとめ

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群の南端に位置する、3間×2間の南北棟である。本建物跡に確実に伴う遺物はなく、遺物から時期を推定することはできないが、他の建物跡との関係から、およそ奈良時代頃の遺構と考えられる。 (青山)

15号建物跡 SB15

遺 構 (図26, 写真25)

本掘立柱建物跡は、E・F-18・19グリッドのLⅢ上面で検出された。調査区の南端付近に位置する。柱穴は、LⅢの暗褐色土の上面に黒褐色土によっていずれも比較的に明瞭に識別された。当初の検出によって5基の柱穴が確認されたが、建物跡とするにはやや不規則な配置であったため、柱穴の存在が予想される箇所を5cmほど掘り下げるなど入念な検出作業を行ったが、検出された柱穴は当初の5基にとどまった。本建物跡の北西側約3mにSK04, 同じく6mにSⅡ10がある。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は、建物跡の南端がもっとも高く約18.95m, 北西端付近がもっとも低く約18.85mで、高低差は約10cmである。

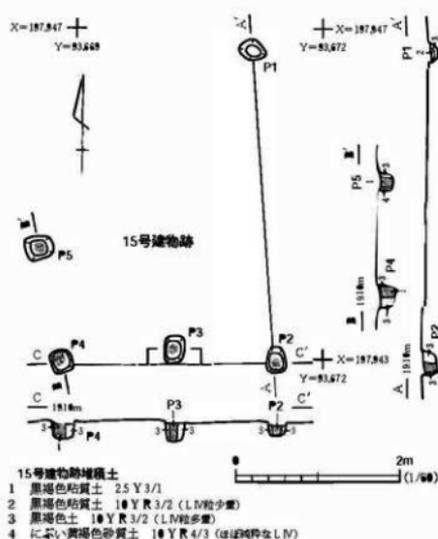


図26 15号建物跡

平面形は、5基の柱穴が四角形に不規則に並んだものである。柱穴は東・西・南辺を形づくるが、北辺には柱穴が検出されなかった。東西辺は1間、南辺は2間である。東辺の柱痕を結んだ線は $N4^{\circ}W$ を、西辺の柱痕を結んだ線は $N11^{\circ}W$ をそれぞれ指す。

規模は、隅の柱痕間(柱痕の確認されなかった柱穴についてはそのほぼ中央)で、東辺(P1~2間)約3.8m, 南辺(P2~4間)約2.7m, 西辺(P4~5間)約1.4mである。南辺の各柱痕間の距離は、東から1.3m, 1.4mである。

柱穴の平面形は、おおむね隅丸方形から楕円形である。規模は概して小さくほぼ一定しており、もっとも大きい

P5が東西35cm,南北27cm,最小はP2で東西24cm,南北31cmである。柱穴の深さは、検出面から剥ってP3がもっとも深く25cm, P9がもっとも浅く12cmである。底面の標高は約18.7mをはさんで前後約10cmの範囲に収まる。

柱穴の側壁は、P1を除いて垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はP1を除いておおむね平らである。P1のみ壁の立ち上がりがやや緩やかで、底面との境も不明瞭である。P1を除くいずれの柱穴にも、直径が10cmほどの柱痕がある。柱穴の堆積土は、いずれもしまりの弱い黒褐色土でLⅢ起源の暗褐色土の小塊を含む。

本遺構からは遺物はまったく出土しなかった。

まとめ

本掘立柱建物跡は、掘立柱建物跡群の南端に位置する不規則な柱配置をもつ建物跡である。本建物跡に確実に伴う遺物はなく、遺物から時期を推定することはできない。他の掘立柱建物跡が規則的に配置されているのに対し本建物跡はやや離れた場所であり、柱穴の配置や柱穴の形状なども他の建物跡と異なる。以上から、当遺構の時期は不明とせざるをえない。(青山)

16号建物跡 SB16

遺 構 (図27, 写真26)

本掘立柱建物跡は、D・E-12グリッドのLⅢ上面で検出された。L字形に配置された掘立柱建物跡群の西端北側に位置する。検出時の状況は、攪乱を掘り込んだ際に一部分だけ深くなる部分が見つかったため周辺を精査したところ5基の柱穴が見つかり、最初に掘りあげてしまったものとあわせて6基の柱穴を検出した。いずれもLⅢの暗褐色土の上面に黒褐色土によって柱穴の輪郭が比較的明瞭に識別された。

検出された場所は平坦であるが、南から北にむかってきわめて緩やかに下っている。検出面の標高は建物跡の南辺付近がもっとも高く約18.6m,北辺付近がもっとも低く約18.55mで、高低差は5cmである。他の遺構との重複関係はないが、攪乱でP5の一部とP6の上部が壊されている。本建物跡の東側約6mにSⅡ06・07が、同じく約7mにSⅡ05が、南側約10mにSⅡ05がある。

平面形は南北方向に長い長方形である。南北2間×東西1間である。西辺の柱痕を結んだ線は、N10°Eを指す。規模は、四隅の柱痕間で、北辺(P1~2間)約2.3m,東辺(P2~4間)約2.6m,南辺(P4~5間)約2.5m,西辺(P5~1間)約2.5mである。各柱痕間の距離は、東辺が北から1.3m,1.3m,西辺が南から1.3m,1.2mである。東西辺と南北辺の柱間の距離には差が認められる。柱痕間隔を平均すると、東西辺が1.28m,南北辺が2.4mとなる。

柱穴の平面形は、いずれも隅丸の方形か長方形である。隅丸長方形のものは、いずれも建物の方向と同じ方向に向きをそろえているか、ややふれる程度である。規模はややばらつきがあり、もっとも大きいP4で東西66cm,南北52cm,最小はP5で東西45cm,南北40cmである。

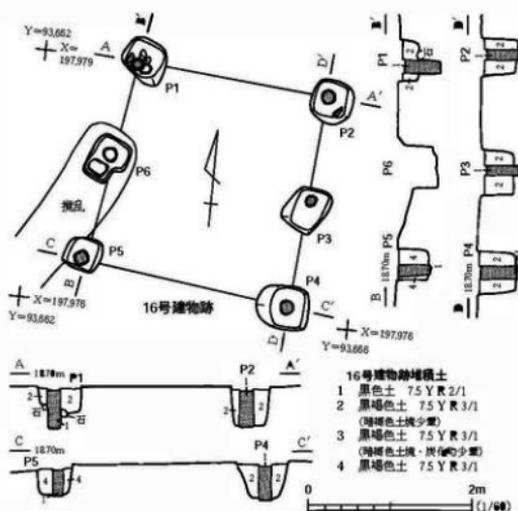


図27 16号建物跡

柱穴の堆積土は、黒褐色土にLⅢ起源の暗褐色土の小塊を含むものが多い。P4には炭化物が少量含まれていた。しまりなどはとくになかった。

本遺構からは遺物はまったく出土しなかった。

まとめ

本掘立柱建物跡は、L字形に配置された掘立柱建物跡群のほぼ西端北側に位置する、2間×1間の南北棟である。本遺跡では2間×1間の南北棟が掘立柱建物跡群の西辺にはほぼ一列に5棟並んでおり、本建物跡はその北から2番目に位置している。本建物跡に確実に伴う遺物はないが、他の建物跡との関係から、奈良時代頃の遺構と考えられる。(青山)

第4節 性格不明遺構

性格不明遺構は、調査区東部から1基検出された。この遺構は、掘形内に粘土を据えた施設が付属する、周壁を伴った遺構である。遺物も出土することから壘穴住居跡の可能性が考えられるが、遺存状態が悪く、遺構の性格を限定するのは躊躇されるため、性格不明遺構として報告する。

1号性格不明遺構 SX01

遺構 (図28, 写真28)

本遺構は、調査区南東部のJ・K15グリッドに位置する遺構で、北西に緩やかに傾斜する微高地

柱穴は、概して深く掘り込まれている。検出面から測ってP1がもっとも深く53cm、P5がもっとも浅く40cmである。底面の標高は約18.05mから18.15mまでおよそ10cmの標高差がある。柱穴の側壁はいずれも垂直に近い急な角度で立ち上がる。底面はおおむね平らである。P1・2・6は基本土層に含まれる礫が底面に露出している。記録前に堆積土を掘りあげてしまったP6を除くいずれの柱穴にも、直径が13~18cmほどの柱礎がある。

に立地している。周辺は礫層であるLNが分布し攪乱も著しいため、凹凸がみられる。このLNを精査していたところ、粘土塊や炭化物を含む黒色土の広がりが見出され、遺物も出土した。他遺構との重複はない。遺構内堆積土は3層に分けられ、Ⅰが遺構全面に分布し、Ⅱ・Ⅲがカマド状施設の堆積土・構築土である。

本遺構は、東壁の一部が残存するのみで、東壁から西方に約2.5mの黒色土の広がりとして認識された。底面はLNをそのまま用いているため凹凸があり、西に傾斜している。壁高はもっとも良好な部分ですら4cmしかない。このように遺構の遺存状態は悪く、平面プランや規模については言及できない部分が多い。

底面の南東部にはカマド状の施設が見出されている。柱穴は検出に努めたが、検出できなかった。カマド状の施設は、粘土や混土を貼り付けて土手状にしたもので、大きさは、長さ60cm、幅16～24cmを測る。粘土は柱状に整えたものが掘形内に据えられており、同じ粘土の小破片が周辺に分布するⅡ中に含まれている。これらの粘土は内面が白色で、表面が酸化して赤く変色していることから、熱を受けたことがわかる。また、これより南方に分布するⅡはカマド崩落土に類似する層で、この層上面から大型の土器片が出土している。このようにこの施設は、形状や規模・被熱の痕跡などで、カマド跡の袖に類似している。

遺物 (図28)

本遺構から出土した遺物はすべて土器器片で、層位的にはⅠから34点、Ⅱから16点の計50点を数える。別では壺が大部分を占め、杯はなかった。壺はすべて非口口成形である。なかでもⅡから出土した土器器は接合できた。

このうち2点を図示した。図28-1はⅡ上面から出土した土器器壺である。大型の破片2点からなり、口縁部から体部上半までの約50%が遺存する。口縁部がわずかに開く筒形の器形を呈する。内外面に輪積痕を残し、特に口縁部では明瞭である。また、外面は熱を受けているようで赤変し、器面は粗い。器面調整は、外面が体下部から上部にかけて縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデが施されている。口縁部にはヨコナデが施されている。同図2は口縁部が外反する壺である。口縁部付近のみが遺存している。口縁部と体部の境には内外面とも不明瞭な稜線がある。外面にハケメかとみられる縦方向の調整が、内面には体部に横方向のヘラナデが観察される。口縁部にはヨコナデが施されている。

以上の土器は器形や調整の特徴が、SⅠ01から出土した壺に類似している。

まとめ

本遺構は、壑穴状の掘形に土手状の施設が構築された遺構である。堆積土の状態や遺物の出土などから推定すると、この施設はカマド跡である可能性が高い。したがって、本遺構は壑穴住居跡と推定されるが、遺存状態が悪いため、ここではその可能性を指摘するにとどめておく。出土した土器はSⅠ01の出土遺物に類似しており、本遺構の年代も奈良時代と考えられる。(佐藤)

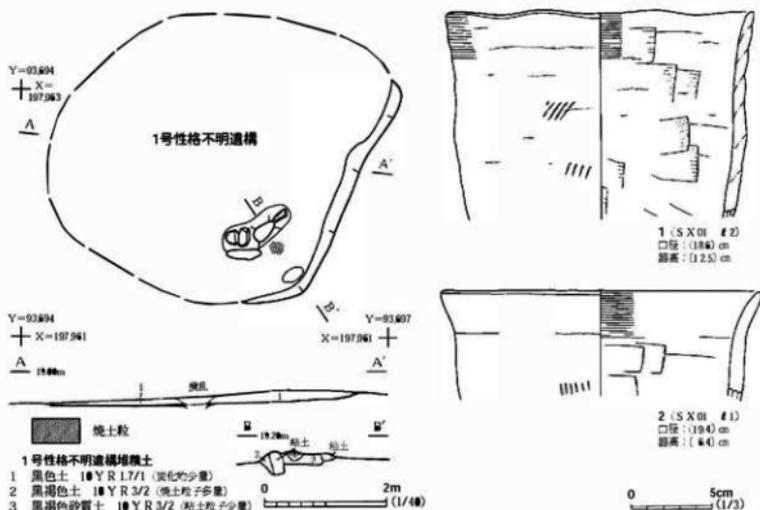


図28 1号性格不明遺構と出土遺物

第5節 土 坑

土坑は調査区の北部から3基、南部から1基の計4基が検出された。このうち古代の井戸跡の可能性が高いSK02を除いては、大部分は機能・性格や年代など詳細は不明である。以下は、遺構番号に応じて各土坑の記述を行う。

1号土坑 SK01 (図29, 写真29)

本遺構は、調査区北西部のD7グリッドに位置する。遺構検出面はLⅡ上面である。東側に2号土坑や1号集石遺構が位置する。

平面形は不整形円形である。規模は長軸が150cm、短軸が95cm、深さが20cmである。壁は概ね緩やかに外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に区分した。堆積土は耕作土に近い土質であり、グライ化していた。

本土坑の時期は、出土遺物がなく明確ではない。

(吉野)

2号土坑 SK02 (図29, 写真29)

本遺構は調査区北西部のE6グリッドのLⅡ上面から検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸が160cm、短軸が124cm、深さが88cmである。断面形は逆ハの字状となっている。底面からは湧

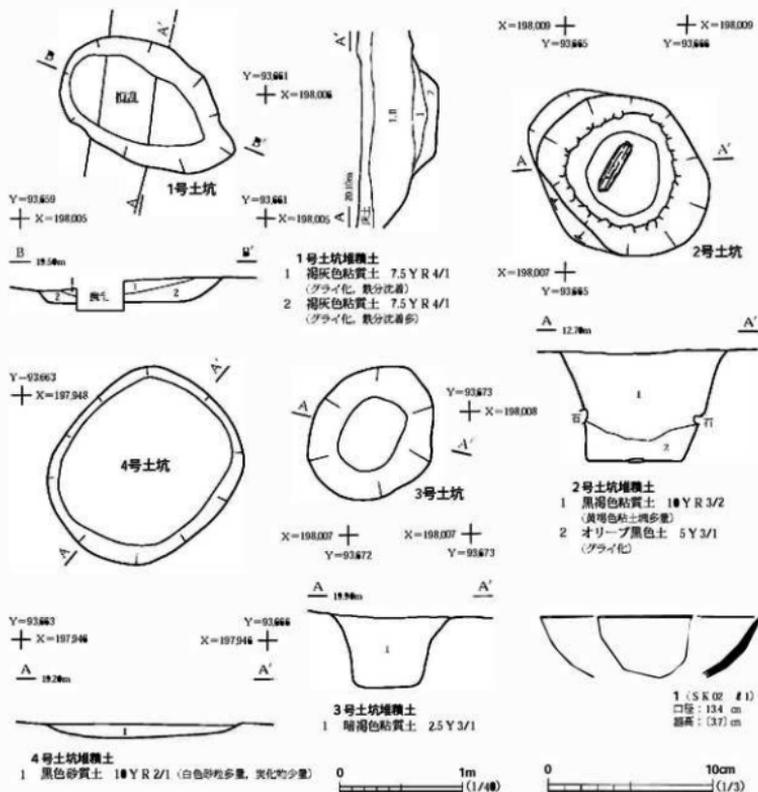


図29 土坑と出土遺物

水が著しい。堆積土は2層に区分した。堆積土の大半は1が占め、2はグライ化していた。

遺物は堆積土から土師器杯の破片が、底面からは板が出土した。図29にそのなかの1点を示した。本土坑の時期は出土遺物から奈良時代と考えている。さらに、戦能は砂礫層を掘り抜いて湧水地点にまで達しているのが井戸と考えている。

(吉野)

3号土坑 SK03 (図29, 写真29)

3号土坑は、調査区北部のF6グリッドLⅡ上面から検出した。付近には西側に接して1号溝跡が位置する。平面形は整った楕円形である。規模は長軸が116cm、短軸が100cm、深さは54cmである。壁は上部にゆくほど外傾し、底面は平坦である。堆積土は耕作土に類似する暗褐色粘質土のみである。時期は、出土遺物がなく明確ではない。

(吉野)

4号土坑 SK04 (図29, 写真29)

本遺構は、調査区南西部のD・E17グリッドに位置し、標高18.9m付近の平坦面に立地している。平面形はLⅢ上面で検出されている。重複する遺構はなく、北2.5mにSB10が存在する。遺構内堆積土は、LⅡ由来の黒色砂質土の単層で、下部に砂粒を多く含む。自然堆積と考えている。

本遺構は、平面形が円形を呈し、規模は長さ1.61m・幅1.36m、検出面からの深さ12cmを測る。底面は硬層まで達していないためおおむね平坦で、周壁は緩やかに立ち上がっている。

本遺構から、縄文土器10点が出土した。すべて底面から浮いて出土し、本遺構には伴わない。詳細は不明だが、胎土に繊維を含まず、縄文施文された例がある。

本遺構は、調査区南西部から検出された小規模な土坑である。その性格や時期などを示唆する調査所見は得られておらず、詳細は不明である。(佐藤)

第6節 その他の遺構

明神遺跡からは、上記の遺構以外に集石遺構・柱列跡・溝跡・屋外ピットが検出されている。これらの多くは単独で検出されているため、ここでは一括して節立てし、順次説明することとする。

1号集石遺構 SS01 (図30, 写真30)

本遺構は調査区北部のE7グリッドLⅡ下部から検出した。周辺には北側に2・3号土坑、1号溝跡が位置する。集石は南北・東西とも60cmの範囲に掘形を用いて配置されていた。礫は15~25cmの大きさのもので、熱を受けたような痕跡は認められない。掘形の規模は南北が64cm、東西が74cm、深さ14cmである。掘形は黒褐色土で埋め戻されていた。

時期は出土遺物がないため明確ではないが、縄文時代のものと考えている。(吉野)

1号柱列跡 SA01 (図30, 写真30)

本遺構は調査区北部の東端、H6グリッドに位置する。LⅢ上面から検出したが、堆積土とLⅡが類似しているため、LⅡ上面で検出できなかったものとみられる。周辺には4m西側に3号土坑、1号溝跡が位置する。

柱列は現状で柱穴2基から構成され、北からP1・2と呼称する。遺構は、調査区際で検出したため、調査区外にも柱穴が位置している可能性がある。調査区内での規模は2.1mを測り、主軸はN30°Wを指している。掘形の平面形はP1・2とも楕円形である。柱穴はみられなかった。P1・2とも規模は長軸25cm、短軸22cm、深さ22cmである。P1・2の中点からの距離は180cmである。堆積土はP1・2とも黒褐色土である。

時期は、出土遺物がないため不明だが、柱穴の形状から近世以降のものともみられる。(吉野)

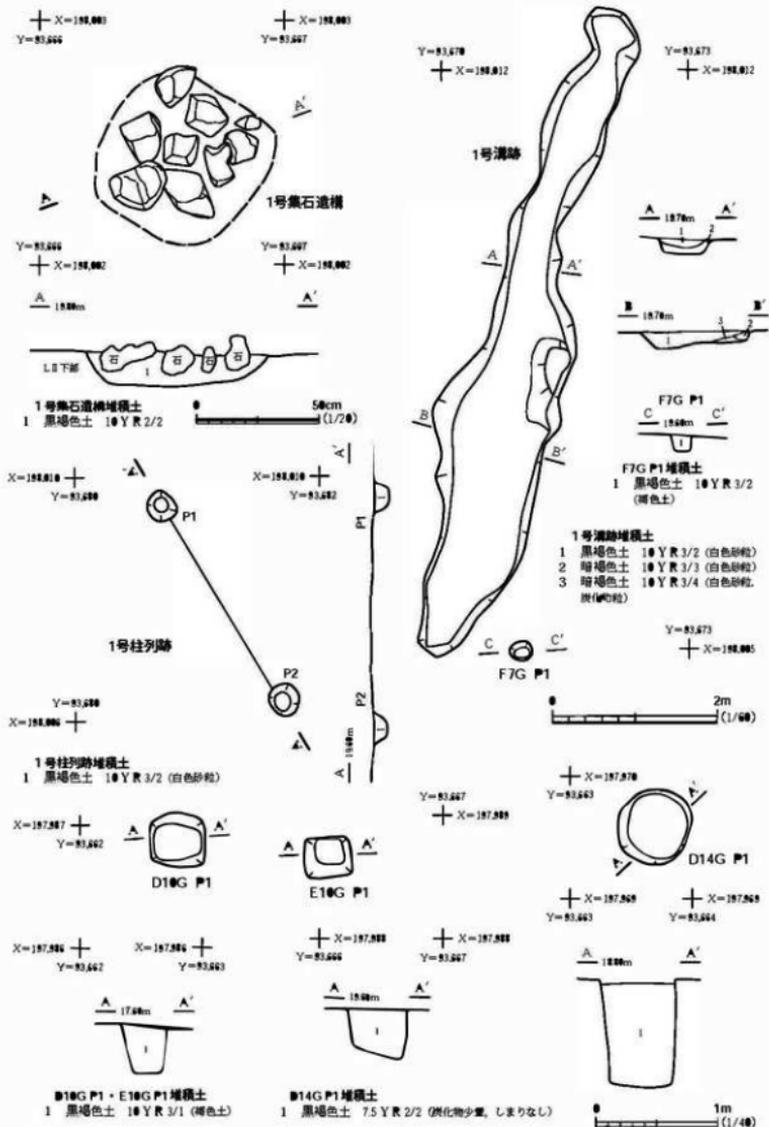


図30 その他の遺構

1号溝跡 SD01 (図30, 写真30)

1号溝跡は、調査区北部のF6グリッドを中心とする位置にある。検出面はLⅡである。周辺には東側に接して3号土坑がある。

本溝跡はほぼ南北方向に延びている。壁は概ね外傾しながら立ち上がる。規模は長さが810cm、幅が65～160cm、深さは20cmである。堆積土には砂が含まれていないので、水が流れていた状況は窺われない。時期は本溝跡から遺物が出土していないので明確ではない。(吉野)

屋外ピット (図30, 写真30)

調査区北側のF7・D10・E10グリッド、調査区中央部のD14グリッドから各1基、合計4基を検出した。検出面はいずれもLⅢ上面であるが、これらの堆積土とLⅡが類似しているため、LⅢ上面で検出できなかったものとみられる。いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

F7P1の平面形は楕円形である。規模は長軸25cm、短軸24cm、深さ20cmである。D10P1・E10P1ともに平面形は長方形である。D10P1の規模は、長辺が46cm、短辺が36cm、深さが40cmである。E10P1の規模は、長辺が35cm、短辺が30cm、深さが40cmである。堆積土はいずれの柱穴とも黒褐色土である。時期は出土遺物がないため明確ではないが、柱穴の形状から近世以降のものと思われる。D14P1は、S108とS116の間にある空閑地に位置する。長軸65cm、短軸60cmのはほぼ円形で、深さ90cmである。遺物が出土せず時期は特定できないものの、他の掘立柱建物跡と同時期の遺構の可能性はある。(吉野・青山)

第7節 遺構外出土遺物

明神遺跡では、遺構外から出土した遺物は、縄文土器219点・土師器1598点・須恵器57点・石器17点・鉄滓4点があり、この他陶磁器や面取りされた粘土塊がある。このうち、陶磁器については、いずれも明治時代以降の遺物であることが判明しているため、ここでは報告しない。

グリッド単位の出土点教をみると、調査区中央部とM20グリッド周辺の調査区南東端の二カ所に分布の中心が読みとれる。層位的には、LⅡ出土の資料がほとんどである。G10グリッド周辺の中央部では、LⅡから縄文土器と土師器・須恵器が混在した状態で出土する。器面に摩耗が著しいことから、周辺の土層は攪乱されているものと推定される。M20グリッドを中心とした南東端では、検出された流路跡内に堆積するLⅡから縄文土器が出土する。

以下、特徴ある遺物について報告する。

縄文土器 (図31・32, 写真35・36)

縄文土器は、6時期に準じた大別を行い、次いで型式に応じた細別を行っている。点教の少ない

遺物や区別が困難な資料については、ある程度連続する時期で細別を行ったものもある。時期的には前期後半と中期末葉～後期前葉の例が多い。

I 群土器 (図31-1～19, 写真35)

前期末葉の大木6式の土器で口縁部の隆帯や刺突文が施される。図31-1～7が口縁部片、同図8～19が体部片である。すべて深鉢とみられ、器形は、わずかに体部が張る円筒形(2・4・5・7・10など)と体部が強く張る球形(1・8・9・12)に分かれる。口縁部は平縁(3・7)と波状(2・4・5)があり、小突起が付く判(1・5・7)や複合口縁(6)もある。

文様は、刺突を施した隆帯によって体部と区画され(3・6・10)、刺突文のみの例もある(8)。1・7・9は同一個体で、隆帯で口縁部を区画している。口縁部には楕円形区画が展開し、この隆帯の交点は瘤状に張り出している。体部にはボタン状の貼付文と縄文が施文される。縄瓦俵や三角陰刻文はみられない。

8・10・14・15は体部に刺突文が施文された一群で、押し引状の連続刺突文が浅く施文される例(8・10)と竹管状の工具を用いて深く施文される例(14・15)がある。11～13は沈線施文の一群である。いずれも体部片で、11・12には平行沈線が用いられる。16～19は地文のみの土器である。斜縄文(17)の他に、結節縄文(19)や付加糸縄文(16・18)が、該期の特徴である。

II 群土器 (図31-20～35, 写真35・36)

中・後期の土器である。4類に細分できる。

1類 (図31-20・21) 中期初頭に位置づけられる。図示した遺物のみ出土した。20は平行沈線で区画された文様帯内に、同じ工具によって格子目文が施される。大木7a式に比定される。21はキャリアー状の口縁部をもつ深鉢の突起である。C字状を呈し上方に向いている。C字状の突起も大木7a式に多くみられる。

2類 (図31-22) 中期中葉に位置づけられる。出土量は少なく、型式認定のできる1点のみ図示した。22はキャリアー形深鉢の口縁部片である。沈線を沿わせた隆帯により、渦巻文と連続する楕円形区画が展開する大木8b式で、区画内には地文の縄文が観察される。

3類 (図31-23～27・30～33) 中期末葉から後期初頭にかけての一群を一括した。これらは細片だと区別できない例が多い。多くは、調査区南隅の流路跡から出土している。

24・25は磨消縄文で文様を描くもので、24は微隆起線、25は沈線で文様を区画している。大木10式である。26・27・31～33は両耳壺ないし口縁が内湾する楕形の深鉢とみられる。26には上方に延びる把手下端を起点として、隆帯による円形のモチーフが描かれている。31も同様の器形を呈する深鉢の口縁部片で、隆帯が部分的に大きく張り出して瘤状を呈する。以上の土器は、いわゆる牛埜式に類似する特徴をもつことから、おおむね大木10式期に比定できる。

一方、27・32・33の隆帯には刺突文が施されている。器形は27が楕形の深鉢、32・33が頸部にくびれをもち、口縁部が外反するキャリアー形の深鉢とみられる。32・33の刺突文は短沈線に近い。33は小突起から垂下する隆帯の下位に、円形の刺突文が観察される。鈎手状やJ字モチーフの端部

と推定される。これらは網取1式に比定でき、刺突文ある隆帯の27も同時期と考えられる。

また、30は沈線に沿った隆帯によるJ字状のモチーフが観察される、口縁部破片である。網取1式と考えられるが、モチーフ末端の刺突文がみられず、若干古い様相を示している。

4類(図31-28・29・34・35、図32-1~4) 後期前葉網取2式の一群である。3類とは若干の時間差が想定される。図31-28・29は退化した口縁部文様をもつ深鉢である。貫通孔(28)や首孔(29)が施された口縁部から同図34・35のような頸部を経て図32-1~4の体部文様帯にいたる。器形は、体部が張り背の高い例(28・4)と、頸部でくびれ体部の貼りが強い金魚鉢形の例(35)の二者が認められる。体部文様は沈線を描線とするものが主体的で、隆帯が用いられる例は少ない(2)。モチーフは、曲線文(1)や獣手文に類似した例(3)、懸垂文(4)などがある。

Ⅲ群土器(図32-5~8、写真36)

晩期に属する一群である。いわゆる粗製土器のみで、精製土器は出土していない。5~7は割目状捺糸文が施された薄手の土器で、晩期中葉に比定できる。8の器面には櫛歯状の工具を用いた条線が観察される。

このほか、図32-9~15には、底部資料ならびに地文のみの土器を掲載した。中期から後期に属する可能性が高いが、型式を限定するのは難しい。(佐藤)

土師器・須恵器(図32-16~27)

16・17・19・23は土師器、それ以外が須恵器である。16・19はロクロ成形の杯である。16の再調整は手持ちヘラケズリである。内面はいずれも黒色処理が施されている。17は壺と思われる。内外面とも摩滅が激しい。内面には黒色処理が施される。18・21は杯である。20は高台付杯である。22は長頸瓶の口縁部である。24は蓋の口縁部である。25の器種は不明である。26は瓶頸の肩部の破片である。肩に比較的に明瞭な稜線をもつ。外面は灰黄褐色、内面は藍色である。27は大甕である。外面に平行タタキメ、内面に同心円状のあて具痕が付されている。(青山)

石器(図33-1~7、写真37)

図示できた石器は少ない。図33-1・2は石鏃で、1が欠損品、2が未製品である。同図3は縦形の石匙で、刺刃は一方が直線的、もう一方が外反し、端部は丸みをもっている。調整剥離は主に正面側に施される。刺刃の形状から縄文時代中期に属する可能性が高い。4は剥片素材のスクレイパーで、調整は主として正面に施され、裏面には自然面が大きく残されている。両端が丸みをもっていることから未製品の可能性もある。5は砥石で、各面に擦痕が観察される。6は磨石、7は石皿である。(佐藤)

土製品(図33-9・10、写真37)

2点出土している。9は環状土製品である。30%程度が遺存している。断面形が丸い、厚み1cm

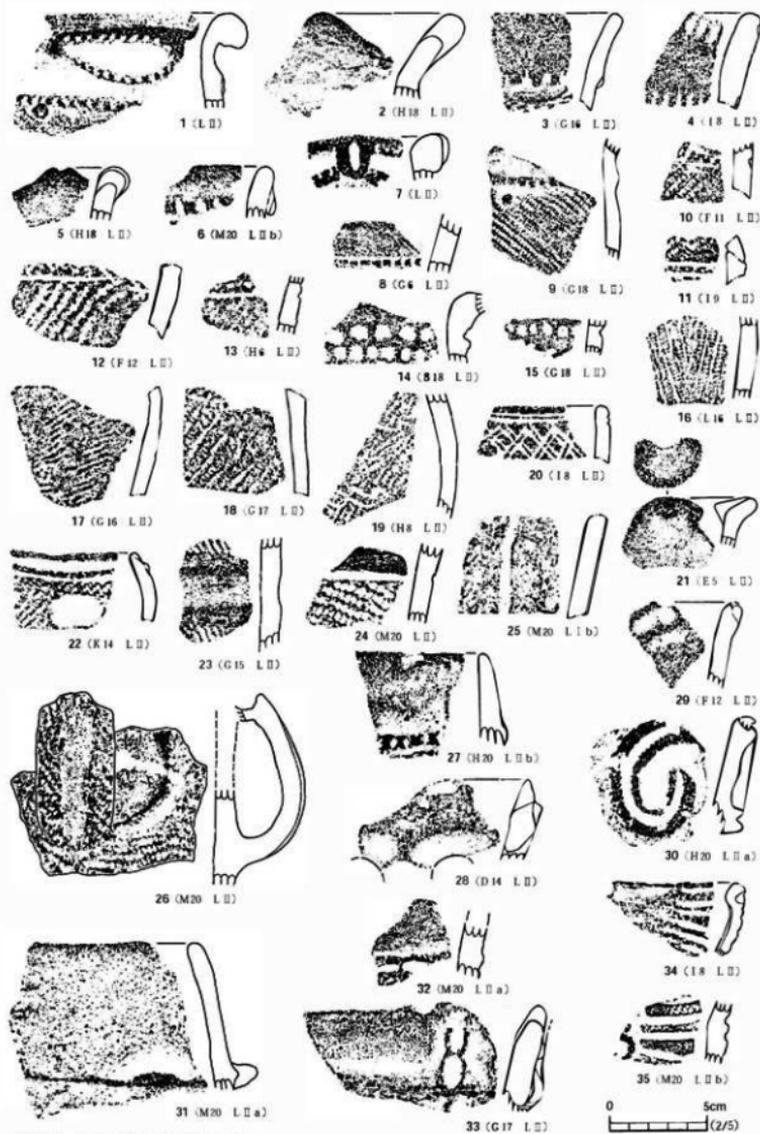


図31 遺構外出土遺物(1)

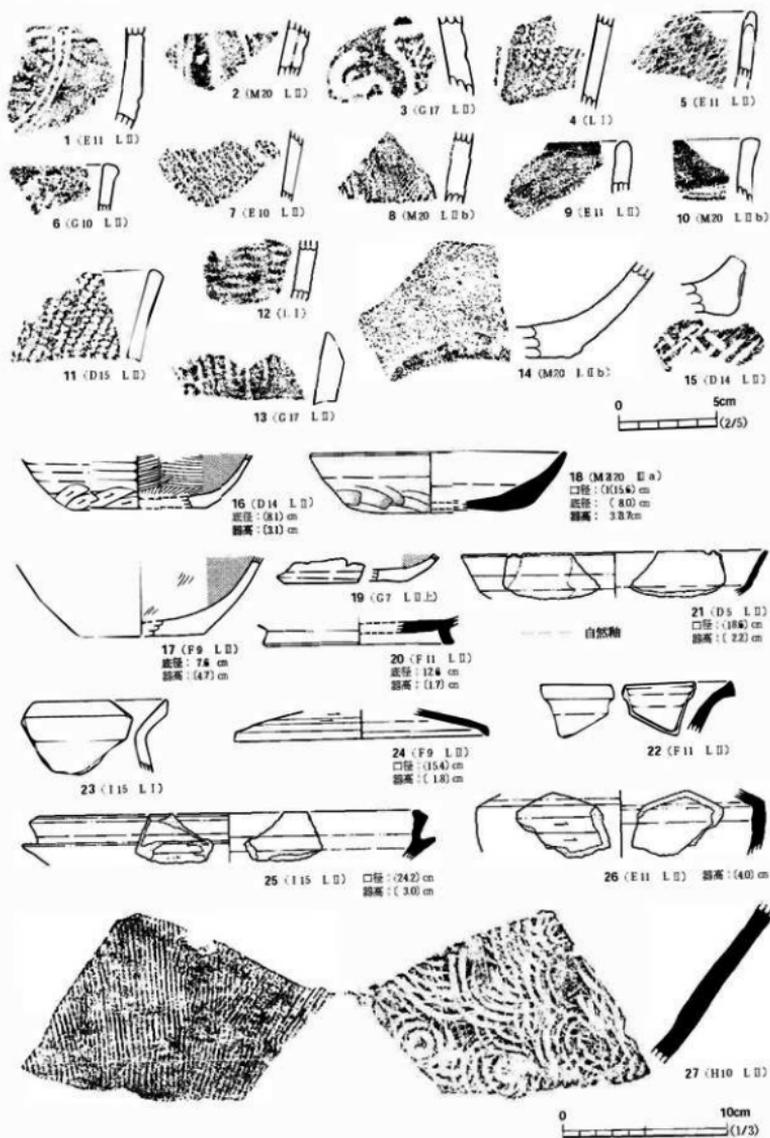


図32 遺構外出土遺物(2)

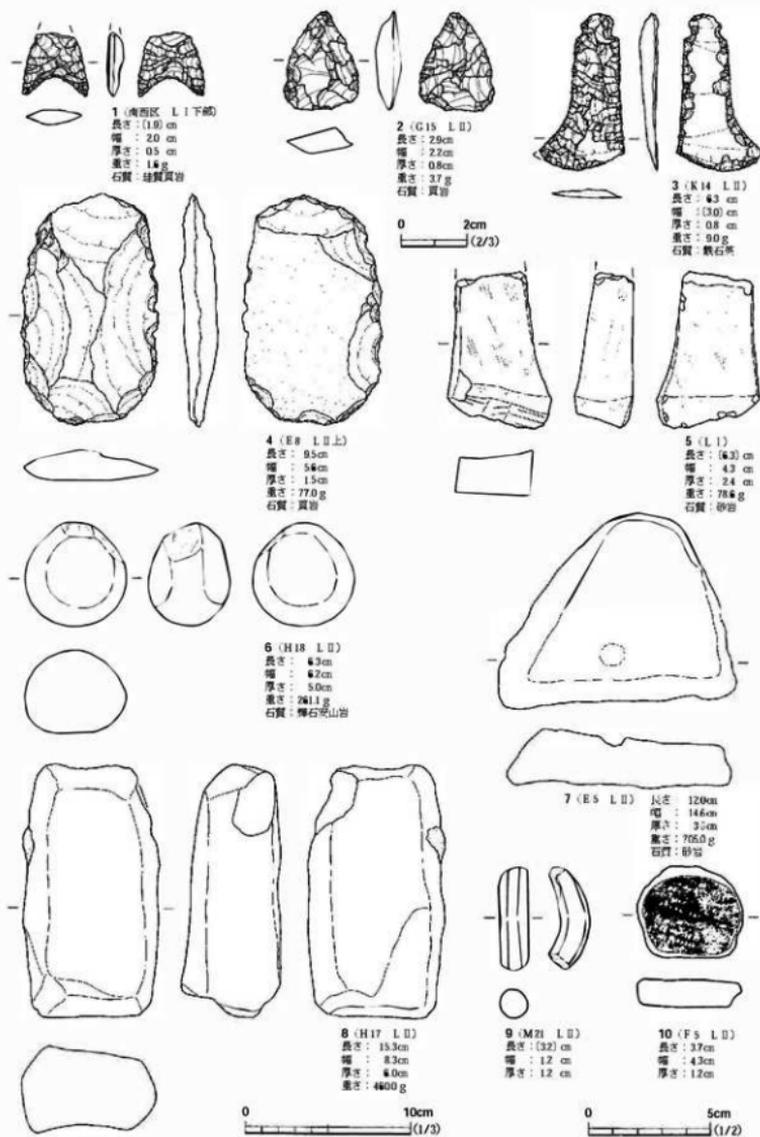


図33 遺構外出土遺物(3)

の粘土甕を撰状にしたもので、径は6cmと推定される。装飾品の可能性が高い。10は、土器片の周縁部を加工した土製円盤である。 (佐藤)

粘 土 (図33-8, 写真37)

S I 01近くのL II中から、面取りされた粘土塊が出土した。粘土塊は完形品1点、5cm程度の小破片1点が出土している。このうち1点を図示した。8は、形状が整った直方体を呈している。器面が摩耗しているため観察は困難だが、ヘラ状の工具で削られたと推測できる。また、全体的に赤く酸化していることから、熱を受けたことが明らかである。図示しなかった粘土塊は、側辺を直角に整えている。S I 01aカマドや性格不明遺構からも、柱状や板状に整形された粘土塊が出土している。この粘土は、明神遺跡の北方に位置する丘陵上に堆積していることを確認しており、遺構の構築材として採取・整形されたと考えられる。 (佐藤)

第3章 考 察

第1節 遺 物

1a号住居跡出土土器の編年的位置 ここでは、本遺跡でみつかった建物群の年代と性格を考察するため、まず出土遺物の多かったS I 01aから出土した土器群の年代を検討する。

S I 01aでは比較的多くの土器が床面と堆積土中から出土した。付近には他の時期の遺構がないことから、これらは堆積土中から出土した遺物も含めて一括性の高い土器群と考えてよいだろう。

この土器群を出土したS I 01aは、周辺に計画的に配置された建物群の一角においてこれらとはほぼ同時に併存していたと考えられる。周囲の掘立柱建物跡から出土した遺物がほとんどなかったことから、当住居跡出土土器がこの建物群の年代を推定するほぼ唯一の資料ということになる。

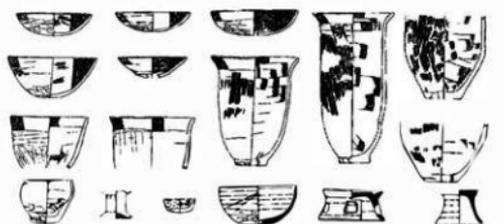
この土器群を構成する器種には、杯・手づくね・高杯・鉢・甕・壺がある。甌は含まれていない。いずれも非ロクロ成形の土器で、ロクロ成形の土器は出土していない。須恵器は堆積土中から大甕の破片が少量出土したのみである。

杯はいずれも丸底で、平底のものはない。口縁部は、外反・内湾の二者がある。いずれも体部と口縁部との境に段や稜線をもたない。多くは内面に黒色処理が施される。鉢・甕の底部は確認できるものはすべて木葉痕が付され、体部は張りの弱い寸胴である。口縁部は急な角度で立ち上がり、体部との境は不明瞭である。以上の特徴から、おおむね区分け下層系に位置づけることができる。

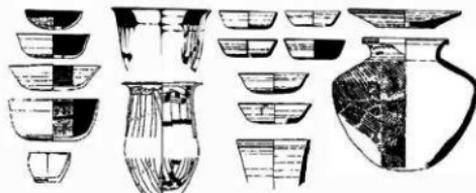
これと同じ特徴をもつ土器群には、新地町三貫地遺跡（橋本他1987）24号住居跡、いわき市五反田A遺跡（廣岡他1999）1号壘穴住居跡とこれを巡る1号溝跡出土土器、同5号壘穴住居跡、小野町落合遺跡（櫻村他1995）46号住居跡などがある。これらにはいずれも須恵器が伴っている。

三貫地遺跡24号住居跡出土土器は、丸底で内外面ともに稜線をもたない杯、中実脚の高杯が含まれている点で、本遺跡のS I 01a出土土器群の特徴とよく似ている。五反田A遺跡1号住居跡・1号溝跡出土土器もほぼ同じ内容である。五反田A遺跡5号住居跡、落合遺跡46号住居跡出土土器は、外面に段をもつ杯が含まれている点で、本土器群よりもやや古い様相をもつ。

これらの資料の年代を推定する根拠となっている資料は四つある。一つは宮城県色麻町日の出山窯跡群Ⅲ土器群である。この土器群はその一部を出土した窯跡の焼台に転用されていた瓦が、天平10年（738年）を記す平城京二条大路木簡を伴出した瓦の系譜下にあると考えられることから、これを前後する年代のものとされる（古川・太田1993）。二つめは、玉川村江平遺跡（大越他2002）の沢地跡から出土した土器群と木簡である。この木簡には、天平15年（743年）の銘がある。三つめは、宮城県多賀城市山王遺跡（千葉1992）S 1180から出土した土器群と2点の漆紙文書である。これらの漆紙文書は、天平12年～天平勝宝元年（740～749年）に作成されたと考えられるものと、天平宝字7年（763年）の具注曆である（平川1992・1997）。四つめは宮城県石巻市（旧河北



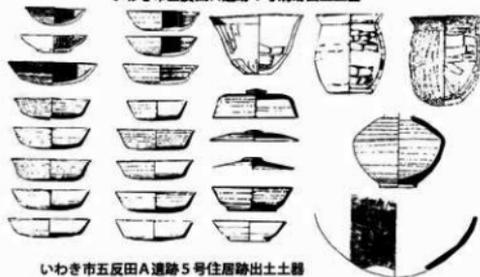
新地町三貫地遺跡24号住居跡出土土器



いわき市五反田A遺跡1号住居跡出土土器



いわき市五反田A遺跡1号溝跡出土土器



いわき市五反田A遺跡5号住居跡出土土器



小野町落合遺跡46号住居跡出土土器

S=1/10

図34 1a号住居跡出土土器の類例(1)

町) 桃生城跡SB17西脇殿跡出土土器である(進藤他1995)。同遺構は宝亀5年(774年)の海道の蝦夷の蜂起によるものと考えられる火災によって廃絶している。

これらの資料と、本遺跡出土土器および周辺の資料を比較してみよう。

山王遺跡SD180から出土した土器と本遺跡のS101a出土土器を比較すると、丸底で内外面に稜線をもつ土器の杯や、平底気味で内外面に稜線や段をもたない土器の杯など、山王遺跡SD180には本遺跡S101aの土器群よりも古相・新相の土器の両者が含まれている。溝跡という遺構の性格から出土土器にある程度の時間幅を考慮すべきで、それは伴出した2点の漆紙文書の示す年代に開きがあることからもうかがえる。江平遺跡沢地出土土器群にも、S101aとほぼ同時期～新相の土器がある。江平遺跡の場合も沢地という遺構の性格から同様のことがいえる。また沢地近傍の住居跡群から出土している土器は、本遺跡S101aの土器群と同じ特徴をもつ。本遺跡S101aの土器はこれらと一部共通する特徴を

もつことから、伴出した漆紙文書や木簡の示す年代、すなわち8世紀中葉の中にまずは位置づけることができる。

本土器群とほぼ同じ内容をもつ五反田A遺跡1号住居跡・1号溝跡の須恵器と比較すると、五反田A遺跡には丸底の杯が含まれる点で、桃生城跡S B17西脇殿出土土器よりは明らかに古相を呈している。したがって本土器群の年代はここまでは下りえない。

本遺跡S101aの土器より古い特徴をもつ落合遺跡46号住居跡出土の須恵器の蓋には、天井部が扁平で宝珠形つまみのものが含まれている。日の出山窯跡群第Ⅲ群土器にも天井部が扁平な須恵器の蓋が含まれるものの、宝珠形つまみは確認されていない。したがって落合遺跡46号住居跡の土器は日の出山窯跡群第Ⅲ群土器より古いといえ、本遺跡の土器群は日の出山窯跡群の示す年代を含む可能性がある。8世紀中葉とした先の位置づけとも矛盾しない。

以上から、本住居跡出土土器にはおよそ8世紀中葉の年代を与えることができる。（青山）

第2節 遺構

本遺跡の内容 掘立柱建物跡などがコの字形やL字形に配置され一つの建物群を構成する例は

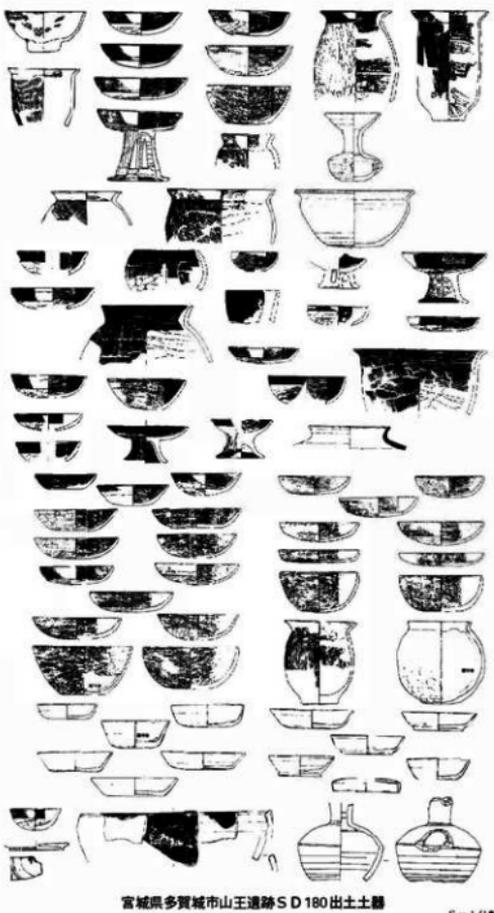


図35 1a号住居跡出土土器の類別(2)

S=1/10

「官衙風建物群」(菅原1998b)などと呼ばれ、すでにいくつかの調査例をもとにした検討がなされている(辻1995, 菅原1998a・b, 荒木2000, 垣内2002など)。いずれも8世紀から9世紀頃のもので、官衙ではないもののこれに類似し、一般の集落遺跡とはことなる性格が想定されている。

このような官衙風建物群のもつ立地などに関する特徴は、菅原祥夫氏によって以下のようにまとめられている(菅原1998b)。

- 周辺の集落を見下ろせる丘陵頂部付近の緩斜面に立地する。
- 立地する地形によって建物群の正面が必ずしも南向きであるとは限らない(多くは南向きである、カッコ内は筆者)。
- 各建物間の軸線方位には微地形が反映されており、微妙な食い違いがある。
- 配置からみて明らかに同時存在と判断される建物間でも、建て替えの回数に違いがみられ、建物群全体での一律の変遷は捉えられない。
- 全体を区画する施設は認められない。
- 屋根瓦は使用されない。

本遺跡は、●を除いてはほぼ合致する。

菅原氏はさらにその内部構造を以下のように指摘している。A. 建物群は中央に広場を有し、その奥と両脇に多数の掘立柱建物跡がコの字形に配置される。建物には掘立柱建物跡だけでなく壑穴住居跡も含まれる。その中には、正方形掘立柱建物跡と大型壑穴住居跡の二つが必ず認められる。両者は隣接することはなく一定の距離をおいて配置される。B. 広場の手前は遺構の分布が希薄である。C. 掘立柱建物跡の周囲には食膳具類が廃棄された浅い土坑が分布する。D. 遺物組成には、墨書土器や陶視類、仏具類などの存在が顕著で、一般居住域とは異質な内容を含む。

本遺跡は、内部の構造に関する以上のような特徴についてもほぼ合致する内容をもつ。ただし、本遺跡では建物群の東部が調査区外に伸びているため、Aに述べられている正方形の掘立柱建物跡の存在については不明である。またCに述べられている廃棄土坑も、本遺跡では確認されていない。

以上のような若干の違いはあるものの、本遺跡はこれまで指摘されてきた「官衙風建物群」と同じ特徴をもっている。したがって本遺跡も同様の性格をもつ遺跡の一つといえることができる。

建物配置の構造 本遺跡の遺構の配置が、空間地を中心にその北側と西側に掘立柱建物跡などが棟の方向をそろえてL字形をなすことは、事実報告で述べたとおりである。これらの建物は壑穴住居と掘立柱建物からなり、掘立柱建物には2間×4間、2間×3間、1間×2間の三種がある。これらの占地・配置には規則性がうかがえ、それぞれ別の機能や役割のあったことが予想される。

本遺跡と構造が類似する例は、県内外にいくつかみることができる。なかでも郡山市直直C遺跡(鈴鹿はか1995)、東山田遺跡(垣内2002)、会津若松市矢玉遺跡(萩生田和郎はか1999)は、本遺跡の内部構造を考える上で示唆に富む内容をもっている。これらはいずれも空間地に面して大型の掘立柱建物や壑穴住居が建てられ、その背後には概して規模の小さい掘立柱建物が配置されているというように、基本的によく似た構造をもっている。そしてこれまでの検討によって、空間地に面した大型の掘立柱建物は「居住施設」、壑穴住居は「炊事施設」、掘立柱建物跡の背後の規模の小さい掘立柱建物跡は「倉庫」という想定がなされている。

これをもとに各建物の機能を考えてみると、まず建物群の中心部に位置しもっとも大きな2間×4間の規模をもつS_B02・05・06・07は、居住施設に相当する。このうちのS_B05・06・07は、建

物群の中で唯一2回の建て替えが行われている。またSB02・05は建物の南辺の柱間が1間多いという構造をもって、それは建物の南辺中央に入り口があったことを示すものと思われる(荒木2000)。これらの建物が居住施設であったかどうかは別にしても、本建物群の中心的な役割を担った施設であったことは、建物群の中では最大の規模をもつこと、建物群の中心に位置することから間違いない。

そしてSB05・06・07の南に隣接するSI01は、これらの居住施設その他に対する炊事施設と考えられる。SI01からは、破損品を含めれば13点の土と鉢が出土していて、いずれも強い二次被熱が認められる。出土量も該期の竪穴住居跡にしては多いといえる。このような点に、この竪穴住居の役割

が反映されていると思われる。ただし杯などの供膳具の出土量は少ない。

2間×4間の大型建物と竪穴住居跡の脇に並ぶ2間×3間のSB01・03・12・14は、これに付属するようにみえるものの、その性格については発掘調査や預例との比較からも明らかにしえない。山中敏史・石毛彰子の両氏は、建物群の中心となる大型建物を「主屋」、これに付属するやや規模の小さな建物を「副屋」とする(山中・石毛1998)。本遺跡もこれに合致する。

本建物群の西辺に列を成して立ち並んでいる1間×2間の小規模なSB08・09・10・11・16は、倉庫としての機能が考えられる。他の多くの例では小規模ながらも総柱建物であることが多いが、本遺跡では1間×2間の建物である。全国的な集成をもとにした分析によれば、倉庫は主屋の西側に配置される例が圧倒的に多いことが指摘されている(山中・石毛1998)。本遺跡もこのような傾向と軌を一にした建物配置をとっていると考えられる。

以上のように、本遺跡は全国的にみられる同様の建物群とよく似た構造をもってしているといえる。このことは本遺跡の造営が全国的な動向に契機したものと見え、本遺跡の性格を考えるうえで考慮

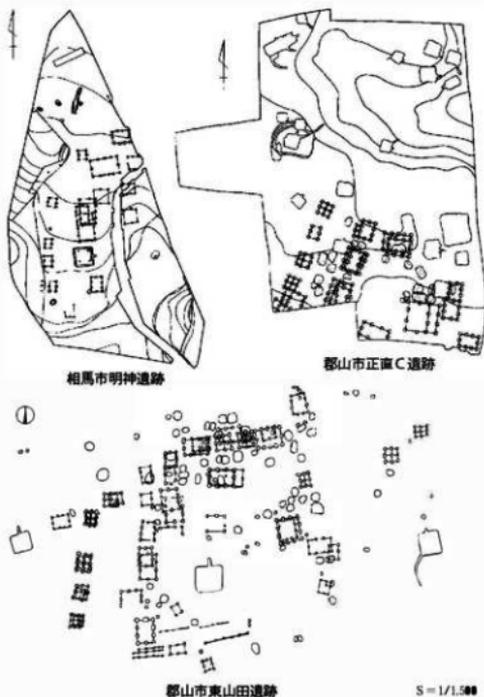


図36 官衙風建物群の諸例

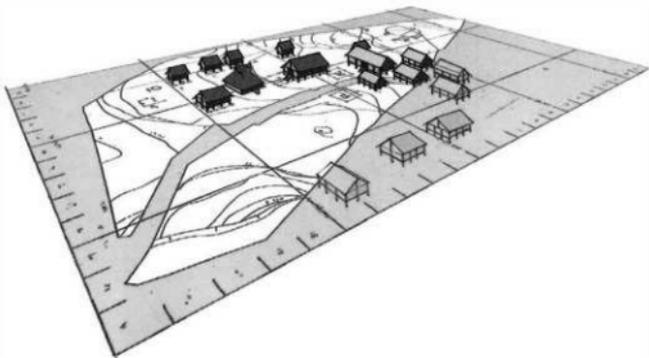


図37 明神遺跡推定復元図

すべき点と思われる。

これに加えて、本遺跡では建物群の北側に井戸（SK02）が、広場のほぼ中央に火を焚いたと考えられる施設（SX01）がある。これらも遺物から建物群と同時に機能していた遺構と考えられる。

本遺跡の性格 このような遺跡の性格については、官衙の性格を想定する考え（辻1995）、地方豪族の居宅（山中・石毛1998）、墾田開発を主導した在地有力者・富豪層の居宅とする考え（菅原1998 a・b）、『類聚三代格』巻12に収められた延暦14年（795年）の太政官符に記載されるところの「郷倉」とする考え（垣内2002）などがあげられてきた。末端官衙とも総称される（山中2004）。

本遺跡の調査でわかったことは、8世紀の中葉に位置づけられ、建て替えがほとんどなく比較的短期間のうちに廃絶していることである。一方で遺物はS I 01 aを除いてほとんど出土しなかった。官衙風建物群から出土する遺物は墨書土器や陶硯類、仏具などの出土が多く、一般の集落遺跡とは異なる内容をもつことが多いことが指摘されているが、本遺跡から出土した遺物は総量が少ないこともあり、S I 01 a 出土土器をみる限り一般集落とくに異なる内容はない。以上のように、本遺跡の調査からはその性格について言及できる所見は少ない。いずれにしろ、官衙ではないものこれに類し、竈穴住居跡を主に構成される一般集落とは異なった性格が想定される。

黒木田遺跡との関係 本遺跡の南側を流れる宇田川を下った東北方約2 kmには、宇多郡衙に比定されている黒木田遺跡がある。黒木田遺跡は出土した瓦などから8～9世紀にかけて機能していたと考えられている。すなわち、本遺跡と黒木田遺跡は2 kmという近接した距離にあって、同時に機能していた時期があったことになる。このような点も、本遺跡の性格を考える上で考慮すべきと思われる。

本遺跡は宇多郡衙の間近にあってこれと同時に併存したことを考えれば、郡衙との密接な関係のもとこれとは異なる機能をもっていたことを想定できるのではないだろうか。（青山）

第4章 まとめ

2ヶ年にわたる調査の結果、明神遺跡は縄文時代と古代の複合遺跡であることが判明した。遺構は段丘礫層を避け、旧宇田川の自然流路跡の埋没土と、後背湿地への移行部に堆積する粘土層に構築されている。流路跡は2本検出された。調査区南部で検出された流路跡は、黒色土で埋没が終了しており、この黒色土中から縄文時代中・後期の土器が出土する。これに対し、調査区中央部の流路跡には暗褐色土が堆積し、遺物や黒色土はみられなかった。このことから、中央部の流路跡は更新世には埋没していた可能性が高く、宇田川が南に移動することで、現在の地形が形成されたと考えられる。

明神遺跡で最も古い人類活動の真跡は、縄文時代前期末葉の大木6式土器まで遡り、以後晩期まで断続的に認められる。なかでも、中期末葉から後期前葉にかけての土器はある程度まとまった出土量がある。これらが、明治期に館岡虎三により報告された明神遺跡の内容と推測される。今回の調査区の西方には比高差2mで微高地が所在し、圃条整備がされる以前はここから多数の遺物が採取できたという。縄文時代の集落はこの微高地に展開していたものと考えられる。

しばしの断絶後、奈良時代に再び明神遺跡が利用される。この時期の遺構は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡から構成される。そして、これらが中央に空間部を伴って規則的に配置される点が特筆に値する。竪穴住居跡と掘立柱建物跡は重複していないことから、大きな年代差は考えにくく、むしろ同時存在していた可能性が高い。住居跡の出土土器を参考にすれば、遺構の年代は8世紀代に比定できる。遺構は、前述した流路跡内に掘り込まれているため、礫層が広がる東側調査区外の状況は必ずしも明確でないが、第3章では「コ」字状の配列を想定している。

こうした配置をとる集落は、一般集落とは異なる特徴をもち、いわゆる「官衙風建物群」に類似する。当然、宇多郡の官衙遺跡である黒木田遺跡（旧中野庵寺跡）との関係が注目されるが、遺構の構造や規模・遺物の貧弱性・遺跡の継続期間などから、同等に扱うことはできない。よって、本遺跡の建物群は、官衙関連の施設と一般集落との中間的な様相が何われ、当時の社会階層を反映する集落の一つといえる。こうした遺跡の性格として、「末端官衙」とする用語が与えられている。しかし、その具体的な内容については、研究者間で見解が分かれているのが現状である。

いずれにせよ、今回の調査によって、これまで不明な点が多かった古代宇多郡の集落の姿がわずかながら垣間見られた。今後は、生産遺跡などこれまで知られている成果とも照らしあわせて、研究を進める必要がある。また、調査区から30m東方の畑地からは、少量ではあるが土器が採取されている。調査区西側の微高地も含めて、遺跡範囲が延びていることは確実であり、今後、自然堤防上の開発にあたっては十分な注意が必要である。

(佐藤)

引用・参考文献

- 荒木 隆 2000 「古代会津郡東半郡(会津若松市域)における奈良・平安時代掘立住建物跡の特質」『若松北部県営は馬整備事業発掘調査報告』Ⅱ 会津若松市教育委員会
- 石本 弘 1995 「福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 石本 弘 1996 「丸底から平底へー福島県におけるクロコ導入時期の土器器一」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 大越 道正 他 2002 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』12 江平遺跡 福島県文化財調査報告書第394集 福島県教育委員会ほか
- 垣内 和孝 2002 「陸奥国安積郡小川郷と東山田遺跡」『福島考古』第43号 福島県考古学会
- 樫村 友延 他 1995 『東北横断自動車道遺跡調査報告』29 福島県文化財調査報告書第309集 福島県教育委員会他
- 進藤 秋輝 他 1995 『続生城跡』Ⅲ 多賀城関連遺跡発掘調査報告第20冊 宮城県多賀城跡調査研究所
- 菅原 祥夫 1993 a 「陸奥国南部における富榮層居宅の倉庫群」『古代の稻倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 菅原 祥夫 1993 b 「古墳時代、奈良・平安時代の遺構と遺物」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』2 小又遺跡 福島県文化財調査報告書第353集 福島県教育委員会ほか
- 鈴鹿 良一 1995 『母畑地区遺跡発掘調査報告』136 正直C遺跡 福島県文化財調査報告書第305集 福島県教育委員会
- 鈴木 敬治 1989 「表層地質図」『土地分類基本調査 相馬中村』福島県
- 館岡 虎三 1892 「磐城東北郡古代遺跡表」『東京人類学雑誌』第74号
- 千集 孝弥 1992 『山王遺跡』-第12次調査概報-多賀城市文化財調査報告書第30集 多賀城市教育委員会
- 辻 秀人 1995 「福島県・東北の古代官衙とその周辺」『地方官衙とその周辺』日本考古学協会
- 荻生田 和郎 他 1999 『矢玉遺跡』若松北部地区県営は馬整備発掘調査報告書Ⅰ 会津若松市教育委員会
- 橋本 博幸 他 1987 『国道113号バイパス遺跡調査報告書』Ⅲ 三貫地遺跡(原口地区) 福島県教育委員会他
- 橋本 博幸 他 1996 『史跡中村城跡 保存管理計画書』相馬市教育委員会
- 平川 南 1992 「山王遺跡出土の漆紙文書および木簡」『山王遺跡』-第12次調査概報-多賀城市文化財調査報告書第30集 多賀城市教育委員会
- 平川 南 1997 「山王遺跡出土の漆紙文書・木簡」『山王遺跡』Ⅰ 多賀城市文化財調査報告書第45集 多賀城市教育委員会
- 福島県教育委員会 2004 『福島県内遺跡分布調査報告』10 福島県文化財調査報告書第412集 福島県教育委員会
- 古川一明・太田 肇 1993 『日の出山築跡群』色取町文化財調査報告書第1集 色取町教育委員会
- 堀内 俊秀 1983 「相馬市付近の地質」『相馬市史』Ⅰ 福島県相馬市
- 目黒 吉明 他 1990 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅴ 福島県教育委員会他
- 山中 敏史 2004 「末端官衙と豪族居宅」『古代の官衙遺跡』Ⅱ 遺物・遺跡編 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 山中敏史・石毛彩子 1998 「地方豪族の居宅と稻倉」『古代の稻倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

写 真 図 版

第 1 編 な が や ま 仲山 C 遺跡



1 調査区遠景（北東上空から）



2 調査区遠景（南から）



3 沢1, 7・9・14・16号土坑(東から)



a



b



c



d

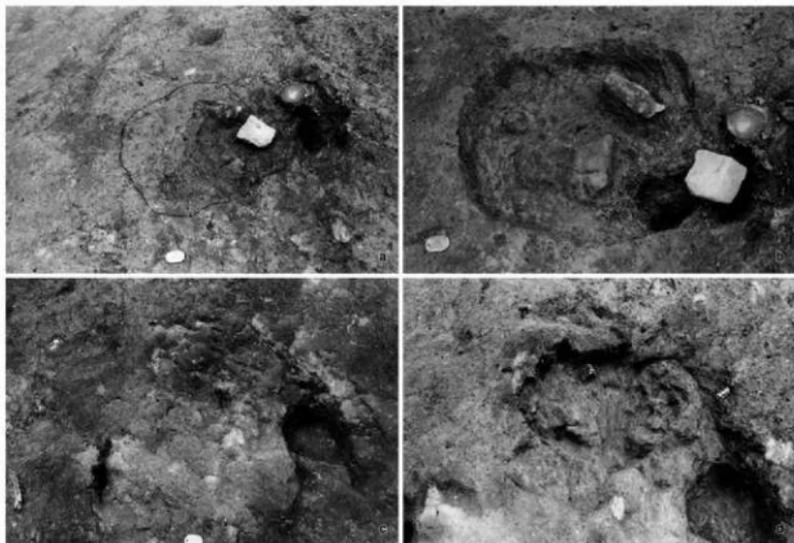
4 基本土層, 沢2・3・4

a 調査区南側斜面基本土層(南東から)

b 沢2・3(北東から)

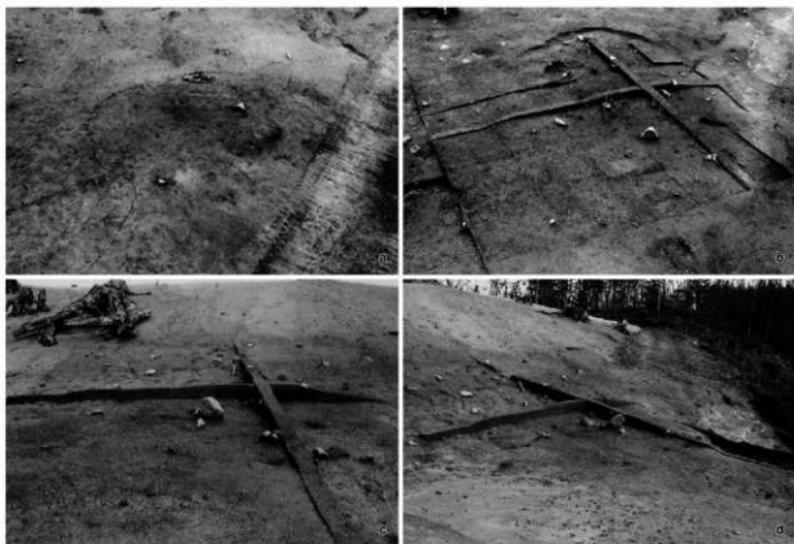
c 沢4(南東から)

d 調査区北側基本土層(南から)



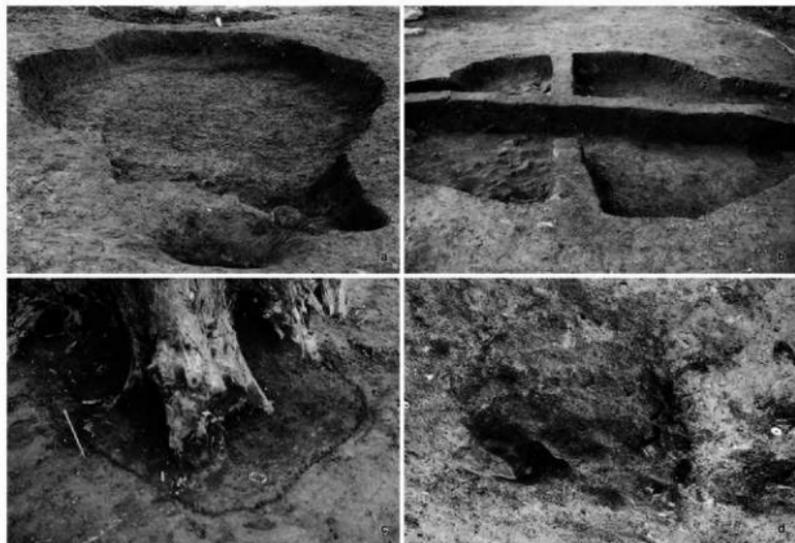
5 1・2号鍛冶遺構

a 1号鍛冶遺構検出(東から) b 1号鍛冶遺構全景(東から)
c 2号鍛冶遺構検出(南から) d 2号鍛冶遺構全景(南から)



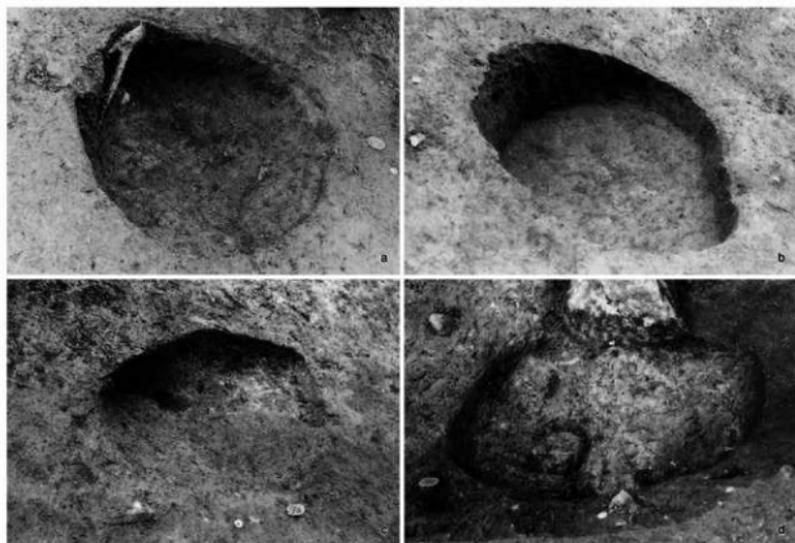
6 3号鍛冶遺構

a 検出状況(南西から) b 遺物出土状況(北東から)
c 東西断面(南から) d 南北断面(南西から)



7 1号住居跡, 1・2号土坑

a 1号住居跡全容(南西から) b 1号住居跡土層(北東から)
c 1号土坑(南東から) d 2号土坑(西から)



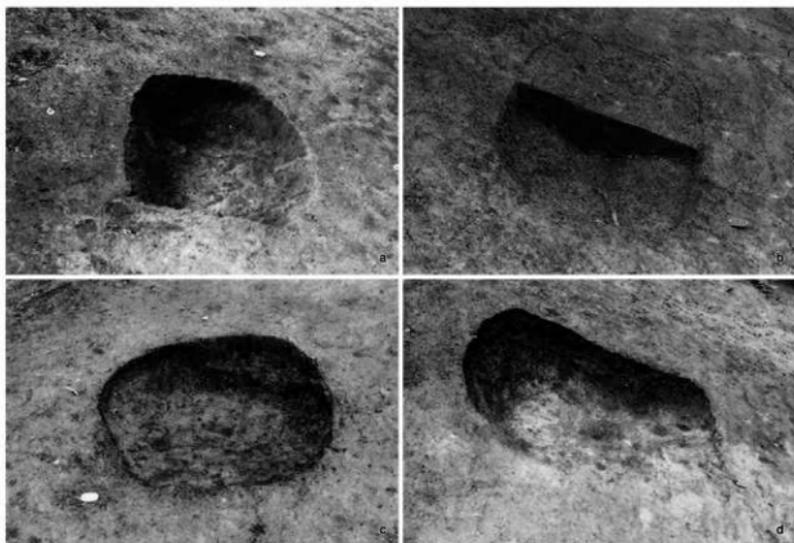
8 3～6号土坑

a 3号土坑(西から) b 4号土坑(西から)
c 5号土坑(南から) d 6号土坑(西から)



9 7～9号土坑

a 7号土坑(北から) b 8号土坑(南西から)
c 9号土坑断面(西から) d 9号土坑土器出土状況(北から)



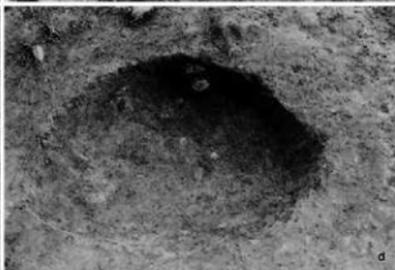
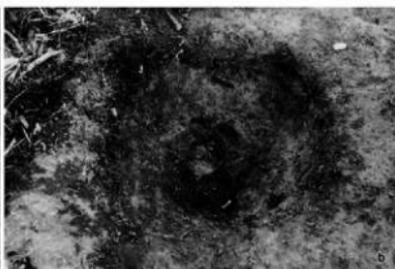
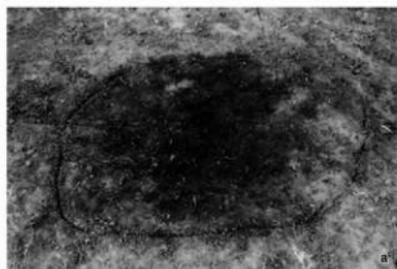
10 10～13号土坑

a 10号土坑(南西から) b 11号土坑(南西から)
c 12号土坑(南東から) d 13号土坑(西から)



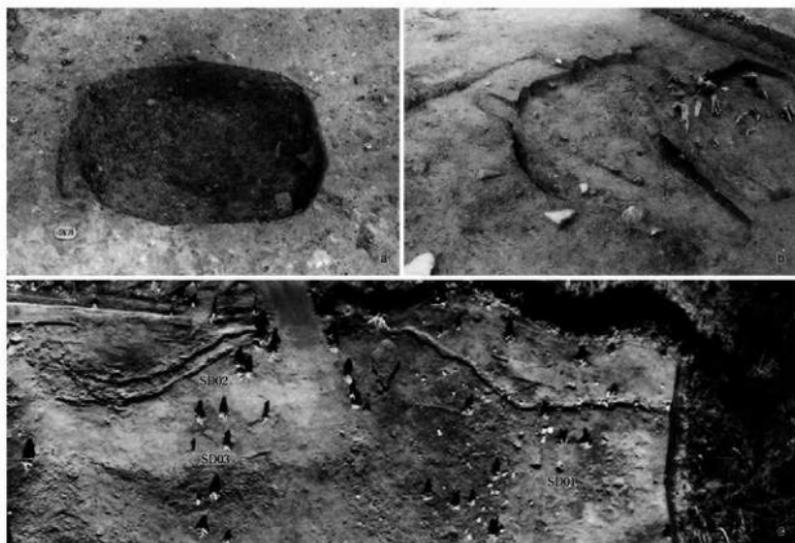
11 14～16号土坑

a 14号土坑土器出土状況(南から) b 14号土坑断面剖面(西から)
c 15号土坑(南西から) d 16号土坑(東から)



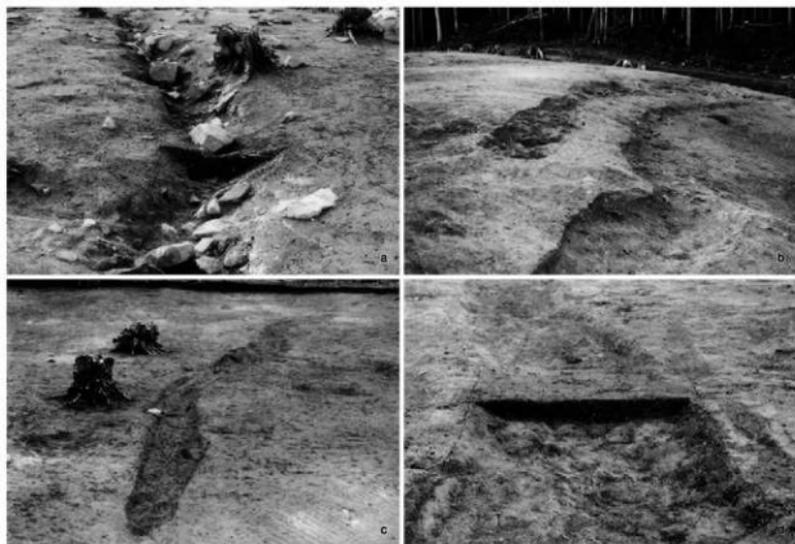
12 17～20号土坑

a 17号土坑(南から) b 18号土坑(西から)
c 19号土坑(北から) d 20号土坑(南西から)



13 21・22号土坑，1～3号溝跡

a 21号土坑（東から） b 22号土坑（北東から）
c 1～3号溝跡（上空から）



14 1～3号溝跡，1号道跡

a 1号溝跡（東から） b 2・3号溝跡（東から）
c 1号溝跡（西から） d 1号道跡断面（西から）



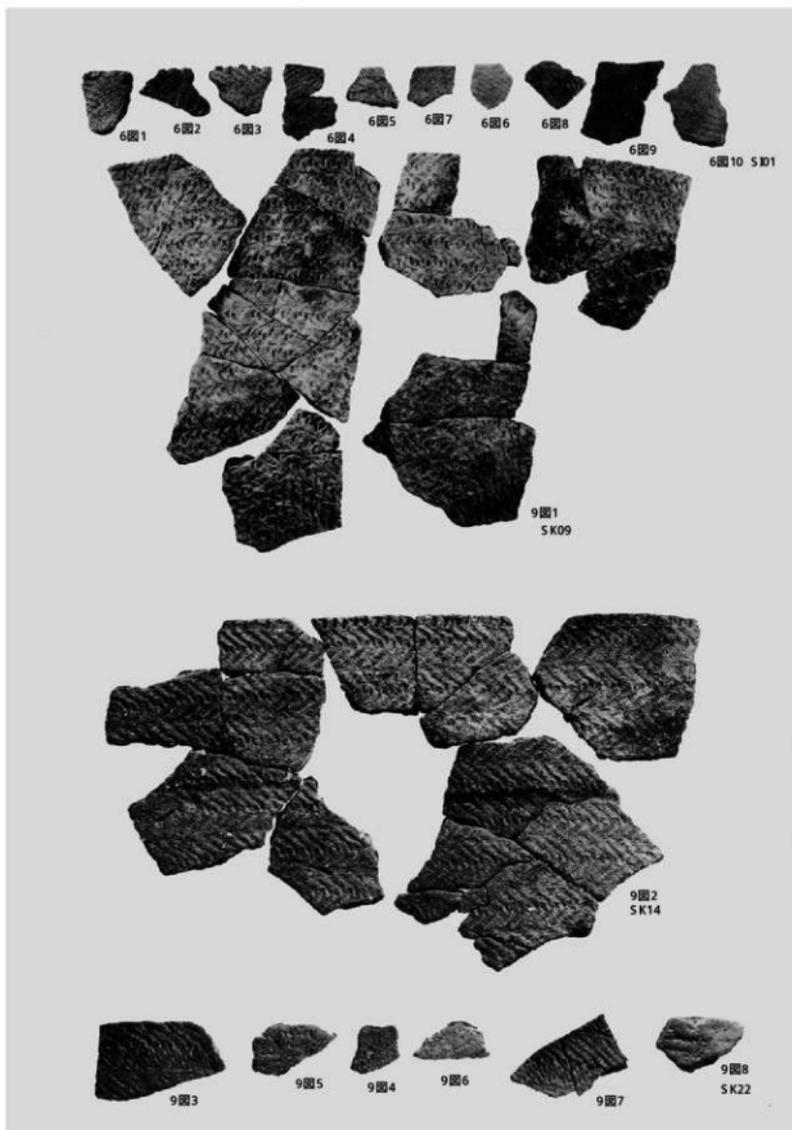
15 2・3号道跡, 1・2号性格不明遺構

a 2号道跡(西から) b 3号道跡(北から)
c 1号性格不明遺構(東から) d 2号性格不明遺構(南から)

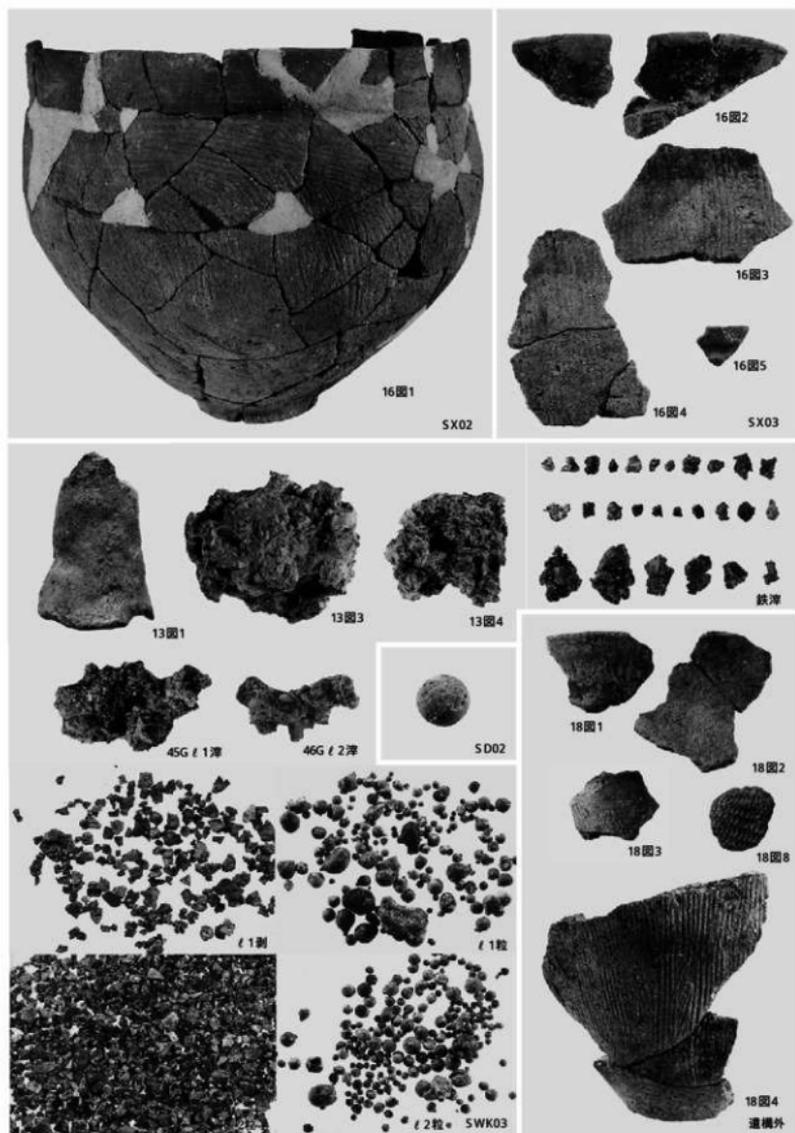


16 2・3号性格不明遺構
遺跡外北西に隣接する製鉄関連遺構

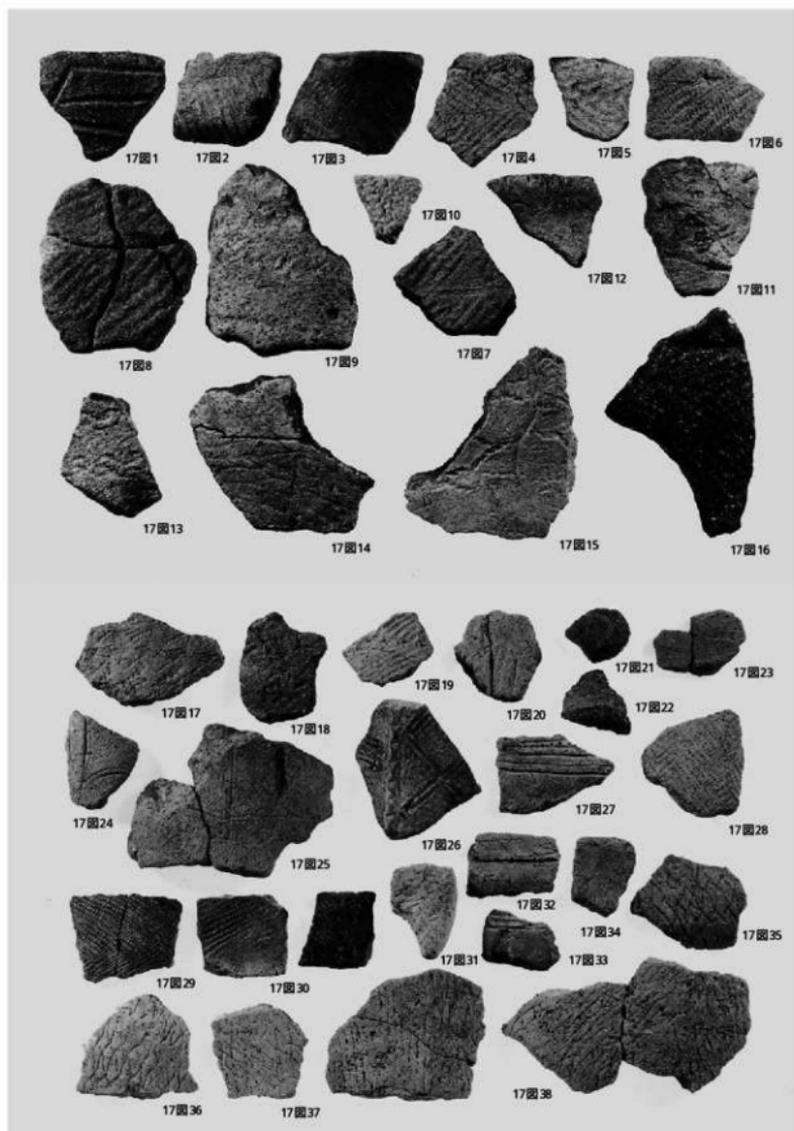
a 2号性格不明遺構P1(北東から) b 3号性格不明遺構(北東から)
c 3号性格不明遺構土器出土状況(北東から) d 調査区外鉄滓散布状況



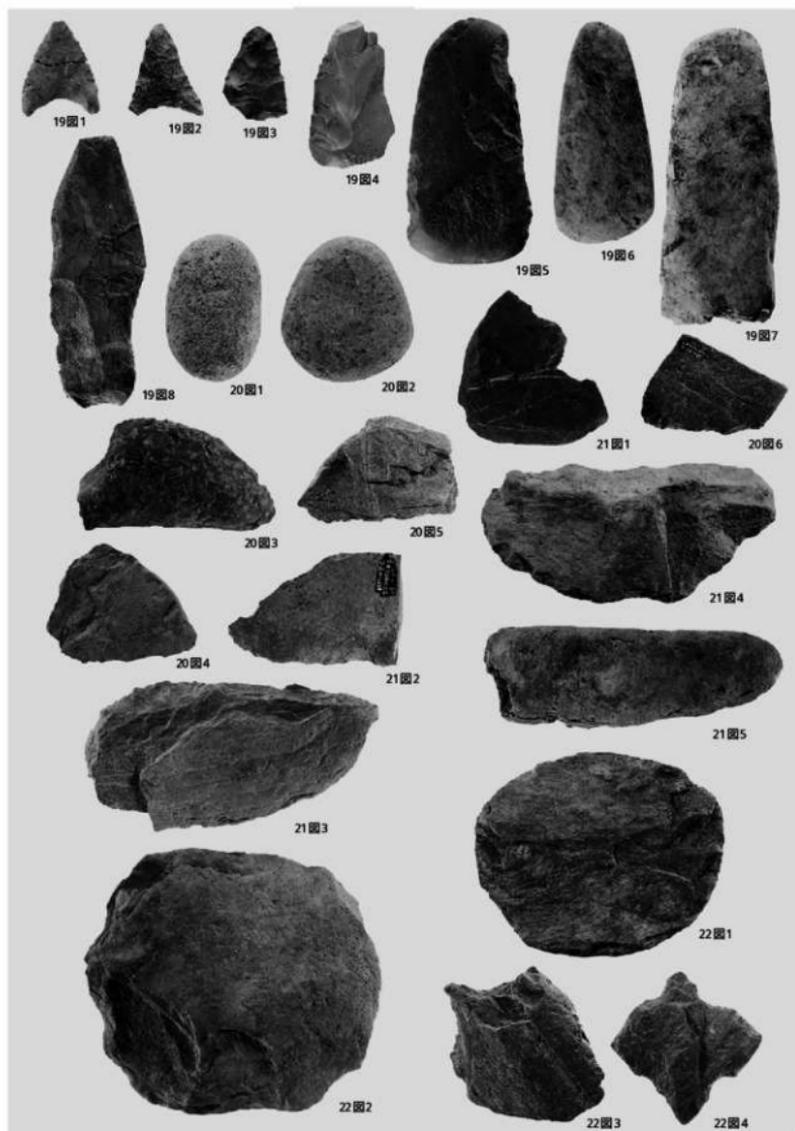
17 1号住居跡，9・14・22号土坑出土遺物



18 2・3号性格不明遺構，3号鍛冶遺構，2号溝跡，遺構外出土遺物



19 遺構外出土遺物(1)



20 遺構外出土遺物(2)

写 真 図 版

第 2 編 みょうじん 明神遺跡



1 遺跡遠景（東上空から）



2 遺跡遠景（南上空から）



3 調査区中央部近景（東上空から）



4 調査区全景

a 1次調査区（北西から） b 調査区北部（南西から）
c 調査区南部（北東から） d 調査区中央部（西上空から）

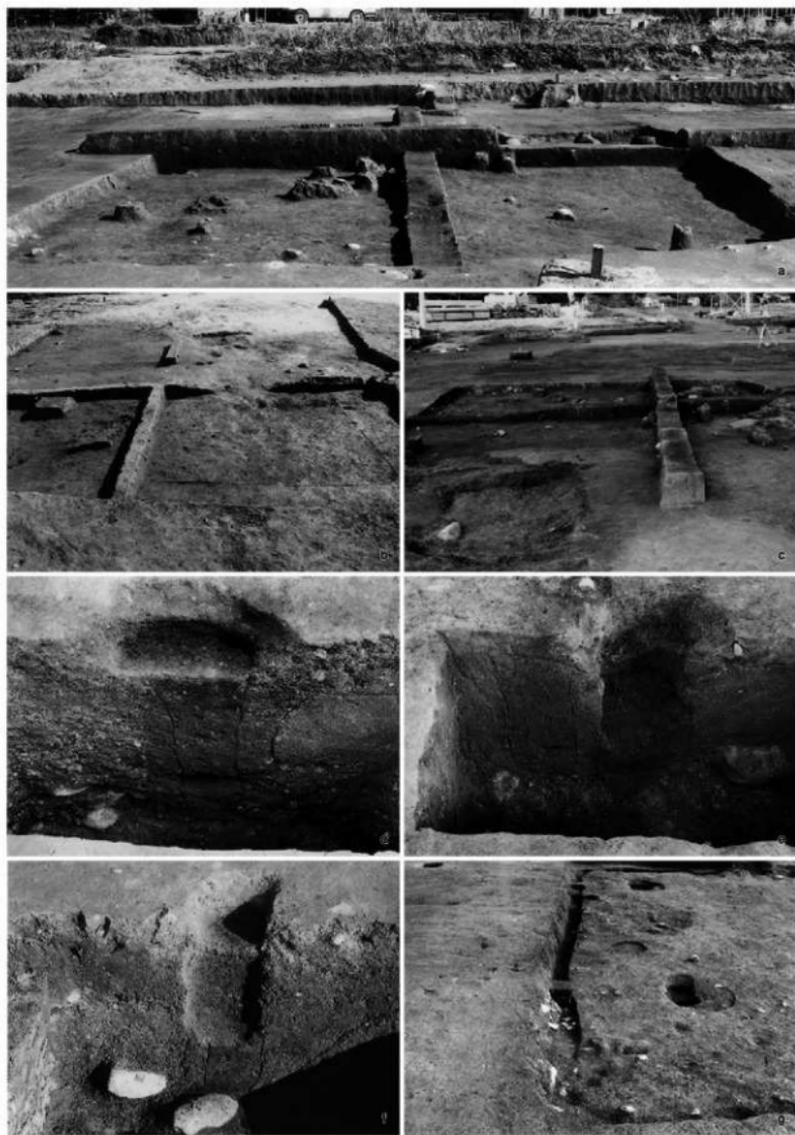


5 基本土層

a 調査区北部 (西から) b 調査区中央部 (西から)
c 調査区中央部白流跡 (北東から)



6 1a号住居跡全景 (西から)



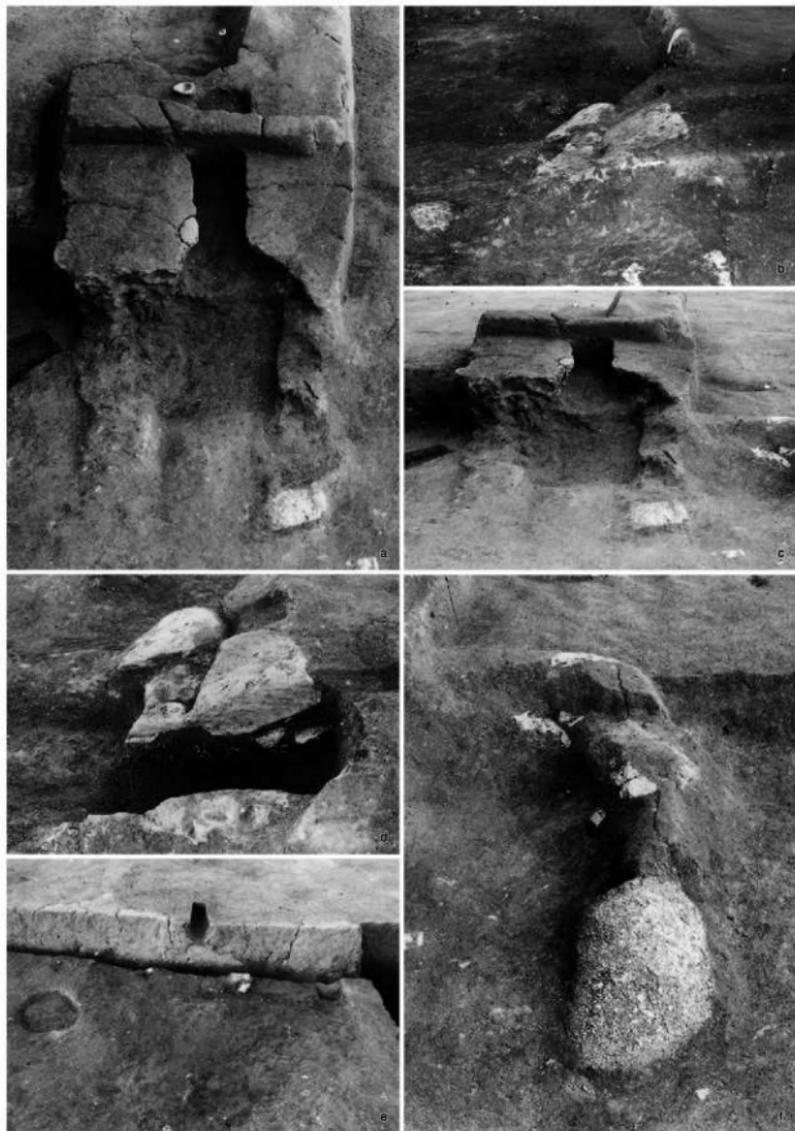
7 1 a号住居跡細部

a 南北土層断面(北から) b 検出状況(北から) c 東西土層断面(南から) d P1新耐(西から)

e P3・P5新耐(西から)

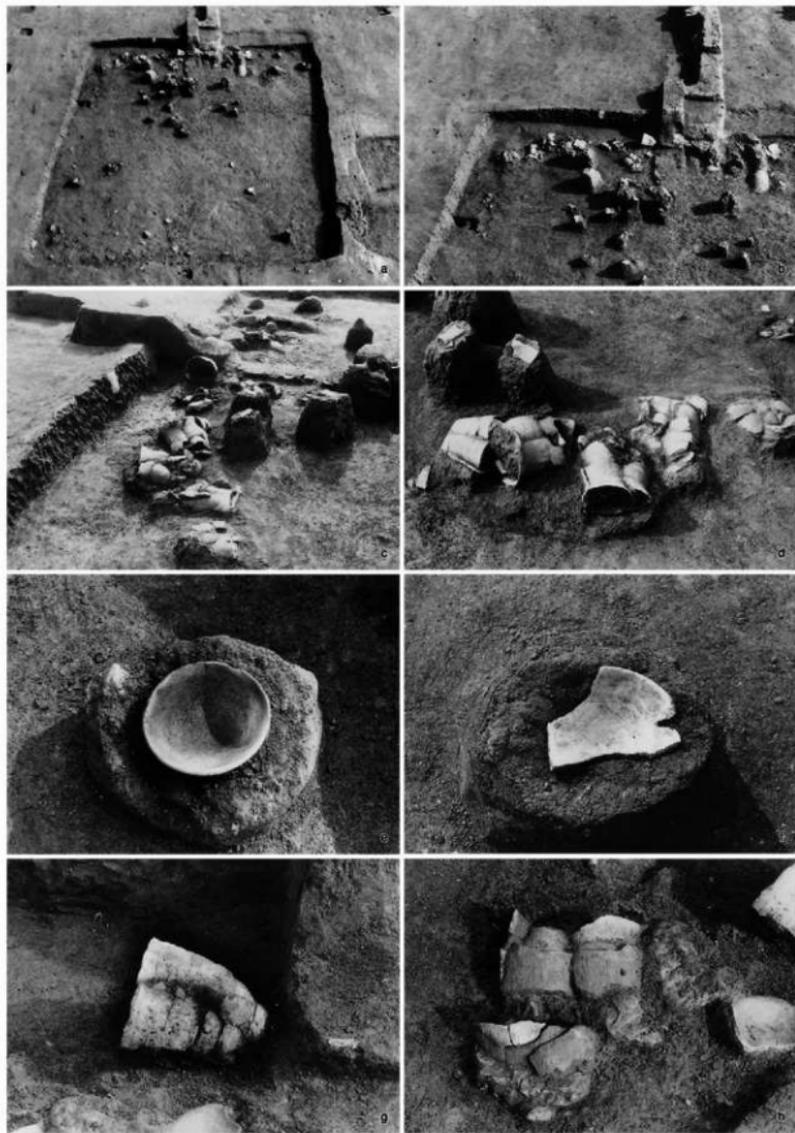
f P4新耐(西から)

g 壁溝(西から)



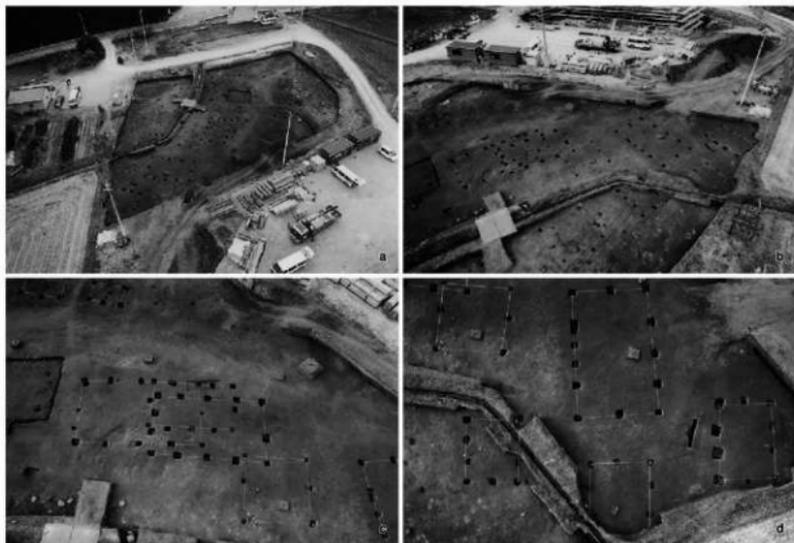
8 1 a・b号住居跡細部

- a カマド全景 (西から) b カマド残出状況 (南から) c カマド燃焼部 (西から)
 d カマド土層断面 (南から) e 1 b号住居跡カマド全景 (南から) f 1 a号住居跡土塊 (西から)



9 1 a号住居跡遺物出土状況

- a 全景(西から) b カマド北側(西から) c カマド北側(北から)
 d 集中部(東から) e 残1)(西から) f 残2)(北から)
 g 残1)(西から) h 残2)(南西から)



10 掘立柱建物跡群

a 建物群配置 1)(北西上空から) b 建物群配置 2)(東上空から)
 c 西部建物群 (東から) d 北部建物群 (東から)



11 1号建物跡全景 (北から)



12 2号建物跡全景（北から）



13 3号建物跡全景（北から）



14 4号建物跡全景（西から）



15 5号建物跡全景（西から）



16 6号建物跡全景（西から）



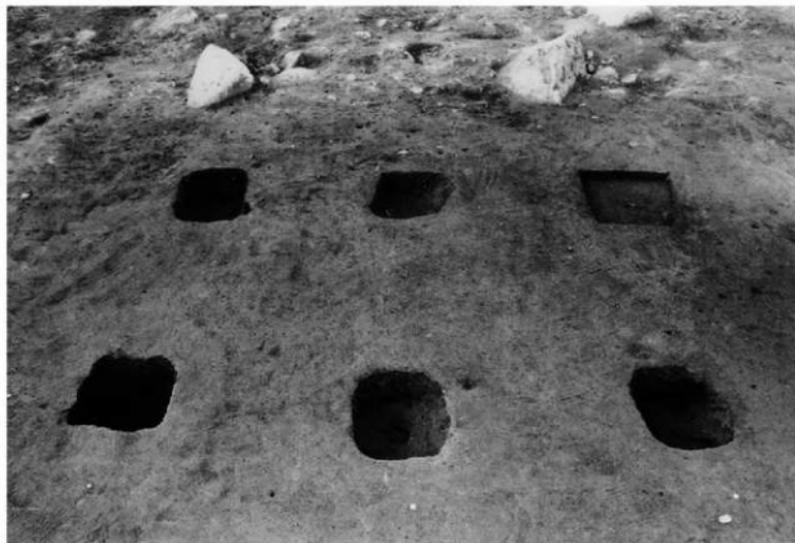
17 7号建物跡全景（西から）



18 8号建物跡全景（東から）



19 9号建物跡全景（東から）



20 10号建物跡全景（東から）



21 11号建物跡全景（東から）



22 12号建物跡全景（南から）



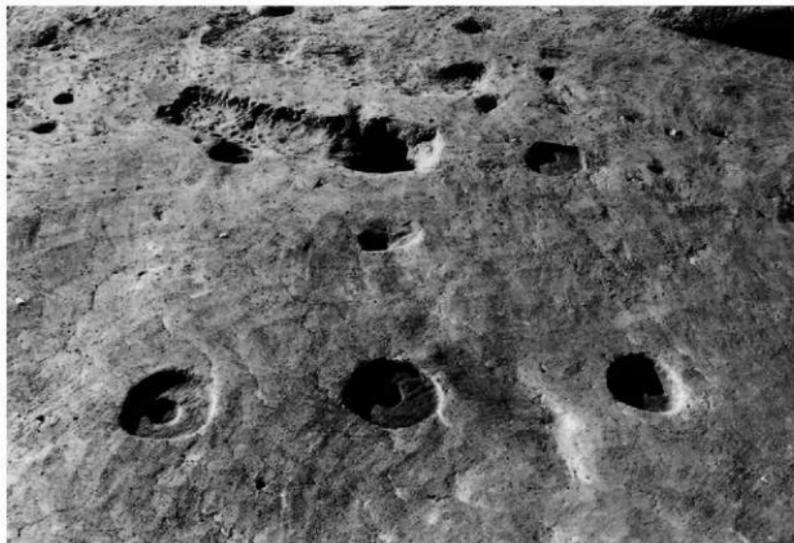
23 13号建物跡全景（南から）



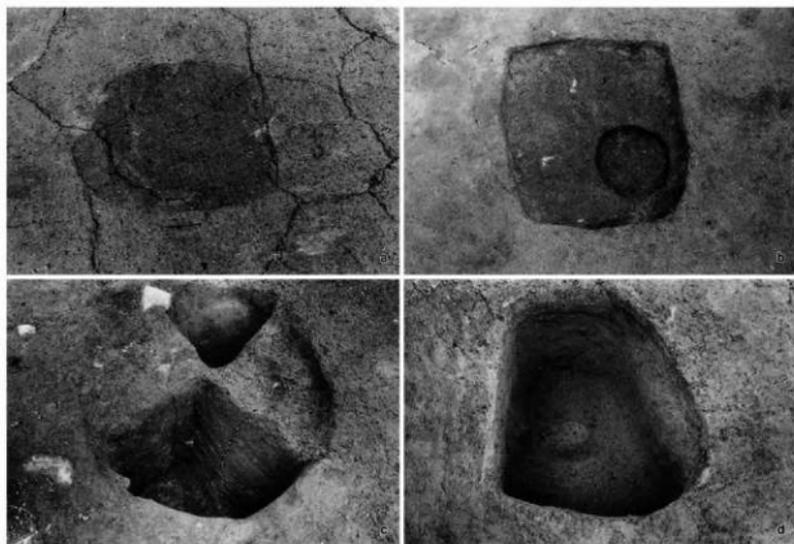
24 14号建物跡全景（西から）



25 15号建物跡全景（北から）



26 16号建物跡全景（東から）



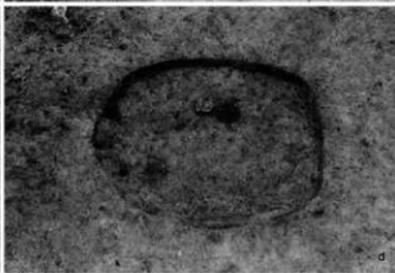
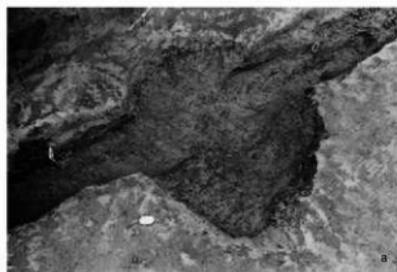
27 掘立柱建物跡細部

a S B 02 P 13 棟出（西から） b S B 03 P 5 全景
c S B 06 P 1 土層断面（南西から） d S B 09 P 3 元堀（東から）



28 1号性格不明遺構

a 全景(西から) b 土層断面(南西から) c 遺物出土状況(南から)



29 土坑

a 1号土坑(東から) b 2号土坑(南から)
c 3号土坑(南から) d 4号土坑(南東から)

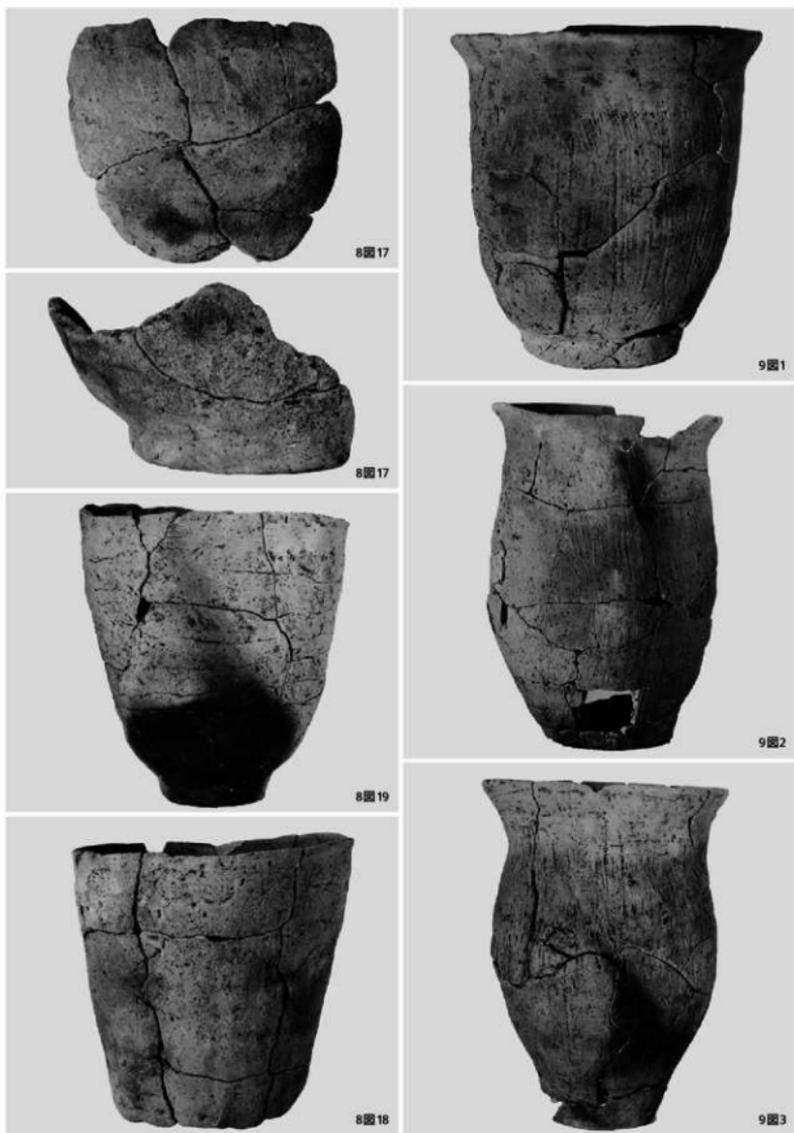


30 その他の遺構

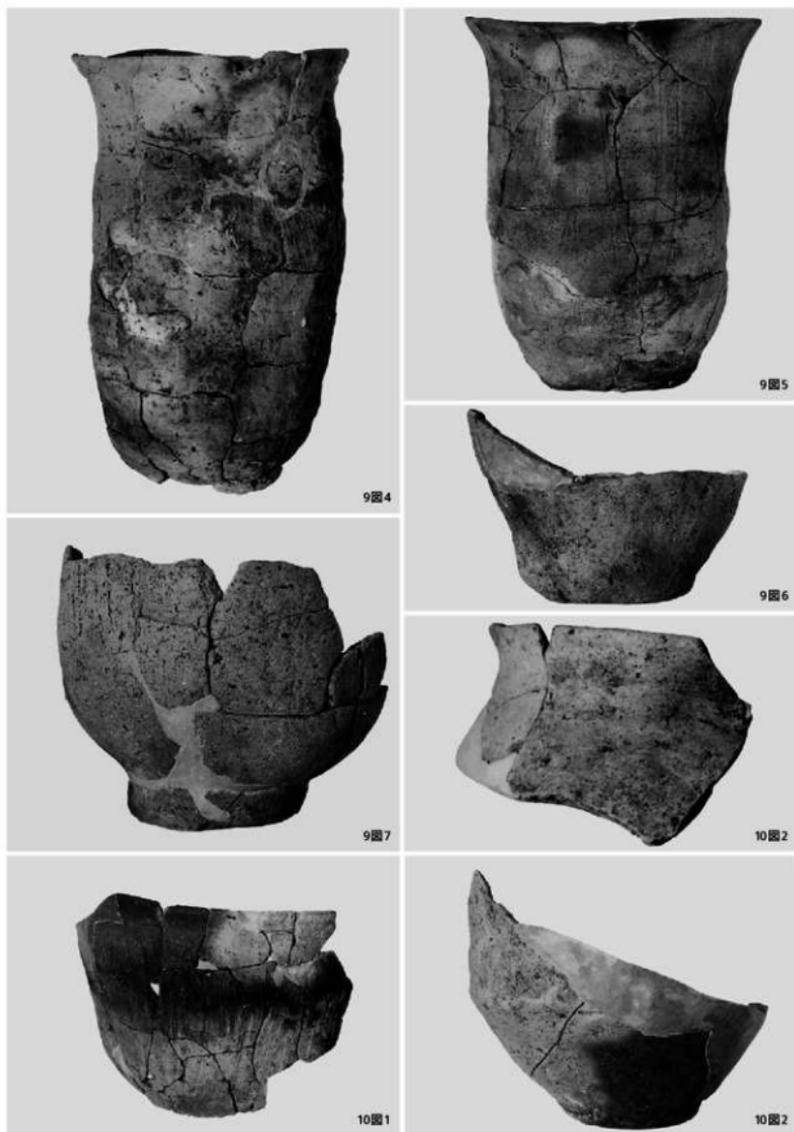
- a 1号窯石遺構全景（南から）
 b 1号窯石遺構土層断面（南から）
 c 1号柱列跡全景（南から）
 d 1号溝跡全景（南から）
 e D14GP1全景（北から）
 f 調査区南端田尻路全景（北東から）



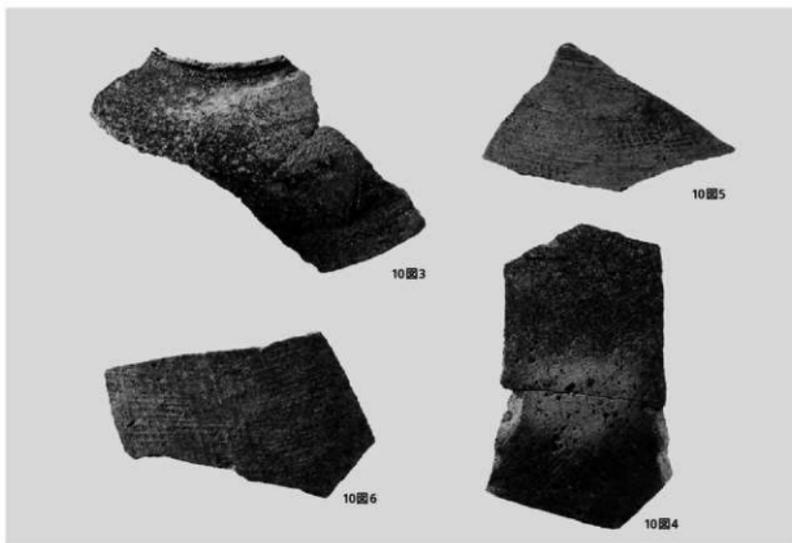
31 1 a号住居跡出土土器(1)



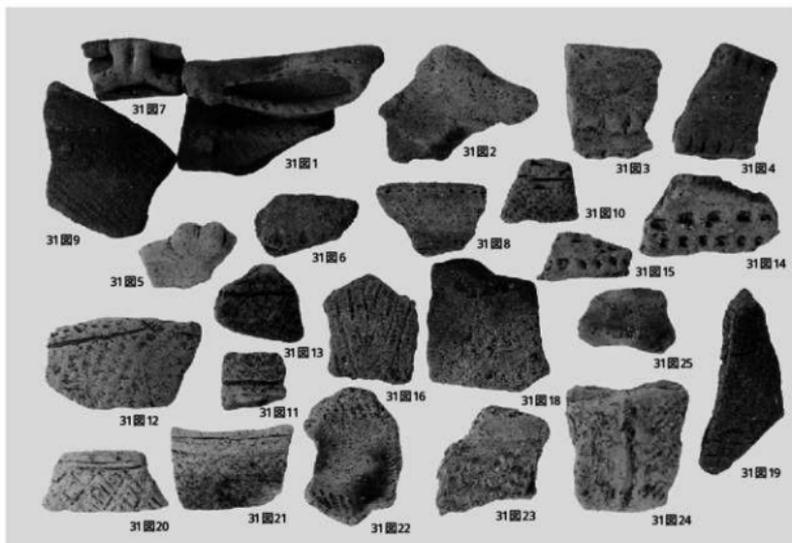
32 1 a号住居跡出土土器(2)



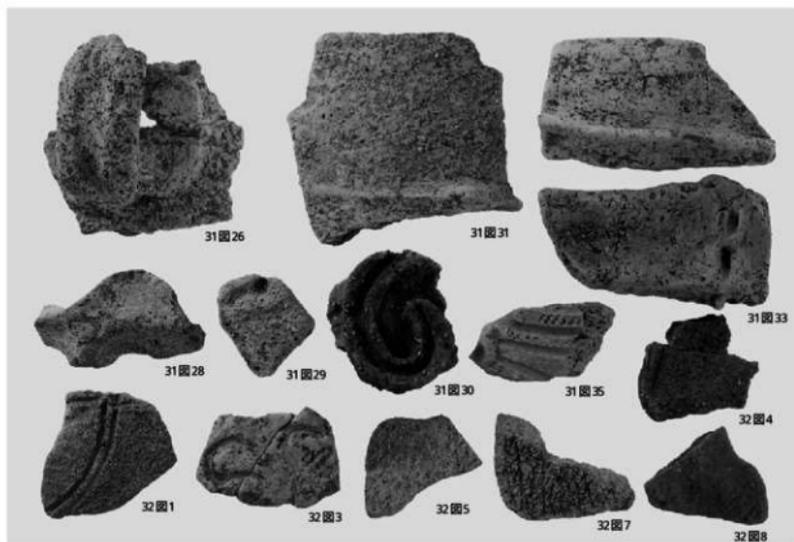
33 1 a号住居跡出土土器(3)



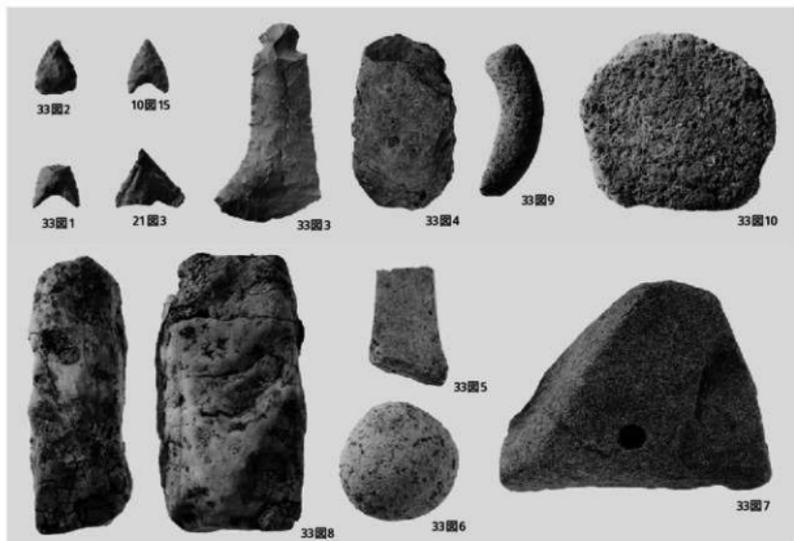
34 1 a号住居跡出土土器(4)



35 遺構外出土縄文土器(1)



36 遺構外出土縄文土器(2)



37 石器・石製品・土製品

付 編

仲山C遺跡出土鉄滓等分析調査

JFEテクノリサーチ株式会社

分析・評価事業部

埋蔵文化財調査研究室

1 はじめに

静岡県文化振興事業団から福島県南相馬市原町区に所在する仲山C遺跡から出土した鉄関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土鉄滓の化学成分分析、外観観察、ミクロ組織観察およびX線回折に基づき、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

2 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

表1 調査資料と調査項目

資料No	遺跡	資料番号 出土位置 層位	資料種別	重量 g	着磁度	M C 反応	外観 写真	化学 成分	組織 写真	X 線 回 折
1	仲山C	F B2005.004 SWK03 1層	炉内滓	363.9	○	○	○	○	○	○
2	仲山C	F B2005.005 SWK03 2層	含鉄鉄滓	7.1	○	○	○	○	○	○

(2) 調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cm

の高さから吊した磁石が動き始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さ等を等しくした金属鉄円柱(1.5mmφ x 1.5mmh, 2.0mmφ x 2.0mmh, 5mmφ x 5mmh, 10mmφ x 10mmh, 16mmφ x 16mmh, 20mmφ x 20mmh, 30mmφ x 30mmh)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関する J I S 分析法に準じて行っている。

- ・全鉄(T.Fe)：三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
 - ・金属鉄(M.Fe)：臭素メタノール分解-EDTA 滴定法。
 - ・酸化第一鉄(FeO)：ニクロム酸カリウム滴定法。
 - ・酸化第二鉄(Fe₂O₃)：計算。
 - ・化合水(C.W.)：カールフィッシャー法。
 - ・炭素(C)、イオウ(S)：燃焼-赤外線吸収法。
 - ・ライム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、酸化ナトリウム(Na₂O)、珪素(Si)、マンガン(Mn)、リン(P)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、アルミニウム(Al)、ヴァナジウム(V)、チタン(Ti)：ICP発光分光分析法。
 - ・シリカ(SiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化リン(P₂O₅)、酸化カリウム(K₂O)：ガラスビード蛍光X線分析法。
- 但しCaO、MgO、MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。
- ・酸化ナトリウム(Na₂O)：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分を各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

(iii) 顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが、特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬・鍛造工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイトール(5%硝酸アルコール液)で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡(5倍~20倍)による観察もする。

(iv) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射(回折)された特性X線を検出(回折)できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

3 調査結果および考察

各資料の外観写真と資料採取位置を写真1-①、2-①に、鉄滓の顕微鏡ミクロ組織を1-②・③、2-②・③に、各資料のX線回折チャートを図1・2にそれぞれ示す。また、分析調査結果について、表2に資料の化学成分分析結果を、表3にX線回折結果を、図3～5に製造工程上の分析結果をまとめて示す。以下、資料の番号順に述べる。

資料番号No.1 (FB2005・004) 炉内滓, 着磁度: 2, MC: 無

外 観 (写真1-①)

外観及び資料採取位置を写真1-①に示す。重量363.6g, 長さ100.8mm, 幅89.1mm, 厚さ75.0mm。2段の碗型滓の90°に割れた一片と思われる。上面は大きく滑らかに窪み錆化鉄の茶褐色を呈し、右上部に錆化瘤がある。錆化膨張による亀裂があり、鉄塊が存在していたと思われる。下面は木炭片の圧痕が多量に観察される。断面で見ると小さな気孔が多く、黒錆部も一部に観察される。

顕微鏡組織 (写真1-②・③)

白色で多角形状のウルボスピネルと棒状のファイヤライトが観察される。資料全体としては風化が進んでいるように思われる。写真の視野にはないが錆化鉄も多く見られる。

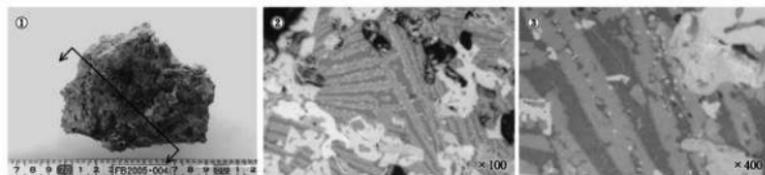


写真1 仲山C遺跡出土資料No.1 外観・顕微鏡組織写真

X線回折 (図1, 表3)

回折結果を図1に示す。ウルボスピネル($Ulvospinel-FeO \cdot TiO_2$)が最強強度を示し、マグネタイト($Magnetite-Fe_3O_4$)とファイヤライト($Fayalite-Fe_2SiO_4$)の中程度の回折線がみられる。ゲーサイト($Goethite-\gamma FeOOH$)の存在も確認される。

化学成分 (表2)

全鉄50.5%に対して金属鉄は3.41%と高い。 FeO は47.8%、 Fe_2O_3 は14.21%である。 SiO_2 は18.9%で Al_2O_3 は4.01%である。造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は18.51%である。26.5%と高い。 CaO , MgO はそれぞれ1.93%と0.90%である。 TiO_2 は5.97%で砂鉄系の滓であることは間違いない。化合物が1.29%含まれていることから錆化鉄が多く存在すると見られる。 $FeO-n-SiO_2-TiO_2$ の3元系に換算するとそれぞれ71.4%, 21.7%, 6.9%となり、平衡状態図ではファイヤライトの

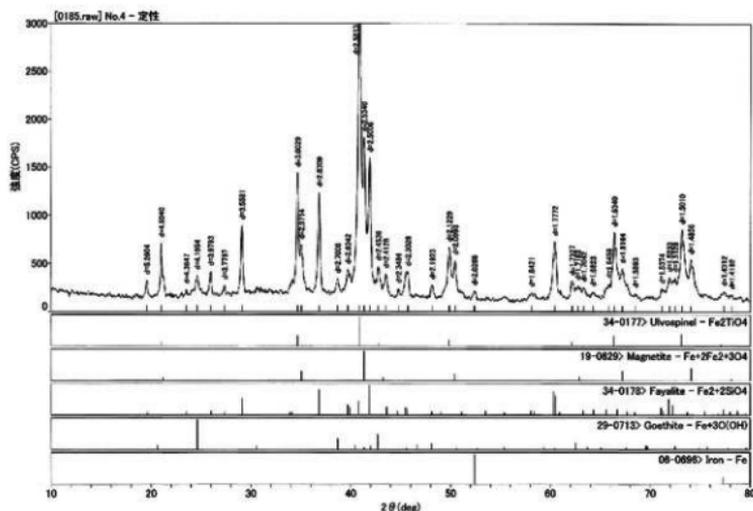


図1 仲山C遺跡出土資料No.1 X線回折チャート

境界に近いウルボスピネルの領域にあり、ウルボスピネル、ファイヤライトが晶出すると想定され、顕微鏡観察、X線回折と一致する。鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図3・4・5で見ると図3では製錬滓と精錬鍛冶滓の境界領域にあり、図4・5では精錬鍛冶滓と判断される位置にある。総合的に精錬鍛冶滓と思われる。

以上の結果から、本資料は砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した精錬鍛冶滓と推察される。

資料番号No.2 (FB2005・005) 炉内滓、着磁度：1，MC：無

外 観 (写真2-①)

外観を外観写真2-①に示す。No.2は全量分析に使用した。重量7.1g、長さ29.7mm、幅20.3mm、厚さ16.7mm。黒色のガラス質滓に酸化土砂が付着した資料である。ガラス質部は発泡しており、気

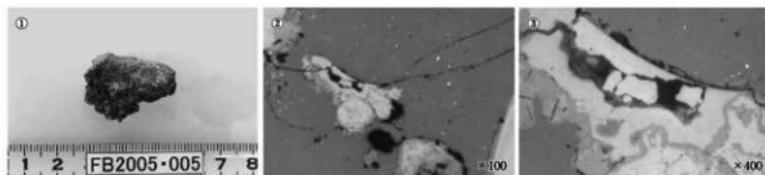


写真2 仲山C遺跡出土資料No.2 外観・顕微鏡組織写真

泡の破れた中には土砂が侵入している。メタル反応はなく、着磁度 1 の弱い着磁がある。

顕微鏡組織(写真 2 - ②・③)

滓部分の顕微鏡組織を写真 2 - ②・③に示す。資料はガラス質が主体で、一部に写真に見られるような恐らく錆化鉄と見られる組織が観察される。小さな鉄粒子が錆化したものとみられる。

X線回折(図 2、表 3)

回折結果を図 2 に示す。石英が強い回折線を示す。他には金属鉄、石英の高温変態型のクリストバライトの弱い回折線が見られる。顕微鏡組織には観察されなかったがイルメナイト(Imenite- $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)の弱い回折線が認められる。

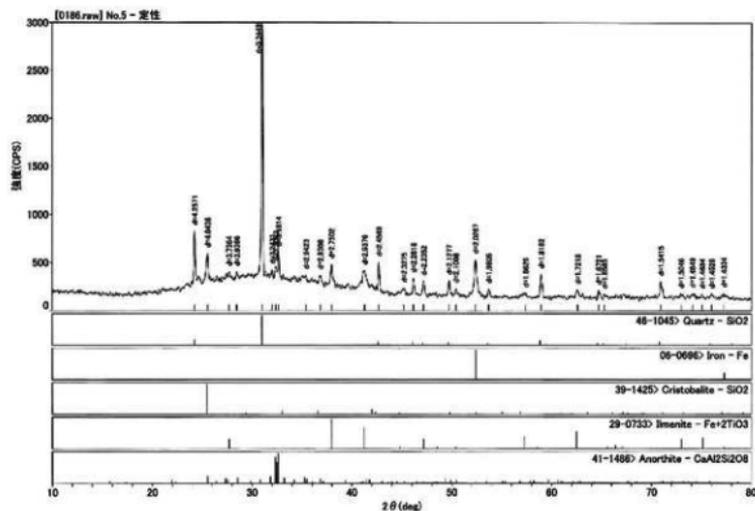


図 2 仲山 C 遺跡出土資料 No 2 X線回折チャート

化学成分(表 2)

ガラス質を反映した化学成分である。SiO₂は51.4%と高く、Al₂O₃も11.4%と高い。従って、造滓成分も75.88%と非常に高い。CaO、MgOもそれぞれ8.33%と1.48%でかなり高い。TiO₂は2.96%である。全鉄14.9%に対して金属鉄は3.66%と相当高い。

鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図 3・4で見るといずれにおいても炉壁附着滓と考えられる。鉄滓が炉壁胎土と反応して薄まっていると仮定し、元々の滓の T.Fe を 30%、40%、50%に仮定すると TiO₂は 6%、8%、10%と推定され、図 3では製錬滓の領域にある。また、X線回折でイルメナイトのような高 TiO₂ 鉱物が明瞭に確認できる。一方、本資料は鍛冶炉に関わる遺構から出土していることを考慮すると、精錬初期の滓が炉壁と反応した可能性が考えられる。

以上の結果から、本資料は砂鉄を原料とする鉄滓が炉壁と反応した炉壁附着滓と推察され、滓そのものとしては精錬初期の滓の可能性が考えられる。

4 ま と め

本分析調査を以下にまとめた。

1) 遺跡の性格

資料No.1は精錬鍛冶滓と判断された。資料No.2はガラス質の炉壁附着滓と推察され、滓そのものは精錬初期のものの可能性が考えられ、精錬鍛冶が行われていたと思われる。しかし、炉壁附着滓の滓に関しては成分の推算も入れている推定のため他の条件も入れて最終的には判断すべきと思われる。

2) 個別資料

資料No.1：砂鉄を始発原料とする製鉄工程で生成した精錬鍛冶滓と推察される。

資料No.2：砂鉄を原料とする鉄滓が炉壁と反応した炉壁附着滓と推察され、滓そのものとしては精錬初期の滓の可能性が考えられる。

表2 鉄滓の化学成分分析結果 (%)

資料 No	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	比率 (%)	
											FeO	Fe ₂ O ₃
1	50.5	3.41	47.8	14.2	18.9	4.01	1.93	0.90	0.53	0.23	77.1	22.9
2	14.9	3.66	7.36	7.89	51.4	11.4	8.33	1.48	2.30	0.97	48.3	51.7

資料 No	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Co	C.W.	C	V	Cu	TiO ₂ / T.Fe	MnO/ TiO ₂	造滓 成分%
1	5.97	0.15	0.135	0.047	1.29	0.16	0.058	0.012	0.118	0.025	26.50
2	2.96	0.18	0.247	0.036	0.86	0.15	0.020	0.005	0.199	0.061	75.88

C.W.=化合0.80水、造滓成分=SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O

表3 鉄滓のX線回析鉱物と製造工程の分類

資料 No	資料の種類別	X線回折鉱物(鉄関連)	製造工程の分類
1	炉内滓	U 最強, M 中, F 中, Go 弱	精錬滓
2	含鉄鉄滓	Q 強, Fe 弱, Cb 弱, Il 弱	炉壁附着滓
鉱物記号: Il (イルメナイト: Ilmenite-FeO・TiO ₂), Q (シリカ: Quartz-SiO ₂) U (ウロポスピネル: Ulvospinel-FeO・TiO ₂), F (ファイヤライト: Fayalite-Fe ₂ SiO ₄) Cb (クリストブライト: Cristobalite-SiO ₂), M (マグネタイト: Magnetite-Fe ₃ O ₄)			

製造工程上の鉄滓分類

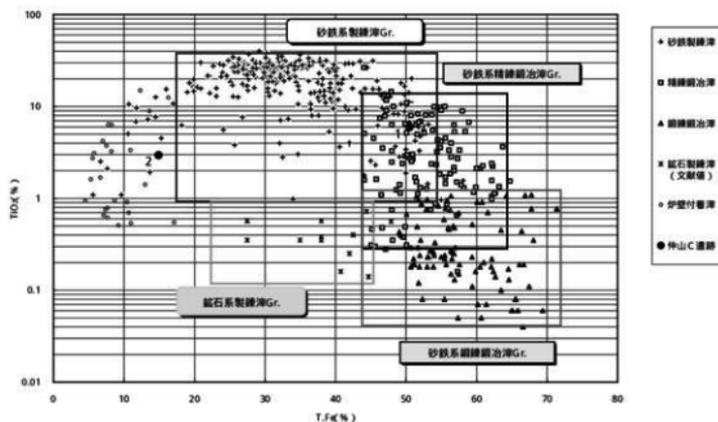


図3 出鉄鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

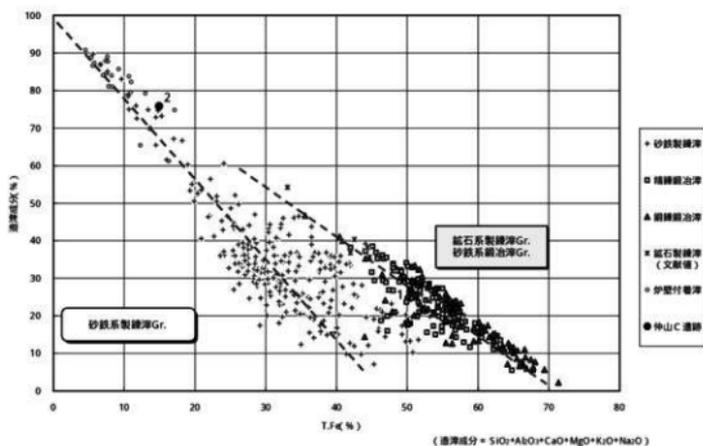


図4 精錬滓と銅治滓の分類

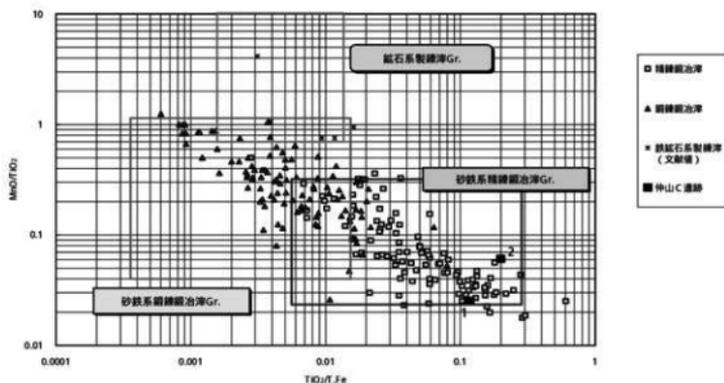


図5 砂鉄系製錬渣滓の分類と鉍石系精錬渣滓の範囲

5 参 考

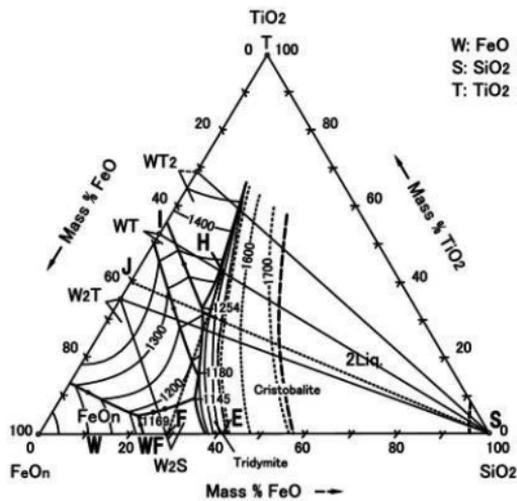


図6 FeO-TiO₂-SiO₂系平衡状態図

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告 42							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 432 集							
編著者名	吉田 功・佐々木慎一・佐藤 啓・青山博樹・笠井崇吉・鹿又喜隆							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査グループ 〒960- 8115 福島県福島市山下町 1- 25 TEL 024- 534- 2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960- 8688 福島県福島市杉妻町 2- 16 TEL 024- 521- 1111							
発行年月日	西暦 2005 年 10 月 27 日							
所収遺跡名	所在地	コード		東経 ° ′	北緯 ° ′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仲山 C	福島県南相馬市 原町区深野 字仲山	206	000297	37° 40′ 41″	140° 55′ 01″	2005年9月12日 ～ 12月13日	6,300㎡	道路(常磐自動車道)建設に伴う事前調査
明神	福島県相馬市 山上字明神	209	000196	37° 46′ 44″	140° 53′ 47″	2004年10月14日 ～ 12月22日 2005年 9月19日 ～ 12月16日	2,000㎡ 2,000㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
仲山 C	集落跡	縄文時代 奈良時代 近世	竪穴住居跡 1軒 鍛冶遺構 3基 土坑 22基 溝跡 3条 道跡 3条 性格不明遺構 3基	縄文土器 石器 土師器 炉壁 鉄滓	湧水点に作られた縄文時代の取水を目的とした土坑, 沉底に展開する鍛冶関連遺構群。			
明神	集落跡	縄文時代 奈良時代	竪穴住居跡 2軒 独立柱建物跡 16棟 土坑 4基 集石遺構 1基 柱列跡 1列 溝跡 1条	土師器 須恵器 縄文土器 石器 砥石	16棟の独立柱建物跡と 1軒の竪穴住居跡が, 空開地を中心に L 字型に整然と配置されている。			

福島県文化財調査報告書第432集

常磐自動車道遺跡調査報告42

仲山 C 遺跡
明神 遺跡

平成18年10月27日発行

編 集	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部	
発 行	福島県教育委員会	〒960- 8688 福島市杉妻町 2- 16
	財団法人福島県文化振興事業団	〒960- 8115 福島市山下町 1- 25
	東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所	〒976- 0042 相馬市中村字塚の町65- 16
印 刷	雫平電子印刷所	〒970- 8024 いわき市平北白土字西ノ内13